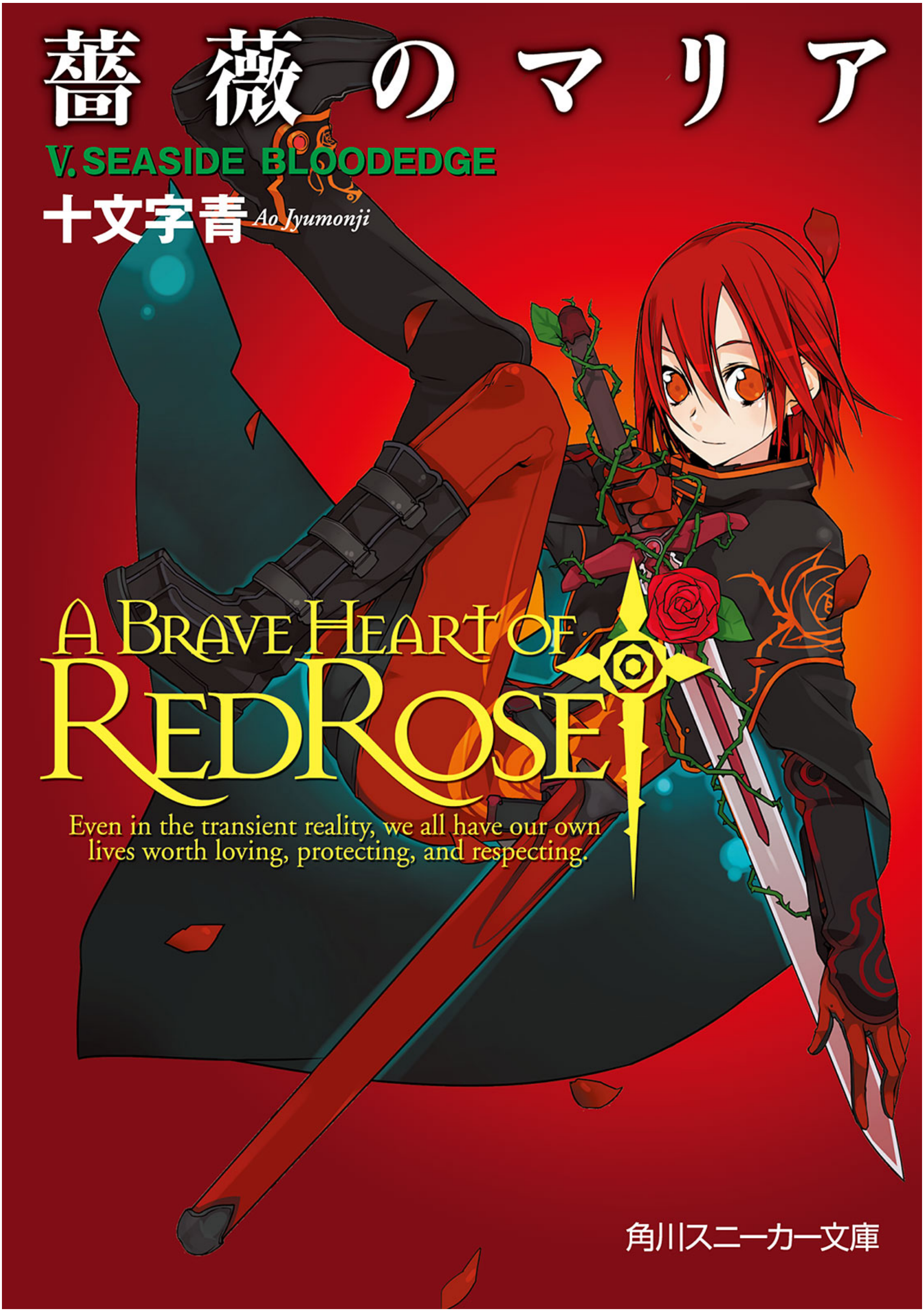

薔薇のマリア
V. SEASIDE BLOODEDGE
十文字青
Ao Jyumonji
A BRAVE HEART OF
RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own
lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

薔薇のマリア

V. SEASIDE BLOODEDGE




“The Sin””The Ungodly” Monica Tautoua
~Ito Kegarawashiki Hito yo Anata ha Nani wo Motomete Itano Desuka.
怖かったんだ
——誰かを好きになること。
“on the way”Mariarose&Safinia
“Teach Me More”Paolo from BTK
僕らは穢れている。
恐れるな、臆病者よ。
“Villa a Joker”Jean-Jacques de Joker&Claudia


僕らはついにやってきた——
"Jaderi" ZOO

薔薇のマリア

Ｖ．ＳＥＡＳＩＤＥ ＢＬＯＯＤＥＤＧＥ

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE V

—SEASIDE BLOODEDGE—

Ao Jyumonji

First published 2006 in Japan
By
Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

illustration：*BUNBUN*
design work：*design CREST*

A BRAVE HEART OF RED ROSE

V

CONTENTS

a prologue 波の音(と) ——7
chapter.1 旅は道連れ ——12
chapter.2 ジョーカー ——29
chapter.3 帰る家 ——48
chapter.4 白い王の苛立ち ——68
chapter.5 貸し借り ——85
chapter.6 罪は回る ——105
interlude 穢れし者どもの国 ——127
chapter.7 僕は一人じゃない ——131
chapter.8 血が叫ぶ ——150
chapter.9 この手がはなれても ——163
chapter.10 ある朝 ——174
chapter.11 世界の正しい救済法 ——193
chapter.12 海辺 ——214
chapter.13 苦しみの在処 ——226
chapter.14 人生の喜び ——247
chapter.15 嘘八百 ——256
chapter.16 血には血を ——280
chapter.17 欠片たち ——295
chapter.18 しあわせの原形 ——313
chapter.19 義兄弟 ——321
chapter.20 日没 ——330
an approach ここにいる ——423
あとがき ——430

C O N T E N T S

a prologue　波の音と

chapter.1　旅は道連れ

chapter.2　ジョーカー

chapter.3　帰る家

chapter.4　白い王の苛立ち

chapter.5　貸し借り

chapter.6　罪は回る

interlude　穢れし者どもの国

chapter.7　僕は一人じゃない

chapter.8　血が叫ぶ

chapter.9　この手がはなれても

chapter.10　ある朝

chapter.11　世界の正しい救済法

chapter.12　海辺

chapter.13　苦しみの在処

chapter.14　人生の喜び

chapter.15　嘘八百

chapter.16　血には血を

chapter.17　欠片たち

chapter.18　しあわせの原形

chapter.19　義兄弟

chapter.20　日没

an approach　ここにいる

あとがき

A BRAVE HEART OF RED ROSE

V

MAIN CHARACTERS



Ricou
リク

ジェードリの少年



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の侵入者（クラッカー）。



Luca
ルカ

ジェードリの少女。



Rom Four
ロム・フォウ

深い森の黒真珠。



Jean-Jacques de Joker
ジャン・ジャック・ド・ジョーカー

でたらめ貴族。



"Sir Judas" Aronz Needlespear
"サー・ジューダス"アロンズ・ニードルスピア

血塗れ聖堂騎士団団長。



Alpha
アルファ

白狼。



Claudia
クローディア

ジョーカーの召使い。



Enzo Pancaro
エンツォ・パンカロ

パンカロ・ファミリーの首領(ドン)。



Lora
ローラ

孤児たちの「ママ」。



Ciro Pancaro
チーロ・パンカロ

エンツォの三男。



"The Sin"
〝罪そのもの〟

罪深き女。



Paolo
パオロ

血塗れ聖堂騎士団の騎士。



Carlo Bossi
カルロ・ボッシ

パンカロ・ファミリーの若頭。

and the others

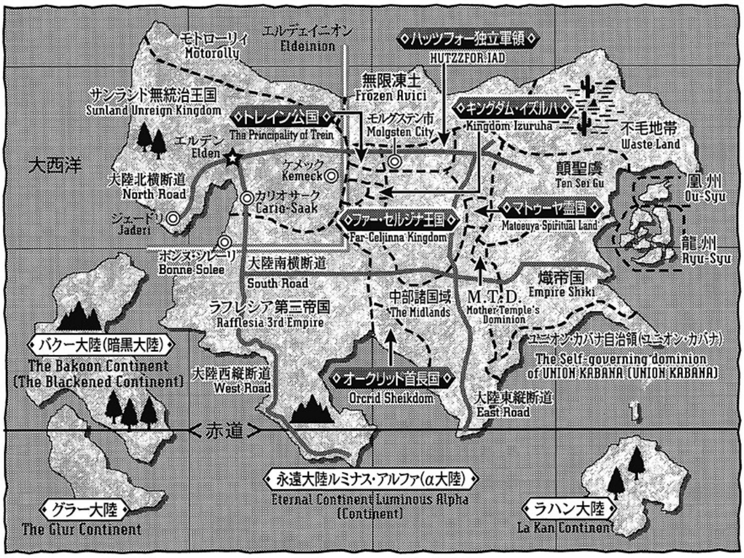
Tomatokun&ZOO
トマトクンとZOOの仲間たち

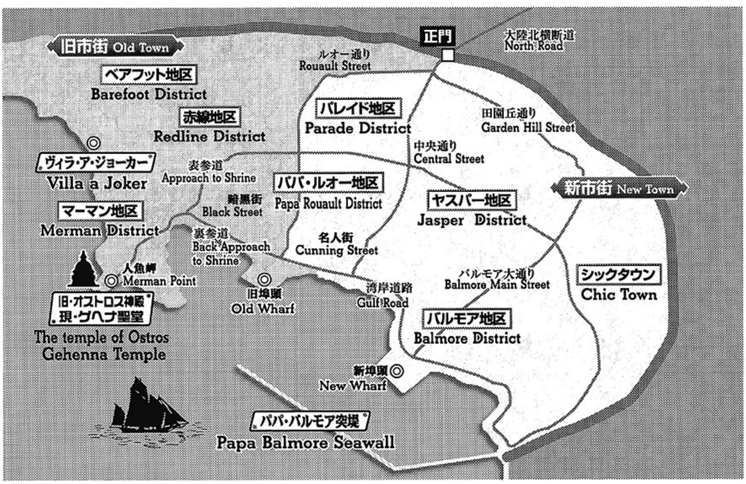
Ugo,Nino,Ibitsu&Harvey etc.
ウーゴ、ニーノ、イビツ、ハーヴェイ他パンカロ・ファミリー

Stella,Raccha&Georgio etc.
ローラの〝子供〟たち

"Sir Andrew"Henry Blackmore&"Sir James"Daredevil etc.
ヘンリー・ブラックモア&デアデビル他血塗れ聖堂騎士団

The World of "A BRAVE HEART OF RED ROSE"





Jaderi: the Seaside town of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 ジェードリ

MAP製作 On Graphics

a prologue

波の音

　さみしくてたまらないときは、目をつぶって波の音に耳を傾かたむけるといい。

　そうすれば、きみはだんだんと世界にとけこんでゆく。

　自分はこの世界から切りとられた断だん片ぺんで、だから一人きりだなんて思わなくてすむ。

　幼いころ、きみはいつもそうして孤こ独どくを癒いやした。

　でも、少しつめたい海風が、きみのなかにあいた傷口を押し開こうとするかもしれない。

　──傷。

　傷なんていくつもある。いくらでもある。

　たとえば、きみの父親は、この海のどこかで死んでしまった。

　それからしばらくの間、きみは海辺に近づくことさえしなかった。

　ある日のことだった。きみは父親の夢を見た。

　その幻まぼろしを追い、泣きながら裸足はだしで砂すな浜はまにさまよい出て、彼を見つけたのだった。

　穢けがれし者どもの国からやってきた少年を。

　追放されし者を。

　彼は今もきみのそばにいる。

　夜だ。

　水みな面もに月が揺ゆれている。

　砂の上で膝ひざを抱かかえているきみに、彼が近づいてゆく。

「──ルカ」

彼はきみの横に腰こしを下ろす。

きみは彼を待っていたのだろう。

「やっぱりここにいた」

彼はきみの頬ほおをそっとさわった。

「つめたい。風か邪ぜひくよ」

「だいじょうぶ」

きみはすねたような態度で、彼のことを見ない。彼の手を振ふり払はらう仕草さえしてみせる。あれから四年。彼は十八歳になった。当時から美しい少年だったが、その印象は少しも色いろ褪あせていない。漆しつ黒こくの髪かみ、日焼けしない白い肌はだ、整いすぎた目鼻立ち、そして赤い瞳ひとみは、どれもこれも特別製だ。少なくとも、きみはそう思っている。彼と比べたら自分は平へい凡ぼんすぎると。

ただ、きみは引け目を感じて、彼につれなくするのではない。

きみは知っている。彼はやさしい。だから、きみは心にもないことを言う。

「あたし、もう少しここにいたいから。リクは先に帰れば」

「じゃあ、ルカが帰りたくなるまで、おれもつきあうよ」

「朝までいるかも」

「うん」

「寒いよ。今はよくても、どんどん冷えてくるよ」

「おれは平気だよ」

「リクは丈じよう夫ぶだもんね」

「ルカよりはね」

「風邪もひかないなんて、リクはきっとバカなんだ」

「かもしれない」

「バカ。リクはバカなんかじゃないよ」

「どっちなの？」

「どっちもだよ。バカだし、バカじゃないんだよ、リクは。でも──やっぱり、バカだ」

　きみは自分でも何を言っているのかよくわからなくなって、膝の間に顔をうずめ、口をつぐんでしまう。

　彼もしばらく黙だまっている。

　夜中まで仕事をして家に戻もどった彼は、きみがいないことを知って、ここまで捜さがしにきたのだ。

　きみは彼に捜してもらいたくて、ここにきた。

　これまできみの期待が裏切られたことは、ただの一度もない。

　きみは知っている。彼はけっして裏切らない。きみは彼を信じている。

　ややあって、彼が口を開く。

「何、考えてたの」

「……べつに」

　本当は考えていた。

　だから、ごまかすように、きみは違ちがうことを言う。

「あたしの、名前」

「名前？」

「──のことを、ちょっとだけ」

「ルカ？」

「いやなんだ。好きじゃないんだ、この名前。ルカなんて、男の子

みたい」

「そうかな」

「そうだよ」

「だけど──」

　彼の指が砂のなかから何か見つけた。貝かい殻がらだった。彼は立ちあがって、それを海に投げた。

「おれは好きだよ。おまえの名前だから」

　きみは貝殻の行方ゆくえを見つめている。波に沈しずむ貝殻を。頭のなかで、ずっと反はん響きようしている言葉がある。彼の声が。きみはそれを止めようとして耳をふさぐ。暴れはじめた心臓が口から飛びだしてきそうで、唾つばをのみこもうとする。いや。のみこむのではなくて、吐はきだしたい。言葉を。思いを。やがてきみは耐たえられなくなる。

「嘘うそ」

　彼が振り返る。

「──嘘、だよ……」

　そう。

　きみは考えていた。

　失った人のことを考えていた。

　そして、失いたくない人のことを考えていた。

「リクの、こと」

「おれの？」

　少し首を傾かしげてみせる彼に、きみはいらつく。いらついても仕方ないと知っているから、なんだかとても胸のまんなかがギチギチいう。

　この思いも、言葉も、むなしく吐きだされ、あの貝殻のように、

海に沈むだろう。

　そうだとしても、きみはもう、抑おさえられない。きみには予感がある。なぜか、ずっとそんな思いが消えない。彼はいつか行ってしまう。そうして、もう帰ってこないかもしれない。そのときは、止められない。だから、きみは言う。彼を困らせるだけだと、わかっているけれど。

「あたし、リクが好き」

Omenage 897 10th revolution 24th day

サンランド無統治王国大陸北横断道（ノースロード）

〝on the way〟

chapter.1

旅は道連れ

一番記き憶おくに残っている旅は、警察隊に追われながら、ラフレシア第三帝てい国こくの首都太華饒京アルマンドナを出て、サンランド無統治王国へ向かった逃とう避ひ行こうだ。もっとさかのぼれば、エルデンで大勢のこどもと一いつ緒しよに荷馬車に押しこまれ、人売りの市場まで運ばれた。あれも旅といえば旅かもしれない。それから、夜よ逃にげして、親子三人でエルデンにたどりつくまでの苦しい道のり。

いずれにしても、旅にはあまりいい思い出がない。とくに、馬車は好きじゃなかった。子し爵しやくのお供をさせられるとき、移動がいつも馬車だったからだ。

あの座席の振しん動どうが嫌きらいだ。屋根付き箱形の座席だと、子爵の香こう水すいのにおいが蘇よみがえってくるような気がして、鼻をつまみたくなる。馬車はいやだ。旅なんか二度としたくない。ずっとエルデンでいい。僕はエルデンで生きて、いつか死ぬんだ。お父さんとお母さんが死んだ土地で、僕も死ぬんだ。それでいいと思っていた。

でも、こういう旅なら、悪くない──かもしれない。

エルデン－ジェードリ間を結ぶ高速乗合馬車フライング・ワゴンは、約一五〇〇キルメーテルの距きよ離りをたった十日あまりで走破してしまう。しかも、機術の粋すいを集めて造られたこの馬車は、非常に揺ゆれが少なくて、居住性も抜ばつ群ぐんだ。その二十四人乗りのフライング・ワゴン一台を、今回は七人で貸し切っているから、空間的にも精神的にもかなりゆとりがある。前部一階座席の大きな窓から景色を眺ながめているだけで暇ひまつぶしになるし、それに飽あきたら誰だれかと無む駄だ口ぐちでもたたいていればいいし、眠ねむくなったら後部二階寝しん台だい席で毛布をかぶって横になればいい。おなかがすいたら、食事もちゃんと用意されている。おやつもたっぷり買いこんである。

そして、何より──みんながいる。

「どないしたん、マリアローズ。さっきから一人でにやけとるけど」

「僕はけっしてにやけてなんかないけど、きみはいっつも驚おどろ

いたような顔してるよね」

「魚ぎよ々ぎよ！　ってか。うひょ！　そらまたものごっつさっぶいダジャレやのう」

「自分で言っといて……」

「誘ゆう導どうしたんはお前じぶんやろが」

「で、魚だけに？」

「おう！　見事に釣つられてもうたわ！　腕うでのええ釣り師に、こう、ズバババッとな！　餌えさがまるで生きとるように見えよったもんでな！　ホンマにもう、まんまと騙だまされたわ！　してやられたっちゅうやつや！　ところで、そろそろ誰か止めてくれへん？」

「うむ。ジェードリは魚がうまいぞ」と、舳へ先さきがどこに向いているのかよくわからないような助け船を出したのは、この旅の発案者であるトマトクンだ。「エルデンだと、生きた魚はそうそう手に入らんからな。刺さし身みを食うならジェードリだ」

「サシミって、何？」

「魚をさばいて、生のまま、醤しよう油ゆと山葵わさびをつけて食べるんだ」

「ええ？　生のままぁ？　それって、おなか壊こわさないの？」

「……海辺の街では……お魚を、そうしていただくことも……珍めずらしくはないようです……」

「ふうん。そうなんだ。でも、どうせなら、サフィニアにちゃんと料理してもらったほうがおいしそう」

「わたしも、おしゃかなを生のまま食べるのは、ちょっと怖こわいかも」

「どっちにしても、わしは魚はよう食わんけどな！　そらそうやろ！　共食いになってまうからな！　がはははははっ！　頼たのむ……無視せんでくれ……お願いや……」

「自じ業ごう自得でス」

「がうーん。ピンプゥッ！　お前じぶん、そんな難しい言葉いつ覚えよったぁっ！」

「歩ク・自業自得、目の前いたラ・自然と覚えマス」

　ピンパーネルに指さされて、カタリは醜みにくく身み悶もだえしている。しかし、こう見ると、基本的にあまり感情を表に出さないピンパーネルまで、なんだか楽しそうだ。泉セン里リ決戦における活かつ躍やくで時の人となり、それがうざったくて、しばらく自宅に引きこもっていたトマトクンは言うに及およばず。多数の余計者つきとはいえ、トマトクンと旅行ができるサフィニアはさらに言うまでもなく。カタリは常に無む駄だにハイテンションだし、ユリカは皆みなといるときは笑え顔がおを絶やさない。マリアローズも、旅に対する悪いイメージを、今回で払ふつ拭しよくできそうな勢いだ。

　そんななかで唯ゆい一いつの例外が、長身のトマトクンよりでかい身体からだを窓まど際ぎわの座席にうずめて、外の景色を見るともなく見ている。

　ため息。また、ため息。

　というか、マリアローズにしてみれば、彼がこの旅に同行していること自体、若じやつ干かん不思議だ。もともと、つきあいのいい男ではないし。くわしいことは知らないが、ジェードリの大海王神オストロス神しん殿でんから破門された過去があるらしいので、それほど験ゲンのいい土地ともいえないだろう。あげく、この有様だ。筋肉と髭ひげだけでもうっとうしいのに、それに憂ゆう鬱うつの重苦しいエッセンスが加わると、邪じや魔まくさいことこのうえない。

「まあ、髭のことは放ほうっておいてやれ」マリアローズの視線に気づいたらしい。トマトクンが髭を一いち瞥べつして、唇くちびるを少しゆがめた。「あれで、髭にもいろいろあるんだ」

「……いろいろって？」

「いや、昔やつの口から聞いたような気もするが、忘れた」

「そういうことくらいは覚えておこうよ？　わざわざ話すくらい

だったら、わりと大事なことだよね？」

「そうなのか？」

「だと思うんだけど。僕は。てゆうか、大多数の人はそう思うんじゃないかな」

「ふむ。俺は少数派か。でも、まあ、過去なんてどうでもいいとは言わんが、今と未来のほうが重要だろう。昔、髭が何をしたかには興味がない。俺は今のやつを知ってるしな。お前たちのことだって同じだ。だいたい、昨日何を食ったかなんて、すぐ忘れる。大事なことは、これから何を食うかだ」

「なんで食べることに結びつけるかな」

「ヒヒヒ」

　トマトクンは目を細めて似合わない下げ卑びた笑い声をたてた。

　その笑い方を見ていて、マリアローズはふと思った。

　もしかしたら、トマトクンは笑うのが苦手だったのかもしれない。

　なぜそんなことを考えたのか、自分でもわからない。けれども、勝手に、さけようもなく、どうしようもなく積み重なってゆく過去が、トマトクンにも必ずある。皆みなにあるはずだ。そのなかには、思わず目をそむけたくなるような汚けがらわしい過去のかけらも、きっと含ふくまれている。少なくとも、マリアローズにはある。たぶん、髭にもあるのだろう。トマトクンは、ただそれらを見て見ぬふりをするのではなく、知ったうえで「あっそ。だから何？」と言っているのだ。

「……かなわないな……」

　マリアローズは、誰にも聞こえないように、ひっそりとつぶやいた。

　本当に、かなわない。かなうとか、かなわないとか、そういう問題じゃないとわかってはいる。でも、まいってしまう。

　心ここ地ちよすぎて。

ＺＯＯに入ることができてよかった。

そんな思いが、なんべんもなんべんも、折にふれて襲おそってきて。

少し、いや、かなり怖いくらいで。

こんな素す敵てきな──口に出しては絶対に言えないけれど、いい仲間たちに囲まれて、笑っていられる日々が訪おとずれるなんて、想像もしていなかったから。

昨日、僕は、みんなが寝ね静しずまった馬車のなかで、ちょっとだけ泣いた。

生まれてきたことに、心の底から感謝してしまった。

お父さん、お母さん、ありがとう。たぶん、僕を生んでくれて。確実に育ててくれて、本当にありがとう。こんなことなら生まれてこなきゃよかった。そう思ったことが何度もあった。あれは取り消します。ごめんなさい。もう二度とあんなことを思ったりはしません。

僕はこの先、何があっても、この命を後こう悔かいしたりしない。捨てたい過去はたしかに多いけれど、この一いつ瞬しゆんだけは大事にしまっておこう。そして、死の間ま際ぎわ、それがたとえどんなに残ざん酷こくであっても、痛くても、恐おそろしくても、胸の奥からこのあたたかい一瞬をとりだして、「ああ、よかった」と思って目を閉じよう。

「またにやけとるで」

「うん」

今度は否定しなかった。カタリのもともと妙みような顔が、もっと奇き妙みような表情になった。

「なんや。お前じぶんがにやけるっちゅうたら──あのオッサンの遺産のことでも考えとったんか」

「なんで僕がにやける＝お金なわけ？」

「そら、お前じぶん、めっちゃ金が好っきやろ」

「大好き。世界で二番目に好き」

「ほえ？　二番？　ほな、一番は？」

「内ない緒しよ」

「ずぬぉぉぉぅ……！　なんやねん、教えてえな。そんなん気になって今晩寝ねられへんわ。わしが寝られんくなって死んでもうたら、どないして責任とってくれるんや」

「うーん。そうだなあ……質素なお葬そう式しきを出してあげるとか？」

「葬式かい！　しかも質素て！」

「立派なのがいいの？　どうせ似合わないよ？」

「いらんがな！　わしが死んだら、骨を海に撒まいてくれるだけでええわ！　そんで魂たましいも肉体も故郷に帰るってか！　わしは魚ちゃうがな、ダァホ！」

「ですが……」一人で狂きよう乱らんするカタリを無視して、サフィニアがはかなげに微笑ほほえんだ。「ジョーカーさんに、お会いするのは……久しぶりですね。わたしは……今まで、三回ほどしかお目にかかっていませんが……」

「ジャン・ジャック・ド・ジョーカー、だっけ」マリアローズはこの旅のきっかけになった手紙の文面を思い出した。達筆だが、味も素っ気もない、用件のみを伝えるその手紙を持って、トマトクンは久しぶりに動物園事務所に姿を見せたのだった。「──で、その人、本当に大だい丈じよう夫ぶなの？　手紙には『我が病きわめて重く明日をも知れぬ身なり』とか書いてあったけど」

「病気といったら、あれがやつの病気みたいなものだからな」トマトクンが軽く肩かたをすくめて苦笑いを浮うかべてみせた。「今までも、やつに呼ばれて、何度かのこのこ出かけて行ったことがあるんだが、俺たちがつくころにはだいたいけろりとしてたぞ。もともと、そう簡単にくたばるようなやつでもないしな。マリアにとっては残念だろうが、やつの財産とやらが遺産になるのは、まだ先のことじゃないか」

「や。だから、その人の遺産わけてもらおうなんて、べつに思って

ないし」

　たしかに、トマトクンに見せてもらったジョーカーからの手紙には『ついては我が莫ばく大だいなる資産の分配等に関して貴公らと相談したき議あり。至急ジェードリの我が別べつ邸ていまで来られたし。云うん々ぬん』と記されていたが、マリアローズだってそれを真に受けているわけではない。会ったこともない人間の遺産を相続しようなんて考えるほど、ごうつくばりではないつもりだし。

　もちろん、くれるというのなら拒こばむ理由はない。そうはいっても、さすがに面識がないとそういう展開にもならないだろう。せっかく同じクランに所属しているわけだし、まずは顔見知りになっておいて。どうやら、相手はたまにしかエルデンにはこないようだから、この機会を逃のがす手はない。これをきっかけに仲よくなっておけば、マリアローズはまだ若いので、まず相手のほうが先にお亡なくなりになる。そうすれば──いや、それはおいておくとして。

「僕、ジェードリは初めてだからさ。じつは、海も何回かしか見たことないんだよねー。あー楽しみだなー。ちょっと怖こわいけど、サシミってのも食べてみたいなー。あー楽しみ楽しみ」

「どうも心がこもっとらへんように聞こえるんは、わしだけか」

「きみだけじゃない？　真心こもりまくりだもん。あー早く海が見たいなー」

「しょれなら、本当はもっと暖かい季き節しえちゆがよかったかもしれないわね。今だと、もう水みじゆがちゅめたくて泳いだりできないでしょうし」

「あ。ダメ。僕、泳ぐのはパス」

「……マリアさんは……もしかして、カナヅチなんですか……？」

「え？　や、そういうわけじゃないんだけど。あんまり、その……好きじゃないんだよね。日焼けとか。僕、皮ひ膚ふが弱いからさ。すぐ火ぶくれみたいになっちゃって」

「……それは、わたしも……というか、水着を着るのが……恥はずかしいです……」

「なんで？　サフィニアだったら、絶対かわいいでしょ。恥ずかしがることなんてないんじゃない？　ねえ、トマトクン」

「ん？　水着？　俺はブーメランだが」

「……きみが愛用してる水着の種類なんて誰だれも訊きいてない──って、あ！　ちょっ、ちょっと、ユリカ、サフィニアが！　顔から湯気出してる！　湯気！」

「たいへん！　サしやフィニア！　大丈夫？」

「……ぶ、ぶーめら……だ……だ、だいじょうぶ……です……ごめんなさい……本当に、なんでもないです……」



「ワタシ・水着、フンドシでス」

「──や、ピンパーネル、きみまでそんなかなり個人的な情報開示しなくていいから。へ？　フンドシ……？」

「カカカッ！　漢印のフンドシや！　わしとおそろいやで。七代兵

ひよう衛え辰たつ巳みの特注品や！」

「……ピンパーネル、今度、違ちがうの買おうね。一いつ緒しよに選んだげるから」

「はイ」

　おそらく、フンドシはカタリに無理やり押しつけられたものなのだろう。ピンパーネルも、ちょっといやだったらしく、こくりとうなずいて、少しだけ目め許もとをゆるめてみせた。

　それにしても、こうして皆みなで無む駄だ話ばなしに花を咲さかせるのはいつものことだが、やっぱり何か違う。旅は、ピンパーネルを少しだけ饒じよう舌ぜつにさせる。サフィニアの妄もう想そう力りよくを加速させ、ユリカやカタリをふだんよりやや元気にさせて、髭を憂ゆう鬱うつにさせる。歩いていれば通行人に指をさされ、腕うで自じ慢まんから勝負をもちかけられ、名をあげたい悪党等につけ狙ねらわれるエルデンでの窮きゆう屈くつさから、トマトクンを解き放つ。そして、アジアンやら王おう龍りゆうの荊ジン王ワンやら、変態ストーカーの手の届かない場所へと、マリアローズを運んでくれる。そういえば、ピンパーネルもＳ＊Ｋシリアル・キラーズの飛燕フエイヤンにつきまとわれて、かなりうざったがっていたっけ。

　解放感。僕らはどこにも縛しばりつけられてない、とにかく今は自由なんだという感覚。

　トマトクンは動物園事務所で皆に手紙を読ませてこう告げた。
「──というわけで、ジェードリに行くことにした。とくに用事がないやつは全員一緒にこい。旅費は俺が出す。ああ、マリアは絶対参加だぞ。ジョーカーのやつも一応ＺＯＯだからな。一度は会っておいたほうがいいだろう。まあ、ジェードリも近くはないが、家に閉じこもってほとぼりが冷めるのを待つのにも少し飽あきてきた。しばらくエルデンを出てないしな。渡わたりに船ってやつだ」

　とはいうものの、往復するだけで二十日以上。滞たい在ざい期間をふくめると一巡じゆん月げつほどもエルデンを離はなれるんだと思えば、正直、少々ためらいはあった。旅自体にもいい印象がなかったし、移動の間、暇ひまじゃないかとか、いろいろ考えもした。

　でも、今はきてよかったとマリアローズは感じている。

　なんだか、自分をがんじがらめにしていた重くて邪じゃ魔まっけな手て枷かせ足枷が、エルデンを離れるごとにどんどん外れてゆくような気さえする。

　ちなみに、最低最悪の足枷には、当然、何も言わずに出てきた。言うチャンスはあったけれど、わざわざ教えてやる義理なんかない。今ごろ、あいつはどうしているだろう。「いないいない見つからない」と僕を捜さがしまわっているだろうか。あいつは僕やトマトクンの家の場所を知っている。意外とすぐ僕がエルデンにいないことに気づくかもしれない。そうしたら、あいつはどうするだろう。

　━━いっそ、忘れてくれないかな。

　女の子にもてそうな顔をしてるんだし、恋こい人びとでも作ればいいのに。僕に言いよるときみたいな態度で、情熱で、献けん身しんで、誰かにつくしたら、いやがる人もいるだろうけど、そうじゃない人だって少なくないに違いない。

　僕は、はっきり言うべきなのかもしれない。「きみとは、友だちにはなれても、それ以上は絶対に無理」って。

　でも、以上とか以下とか、本当はよくわからないし、上手にできるとも思えない。

　だから、どうせなら、もう二度と会わないほうがいい。

　あいつだって、いいかげん気づいてもいいはずだ。あいつはバカだ。どうしようもないバカだ。僕なんかじゃなくて、誰か別の、もっとまともな人を好きになればいいのに。それがお互たがいのためなのに。これ以上は苦しいだけなのに。べつに、苦しんで欲しくなんかないのに。

　僕は傷つけたいわけじゃないんだ。

　ただ、僕だって傷つきたくないんだ。

　━━この傷は、誰にも見せたくない。

　その先には踏ふみこまないで、えぐらないで、あばかないで、

そっとしておいて、それでいてそばにいて欲しい。

　僕は贅ぜい沢たくなんだと思う。だけど、ここにはそれがある。ＺＯＯの仲間たちは、たぶんそれぞれ深い、深い、深い傷を抱かかえていて、そのことを互いに知っている。知っているからこそ、無理やり手当てしようとしたりしない。けっして癒いやすことのできない、疼うずきつづける傷を引きずったまま前を向いて歩こうとするとき、彼らの背中が目標になる。たまに、くじけそうなとき、彼らが何も訊かずに振ふり返って手をさしのべてくれる。

　僕もそうしたいと思う。

　今は力不足で不可能でも、いつかそうできるようになりたい。

　皮肉なことに、あいつが言ってくれた。「キミはＺＯＯにいるべきだ」って。

　僕はきみに背中を押してもらった。感謝してる。心の底から。でも、きっと、これからも僕はきみを傷つけるし、きみも僕を傷つける。あのあと、僕は思ったんだ。きみが仲間だったらよかったのに。だけど、そうじゃない。きみにはちゃんと仲間がいる。昼飯時ランチタイム。きみを信じて、きみのことが好きで、きみの周りにいる仲間たち。だから、おそらく、僕らの歩く道は違うんだ。別々の道なんだ。どうかそのことに気づいて欲しい。たとえ少しだけ寂さびしくても、生きているかぎり、歩いてゆくことはできるはずだから。

　次に会ったとき、さよならを告げよう。

　笑って言おう。

　──なぜだか、そう考えると、ちょっとだけ心臓がきゅっと縮まるような心ここ地ちがする。

　だけれど、この旅が終わるころには、きっと平気になっているだろう。

　僕にはこの旅が必要だったんだ。

　また一歩、前に踏みだすために。

　だから、トマトクンじゃないけれど、まさしく渡りに船だ。

「髭」

　と、不意に風が吹ふきこんできて、思いとともに髪かみが乱れた。

　見れば、トマトクンに呼ばれた髭は、すでに窓を全開にして、そこから半分身を乗りだしている。その脇わきに顔を突つっこんでいるのはカタリだ。トマトクンは鞘さやごとの大たい剣けんをつかんで立ちあがったところだが、ピンパーネルはもう臨戦態勢をとって主人の命令を待っている。もちろんそれはユリカもサフィニアも、マリアローズだって同じだ。客車前部の小窓が開いて、当フライング・ワゴン十三号車の運行を担当している三人の御ぎょ者しゃのうち一人、アニャキス・ローが景気の悪い顔を出したのは、そのあとだった。

「お客さんたち、運が悪いねえ。馬ば賊ぞくだ。白地に青い右足。あの旗印は〝疾走スパンキーのダン〟だな。やつらが狙ねらうのはたいていでかい隊商なんだがね。たまたま実入りがよくねえのか。全財産さしだして見み逃のがしてくれりゃあ御おんの字ってところだが、期待はしねえこった。金目の物も好きだが、殺す犯おかすはもっと好きって連中だからな。とりあえず、別べつ嬪ぴんさんは覚かく悟ごしとくこったぜ」

「その必要はない」

　トマトクンはこともなげにそう言い放って、サフィニアに目で合図した。サフィニアはアニャキス・ローの「運が悪い」発言でへこんでいたものの、かすかにうなずいて髭とカタリの間におさまる恰かつ好こうになり、さっそく特殊なチヤネ集中リングに入ろうとしている。前部一階座席には両側にそれぞれ三つずつ窓があって、髭たちは右側まんなかの窓にひっついているから、トマトクンとピンパーネルは右側後ろの窓に、マリアローズとユリカは左側まんなかの窓に陣じん取どった。なるほど。見える。追ってくる。馬だ。当然、人が乗っている。「──十……や、もっと。十五はいるかな」「こっちは三十くらいや」ということは、カタリの半魚眼を信用するなら、あわせて五十程度か。マリアローズは舌先で唇くちびるを舐なめて、ベルトのホルダーに手をのばし、カバーを外して小こ瓶びんを抜ぬきとった。

「……おいおい、あんたら、何やらかすつもりだよ。無茶だぜ。相手は五十人ばかりもいて、全員騎き馬ばだ。逃にげられっこねえ

し、戦ったって……」

「お前たちは気にしないで馬車を走らせていればいい。すぐ終わる」

　トマトクンは剣を抜く気がないようだ。弛し緩かんしているわけではないのだろうが、緊きん張ちようしている様子は微み塵じんもない。再びアニャキス・ローに顔を向けたときの表情も、場ば違ちがいなほど落ちついていた。

「ところで、あの旗、なんで白地に青い右足だってわかるんだ。俺にはただの靴くつにしか見えん。あれで右か左か区別がつくのか」

「んなこたあどうだっていいだろう！　あんた、頭がおかしいんじゃねえのか！　この状じよう況きようで、あれが右足だろうが左足だろうが靴だろうが──」

「それもそうだな」

　トマトクンが片方の眉まゆをつりあげて軽く頭かぶりを振った瞬しゆん間かんだった。サフィニアの詠えい唱しようが始まった。同時にマリアローズも爆ばく薬やく液ハーレム・ゴードン入りの小瓶を三本、迫せまりくる騎馬の群れに向かって投げつけてやった。一。二。三。ドドンドン！　直ちよく撃げきを受けたのはせいぜい先頭の三騎くらいだが、あおりを食って転てん倒とう、落馬する者が多数出た。こっちはこれで十分だろう。あとはあっちだ。「──Ａｇｎｅｓ妄Ｓｉｇｒｕｓ螻ＭａｚｚＲｅｚｚＫａｚｚＰａｚｚ□早世跳梁魍魎荒涼緋Ｃｏｎｇ贋Ｒｅｙ眩保明功明定明軽妙功名唱名卿ＳamＥｒＤ」

　マリアローズの場所からは、何が起こったのか、はっきりと目にすることはできなかった。ただ、詠唱が終わって間もなく、馬車が──というか、たぶん地面が揺ゆれたし、後方にパアッと光の柱が出現したのが見えたし、音も聞こえた。それだけである程度のことは想像できた。何しろ、マリアローズの爆ばく弾だんなんて問題にならないような盛せい大だいな爆発音だった。呪じゆ文もんも長めだったし、強力な魔ま術じゆつだったに違いない。どれくらいの被ひ害がいが出たのか知らないが、これでまだ追ってくるとしたら、たいした根こん性じようというより、単なる馬ば鹿かだろう。実際、こっち側の無事な騎馬は慌あわてて引き返してゆき、馬を失った者も這ほう々ほうの体ていで逃げていった。

「右足か左足か知らんが、どうせあの旗を見る機会は二度となさそうだしな」

　トマトクンが顎あごを撫なでながら再び窓の外に目をやった。

「……結構派手にやったな、サフィニア」

「す……すみません……新しい魔術で……少し、加減がうまくできなくて……」

「あ、あんたら、いったい……」

　小窓から顔をのぞかせているアニャキス・ローが、ありえないくらい大きく両目を見開いている。

　マリアローズは肩かたをすくめてみせ、短く答えた。

「ただの旅行者だよ」

Omenage 897 10th revolution 24th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ベアフット地区

〝ヴィラ・ア・ジョーカー〟

chapter.2

ジョーカー

　丘の上のお屋敷については、以前からさまざまな噂うわさが囁ささやかれていた。

　なんといっても、ここは山の手の高級住宅街シックタウンではなく、旧市街オールドタウンのベアフット地区だ。海岸を見下ろす小高い丘おかの上にあるその瀟しよう洒しやな屋や敷しきは、かなり場違いな印象で、周りの風景から浮ういている。どうやら、十年近く前にできたらしいが、柵さくで囲われた敷しき地ちがやたらと広いせいもあって、人が住んでいるのか無人なのかも判然としない。

　ただ、深夜、貴族風の男がものすごい美女を連れてあの屋敷から出てきたところを、誰だれかが見たとか見なかったとか。あるいは、強こわ面もての男たちが、あの屋敷であやしげな会合を開いているらしいという話もあった。なかには━いや、あの貴族風の男は、じつは人間の生き血を吸う化物で、美女はその僕しもべなのだ。そんなことをまことしやかに語る者さえいる始末で、結局、たしかなことは何もわからない。わからなかった。今日までは。

「じゃあ、この屋敷を建てたのはエンツォさんなんですか」

「そうだよ」

　屋敷のポーチでリクの問いにうなずいてみせたのは、そのエンツォ・パンカロだ。白はく髪はつで、きわめつきの凶きよう相そう。一見、実じつ年ねん齢れいの六十二歳よりも老ふけて見える皺しわ深ぶかい顔がん貌ぼうは、だが、彼が歩んできた壮そう絶ぜつな人生によって形づくられたものだろう。

　それに、彼は老けこんでなどいない。古傷のせいで、左足を若じやつ干かん引きずってはいるものの、いざとなれば自分で自分の身を守ることくらいは十分以上にできる。それどころか、半はん端ぱな覚かく悟ごで彼に挑いどみかかれば、危害を加えるどころか返り討うちに遭あうのがオチだろう。だから、友人の見み舞まいに護衛など不要だというのがエンツォ・パンカロの主張だが、立場が立場だ。いくら本人がよくても、周りの者は納なつ得とくできない。

　何せ、エンツォ・パンカロは、ジェードリで知らぬ者とていない、パンカロ・ファミリーの首領ドンなのだ。

「この家の主あるじがいなければ、今ごろ私は生きとらんかっただろう。大恩人だ──などというと、彼が嫌いやな顔をするから、友人ということにしているがね。それで、海の見える場所に家が欲しいという彼の望みを聞いて、私が勝手に場所を探してこの家を建てた」

「勝手に、ですか。その人に頼たのまれたわけじゃなくて」

「誰かに頼み事をするような男ではないな。しかし、この家はあっさり受けとってくれた。内心、拒きょ絶ぜつされるのではないかと気がかりだったから、あのときはほっとしたものだよ」

　一いつ般ぱん的に、エンツォ・パンカロには二つの顔があると信じられている。敵に対するときの非情な鬼おにの顔と、味方に対するときの寛かん容ような父の顔だ。だが、リクは今日、第三の顔を見たような気がする。友を思う男の顔とでもいえばいいか。あたりまえのことかもしれないが、彼も一人の人間なのだ。ファミリーを束ねる者、数百人の義理の子を持つ父として、恐おそれを知らず、揺るがず、常に厳しく、それでいてやさしく、そして誰よりも孤こ独どくな男の横顔が、今はやけに身近に感じられる。親しみさえ覚えずにはいられない。

「ん？　どうしたのだ、リク」

「……いえ。なんでもありません。でも、やっぱり、護衛がおれとカルロさんの二人だけじゃ危険だと思います」

「カルロは腕うでが立つ。カルロが見こんでいるお前も、若いとはいえ信用できる。あまり大勢連れて歩いては目立つしな。それでは、かえって狙ねらってくださいと言っているようなものだ。そうは思わんか、カルロ」

「何度も言っているように、私はリクと同意見です」

　カルロ・ボッシは、金色の光こう沢たくを持つ栗くり色いろの髪かみを短く整えて、右は一ひと重え瞼まぶた、左は二ふた重え瞼まぶたの鷹たかのように鋭するどい目をした長身の三十一歳だ。十七でエンツォ・パンカロの子となり、ファミリーに加わって以来、父の手足として働き、今は側近中の側近と見なされている。

「例の妙みような連中がオストロス神しん殿でんを占せん拠きょし

てから、どうもきなくさくなってきています。できれば親おや父じには、家に閉じこもっていて欲しいくらいです」

「人間、死ぬときはどうやっても死ぬ。運命に逆らっても無様なだけだ」

「運命だろうとなんだろうと、まだ死なれては困ります」

「そうだな。死ぬ前に片づけておかねばならん問題がある、か」

「そういう意味では」

「いい。この話はよそう。いずれ私が一人で決めねばならんのだ。友を見舞う前に考えるようなことでもない」エンツォは首を振ふってドアに手をのばしかけ、途と中ちゆうでやめて、リクとカルロに片目をつぶってみせた。「まあ、どうせたいした病ではなかろうがな。これこそ、彼の病気みたいなものだよ」

「──まったくもって、失敬千せん万ばんなやつだ。この老いぼれめ。病で臥ふせっている者の姿を目にして、開口一番、元気そうだとは何事だ」

　通されたエンツォ・パンカロの友人の寝しん室しつは、華か美びではないが豪ごう勢せいで、いかにも贅ぜい沢たくが身についている者の部屋というかんじだった。

　寝台にせよ、そのほかの調度にせよ、内装にせよ、たいした審しん美び眼がんを持たないリクが見ても、高価な一級品だとわかる。それでいて、何もかもがさも当然といった様子でそこにあり、ぜんぜん嫌みたらしくない。

　それら、値段を聞いたら目玉が飛びでるだろう品々に囲まれ、絹をしきつめた寝台で上半身だけ起こしているこの屋敷の主も、やはりある種の気品を身にまとっていた。

　だが、エンツォの命の恩人だという話を、前もって聞かされていたせいだろうか。黒髪を肩かたまでのばして、口くち髭ひげと顎あご鬚ひげを伊だ達てっぽく整えたこの男には、それだけではないと

思わせる何かがある。あの青味を帯びた黒い瞳ひとみの奥に、いったい何をひそませているのか。一言でいえば、ただ者ではない。

　ジャン・ジャック・ド・ジョーカー。

　六十二歳のエンツォよりは確実に年下だろうが、五十代には見えず、四十代でも、三十代でも不思議ではない。さすがに二十代ではないと思うが、エンツォが「元気そうだ」と言ったとおり、血色はあまりよくないものの、奇き妙みようなほど肌はだに張りがある。目には少年めいた力強い輝かがやきがあり、しかし、闇やみの底を見み据すえているかのように、どこか昏くらい。

　男性にしてはやや精せい悍かんさに欠け、女性的というほど優美ではなく、少し口が小さめだが、美男子といっていいだろう。一度見たら忘れられない、印象的な顔立ちだ。

「だが──」エンツォは、友の寝台の脇わきに置いた椅い子すに腰こしかけている。リクとカルロは寝台から離はなれた場所のソファに座っていて、顔を横に向けないと二人の姿を見ることはできないのだが、思わずド・ジョーカーにちらちら目をやってしまう。その得体の知れない存在感のせいかもしれない。「本当に、たいしたことがなさそうでよかった。順番でいえば、あんたより私のほうがずっと先のはずだからな。何かの間ま違ちがいであんたを見送る羽目にでもなったら、運命のやつをとっつかまえて、さんざん抗こう議ぎしないとならんところだ」

「ふん。運命に逆らっても無様なだけだ。それが貴様の口くち癖ぐせだったはずだろうが」

「無様だろうが、みっともなかろうが、やらざるをえんことはあるさ」

「やらざるをえん、だと？　馬ば鹿か者ものが！　己おれのことなど捨て置いて、貴様は貴様の可愛かわいくて可愛くてたまらない家族のことだけ考えていればいいのだ、エンツォ・パンカロ。第一、己おれは貴様をはじめとする世界中の野や郎ろうどもが盛せい大だいに大だい嫌きらいだ。貴様もそれはよく知っているはずなのに、供の者は目つきの悪い男に、餓が鬼き一匹ぴきか。気のきかんやつめ。思うに、その白しら髪が頭あたまは飾かざりなのだな。よくできたヘルメットだ。職人技わざだな。いったい誰だれに作らせた。今度紹しよう介かいしろ。その前に、美しい女の一人や二人連れて

くるくらいの気配りがなぜできなかったか、そのあたりをとくと反省するがいい」

「だが、あんたにはクローディア殿どのがいるではないか」

「あれは下女だ」

「そうは見えんが」

「貴様の目玉が腐くさっているのだろう」

「たしかに老眼気味ではあるが、遠くのものはよく見えるぞ」

「だったら、腐っているのはそのヘルメットの中身か」

「もしそうなら、早く隠いん居きよせねばならんな」

「で、意志薄はく弱じやくの長男か、金に汚きたなく額も度量も狭せま苦くるしい次男か、単純馬鹿の三男に跡あとを継つがせ、酒を片手にパンカロ・ファミリーの崩ほう壊かい劇を黙だまって見物か。うむ。悪くない。なかなかに愉ゆ快かい痛快な老後だな」

「それを言わんでくれ。悩なやんでおるのだ」

「ふん。言葉は正確に使うものだぞ、エンツォ・パンカロ。己おれに言わせれば、貴様は悩んでなどいない。微み塵じんもだ。そうではなく、貴様は迷っているのだろう」

「言こと葉ば遣づかいについて、あんたに何か言われるとは心外だな」

「言葉はYew uis 心よりEnola 出でるnar Eno.。己おれは常におのれの心のうちをもっともふさわしい方法で表現している。正しいとはそういうことだ。何よりもおのれにとって正しくなくば、すべてが誤りに堕おちる。貴様は思っているのだろう。おのが子にその器量がないと。ならば他の者に継がせればいい」

「簡単にできると思うか」

「少なくとも、貴様にしかできんことだ。意中の者はいるのだろうが」

　ド・ジョーカーは不意にカルロをちらりと見た。まるで、こどもが庭に埋うめられた誰かの宝物を発見したときのような顔つきだ。カルロは気まずそうに視線をそらしたが、エンツォ・パンカロは否定しなかった。

「──あんたの言うとおりなのだがな。そもそも、このようなことで頭を悩ませておるのが、衰おとろえの証しよう拠こかもしれん」

「人は皆みな、老いて死ぬ。ときに、老いることさえ許されず、無残に死んでゆく。恐おそれるな、臆おく病びよう者ものよ。貴様の命は、始めから散るためのみに生を受けたむなしいものなのだ」

「誰しもが、あんたのように達観できるわけではない」

「馬鹿め。達観などではない。これは我々徹てつ底てい的な弱者を容よう赦しやなくのみこみ粉微塵に打ち砕くだく、圧あつ倒とう的な真実だ」

「あんたさえも、真実の前では無力だというのか」

「打ち勝つ方法はあるぞ」

「どうせ、教えろと言っても、自分で考えろと言うのだろう」

「当然だ。貴様は己おれより無む駄だに長く生きているではないか。その冗じよう長ちような人生からえた一いち握あくの知ち恵えはないのか、愚ぐ者しやよ」

「……ないでもない、か」

　エンツォがうつむき加減でぽつりとそう呟つぶやいたときだった。ドアがノックされ、トレイを持った女性が寝しん室しつに入ってきた。玄げん関かんで彼女に出で迎むかえられたときも驚おどろいたが、リクはまた思わず息をのんでしまった。

　彼女は双そう眸ぼうに煌きらめきを宿し、輝く王おう冠かんをかぶっている。もちろん比ひ喩ゆだが、光のあたる角度によって、金色にも銀色にも見えるその瞳ひとみと髪かみの毛は、そうとでも表現するしかない。

　今にも壊こわれてしまいそうなくらい、どこまでも繊せん細さいで、人ではなく別の生き物なのではないかとさえ疑われる、その面

おも差ざし。悲しい目め許もと。せつなく引き結ばれた唇くちびる。それでいて、どこか芯しんの強さを感じさせる。

　とにかく、とてつもなくきれいな女性だ。黒、赤、白の三色で彩いろどられたジャンパースカート、ブラウス、ヘッドレストは、カードゲームの道化者ジヨーカーを意い匠しよう化した紋もん章しようが刺し繡しゆうされていることもあり、ちょっと風変わりなデザインに見えるが、それさえも彼女にはよく似合う。いや、彼女が身にまとえば、どんな衣い装しようでもその価値を極限まで高めるだろう。

「お茶をお持ちいたしました」

　そんな女性に茶を出されると、なんだか心苦しい。それはリクだけでなく、カルロも一いつ緒しよのようだ。ソファから腰こしを浮うかしかけて、慌あわてて座りなおすカルロの姿は、ふだん冷静沈ちん着ちやくを絵に描かいたような男だけに、ちょっとだけおかしかった。

「……わざわざ、すみません」

「粗そ茶ちやでございます。お口にあいますかどうか」

「ああ、いや、とんでもない」

　パンカロ・ファミリーの若わか頭がしらともなれば、当然、女にもてる。目つきはかなり物ぶつ騒そうだが、カルロは男前の部類に入るから、余計に女たちが放ほうってはおかない。特定の女性がいるという話は聞かないものの、それなりに浮き名を流しているはずのカルロが、彼女の前では初心うぶなこどもみたいだ。それなのに、彼女のほうは表情一つ変えない。まぶしいほどに堅かたい女性だ。

「クローディア」

　ただ、ジャン・ジャック・ド・ジョーカーに向けられる眼まな差ざしだけは、違ちがう。

「己おれは茶はいい。酒だ。酒を持ってこい。アパルマティの五十二年があっただろう」

「かしこまりました」

　リクは見み逃のがさなかった。そう答えて頭を下げる直前、ほんの一いつ瞬しゆんだけだが、クローディアの美しい精せい巧こうな顔がある感情で彩られた。呆あきれたような、何かをこらえるような──しかし、愛いとおしくてたまらないというような、女の表情だった。

「やれやれ、昼間から酒か」エンツォがわざとらしくため息をついた。「ジャン・ジャック・ド・ジョーカー。あんたは一応、病人なのだろう。クローディア殿どのもクローディア殿だ。なんでもはいはいと言うことを聞く必要はないのだぞ。あんたは召めし使つかいではないのだ」

「わたくしは主様マスターの下女でございます」

「そらみろ。本人もこう言っているではないか」ド・ジョーカーは、クローディアを追い払はらうように手を振ふってみせた。「さあ、酒だ。急げよ、クローディア。エンツォ、貴様も飲め。時はよどみなく流れ、人の生は短い。せいぜい鱈たら腹ふく極ごく上じようの酒を飲み、旨うまい飯を貪むさぼり食い、佳よい女を抱だき壊し、敵を血祭りにあげ、財宝の海に溺おぼれるがいいのだ。どれだけ欲得にまみれ、汚お濁だくに身をひたし、罪を重ねたところで、我らは早晩死して跡あと形かたもなく消え去る。恐れることなど何もない。エンツォ・パンカロ。その萎しなびた足で、昔のようにすべてを踏ふみにじるがいい。それができんなどと情けないことをぬかすのなら、己おれの前にひざまずいて頭こうべを垂れろ。昔のよしみだ。その素っ首、いっそ今すぐ叩たたき落としてくれる」

　結局、ド・ジョーカーとエンツォはワインを五本開け、カルロも断りきれずに少し飲まされて、リクはジュースだの茶だのを腹が一いつ杯ぱいになるまで飲んだ。

　エンツォは酒しゆ豪ごうで、浴びるほど飲んでも泥でい酔すいしないのだが、今日は足どりが若じやつ干かんあやしい。やはり、友人と酌くみ交かわす酒は何か違うものなのかもしれない。天下のエンツォ・パンカロが、あそこまでさんざんなことを言われまくる光景は初めて見たが、当人はやたらと上じよう機き嫌げんだし、リクもなぜか不快な思いはしなかった。エンツォと一緒に何度かド・

ジョーカーを訪おとずれたことがあるというカルロによれば、いつもこんなかんじなのだという。

「彼は、そんなものがあればの話だが──真の意味で貴族なのだ」

　日も暮れかけた帰り道の途と中ちゆう、エンツォはド・ジョーカーをそう評した。

「私は彼の素す性じようを知らん。本名さえも知らん。だが、彼が生まれながらの貴族だということはわかる。彼は卑ひ屈くつと無む縁えんで、何ものにもこびへつらうことがなく、恐おそれず、怯ひるまず、従わず、奔ほん放ぽうで、とらえどころがなく、気ままで、冷れい酷こくだが、慈じ悲ひ深い。たまに、彼のように生きられたらと思うことがある。自分の人生に後こう悔かいがあるわけではないがね」

「ジョーカーという名は、やはり偽ぎ名めいですか。伯はく爵しやくを名乗ってらっしゃるようですが」

　どうやら、カルロはド・ジョーカーがあまり好きではないようだ。いや、苦手といったほうが近いだろうか。いつもたいていしかめ面つらをしているカルロは、好き嫌きらいがわかりづらいのだが、ド・ジョーカーのことは、はっきりと敬遠している態度が見てとれた。

　エンツォも、そのあたりには気づいているだろう。だが、かえってからかうような口調で返すあたり、今日のエンツォは本当に楽しそうだった。

「彼と一度切り札をしてみればわかるよ。まあ滅めつ多たに勝てん」

「なぜです」

「道化者ジヨーカーの札が必ず彼に味方する」

「イカサマですか」

「だとしたら、彼は世界一の手品師だな。たとえ目をつぶっても、自分の手を一いつ切さい使わなくても、道化者ジヨーカーは彼を助ける」

「とんだ伯爵様だ」

「私にとっては、彼が道化者ジヨーカーだよ」

　エンツォは不意に足を止めると、しばらく地面を見つめてから、夕焼けの空を見上げた。

「──腹を決めた。私にしかできんことを、なすべきことをなす。カルロ」

「はい」

「私が今、死ねと命じたら、お前は死ぬか」

「死にます」

「そうか」エンツォは一つ息を吐はいて「……そうか」と呟つぶやき、ゆっくりと首を回した。「ウーゴやニーノなら、そうは答えんな。チーロはわからんが、末子のあいつには荷が重かろう。実の兄どもより、お前を慕したっておるようだしな」

「親おや父じ……」

「私が決めることだ」エンツォ・パンカロの少しかすれた声には、有う無むを言わせぬ力強い響ひびきがあった。「たとえ誰だれの意見を聞いたところで、所しよ詮せん、私以外に決断できる者はおらん。どのみち、私の目が黒いうちに片をつけねばならんのだ。異議がある者は腕うでずくでも従わせる。それでも駄だ目めなら排はい除じよする。もはや我がファミリーは我々だけのものではない。ベアフットの女たち、こどもたちの明日の暮らしにも責任がある。跡あと目めなど誰でもかまわんのだ。責任を果たすことができる者なら誰でもな。だが、それが理解できん者に、ファミリーを率いる資格はない。それだけのことだ」

　パンカロ・ファミリーは赤線地区の支配者だ。それはおそらくジェードリに住む者の共通認にん識しきだと思うが、実際はそれだけではない。

　リクは四年前にこの街にきたので、昔のことはよく知らない。しかし、少なくとも現在のパンカロ・ファミリーは、もっと大きな役割を果たしている。シックタウンやヤスパー地区でぬくぬくと暮らしている連中には無関係だろうが、ベアフット地区の人々に仕事を

提供しているのは、パンカロ・ファミリーだ。勤め先は赤線地区の風ふう俗ぞく店てんや飲み屋が多いとはいえ、埠ふ頭とうや名人街の下働きの口も一部あるし、いずれにしても仕事がないよりはいい。後ろにファミリーがついていれば、ひどい扱あつかいを受けることも少ないし、ファミリーの面めん目ぼくをつぶすわけにはゆかないので、皆みな、たいてい真ま面じ目めに働く。しかも、エンツォ・パンカロは紹しよう介かい料も要求せず、給料から天引きすることもしない。おかげで、以前は家を建てるために街の城じよう壁へきを壊こわして材料を調達しなければならないような状態だったベアフット地区は、徐じよ々じよに、ほんの少しずつだが、マシになってきているのだ。

　エルデン、カリオサークに次ぐサンランド第三の都市ジェードリには、三人の「父」と呼ばれる人物がいるという。

　一人は、暗黒大陸との通商の拠きよ点てんとしてこのジェードリを造った、ルオー兄弟商会のマルセル・ルオー、パパ・ルオー。もう一人は、新埠頭を建設したジェードリ中興の祖、バルモア商会の会長エドウィン・バルモア、パパ・バルモア。そして――ベアフット地区の救世主、パンカロ・ファミリーの首領ドン、エンツォ・パンカロ、パパ・パンカロ。

　エンツォを他の二人と並べて称しようするのは、ベアフット地区の住民だけかもしれない。

　けれども、海運の中心として繁はん栄えいしている港町ジェードリの半分は、新埠頭の隆りゆう盛せいですたれてしまった旧市街オールドタウンだ。その旧市街オールドタウンの半分以上の地域が、俗ぞくにベアフット地区と呼ばれている。ベアフット地区の英えい雄ゆうを父と呼んで何が悪い。裸足ベアフツトの我々だって生きている。そう胸を張って主張できるのも、エンツォ・パンカロのおかげなのだ。もちろん、エンツォやファミリーに反感を抱いだく者、嫌けん悪おする者、恨うらみを持つ者もいるが、きれいごとばかり言って渡わたってゆける世の中ではない。とくに、このサンランドでは。

「リク」エンツォがリクに向きなおった。「今の話は聞かなかったことにしておけ」

「はい」

「まあ、心配はしておらんが。お前は口が堅かたそうだ」

「口が堅いかどうかはわかりませんが、誰にも言いません」

「信じるよ。お前はいい目をしておる」

　エンツォはリクの肩かたを軽く叩たたいて、かすかに笑った。

　でも、いい目。そうなのだろうか。リクは自分の右目に手をのばして、まぶたの上を指でなぞった。この赤い瞳ひとみが、いい目。そうとは思えない。これは━━失敗で、ニセモノの、証しよう拠こなのに。

　誰かを信じるのはたやすい。

　けど、だめだ。おれはおれを信じられない。

　誰かを裏切るつもりなんかない。

　けど、だめだ。おれはおれを裏切るかもしれない。

　━━だから。

「リク、この話を親父の前で持ちだすのは卑ひ怯きようだろうが」

　それは、カルロの好意なのだとわかっている。

「そろそろファミリーに入れ。お前ならやっていける」

「……いえ、それは」

「何が気に入らない」

「気に入らないことなんて……ありません」

「じゃあ、なぜだ」

　言えない。言えるはずがない。

　ファミリーの仕事を始めて、三年。二年前にカルロと顔をあわせる機会があって、それ以来、直々に用を頼たのまれるようになった。たぶん、最初は、わりと使えるやつだと思ってもらえたのだろう。だが、カルロと行動をともにする時間が増えるに従って、何か

それ以上のものを感じるようになってきた。それがなんであれ、今やカルロは、はっきりとリクに目をかけてくれている。お忍しのびのエンツォを護衛するのにも、こうして同行させるくらいだ。信しん頼らいされている。それは素す直なおに嬉うれしい。なんとか信頼にこたえたいと思う。

　でも、怖こわい。自信がない。

　少なくとも、今はまだ。

「──ハーヴェイが……ファミリーに入りたがってます。真面目な男です」

「あれはまだ餓が鬼きだ。もう少し様子を見る必要がある」

「年はおれとたいして変わりません」

「年は問題じゃない。だいたい──」

　カルロの言葉を、エンツォが厳しい面おも持もちで引き継ついだ。

「ファミリーの一員でもないお前が、さしでがましい口を叩くものではない。思い上がるな」

「……すみません」

「リク」カルロはリクの両りよう肩かたをがっちりとつかんだ。「お前を買ってるンだ。無む理り強じいはしないが、よく考えてみろ。それに、お前のようなやつには──家族が必要だ」

　もし、そうだとしても。

　望んだとしても。いくら欲ほつしても。

　その資格があるのか。

　胸が、ざわつく。

　リクはうつむいて少しだけ下した唇くちびるを噛かんだ。

　不意に、身体からだのどこかで、何かが、ずぐん、とうごめいた。

「……カルロさん」

　唐とう突とつだったが、それだけでカルロは察してくれた。エンツォもさすがだった。カルロとエンツォは、何気ないふうを装よそおってリクの背中をぽんと叩き、すぐそばの路地に入っていった。

　海岸から二、三百メーテル離はなれたこのあたりは、石造りの古い街並みだ。老ろう朽きゆう化かして崩くずれかけている建物も多いが、二階、三階建ても結構あり、ベアフット地区にしては空が狭せまく感じられる。尾び行こうはしやすいだろうが、そのせいでかえって相手は接近しすぎたのかもしれない。

　リクは、カルロたちと逆方向の路地へと足を進めて、角を曲がった瞬しゆん間かん、建物の壁かべに足をかけた。跳とんだ。反対側の壁に足をついて、さらに跳んだ。それを繰くりかえして、あっという間に二階建ての屋根まで達した。こういう芸当はなるべく慎つつしむようにしているが、時と場合によっては、そうもいっていられない。リクが屋根の上から様子をうかがっていると、間もなく男が一人路地に入ってきた。年のころは、三十代。薄うす汚よごれた緑色のオーバーコートは、まだちょっと早いような気もするが、ベアフット地区では、秋冬春をずっと同じ服装で通す者も少なくない。だから、一見、不自然さはないが、注意して見ればわかる。足運び。視線の配り方。あれは素人しろうとじゃない。訓練されている。どこの手の者だろう……？

　リクは屋根から飛び降りた。着地の衝しよう撃げきは、膝ひざを曲げて吸収させた。男の真後ろだ。男が振ふり返る前に、膝裏を蹴けって体勢を低くさせ、後ろから抱かかえるようにして両りよう腕うでを首にからめた。

「一人？」

「…………ッ！」

「そう」

　一気に絞しめた。ものの数秒だった。気絶した男を壁にもたれさせるなり、リクは路地から駆かけ出た。向かう先は、カルロとエンツォが入っていった別の路地だ。二人の後ろ姿の前に、違ちがう男の背中があった。こっちもベアフット地区にとけこんでいる風ふう体ていだが、振り向いて身構えるまでの動作がさまになりすぎてい

る。恐おそれがない。男はためらうことなく、懐ふところから円えん筒とう形の得物を出した。あれは、革かわ袋ぶくろのなかに砂か何かを詰つめてある、サップだとかブラックジャックだとか呼ばれる殴おう打だ用の武器だ。男は場数を踏ふんでいる。弱くない──と感じた瞬間、リクは直進すると見せかけて、跳ちよう躍やくした。飛び越こえる。やつの頭上を。これはさすがに男にとって予想外だっただろう。リクはやすやすと男の背中をとって、足あし払ばらいで転てん倒とうさせたうえ、右手首を踏み砕くだいてサップを取りあげ、両腕をねじりあげた。完全に組み敷しかれた男は、顔を後ろに向けて目を瞠みはった。

「──くっ、こどもか……！」

「こどもで悪かったね」

「しかし、罪は……同じだ。聖なる炎ほのおに焼かれるがいい……！」

　男がそう叫さけんだ直後だった。リクは自分でもよくわからないまま拘こう束そくをといて、男の顎あごを無理やり開けさせようとした。だが、遅おそかった。男はすぐに白目を剝むいて泡あわを吹ふき、全身を痙けい攣れんさせはじめた。

「毒か」カルロがエンツォをかばうようにして引き返してきた。「──同業者じゃないな。ここまでやる馬ば鹿かはいない」

「……炎がどうとか、言っていました」

　リクは男から離れ、頭を振って後味の悪さを追い払はらおうとしたが、うまくゆかなかった。唇くちびるや口のなかがカラカラに渇かわいている。心臓がおかしい。自分のものじゃないみたいだ。見たところ、他ほかに尾行者はいないようだが、まだ誰だれか、いや、何かに監かん視しされているように思えてならない。たとえば、正体不明の、悪あく霊りようのようなものに。

　こんなとき、カルロは本当に頼たよりになる。リクとはくぐってきた修しゆ羅ら場ばの数も質も違ちがうからだろう。クローディアの前でどぎまぎしていたときとは別人のように、カルロは少しも動どう揺ようしている様子がなく、平静に物事を観察し、考えている。死に瀕ひんしている男の上着を脱ぬがせて、それを発見した手つきにも、まったく迷いが感じられなかった。

「これは……」

　急速に生者から死者の領域へと踏みこもうとしている男の首に、それは巻きつけられていた。

　数珠じゅずを繋つなげた首くび飾かざりだ。

　端はしに、石で飾られた十字形の物がぶら下がっている。

「──黒いロザリオ、か」

Omenage 897 10th revolution 24th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ベアフット地区

〝ローラの家〟

chapter.3

帰る家

　ステラはたしかに美人じゃない。鼻が低くて、目が離れ気味で、垂れ目だし、そばかすも目立つ。量の多い髪かみの毛は縮れていて、それもステラは気にしている。でも、整った顔立ちじゃなくたって、ラッチャやテッドを相手にお姉さんぶっている姿は微笑ほほえましいし、アンナやミミの世話をしているときはおとなっぽくて素す敵てきな女性に見える。近所に住んでいるハーヴェイはずっとステラのことが好きだ。何かとリクに対たい抗こう意識を燃やしてうざったいハーヴェイは嫌きらいだけれど、女の子を見る目はあると思う。ステラの笑え顔がおはかわいらしい。

　あたしの前では、すごくつめたい、いやな表情ばかりしてみせるけれど。

　──それは、あたしのせいで。

「あんた、まだ寝ねないの」

　もうそろそろ日付が変わる。ステラは八歳のアンナやまだ三歳のミミを寝かしつけて、ラッチャとテッドの悪ガキ二人組を無理やり布ふ団とんに押しこんだあと、ローラとリクの夜食を用意して、明日の朝食の下ごしらえをして、台所の掃そう除じをして、とにかくいろいろ片づけてから、ようやく今、寝ね床どこにつこうとしているところだ。朝も一番か二番に起きる。たいへんなはずだ。

　ステラにしてみれば、自分はこんなにちゃんとやっているのに、あんたは──という思いが当然あるだろう。ステラは正しい。本当に。ルカだって、わかっている。だから、答えられない。階段の途と中ちゅうからこっちをにらんでいるステラに背を向け、床ゆかの上で膝ひざを抱かかえて、玄げん関かんのドアを見つめたまま黙だまっている。

　ほとんど仕切りのない平屋の上に、無理やり二階を増築したこの古い家は、いつも誰かの視線にさらされているようで、息苦しい。

　嫌いだ、なんて、言えないけれど。

「あんたがさっさと寝ないから、ジョルジュまで真ま似ねして起きてるんでしょう」

「僕はべつに誰かの真似をしてるわけじゃない」ほとんど指定席と

化している窓まど際ぎわの寝ね椅い子すから、心外そうな声でジョルジュが言った。十三歳のジョルジュは、日がな一日仏ぶつ頂ちょう面づらで本とにらめっこしている。今も、ランプの明かりを頼りに読んでいる本から目を離はなしもしない。「どうして僕がルカなんかの真似をしなきゃならないのさ」

「じゃあ、もういいかげん寝なさい。明日起きられないわよ。ちゃんと眠ねむらないと、背だって大きくならないんだから」

「いいよ。背なんかどうでも。僕のことは放ほうっておいて、ステラこそ寝なよ」

「寝るわよ。でも、ジョルジュも、疲つかれたらちゃんと二階にあがってベッドに入らないとだめよ。こないだみたいに、そこで朝まで寝たりしたら、風か邪ぜひいちゃうわ。もう寒いのよ」

「わかったって」

「ほんとにわかってる？」

「うん。だから、ステラは寝て。疲れてるでしょ」

「疲れてなんかないわよ」

　ステラは急に声を落とした。言葉とは裏腹に、ものすごく疲れている声こわ音ねだった。

「ルカ」

　そのせいだろうか。名を呼ばれて、ルカは思わず振ふり向いてしまった。

「……何？」

「あんた、外で働いたら？　そのほうが、あんたのためにも、みんなのためにも、いいんじゃないの」

「──外、って……」

「赤線地区の仕事ならいくらでもあるでしょう。あんた、顔はきれいだから。きっと、高く売れるわよ」

　でも、どうして？

　そんなことを言ったステラのほうが、言われたルカよりも、傷ついた顔をしている。

　まるで、あたしが悪いみたいだ。あたしだけが。

　ようするに、そういうことなんだろうけど。

「おやすみ」

　ステラはルカより先に目をそらして、逃にげるように二階へ上がっていった。とても見ていられない後ろ姿だった。ステラらしくない。違う。あれがステラなんだろう。

　五年前、父が漁に出たまま帰ってこなくて、天てん涯がい孤こ独どくになったルカがこのローラの家にきたとき、ステラはとても親切だった。女同士だし、年も同じくらいだし、姉し妹まいみたいに、友だちみたいになろうと、いろいろ働きかけてくれた。

　けれども、だめだった。昨日まで見知らぬ他人だった人間が、いきなり吐と息いきを感じる距きょ離りまで迫せまってくることに、ルカは耐たえられなかった。慣れていなかったのだ。周りのこどもや大半の大人たちからずっと気味悪がられ、敬遠されて育ってきたルカにとって、ステラは不可解な存在だった。もっといえば、怖こわかった。そして、だんだんといやになった。

　ふれられることも。近づかれることさえ。冗じよう談だんに作り笑いをすることも。挨あい拶さつに、へたくそな愛あい想そ笑いを返すことも。ステラはいいこなんだと頭でわかってはいても、受け入れられなかった。受け入れられない自分がいやで、そんなことで自分がいやになるのはステラのせいだと思った。一時期は、本当に、深刻なくらい、ステラが嫌いだった。

　今はそうでもない。

　ステラが前のようにはルカにかまってこないからだ。

　ただ、ステラはルカが心底から嫌いだろう。

　ステラはたぶん、信じているのだ。好意は好意で報むくいられるものだと。母親に捨てられ、自分と同じような孤児の面めん倒どう

を見てきたステラは、それでも世界はきれいだと信じている。信じようとしている。誰だれかにやさしくすれば、やさしくされるものだと思っている。だから、ステラは一生懸けん命めいいいこでいる。

　あたしは、それを否定したんだ。

　ステラの気持ちを拒きょ絶ぜつすることで、その信念に傷をつけた。

　あたしが目の前にいるだけで、ステラはあの傷を思い出すだろう。強いように見えて、ステラは弱い。弱いから、何かを信じて、すがろうとする。ステラにとって、あたしは邪じゃ魔まなんだ。ルカさえいなければ。ルカなんかいなくなってしまえ。ステラはそう思っているに違ちがいない。でも、そんなことは口が裂さけても言えないはずだ。

　ステラは、いいこだから。

　やさしいステラが、そんなことを言うはずがない。ルカを責めるのも、なじるのも、ルカのため。けれど、さっきは言いすぎた。「高く売れる」なんて。今ごろステラは反省しているだろう。いいこの自分が、あんなことを言っちゃいけなかったって。

　――無理すること、ないのに。

　ステラは、バカだ。

　どうせ、そんなにきれいな人間なんているはずがないのに、自分で自分の首を絞しめるような真ま似ねをして。はっきり言えばいいのに。出て行けって。いなくなれって。あんたなんか消えてしまえって。思っていることを、飾かざらないで、そのまま口に出せばいいのに。そうしてもらったほうが、気が楽だ。

　とはいえ、ステラの言い分にも一理ある。外で働く。それはルカもずっと考えていることだ。

　この家でも、ローラはもちろん赤線地区で昼から夜まで毎日ほとんど休まず働いているし、リクはパンカロ・ファミリーの仕事をしていて、ラッチャとテッドも名人街で船大工の下働きをしている。リクは十八だけれど、ラッチャは十四で、テッドはまだ十三だ。十六のルカが、家のことをとりしきっているステラを、少し手伝って

いるだけなんて。

　いいはず、ない。

　だめだ。

　わかっている。このままじゃいけない。

　でも、仕事となると、赤線地区で働くしかない。

　──リクはなんて言うだろう……？

「ステラは」

　ジョルジュが本を閉じる音がした。

「きっと、疲つかれてるんだよ」

「……うん」

　そして、ルカがさらにステラを疲れさせている。

「そうだね。毎日、結構、きついしね」

「僕は働くなんて馬ば鹿か馬鹿しいと思うな」

　ジョルジュは本をよく読むせいか、なんだかおとなびたところがある。キャラメル色の髪かみがやわらかそうで、同年代の男の子に比べると体は小さいのだが、その青い目はどこか遠くを見ているかのようだ。趣しゆ味みがあわないせいか、ラッチャやテッドとはあまり仲がよくないみたいだけれど、似た者同士ということなのか。ルカと二人のときは、わりとよくしゃべる。

「働いて、お金を稼かせいで、食べて、寝ねて。くだらないよ。どうせみんなそのうち死ぬんだし。好きなことをして、好きなように生きればいいんだ」

「だけど、お金ないと、やっぱり困るよ」

「困ったとしても、死ぬまでの間でしょ。飢うえ死にするのは苦しいし、時間がかかるけど、それがいやなら、首でも吊つって死ねばいい」

「ジョルジュは、死にたいの」

「死んだって、ぜんぶ終わるだけなんだ。痛くもないし、何も感じない。怖くないよ。オストロス神しん殿でんもなくなっちゃったしね。今なら、一回死ねば、ちゃんと何もかも終わりにできる」

「そっか。あたしは──死にたくはない、かな」

「ルカはリクが好きだからね。リクに会えなくなるの、いやでしょ」

「……そういうのじゃないよ」

「違うの？　僕はてっきりそうだと思ってた。好きとか嫌きらいとか、愛だとか恋こいだとか、そんなのもきっと幻げん想そうにすぎないけどね」

「幻想？」

「あると思えばあるし、ないと思えばない。結局、ないのと同じだよ」

「なんだか、難しいこと言うね」

「単純なことだよ。目を閉じてみれば、誰だれにでもわかる」

「閉じたよ」

「何が見える？」

「何も見えない」

「じゃあ、今、ルカの前に何がある？」

「玄げん関かんのドア」

「見えてないのに、どうしてわかるの」

「あるって知ってるもん」

「知らなかったとしたら、わかる？」

「……さわったりすればわかると思うけど」

「じゃあ、ルカに手がなかったら？」

「そんなの、わかんないよ」

「でしょ。わからないんだよ。気持ちなんて、見ることもできない、さわることもできない。それなのに、どうして間違いなくあるって言えるのさ」

　ジョルジュは、なぜか苛いら立だっているみたいだった。そんなものはないと断言しながら、本当はあるんじゃないかと疑っているみたいな口調だった。もしくは、あればいいと願っているのに、ないと言わざるをえないのが悲しくてたまらない。

　ジョルジュはひねくれていて、頑がん固こだ。

　でも、そんな自分でいるしかないジョルジュのことは、少しだけわかるような気がする。

「今の、本に書いてあったんでしょ」

「だったらなんだよ」

「べつに」

「しょうがないだろ。僕自身が実際に経験できることなんて少しなんだから。本を読むことで、もっといろいろなことを知ったり、覚えたりできるんだ」

「怒おこらないでよ」

「怒ってないよ」

「怒ってるよ」

「怒ってない。ルカがしつこいから、イライラしてるんだ。ねえ、はっきり言ってうざいからさ、いつまでもそんなとこにいないで、さっさと海にでも行ったら？　リクが帰ってきたら捜さがしに行ってくれるよ」

「行かないよ。リク、仕事で疲れてるだろうし。ここで待ってる」

「やっぱり、リクを待ってるんだ」

「悪い？」

「リクは誰にでもやさしいだけなのに」

「……わかってるよ、そんなこと」

　ジョルジュに言われるまでもない。たしかにリクはやさしいけれど、それはルカに対してだけじゃない。ルカだろうと、ステラだろうと、ジョルジュだろうと、誰かがいなくなれば、リクは捜すだろう。見つけだして、そっと帰りをうながすだろう。そっけなくしても、愚ぐ痴ちをこぼしても、自分で自分のことが嫌いになりそうな汚きたない表情を見せてしまっても、リクの態度が変わることはない。あたしは特別じゃない。リクはみんなにやさしいんだ。

　そのやさしさが、ルカにはまぶしくて、少し痛い。

　つい期待したくなって、でも、無む駄だだとあきらめて、せめてそばにいられたらと思う。

　──それだって、リクのやさしさにくるまれていたいだけで、自分のことしか考えていない、姑こ息そくな望みだけれど。

　と、鍵かぎを開ける音がして、ドアが開いた。胸が高鳴った。リクかと思ったのだが、違ちがった。ストールを頭にかぶって、厚手で丈たけの長い濃こい色の上着を着ていると、一見、年ねん齢れいがわからない。こんな時間に一人歩きをする女性にとっては当然の用心だが、化け粧しようをすっかり落として、髪かみをほどいて帰宅するのは、別の気き遣づかいからだろう。きっと、そういう部分をこどもたちに見せたくないのだ。だから、家では、必要以上におばさんくさく、お母さんみたいに振ふる舞まっているのだと思う。まだ二十八歳で、おしゃれをすれば、美人なのに。

「……おかえり」

「ただいま。あんた、まだ起きてたの。またそんなとこに座って──ジョルジュも。ちゃんと寝ねないと、おっきくなれないわよ」

「ローラまで、ステラと同じこと言わないでよ」

「そりゃ言いたくもなるわよ。ジョルジュ、あんた、このごろ、ご飯もちゃんと食べてないでしょ。本を読むのもいいけど、育ち盛ざかりなんだから、しっかり食べて、元気に遊んで、ぐっすり寝ない

と」

「そういうの、僕には無理だから」

「まあ、他ほかは他で、あんたはあんただから、できないことをどうしてもやれとは言わないけどね。でも、ご飯は三食きっちり食べなさい。あんたたちにおなかいっぱい食べさせるくらいの甲か斐い性しようはあるつもりだし」

「はいはい」

「あー。嫌きらいだなー、あたし。そういう返事の仕方。ひっぱたかれたい？」

「やだ。ローラに叩たたかれると痛いもん」

「じゃあ、返事。もう一回」

「はい」

「よーし」

　ローラは笑いながらストールと上着を脱ぬいで、大きさだけが取り柄えのダイニングテーブルの上に用意されている夜食に目をやった。黒パンと、シチューの鍋なべには樹じゆ脂し製の保温器をかぶせてあるから、まだ冷めきっていないはずだ。あの保温器も、どこからか樹脂の屑くずを集めてきて、ステラが作った。夜、帰りが遅おそいローラのために。ありあわせの布をかぶせた外観は不ぶ恰かつ好こうだけれど、あれを見るたびに、ローラがちょっとだけ目を細めることをルカは知っている。そして、大事なものを扱あつかう手つきで保温器を外し、お皿によそったシチューを一口食べて「もうあたしより上手だなあ、ステラ……」とか言うのだ。

　ルカは毎日のようにその光景を見ている。何もせず、じっと、黙だまって眺ながめている。たまに、苦しくなって、目をそらす。ローラとステラは繋つながっているんだ。べつに、うらやましいなんて思わない。だって、当然だ。ステラは役に立っている。みんなのために、何をしたらいいか、いつも考えて、行動している。それが、いいこでいるためだとしても、実際、みんなのためになっている。

　で、あたしは？　自分のことしか考えないで、あたしはいったい

何やってるの……？

　ルカは夜食をとっているローラの向かいの席に座った。

「ローラ」

「ん？　どうしたの、ルカ」

「あの、さ」

「なあに？　そんな真しん剣けんな顔して。何か大事な話？」

「そんな……たいしたことじゃないけど」

「じゃ、ちょっと待って。ご飯、食べちゃうから」

「うん」

　ジョルジュは何か察したようで、「僕、もう寝るよ」と言って二階に上がっていった。ただ、ジョルジュはたいていリクが帰ってくるまで床とこにつかない。何にも関心がないみたいなふりをするけれど、人一倍好こう奇き心しんが旺おう盛せいな男の子でもある。今ごろきっと、階段を上がったところで聞き耳を立てていることだろう。それはそれでかまわない。聞かれて困る話でもない。ルカはローラが食べ終えるのを待って、口を開いた。

「あたし、仕事しようかな、と思ってるんだけど」

「ふうん……」ローラは探さぐるような目でルカを見た。「仕事って、なんの仕事？」

「ローラ、どこか紹しよう介かいして」

「あたしが紹介できるのなんて、赤線の店くらいしかないよ」

「いいよ、それで」

「あんた、わかって言ってるの？」

「わかってる」

「あたしが赤線でどんな仕事してるか、本当にわかってる？」

「悪いことしてるわけじゃないでしょ」

「あたしは十五から赤線であの商売やってるけど──」ローラはテーブルに肘ひじをついて右手の中指でこめかみを押しながら、深々とため息をついてみせた。「あんた、十六だよね」

「だから、大だい丈じよう夫ぶだよ」

「あたしは生きてくためにそれしかなかったから、しょうがなかった。環かん境きようが環境だったしね。悪いことじゃないかもしれないけど、やりたくて選んだ仕事じゃないわ。軽い気持ちであの仕事をやるつもりなら、賛成はできないな」

「軽い気持ちなんかじゃないもん」

「だけど、何も考えてないでしょ。あんたには無理。あの仕事は」

「どうして？」

「こどもだからよ」ローラは部屋を見まわして、声をひそめた。「男とどうやるのかも知らないでしょ。黙って寝てればいいってものじゃないのよ？　あんたにできるの？　好きでもない男の前で裸はだかになって、さわられて、さわって、何も感じてないのに、気持ちよさそうな顔をして、声出して。そんなサービス精神、あんたにある？　ろくに挨あい拶さつもできないのに？　笑うことだって滅めつ多たにないのに、愛あい想そ笑わらいできる？　なんでも我が慢まんできるくらい、お金が欲しい？　そこまで切せつ羽ぱ詰つまってる？　そうは見えないけど」

「そ……それは……」

「ごめん」ローラは一度テーブルに額をつけて、顔を上げた。「でも、やっぱりルカには向かないと思う。本当に。あたしはべつに、この仕事やってることを恥はずかしく思ったり、どうしようもなくつらかったりするわけじゃないけど、そうじゃない人もいるしね。たとえば、ステラも無理。あのこは真ま面じ目めだから、いろんなことで自分を追いこんじゃいそうだし。あたしは、基本的にテキトーだからさ。手を抜ぬけるところは手を抜くし、ためこまないし、どうしてもいやだったら逃にげるし。それで、店、何回か変えてるしね。そのせいで面めん倒どうなことになっても、人脈使ってなんとか話つけてもらって、こうやって無事に暮らしてるし。ステ

ラにしても、あんたにしても、そういうふうにうまく世よ渡わたりしていけるタイプじゃないでしょ。できないことやったって、どうせ長続きしないのよ。だいたい、そうじゃなきゃ、あたしから言いだしてるってば。そろそろあたしと同じ店で働かなーいってね」

—嘘うそつき。

何がテキトーだ。何がいやだったら逃げるだ。そんな人間が、その若さで、血もつながっていないこどもを何人もひきとって育てたりするものか。つらくない？　それも嘘だ。皆みなが寝ね静しずまったあとの一階で、頭を抱かかえて背中を震ふるわせているローラの姿を何度か見た。店を変えるとき、すごく苦労して、怖こわい目に遭あいかけたことも知っている。間かん一いつ髪ぱつ、パンカロ・ファミリーの仲ちゆう裁さいが入って事なきをえたが、そうじゃなければたいへんなことになっていた。

そんなときさえ、ローラが心配していたのは、自分の身ではなくて、みんなのことだった。ふだんはあまり言わないが、あのときはさすがにローラもずいぶんほっとしたようで、口を滑すべらせたのだ。「あんたたちを路頭に迷わせるわけにはいかないからね。まだまだ死んでたまるかっての」

どうして、そうやって一人で背負しよいこもうとするんだろう。

なんで、そこまでしてくれるんだろう。

あたしには、それがわからない。

—苦しい。

「でも……あたし、何もしてないし、少しでもお金稼かせげば、楽に……なるだろうし」

「何もしてないってことはないでしょ。ステラと一いつ緒しよに家のことやってくれてるじゃない。お金にはならなくても、それだって立派な仕事なんだから」

「ステラはね。ちゃんとやってる。あたしは、ステラみたいに……できないから」

「—ひょっとして、ステラに何か言われた？」

「違ちがうよ。事実を言ってるだけ。あたしは、ステラに言われてお皿洗ったり、洗せん濯たくしたり……手伝ってるだけで。一人じゃ、何もできない。ステラ一人でもできるよ。たぶん。あたしは、いらないよ」

「いらないなんて言わないで」

「どうして？　だって、いらないでしょ？　そうだよ。いらないよ。あたし、いらない。お金だって、一人ぶん余計にかかるし。仕事もしないで。なんのためにいるのかな。いないほうがいいよ」

「ルカ、みんな寝ねてるんだから──」

「そうだね。ごめんなさい。あたし、自己中だから。ローラだって疲つかれてるのにね。こんな話されて、もっと疲れるよね。あーあ。もうやだ。なんか、耐たえられない。やっぱりあたし、仕事する。家にいたくないし。お金欲しいし。一人で暮らしたい。ローラ、お店、紹介して。好きじゃない男とやるくらい、なんでもないよ。最初はいやかもしれないけど、きっとそのうち慣れるよ。やってみたら、意外と向いてるかもしれないし。そうしたら、もう──」

「ルカ」

　すごく怒おこっているローラの顔が急接近してきた。

　かと思ったら、星が飛び散って、暗幕が下りて何も見えなくなって、重くて硬かたい音がした。

「……痛っ……？」

　そう言ってはみたものの、瞬しゅん間かん、よくわからなかった。これって、痛いんだろうか。いや、痛い。結構、痛い。痛い。痛いよ。ルカはテーブルに突つっ伏ぷして、しばらく頭を押さえていた。何これ。なんで？　どうして？　もしかして、叩たたかれた？　思いっきり叩いた？　平手じゃなくて、グー？　グーで？　こわごわと顔を上げると、ローラはルカの目の前に──テーブルの上に両りよう膝ひざをついた恰かつ好こうで、まだ拳こぶしを握にぎりしめて、ルカを見下ろしていた。

　泣きそうな、少女みたいな、表情で。

　──やめてよ。

　あたしが悪いって、わかってる。

　だから、やめてよ。

　ローラを傷つけたかったわけじゃないんだから。

　あたしは、自分を傷つけたかっただけなのに。

　それなのに、結局、ローラを傷つけて。

　あたしは、やっぱり、どうしようもなく身勝手な女で。

「……ごめんなさい……」

「ばか！」

　もう一発。

　殴なぐられるのかと思ったら。

　抱だきしめられた。

　ああ。

　やわらかくて。あたたかくて。

　本当に、こらえきれなくなった。

「……ごめん……なさい……」

「本当に、あんたは……どうして、そんな……」

　ローラは何か言おうとしたのだろうが、ちゃんとした言葉になっていなかった。ルカもいくら謝っても謝り足りない気がして、「ごめん」とか「ローラは悪くない」とか「泣かないで」とか、何度も何度も繰くりかえしたけれど、たぶん何がなんだかわからなかったはずだ。

　ただ、声にせよ、思いにせよ、ほんの少しでも伝わるものがあれば、上出来かもしれない。

　それくらい、人と人は離はなれている。

断絶がある。

それなのに、果てしないその距きよ離りを埋うめようとして、みんな無理をして、空回りして、足が止まって、とうとう力つきる前に──せめて、一言だけ。

ルカはローラの胸に顔を押しつけたまま言った。



「ありがと」

　あたしなんかのために、泣いてくれて。

　ローラはうなずいて、さらにルカを強く抱いた。

　まさにその瞬間、ドアが開くなんて思いもよらなかった。

　帰宅したリクは、赤い目を少し見開いて、ドアも閉めずにしばらく立ちつくしていた。

　ルカとローラも抱きあったままリクを凝ぎよう視ししていた。

　数秒か、もっと長い時間、そうしていたのかはわからない。

「……おかえり──」「……なさい」

「うん」

　それでも、リクは静かに微笑ほほえんでくれた。

　何事もなかったかのように。

「ただいま」

Omenage 897 10th revolution 27th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ベアフット地区

〝ヴィラ・ア・ジョーカー〟

chapter.4

白い王の苛立ち

　きみはイヌだから、彼女の瞳ひとみの色がエメラルドグリーンだということは知らない。彼女のきめこまかくなめらかな肌はだが、暗い色だと感じることはあっても、色相はよくわからない。彼女の黒くろ髪かみが細く何本にも編んであったとして、それがどうだというのだろう。

　ただ、他の同性の人間と比べて、彼女は上背があるほうだ。その認にん識しきは、きみにとって若じやっ干かん重要性が高い。あくまで若干、だが。

　体の大きさだけで、脅きょう威いの度合いをはかることはできないと、きみは知っている。それは一つの尺度ではあるものの、数多くある基準のなかの一つでしかない。

　たとえば、きみは彼女のにおいを覚えている。彼女の息のにおい。汗あせのにおい。その他、無数の分ぶん泌ぴつ物ぶつのにおい。きみは彼女の動きを視みる。彼女の身のこなしを記き憶おくに刻んでいる。きみはイヌの感覚で彼女を感じて、把は握あくしている。

　北の果てで、大きな雪鹿や、ときには雪熊さえ襲おそって捕ほ食しよくしていた白い種族の血を、きみは引いている。もうずいぶん前のことだが、人間に鬼人オーガと呼ばれている種族の一派が、人間たちに追われて北へ北へと逃のがれ、そこできみの祖先を見つけて、飼い馴ならしたのだ。

　鬼人オーガの谷で、異様なほど大きい体に純白の被ひ毛もうをまとって、きみは生まれた。きみは生まれながらの王だった。その資質を発揮するのに、少しの努力も必要としなかった。きみは幼いころから一目置かれ、長じるに従ってごく自然のなりゆきとして一つの群れを率いた。すぐにすべての群れに影えい響きよう力りよくを持つイヌの王となった。実際、鬼人オーガたちは、彼らの言葉で「白い王」の意味を持つ言葉できみを呼んだ。だが、どう呼ばれようときみは気にしなかった。きみには名前など必要なかった。きみはただ単に王だった。きみは生まれつき気位が高く、傲ごう慢まんで、強者だった。もちろん、それでもきみはイヌだ。イヌの習性から完全に自由だったわけではない。その証しよう拠こに、きみは何も考えずに鬼人オーガたちに飼われていた。鬼人オーガたちには長年にわたってイヌたちを使し役えきしてきたノウハウがあった。き

みはイヌたちの間にあっては絶対的な支配者だったが、鬼人オーガにはほとんど疑問を抱いだくこともなく従っていた。幸か不幸か、きみは知っていた。それがイヌたちの存在理由で、存在意義なのだと。鬼人オーガに飼われ、彼らの役に立つために、白いイヌたちは北の地から連れてこられたのだ。きみは──きみのようなイヌでさえ、あの瞬しゅん間かんが訪おとずれなければ、一生をただのイヌの王として終えたかもしれない。

　彼女と出会った。鬼人オーガに命じられて、獲え物ものを捜そう索さくしている最さ中なかだった。彼女は妨ぼう害がい者しやであり、敵だった。強い、敵だった。戦士だった。

　王のきみを飼っていた鬼人オーガたちが、彼女に斃たおされてゆくさまを、きみはしっかりと視た。嗅かいで、感じた。きみは何かを欲望しただろうか。そうかもしれない。きみは飢うえや渇かわきに似たものを覚えたかもしれない。きみはイヌで、王だった。純白の被毛はきみの産うぶ着ぎで、王の衣ころもだった。しかし、きみはあまりにも自然に王でありすぎて、王とは何か知らなかった。王には王国が必要だなんて考えたことはなかった。

　思い知らせたのは、彼女だった。

　彼女は、きみの王国を容よう赦しやなくどんどん削けずりとる侵しん略りやく者しやだった。

　最初、きみはなんとも思わなかった。次し第だいに慄りつ然ぜんとした。同族の仲間たちが、きみを王たらしめているイヌたちが、次々と死んでゆく！　殺されてゆく！　彼女はイヌたちを射殺し、そして鬼人オーガどもを討うった。まるで、きみが身にまとってきた王の衣が、少しずつ引き剝はがされてゆくかのようだった。王国は、きみの目の前でガラガラ音を立てて崩ほう壊かいしていった。きみはそれを視て、嗅いで、感じていた。ああ。おれは裸はだかの王だ！　気がつけば、おれは丸裸じゃないか……！　それは──だが、それは、なんと心ここ地ちよいことであったか。

　きみは知った。してみれば、おれは王などではなく──おれは、おれでしかない。上位者として刷りこまれた鬼人オーガどもに従い、明らかにおれよりも弱いイヌたちにかしずかれ、群れを率いていたおれは、おれではなかった。本当は、きみは気づいていたのだ。おれは、そんなものではない！　おれは──おれだ！　おれでしかないおれを、縛しばっていたものが、こんなにたくさんあった！　おれ

にけっして逆らわないイヌたち。おれを飼いながら、どこかで恐おそれ、おれに噛かみつかれぬことに安あん堵どしていた鬼人オーガども。おれは当然のような顔で王を気どっていたが、いつも苛いらついていた。おれは、なんだ……！　そう叫さけびたかった。ときにおれは夜に吠ほえた。皆みな、おれの声に怯おびえた。おれは吠えた。わけもわからず、おれは吠えた。そんなときは、誰もおれに近づいてこなかった。おれは吠えた。吠えずにはいられなかった。

　そういうことだったのだ！

　きみは悟さとった。彼女に気づかされたのだった。

「おかしなやつだ、きみは」

　いつか、彼女はそう言った。

「どうしてあたしについてくる」

　おもしろいからだ、と、きみは答えた。おまえは、おもしろい。

「そうかな。むしろ、きみのほうがおもしろいよ」

　彼女はきみの考えがわかるようだった。きみは思う。そんな人間はいない。だから、おまえはおもしろい。

　おまえは、けものだ。

「それは、誉ほめ言葉？」

　そうだ。

「喜んでおくよ、アルファ」

　──アルファ。

　そう、彼女はきみをアルファと呼ぶことにしたようだ。きみは名前になど頓とん着ちゃくしない。アルファ。アルファ、か。おまえがそう呼ぶというのなら、好きにするがいい。いずれにしても、おれはおれだ。どう呼ばれようと。どう思われようと。どう感じられようと。おれはおれでしかない。ロム・フォウ。おまえがおまえでしかないように。

　そうしてアルファは、今日もロム・フォウのあとをつけている。彼女の背中には相変わらずつけいる隙すきがない。筋肉がやわらかそうで、重心の移動がきわめてなめらかだ。まるで、丸裸で歩いているみたいだ。とくに、人間や鬼人オーガは、何か物を持ったり、身につけたりするから、もっとぎこちない動きになりがちだが、彼女は違ちがう。あれはけものの身のこなしだ。だから、とアルファは思う。

　このにおいは、彼女に似合わない。

　大勢の人間のにおいがする。

　この一帯はそうでもないが、それでも人間の痕こん跡せきがそこかしこにこびりついている。

　街──そうだ。街だ。ここは人間の街だ。なんだか、やたらとなまぐさい。海沿いの街なのだ。港がある。船で人や物を運びだし、運ばれてくる。ジェードリ。サンランド無統治王国という、風変わりな人間の国にあって、第三の都市ともいわれている。栄えている。人の街だ。

　そこに、昨日、ロム・フォウは足を踏ふみ入れた。最初、アルファは、おいおい、と思った。人間の街だぞ。そこには人間がたくさんいる。おれにはわかる。おまえは嫌きらいだろう。人間の街が苦手だろう。街に近づくに従って、ほんの少しだが、ロム・フォウは汗あせをかいていた。においがかすかに変わった。アルファが足を止めると、ロム・フォウが振ふり向いた。

「買い足さないといけないものがあるんだ。さすがに、きみにはよくわからないだろうけれど。一日二日だよ」

　しょうがない。

「……ついてこなくていいよ」

　おれはおれのしたいようにする。

「そう。まあ、いいけれど。かなり人目を引きそうだね」

　──そのとおりだった。

　人間どもめ。こちらをじろじろ見て、目があうと、顔をそむけ

る。そんなことを何度も繰くりかえすうちに、アルファは連中が脅きよう威いになりそうもないことを学んだ。前だけを、ロム・フォウだけを見て、それでも当然、警けい戒かいは怠おこたらずに街をのし歩く方法を、アルファはすぐに覚えた。

　やや厄やつ介かいなのは、小さい人間だ。こどもだ。あれは困る。全員ではなく、ごく少数だが、不用意にアルファのテリトリーに入ってきて、さわろうとしたりする。

　今、ここにくるまでの間にも、そんなこどもがいた。

　三人組だった。

　オス一人と、メスが二人。

　アルファを見かけた一番小さいメスが、いきなり走りだして、接近してきた。といっても、かなりおぼつかない足どりだったが、ちょうど、他のオスとメスは、一番小さいメスから目を離はなしていたようだ。やつらが気づいたときにはもう、一番小さいメスは、アルファに近づきすぎていた。「わんわん！　わんわんたー！」もちろん、脅威は感じなかったが、アルファは一応、歯を剥むいて、低く吠えてやった。うおん……！

　一番小さいメスは、すっ転んで、少し間を置いてから、メーメー泣きだした。わかったか、とアルファは思った。こういうことになるのだ。覚えておけ。わかったら、もう近づいたりするな。おれは、おれが認めない者に、この体をさわらせたりしない。それにはそれなりの手順というものがあって、服従を示すには──とか、訓辞を垂れてやりたい気分だったが、やめた。もう一人のメスが全身でかばうように小さいメスを抱だき起こし、オスが敵意剝きだしでにらんできたからだ。え？　もしかして、やる気なのか？　いや、おれはべつに。

「てっめえ……このラッチャ様が見てる前で、ミミに何しやがる！　イヌコロの分際で、ちょっと体がでけえからって……だ、だいぶ、めっちゃでっけーからって、いい気になってやがると、ただじゃおかねえぞ、こんにゃろめ！」

　というか、おまえ、見てなかっただろう。だから、小さいメスを止められなかったのだろう。だいたい、震ふるえているぞ。恐おそろしいのならば、なぜ楯たて突つこうとするのか。

「なんだ、その目つき！　俺が餓が鬼きだからって舐なめてんじゃねえぞ！」

　……いや、そういうつもりでもないんだが。

「おい、アンナ！　ミミは大だい丈じよう夫ぶか！　怪け我がとかしてねえか！」

「う、うん、大丈夫。ちょっと、膝ひざすりむいちゃってるけど……」

「な、なにい！　すりむいたのかよ！　マジカヨォッ！　やべーぞ、それ、リクの兄貴が見たら、ラッチャ、おまえがついててどういうことだって、超ちよう怒おこられるって！」

「……アンナ、リクはそんなこと言わないと思うけど」

「うっせー！　言われなくたって、そういうもんなんだよ！　男にはメンツってもんがあるんだ！　コツコツ男を上げて、俺だっていつかはリクみたいに、パンカロ・ファミリーの仕事やらせてもらうんだからな！」

「そういうバカなこと言ってるかぎり、リクはきっと反対すると思うよ……」

「バカ？　バカだとぉ？　バカとはなんだよ、バカとは！　だいたいな、アンナ、てめえ少し生意気だぞ！　俺のほうがずっと年上なんだからな！　少しは、年長者に対する敬意ってのをだな！」

「あんまりおっきい声出さないでよ。ミミが怖こわがってもっと泣いちゃうでしょ。まだ三歳になってないんだよ」

「わ、わりい。ごめんな、ミミ……」ラッチャとかいうオスは、アンナとかいうメスの腕うでのなかでむずかっている小さなメスの頭をさかんに撫なでた。どうにも落ちつきがないオスだ。ミミだったか。あの小さなメスも、かえっていやがっている。アルファは馬ば鹿か馬鹿しくなって先に進もうとしたが、またラッチャがつっかかってきた。「──あ！　待て、イヌコロ！　て、てめえ、逃にげるつもりかよ！　落とし前つけてけ！」

　落とし前？

「お、お、お手だ！　お手しろ！　そ、そうしたら今日のところは許してやらぁ！」

　お手……？

　アルファは疑問に思ったが、ラッチャが掌てのひらを上に向けてこちらにさしだしたのを見て、相手が何を望んでいるのかすぐに察した。なるほど。単純な命令に服させることで、上下関係を確かく認にんしようというわけか。イヌには、もともとそれに近い習性がある。アルファは、だが、それだけに、冗じよう談だんではない、と思った。どうしてこのおれが、こんな弱そうなオスの命令など聞かねばならないのだ。

　いっそ、この小うるさいオスを屈くつ服ぷくさせてやるか。弱者が強者に刃は向むかう愚ぐ行こうには、相応の報むくいを。当然の処置だ。それに、そっちのほうが遥はるかに簡単で、面めん倒どうが少ない。そうだ。そうしよう——としたときだった。

「アルファ。お手くらいしてあげたら」

　ロム・フォウ。

　少し前で、しばらく様子をうかがっていた彼女が、引き返してきてそんなことを言うものだから。

　——なんで、おれが。

　そう思いつつも、そこに譲ゆずれないものがあるのかと訊きかれれば、とくにない、としか答えようがない。おれはもはや王ではなく、おれでしかないのだ。相手のオスは人間のこどもだし、いざとなれば、一いつ瞬しゆんで息の根を止められる。とはいえ、ロム・フォウの一言がなければ、そんな行こう為いに意義は見いだせなかっただろうが——まあ、おまえがそう言うなら。

　だが、どうしておれは、そんなことを。彼女は、主あるじではないのに。

　アルファは割りきれないものを感じながら、ラッチャの掌を右前ぜん肢しの肉にく趾しで軽く叩たたいてやった。ロム・フォウを見て呆ほうけていたラッチャは、飛びあがって驚おどろき、転びそうになったが、なんとかこらえた。

「……じゃ、じゃあ、きょ、今日のところは、こ、これで許してやる！　ていうか……肉球でかっ！　──お、おい、アンナ、行くぞ！　海だろ、海！　ミミを海に連れてくために、わざわざ仕事休みとったんだからな！　急げってば！」

「う、うん──あの……」

　アンナはラッチャに引きずられつつミミを抱かかえなおし、ロム・フォウをちらりと見てからアルファに向きなおった。

「ばいばい」

　……ばいばい。

　もちろん、アルファは声に出して何か言ったわけではないが、アンナには伝わったようだ。去り際ぎわに、アンナはにっこりと笑った。人間の笑え顔がおは不思議だ。とくに、心底から嬉うれしそうな笑顔は。見ていると、こっちまでくつろいだ気持ちになる。ことによると、あれが一番の身を守るための武器かもしれない。たとえば、ロム・フォウ──

「元気なこどもたちだね」

　彼女に笑顔を向けられると、攻こう撃げきする意欲が甚はなはだしく削そがれるだろう。

「兄妹きようだいかな。あたしはひとりっこだから、少しうらやましいよ」

　──兄弟。

　アルファにも兄弟はいた。だが、「白い王の兄弟」たちは、幼犬のころに他の鬼人オーガの谷にひきとられていって、それきりだ。アルファはそのことを知らない。兄弟の行く末について思いを巡めぐらせたこともない。しかし、ふと、おれはどこにいるのだろう、とアルファは思う。ここはどこだ。人間の街。おれはイヌだ。おれは……。

「さあ、行こうか」

　と、ロム・フォウに頭を撫でられた。彼女にふれられたのは、それが初めてだった。迂う闊かつだった。けれども、なぜだか悪い気

はしなかった。ロム・フォウの後ろを歩く。ある程度の、適当な距離をあける。その距離を、アルファはまた少しだけ縮めた。いつか、並んで歩くときがくるのだろうか。アルファは、そんなことは考えない。そのときが訪おとずれれば、自然とそうなる。訪れなければ、ならない。それだけのことだ。

　そうして、小高い丘おかの前まできた。

　ロム・フォウが足を止めるより早く、アルファは丘の上の不ふ穏おんな気配を察知していた。

「自分の身を守るために、人を使うような男じゃないはずだけれど」

　ロム・フォウはそう言うが、丘の上の柵さくに囲まれた一帯からは、警けい戒かい心しんをあらわにした人間のにおいが鼻につくほど漂ただよってくる。アルファは喉のどを低く鳴らした。

「こちらから手を出してはいけないよ」

　指図は受けない。

「命令じゃない。お願いだよ」

　まあ、やむをえないな。

「いいこだ」

　嚙かまれたいか。

「痛そうだね」

　アルファはロム・フォウを追い越こして前に出た。まったく。こっちに用があるのだろうに、何をぐずぐずしているのか。しかし、丘をのぼって、静止物よりも動く物を視みる力が発達している目で、門の前に立つ二人の人間を視認したときだった。

　総毛立った。

　あれは──なんだ？

　人間、か。

　そのように見える。においも、人間に似ている。二人いるうちの片方だ。まだ若い。十代だろう。もし、アルファが人間であれば、ある種の不自然ささえ感じるほど整いすぎた、彼の顔立ちに目を奪うばわれたかもしれない。そして、長めの黒くろ髪かみからのぞく、血のように赤い双そう眸ぼうに。だが、むろん、アルファにとって、人間の容姿なんてどうでもいいことだ。アルファの足を、一瞬、止めさせたのは、彼の外側ではなかった。そうではなく、彼の――中身だった。

　ロム・フォウ。あれは。おまえと同じ種族なのか。あれが。

「……どうだろう」

　ロム・フォウも、なんらかの確信を持っているわけではないようだが、アルファと同じ何かを感じているらしい。だったら、おまえにもわかるだろう。あれは危険だ。何かわからないが、わからないということ自体が、警戒に値あたいする。用心するがいい。

「でも、敵意はなさそうだ」

　わかるものか。

「威い嚇かくはいけないよ、アルファ」

　ロム・フォウが何を言おうと、アルファは彼から目を離はなさない。ただ、まあ、たしかに、ロム・フォウの言葉どおり、敵意や害意は微み塵じんも感じられない。静かだ。うちにひそませている得体の知れない何かの不気味さとは裏腹に、やけに静かな生き物だ。どうしてか、こちらに向けられている視線には、疑念さえふくまれていないように思える。その隣となりにいる、これまた若い、似合わない薄うすい髭ひげをのばした男は、ずいぶん訝いぶかしそうにしているのに。

「ド・ジョーカーに何かご用ですか」ロム・フォウが剣けんを抜ぬけば一刀のもとに斬きり伏ふせることができそうな距離まで近づいても、彼はやはり落ちつき払はらっていた。「申し訳ありませんが、ここでお名前とご用件をうかがわせてください。すぐにお取り次ぎします」

「その前に尋たずねてもいいかな」

「なんでしょう」

「これは、ジョーカーがやらせていることかい」

「いいえ。エンツォ・パンカロの意思です。ド・ジョーカーの了りよう承しようをえて、一昨日から警備させてもらっています」

「エンツォ・パンカロ……」ロム・フォウは顎あごに右手の人差し指をあてた。「ということは、きみたちはパンカロ・ファミリーか」

「はい。おれは、リクです。パンカロ・ファミリーで仕事をさせてもらっている者です」

「あたしはロム・フォウ。用件は見み舞まいだよ。ジョーカーには会えそうかな」

「元気にしてらっしゃいますよ」

　リクと名乗った男は、ふっと笑え顔がおを浮うかべてみせた。悪くない笑顔だった。作り笑いかどうか、アルファにはすぐわかる。自然な笑いは、かなりの部分、本能的な動作だからだ。とはいえ、それが警戒をとく理由になるわけではない。アルファは依い然ぜんとして男を監かん視ししている。男はこちらを気にするでもなく、隣の男に耳打ちした。「ハーヴェイ。悪いけど、なかにいるチーロさんに伝えてきて」「……なんで俺なんだよ。お前が自分で行けばいいだろ」「だめだよ。おれが残るように言われてる」「ふん。気に入られてんだな。カルロさんだけじゃなく、チーロさんにも。わかったよ。行けばいいんだろ、行けば」

　このあやしい男が、リク。ふてくされたような足どりで、この場を離れ、柵のなかの屋や敷しきへと向かう男が、ハーヴェイ。アルファにとって、名前はさして重要ではない。だが、その名はしっかりと刻みこまれた。

　リク。

　隙すきのない、それでいてゆったり構えている、懐ふところの深さのようなものを感じるこの男が、リク。

　──強い。

　しかも、それは、磨みがきあげて手に入れるたぐいの強さではない。獰どう猛もうな野や獣じゆうは、狩かりのために訓練を積むこ

とはない。それは、習性に裏打ちされた生まれつきのものだ。けものの強さなのだ。おれと、同種の……？　違ちがう。断じて、違う。リクには、ひずみがある。ゆがんでいる。ゆがめられている。おれとは違う。アルファは苛いらついている。

「なんだか、嫌きらわれてるみたいですね」リクはアルファを見て、少しだけ困ったように眉まゆをひそめ、短くため息をついた。「ごめんな。おれのにおいがいやなんだろう。でも、何もしないよ。きれいなイヌだ」

　うおん……！

　どうにも耐たえきれなくなって、アルファは歯を剝むいて吠ほえた。何もしないだと？　どういう意味だ？　何もしない？　おれがおまえを怖こわがっているとでも？

「──アルファ、やめるんだ」

　しかし、こいつは！

「いいんです。慣れてますから。おれ、動物には好かれないタチみたいで。ごめん。そういう意味で言ったわけじゃないんだ。これ以上、近づかないから」

　リクは両手をあげて一歩、二歩と後退してみせた。アルファが一いち撃げき必殺を確信する距きょ離りから、さっと離り脱だつする間合いのとり方が絶ぜつ妙みようだった。それがまた癪しやくに障さわった。アルファは前に出ようとしたが、ロム・フォウの手に押しとどめられた。そのせいで少し頭が冷えたものの、リクから目を離す気にはなれなかった。何かおかしな動きをしてみろ。殺す。絶対に殺す。一方で、リクは動かないだろうとアルファは思っている。そう思ってはいても、油断はできない。結局、ハーヴェイが戻もどってくるまで、アルファはリクをにらみつけていた。ハーヴェイはアルファの形相に恐おそれをなして、近づいてくるのをためらい、やや離れた場所から大声を出した。

「──あの……なかにお通ししろってことなんで、案内します。でも……狼おおかみは」

「まずいかな」

「ていうか、狼のことは、言わなかったんですけど……その、言う

の、忘れちまって」

「そう。アルファ、どうする？　ここで待っているかい」

　ふざけるな。

「そう言うと思った」

「……は？」ハーヴェイは首を傾かしげているが、リクは平然としている。だが、人間としては、ハーヴェイの反応があたりまえだ。それくらい、アルファにだってわかる。異常なのは、リクだ。アルファは苛ついている。なぜかロム・フォウがリクに好意的らしいことも、なんだか気にくわない。というか、何よりもそれが一番、気に入らない。

「リク、といったね」

「はい」

「アルファに悪気はないんだ。それだけは覚えておいて欲しい」

「ええ。わかります」

　何が、わかります、だ。悪気はない？　そうでもない。ある。結構、ある。ロム・フォウが止めなければ、この厄やつ介かいな、内に何を隠かくしているのか知れない危険な生き物を、牙きばと爪つめで引き裂さいてやるのに。ロム・フォウめ。

「それから、アルファを連れてゆくことについては、たぶん大だい丈じよう夫ぶだと思うよ。ジョーカーは相手がなんだろうと気にしない。そんなことは問題じゃないと知っている。それが彼の唯ゆい一いつの美点だ」

「……なんだろうと──」

　リクは一いつ瞬しゆん、自分の右手に目を落としてから、かすかな笑顔を浮うかべて、ハーヴェイに向きなおった。

「ハーヴェイ、ご案内を。お二人とも、ド・ジョーカーの大切なお客さんだから、失礼のないように」

　アルファはロム・フォウやハーヴェイを置いてさっさと歩きだし

た。苛ついている。どうしてか、必要以上に、アルファは苛々している。

Omenage 897 10th revolution 27th day

サンランド無統治王国ジェードリ・赤線地区

"an old bar"

chapter.5

貸し借り

　大海王神オストロスの神しん殿でんが、正体不明の武装集団に襲しゅう撃げきされて占せん拠きよされたのは、それほど前の話じゃない。

　赤地に黒十字の旗をかかげたボロ船数隻せきが旧埠ふ頭とうに入港したのは、たしか二巡じゆん月げつだか三巡月前のことだ。ちょっとした話題にはなったが、バルモア商会がきっちり管理している新埠頭と違ちがって、旧埠頭はさまざまな人種が自由勝手に利用している。いつだったか、夜ナイト魔メア・犬ハウンドとかいう、暗黒大陸の凶きよう暴ぼうなケダモノを満まん載さいした船がついて、たいへんな騒さわぎになったこともあった。もちろん、檻おりには入れられていたが、誰だれがあんなものを運んできたんだか。それに比べれば連中は人間だったし、注目度は低かった。船は打ち棄すてられ、やつらの姿もあまり見かけなくなって、その存在自体、ほとんど忘れられかけていた。

　半巡月前、やつらがオストロス神殿を襲おそうまでは。

「──まさか、オストロス神殿の第三僧そう主しゆが、赤線に身を隠してるとはな」

　オストロス神殿は、このジェードリを造ったマルセル・ルオーが「人魚の夢」に苦しんだ末に、暗黒大陸から大海王神オストロスの僧たちを呼びよせて、建設させたものだという。

　なんでも、ジェードリ港ができる前、この地では人間の漁民と人魚たちが共存共栄していたんだそうだ。マルセル・ルオーは、私兵の武力を背景にして、港の建設に漁民と人魚を駆かりだした。人魚たちは、漁民との友情を重んじて、最初はおとなしく従っていたが、過重な労働で何人もの漁民が死に、また私兵に反はん抗こうして殺され、とうとう一いつ斉せい蜂ほう起き。いわゆる「人魚戦争」が勃ぼつ発ぱつして、人間、人魚の双そう方ほうに甚じん大だいな被ひ害がいをもたらした。最終的に、人魚たちは海へと帰ってゆき、以来、その姿を見かけることは滅めつ多たになくなったが、漁民は彼らを忘れなかった。人魚の骨を拾い集め、海に還かえすのと同時に、彼らとの思い出を碑ひに記し、彼ら一人一人の名を刻んだ墓を建てた。マルセル・ルオーは怒いかりにまかせて、私兵にこれらを破は壊かいさせたが、そのうち悪夢に悩なやまされるようになった。人魚の夢、だ。毎夜、毎夜、夢のなかを訪おとずれる人魚

たちの恨うらみ言ごとに耐えきれなくなって、マルセル・ルオーは神にすがった。

　だが、今となっては、大半の人間にとって、人魚だの信しん仰こうだのはどうでもよかった。オストロス神殿は、蘇そ生せい式の確立後、Ｍ．Ｔ．Ｄ．に多数の僧を派は遣けんし、ジェードリで蘇生式を一手に担になうようになった。首都エルデンでは、目玉が飛びでるような大金を請せい求きゅうされるらしいが、オストロス神殿の料金設定はかなり良心的だった。ケースバイケースで、一律ではないものの、庶しょ民みんでもどうにか手が出る範はん囲いの金額で、分ぶん割かつ払ばらいも受け付けていた。見み栄えっ張りの金持ちなら、寄進という形で別に金を積まないと気がすまないような低料金だった。

　だから、競合する神殿やら寺院はほぼ皆かい無むだった。たまに新興宗教の神殿ができても、気がつくと消えていた。もしかしたら、細々と営業している神殿があるのかもしれないが、少なくとも一いつ般ぱんに知られてはいない。

　そんなわけで、オストロス神殿は、ジェードリの住民たちから一定、あるいはそれ以上の敬意を払はらわれていた。信じがたいことに、神殿には警備という概がい念ねんさえろくになかった。必要ないと見なされていたようだ。僧たちは僧らしく不ふ殺せつ生しょうの戒かい律りつを守り、殴なぐりあいの喧けん嘩かすら御ご法はっ度とだったらしい。それでも、オストロス神殿は守られていた。この国では存在すら疑われている、人々の善意に。あるいは、共通の利益を保護しようとする、利己心の集合体に。

　それが、なくなった。

　赤地に黒十字の連中は、明け方、神殿を急きゅう襲しゅうし、僧たちを手当たり次し第だいに惨ざん殺さつ、祭さい壇だんを破壊したらしい。そうして、やつらはオストロス神殿の奥おく殿どのに付属している灯台の頂上に旗を立てた。もちろん、赤地に黒十字の旗だ。

　いったい、何なんだ、あいつらは。どういう了りょう見けんだ。

　当然、そういう話になった。

　しかし、連中はそれ以来、少なくとも表立ってはなんの動きも見

せていない。いや、どうやら、連中の一部が街中を嗅かぎまわっているようだ。だが、今のところ、衝しよう突とつはない。違ちがう。なかった、と言うべきだろう。あの、黒いロザリオ──と、カルロ・ボッシは右手に提さげている鞄かばんに目を落とした。この鞄のなかに、布につつんだ、あの黒いロザリオが入っている。

　ロザリオ。

　たしか、ロシュ聖教の信者が身につける、数珠じゆずと十字形の飾かざりを組みあわせた、祈いのりに使う信心用具だ。

　ロシュ聖教。

　サンランドではあまり有名ではないが、モトローリィなどではわりとさかんらしい。

　十字。

　黒い、ロザリオ。十じゆう字じ架か。

　赤地に、黒い十字。

「やっこさん、ずいぶんいけるクチみたいでっせ」

　と、カルロの前で、うらぶれた建物の小さなシャッターに、イビツが手をかけた。ケメック出身のイビツは、前歯がやけにでかい。年は二十八だったか、九だったか。一見、剽ひよう軽きんな顔というか、間ま抜ぬけ面づらだ。いつも紫むらさき色いろのやたらと肩かたが張った派手なスーツを身につけ、はっきりいって趣しゆ味みは悪いが、面めん倒どうくさがらずによく動くし、これで意外と口が堅かたい。たとえ半殺しにされても、へらへら笑って、大事なことはしゃべらないだろう。本当に殺されそうになったら、どうかわからないが。それは誰だって同じだ。

「ナマグサ坊ぼう主ずっちゅうやつでんな。酒も女も大好物。しかも、ぜんぜん悪びれんで、酒ならアレがええ、コレがええ、女は何歳、チチのでかさはどんくらいで、髪かみは金きん髪ぱつだっちゅうて、やかましいのなんの」

「坊主だって人間だ」

「まあ、タマでも抜かな、たまるもんはたまりますわな。年がら年

中頭ンなか春めいとるんが人間やさかい」

　イビツはギヒャヒャヒャと笑ってシャッターを押し上げた。その先は下りる階段だ。先頭には、見るからに武ぶ闘とう派はというかんじのオルソが立つ。窮きゅう屈くつそうにノーネクタイで背広を着こんだオルソは、一八五サンチ以上あるカルロより縦も横もでかく、髪も髭ひげもたまに邪じゃ魔まな部分を鋏はさみで適当にちょん切るだけだ。見た目は、まるで、熊くま。実際、オルソという言葉の意味は、ずばり、熊だ。イビツと対照的に無む駄だなことを一いつ切さいしゃべらず、だが、同じように信しん頼らいできる。

　本当は、リクも連れてきたいところだったが、あいつはド・ジョーカーの屋や敷しきに行っている。親おや父じから屋敷の警備を任されたチーロ・パンカロが、リクを使いたいというのだから、仕方ない。いや、チーロも一応、気を回したつもりなのかもしれない。まだファミリーに入ってもいない餓が鬼きを、カルロは重く用いすぎている。その餓鬼にチーロが肩かた入いれしてみせれば、カルロに対する風当たりが少しでも弱まるだろう。チーロなら、そんなことを考えかねない。

　余計なことだし、無駄なことでもある。だが、いい。気持ちはありがたく受けとっておく。親父の息むす子こに向かっておこがましいことだが、チーロ九歳、カルロ十七歳のときからのつきあいだ。弟のようなものだ。それに、直情径行で、喧嘩っ早いものの、心根がまっすぐで、とても嫌きらいになどなれない。「チーロ坊ぼっちゃん」と呼ぶと、いつも「やめてくれよ、カルロぉ。気持ちわりぃなあ。チーロでいいって」と顔をしかめる。たまに、兄貴、とカルロを呼ぶ。実の兄のウーゴとニーノは呼び捨てにするくせに。まあ、ガタイがよくて腕うでっ節が強い、二十三の男に兄呼ばわりされたところで、嬉うれしくもなんともないが。

「お何歳いくつだ。その第三僧主様は」

「へい。たしか──七十一っちゅうたかな。老いぼれやけど、しっかりしたもんでっせ。あっちのほうもね。あてごうたスケから聞いた話やと、とても七十こえたジーサンとは思われへんて」狭せまい階段は、えらくかびくさい。一番後ろのイビツがシャッターを下ろしてきて、照明もないので、ほとんど真っ暗だ。イビツのギヒャヒャヒャという笑い声が闇やみに響ひびく。「一人では足らん、あと二人用意せいとかぬかしよって、さすがに釘くぎ刺さしときましたわ。まったく、第三僧主っちゅうたら、神しん殿でんで三番目に偉

えらいわけでっしゃろ。そのころのまんまのつもりでね。神殿なくなってもうたら、僧主も何もないっちゅうのに」

「追われているような様子はないンだな」

「僧そう服ふく姿で堂々と安酒飲んではったくらいやから、大だい丈じよう夫ぶと違います？　ゆうても、用心はせなあかんと思て――」

「外に見張りは立ててるのか」

「へい。ご指示どおり、建物の周囲に、かくれんぼが得意なもんばかり、こう、バラバラッとね。わてらみたいな一般人やない、あやしいもんが近づきよったら、あっちゅう間に取り押さえる手て筈はずになっとります」

「そうか」

　何かが引っかかる。だが、それが何か判明する前に、オルソが階段を下りきって、左手のドアを開けた。その先の部屋には、たいして明るくはないが、照明があった。嘘うそくさい女の嬌きよう声せいと、人生の階段を最後で踏ふみ外したような老人の奇き声せいが流れでてきた。酒のにおいがした。この古い酒場は、ずいぶん長い間、使われていなかった。急きゆう遽きよ、掃そう除じだけして、老僧と飲食物と女を放ほうりこんだのだ。イビツが選んだ見張り役も三人、つめていたが、彼らはカルロたちと入れ替かわりに出て行った。

「マリリン、ジブンも出てろや。大事な話があるからな。ジブンは聞かんほうがええ」

「えー」

　イビツにマリリンと呼ばれた厚あつ化げ粧しようの女は、不満そうに口を尖とがらせてみせたが、内心ではさっさと老僧から解放されたがっているようだ。それが少しだけ表情に出ている。まあ、その気持ちもわからないではない。ソファの上でマリリンにしがみついている老僧は、ありていにいって気色が悪い。痩やせぎすで、手足がやたらと長く見え、酒のせいか赤らんだ顔は、しわくちゃなのに、どこか童子めいている。口くち許もとの下品さと、澄すみきった黒い瞳ひとみがアンバランスなのだ。暗青灰色スチールブルーと

黒の僧服を諸もろ肌はだ脱ぬぎしていて、老いた上半身があらわになっているのも不快だ。

「なんじゃい、これからというところじゃったのに」

「いやいや、どうもすんまへんな」

　イビツが如じよオさいなく老僧に頭を下げてみせ、すれ違ちがいざまのマリリンに耳打ちした。「今度うまいもんでもおごったるさかいな」「えーマジィ？　イビツさん口だけだからぁ……」「アホぬかせ。わいの気前のよさは折り紙付きやで」「じゃ約束」「おお」そういう真ま似ねは、カルロには無理だ。むろん、カルロも女が嫌いなわけではないが、甘かん言げんを弄ろうしてどうこうしようとまでは思わない。女をうまく使うのも得意ではないし、考えてみれば、心底から女に惚ほれたこともない。イビツは、これでかなり女にもてるし、女扱あつかいは抜ばつ群ぐんだ。そのうえ、カルロの欠点をわかっていて、必要に応じてそこを補ってくれる。イビツとは、もう七年のつきあいだ。

「さーて。ほんだら、ちいとばかし話聞かせてもらいまひょか」

「ふん」

　老僧はソファのうえであぐらをかいて、まだ名残なごり惜おしそうにマリリンが出て行ったドアをちらちら見ている。イビツはテーブルの上に置いてあったウィスキーを二つのグラスにそそぎ、一つを老僧に手て渡わたしした。

「ま、とりあえず乾かん杯ぱいっちゅうことで」

「最後の一杯というわけかの」

「わてら、そないに乱暴なもんとちゃいますがな。教えてもらいたいことちゃあんと教えてもろたら、あとは自由にしてもらってかましまへん」

「パンカロ・ファミリー。ようするに、ぬしらはギャングであろう。信用できるものか」

「そら、あんまりっちゅうたらあんまりのおっしゃりようや。たしかに、かのオストロス神殿の第三僧主様からしたら、わてらなんてゴミクズみたいなもんかもしれまへんけどなあ」

「そのオストロス神殿も滅ほろびた。神殿がなくなれば、第三僧主も第二僧主も筆頭僧主もへったくれもない。拙せつ僧そうは──いや、わしは、もはやただの老人にすぎぬ」

「はあ。ただの老人。なるほど。せやったら、話は早いわ」

　イビツは無理やり老僧のグラスに自分のグラスをふれあわせ、「乾杯」と言うなり一口飲んだ。それが合図だったかのように、オルソが老僧の背後に回った。べつに、それから何かするわけではない。だが、オルソは巨きょ漢かんだ。後ろに立っていられるだけで、かなり威い圧あつ感かんがあるだろう。実際、老僧はいきなり落ちつきを失って、取り繕つくろうようにグラスのウィスキーを舐なめた。その手が震ふるえているのは、だが、この状じよう況きように対する恐きよう怖ふのせいだけなのか。カルロは老僧の前に進みでて鞄かばんを開け、なかから布につつんだ例のものをとりだした。

「カクワン第三僧主。見てもらいたいものがある」

「……それは──」老僧カクワンは、大きく目を見開いて、カルロが布をとく様子をじっと凝ぎよう視ししている。「なぜ……なぜ、パンカロ・ファミリーの者が、それを持っておる」

「そう言うからには、これが何か知ってるンだな」

「ああ……知っておる。もちろん、知っておるとも」

「黒い、ロザリオ」

「そうじゃ……黒い、闇やみの、ロザリオ……いまいましい……いまわしい、おお、なんたる……なんたることじゃ！　栄光ある大海王神オストロスの神しん殿でんが……その歴史が、我らの厚き信しん仰こう心しんが、蘇そ生せい式の秘術が……設備が、祭さい壇だんが……僧が、若い僧たちが、友が、師が……何もかもが……！赤地に黒十字の紋もん章しようを胸に、そのいまいましい闇のロザリオを持った邪じや宗しゆうの悪あつ鬼きどもによって……！」カクワンは歯ぎしりをしながらグラスを両手でつかみ、激しく揺ゆさぶった。酒がこぼれたが、カクワンは気にしなかった。それどころではないようだった。カクワンの澄みきっていた黒い瞳が、何か異様な色しき彩さいを帯びていた。いや、それは色ではない。輝かがやきだった。怒いかりであり、狂気だった。苦く悶もんであり、そ

して、絶望だった。カクワンは、死の淵ふちにしがみついている幽ゆう鬼きのごとき声をしぼり出した。

—血塗れ聖堂騎士団。

Blood Temple Knights.

と。

「……悪鬼どもはそう名乗っておる。やつらは、ロシュ聖教のゲヘナ思想が産み落とした鬼おに子ごじゃ。否。〝預言者ザ・プロフエツト〟ユーバー・マリックの破は滅めつ的な預言から始まったロシュ聖教には、もともとあのような鬼き畜ちくを生む素地があったのかもしれぬ。いずれ天から降り、地の底からわきあがるロシュの炎ほのおから逃のがれるには、ロシュに帰き依えして〝計画〟に参加し、罪を落として穢けがれなき純じゆん粋すい者しやとなる以外にない、などと。人はロシュが浄じよう化かされるべきと示したまさにそのときに死す。ロシュ聖教において、死は浄化だという。ゆえに、蘇生式は徹てつ底てい的に否定する。きゃつらは、僧どもを虐ぎやく殺さつしながら、さかんにその旨むねを叫さけびまわっておった。まさしく、悪鬼。羅ら刹せつ。殺さつ戮りくを正義とし、究極の善行とするあの連中に、命いのち乞ごいなど無む駄だであった。誰だれも彼もが殺された。ただ殺された。連中は殺すためだけに殺した。若い僧が絶ぜつ叫きようした。『大海王神よ、お守りください！』と。むろん、加護は下りなかった。若い僧はまず腕うでを切られ、足を切られ、動けなくなったのち、首を落とされた。拙僧は奥おく殿どのに立てこもっていた僧主連に見聞きしたすべてを伝えた。泣きながら語った。わめくように語った。すると、筆頭僧主殿が拙僧を呼びよせて囁ささやいた。ぬしは逃にげよ、と。ぬしは五人の僧主のなかで一番若い。このときは逃れて、いつの日か必ずや神殿を再興するのだ、と。拙僧は奥殿の隠かくし通路から逃げた。だが、これは自己弁護などではない。拙僧は、助かった、よかった、などとはこれっぽっちも思わなんだ。拙僧は、許されるのならば、皆みなと運命をともにしたかった。死んでしまいたかった。僧主のうちで一番若いとはいえ、拙僧は七十一のジジイじゃ。いったい何ができる。拙僧に何ができるというのだ。これが、大海王神が拙僧に与あたえ給たもうた試練だとしたら—あまりに、むごい。拙僧は、ヒアランム殿が……筆頭僧主殿が、我が師が、憎にくい。なぜ、拙僧に、逃げろなどと。あのとき、うなずいた自分自身がうらめしい。首を振ふればよかった。邪宗の浄化でも、なんでもかまわぬ。死にたかった。拙僧が愛した神殿で死にたかった。もは

やそれさえも許されぬ拙僧は……どうすればいいのだ。神は……答えてはくれぬ……」

　カルロは黙だまって聞いていたが、正直、カクワンの心情についてはどうでもいい。今、初めて会った老人の物語に同情して目を潤うるませせるほど、俺は慈じ悲ひ深くもなければ、情に流されやすくもない、と思う。俺は限定的な人間だ。俺にとって、大切なものと、そうでないものとは、明確に区別される。たとえば、親おや父じのためならいつでも死ぬが、見知らぬ餓が鬼きが道みち端ばたで行き倒だおれていても、躊ちゆう躇ちよなく見捨てるだろう。ファミリーは我が身よりも大事だが、オストロス神殿など路ろ傍ぼうの石ころ同然だ。まあ、ジェードリで蘇生式を受けられる場所がなくなったのは、もちろん不便だが。それはまた別の話だ。

　だから、必要な情報だけかいつまんで頭に叩たたきこみ、そして、カルロは考える。

　血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ。そんなやつらが、なぜ、俺たちを。親父を。

「カクワン第三僧主。ロシュ聖教について、もう少しくわしく教えてくれ。あんたが知っているかぎりのことでいい」

「……邪宗のことじゃ。拙僧も、たいして知りはせぬ」

「俺よりは知っているだろう。ゲヘナ思想だったか。何なンだ、そのゲヘナってのは」

「『神は聖なる土地ゲヘナで、汚お物ぶつ、愚おろかな動物、罪人等、穢れし者共全すべてを焼き払はらい、穢れなき純粋者として作り直す』。ユーバー・マリックの預言のなかに、そのような一節がある。また、モトローリィの北西部にはゲヘナと呼ばれる土地が実在し、そこにはロシュ聖教の中ちゆう枢すう、大聖堂カシードラルがあった……」

「あった？」

「そうじゃ。今はない。焼き払われたと聞く」

「いつのことだ」

「〝火のバーニング日曜日・サンデイ〟。ロシュ聖教では、七日を

ひとまとまりとして、それぞれを月火水木金土日の七曜に対応させる。その事件のことを拙僧が耳にしたのは、そう、あれは……五巡月の中なか頃ごろであった」

「そのことと神殿を襲おそった連中と、何か関係あるのか」

「ある」

　カクワンは鉛なまりをのみこんだような顔で、だが、確信ありげにうなずいた。カルロはその先をうながそうとして、思いとどまった。音がした。声？　わからない。はっきりと聞こえたわけじゃない。気のせいかもしれない。それでも、カルロはオルソとイビツに目配せをして、懐ふところから短刀ドスを抜ぬいた。モトローリィの鍛か冶じ士しオグマ・ボルトエルの作で、地味な造りだが、頑がん丈じようだし、切れ味は鋭するどい。オルソも腰こしに差している大刀の柄つかに手をかけ、イビツは上着の裏から投げ刀を数本とりだして両手に構えた。

「──ま、ま、まさか……」カクワンが震ふるえだして、腰でも抜かしたようにソファにへばりついた。「……や、やつらが……？」

「さあな」カルロは短く答えて、オルソに顎あごをしゃくってみせた。オルソはうなずくのもそこそこに、ドアに近づいていって、そのすぐ脇わきの壁かべに背中をよせた。カルロも壁かべ際ぎわに移動する。怯おびえるカクワンを引きずらなければならなかったイビツは、多少苦労したようだ。とはいえ、準備が整うまで、十秒とかからなかった。オルソがドアを開けた。何も起こらない。物音もしない。オルソが開けたドアから慎しん重ちように顔を出す。部屋から出てゆこうとする。ふと、短刀ドスを握にぎっているカルロの左手に、我知らず力がこもった。その直後だった。ダンダンダンダン。足音。複数か。「──オルソ、戻もどれ！」見かけによらず、オルソは機き敏びんだ。カルロの命令に即そく座ざに反応して、オルソは部屋のなかへ引き返してきた。同時に、カルロもドアに駆かけよって、オルソと二人で開け放ったドアを挟はさむ恰かつ好こうになった。イビツがまんなかだ。まず、最初に駆けこんできた男めがけて、イビツが投げ刀を命中させた。イビツは口が達者なだけでなく、腕もいい。投げ刀はやつの右目に突つき刺さった。すかさず、カルロがそいつに足あし払ばらいをかけて転てん倒とうさせた。二人目がすぐにきた。そいつはイビツの投げ刀を剣けんで叩き落とすなり、瞬しゆん間かん的に標的を定めたようだった。イビツに。それが間ま違ちがいだった。イビツめがけて突とつ進しんしよ

うとしたそいつに、横合いからオルソが大刀を振り下ろした。バゴンと重い音がした。血が噴ふん水すいみたいだった。斬きれた。頭が半分に割れて、首の根もとまで大刀がめりこんだ。それなのに。



そいつは、オルソを見た。

　何か、聞きとれない、わけのわからないことを叫んで、オルソに襲いかかろうとした。

　なんだ、こいつは……？

「──チィッ！」カルロがそいつの膝ひざを蹴けり砕くだいて突き倒たおさなければ、やばかった。というか、まだだ。ぜんぜんやばい。三人目。四人目。二人で一いつ斉せいに飛びこんできた。全員、服装は、ある意味、不自然なくらいありきたりだ。しかし、明らかにふつうじゃない。異常だ。こいつらは、尋じん常じようじゃない。その二人もおかしかった。やつらは最初から捨て身だった。オルソとカルロに、手にした得物で斬りかかってくるのではない、体ごとぶつかってきた。しかも、一人目。右目に投げ刀を食くらい、あの刺さり方なら脳にまで達しているだろう一人目が、這はうようにしてイビツに迫せまろうとしていた。動けるのか。あれで。馬ば鹿かな。だが、驚おどろいてはいられない。カルロはとっさに体を捌さばいて三人目の体当たりをかわし、やつの右手を短刀ドスでぶった斬ってやったが、駄だ目めだ。そんなものではやつの戦意は衰おとろえない。それどころか、もっと猛たけり、狂くるって、カルロに組みついてこようとする。なんだ。何なンだ、こいつら。技量でいえば、さして怖こわい相手じゃない。ただ、気合いの入り方が半はん端ぱじゃない。パンカロ・ファミリーの人間でも、これだけ度胸のある者となると、どれだけいるだろう。カルロも、それなりに場数を踏ふんできたが、たまに頭がイッていてまったく死を恐おそれない馬鹿と出くわすことはあっても、あくまで、たまに、だ。しかし、襲しゆう撃げき者しやたちは、皆みなが皆、文字どおり怖いもの知らずなのだ。

　ありえない。だが、今、目の前にいるのは、まぎれもなく、そんな敵だ。

　しかも、まだくる。五人目。六人目。七人目。八人目──こっちは三人だ。そのうえ、カクワン第三僧そう主しゆというお荷物がいる。乱戦になれば不利だが、そうなってしまった。右手首の切断面から鮮せん血けつを振ふりまきつつ突っこんでくる男を殴なぐり倒しながら、カルロはこの状じよう況きようを呪のろうしかなかった。それ以上に、おのれの迂う闊かつさに唾つばを吐はきかけたい気分だった。なんとなく異変は察知していたのだ。にもかかわらず、それが何を示すのか深く考えなかった。甘かった。こいつらは生半可な敵じゃない。カルロがこれまで相手にしてきた連中とは違ちがう。だいたい、目的がわからない。こいつらは何を企たくらん

でる？　頸けい動どう脈みやくどころか、首を半分ほどまでぶった斬られても向かってきて、「聖なる炎ほのおに焼かれるがいい！」とかなんとか。こいつはいったい、何を言ってやがるンだ？　『神は聖なる土地ゲヘナで、汚お物ぶつ、愚おろかな動物、罪人等、穢けがれし者共全すべてを焼き払はらい、穢れなき純じゆん粋すい者しやとして作り直す』……？　ゲヘナだと？　焼き払う？　罪人？　穢れし者共の全て？

「──ふざけるな……！」カルロはそいつの側頭部に回し蹴りをかまして、首の残り半分を叩たたき折ってやった。さすがにそれでそいつも床ゆかを舐なめたが、別のやつに後ろから組みつかれそうになって、間かん一いつ髪ぱつ、身をひるがえして逃のがれた。今のはやばかった。ちょっとでも遅おくれたら、殺やられていた。でもな。まだ死ぬわけにはいかねえ。この命、こんな連中にくれてやるわけにはいかねえ。カルロは振り返りざま、組みついてこようとしたやつの懐に一気に飛びこんで、突き倒しながら短刀ドスを埋うめこんだ。そいつの額に。それから、すぐさまそいつの剣を奪うばって飛び離はなれた。その剣を、一番近くにいたやつの土手っ腹にぶっ刺した。両手でそいつの頭を抱かかえこみ、顎に膝ひざ蹴げりを三、四発食らわせてやった。とにかく、動かなくなるまで打だ撃げきを加えつづけた。そうやって、俺は、何人殺した？　敵は結局、何人いたンだ？　俺は手傷を負っているのか？　息が荒あらい。あれからどれだけ時間がたった？　くそったれ。返り血がすごい。なんてにおいだ。くせえ。部屋中血まみれで、ひどい有様だ。

「──イビツ」

　返事がない。カルロは素す早ばやく首を巡らせ、部屋の隅すみで腹を抱えてうずくまっているイビツを見つけた。そのすぐそばに、カクワンがいた。うつぶせで──くたばってやがる。駄目だ。頭が割れて、その中身がぶちまけられちまってる。もう死んでいる。畜ちく生しよう。マリリンがざまあみろ助平ジジイと喜ぶことだろう。あの女が生きていればの話だが。で、イビツは？

「おい、イビツ、生きてンのか！」

「……へい……」

　イビツは少しだけ顔を上げて、右手の親指を立ててみせた。阿あ呆ほうが。だったら、さっさと返事をしろ。カルロが血だらけの顔を袖そででぬぐい、死体の額から短刀ドスを抜ぬいていると、右手

に大刀をぶらさげたオルソがのっそりと近づいてくる。負傷はしているようだが、何しろ、手足の一本や二本なくしたくらいでは呻うめき声一つもらさない男だ。「大だい丈じよう夫ぶか」と訊きけば、たとえ死んでいても、黙だまってうなずくだろう。だから、カルロはあえて尋たずねなかった。いや、尋ねている場合じゃなかった。俺は、大おお馬ば鹿かだ。気が抜けていた。もう終わりだと思っていた。甘い、甘すぎる判断だった。

　いきなり、むくり──と、もう死んでいたはずの男が起きあがった。

　カルロは叫さけんだ。

「──オルソ、後ろだ……！」

　後ろだ。前じゃねえ。何やってる。どうしてこっちにくる。カルロは後ろからオルソに襲おそいかかろうとしている瀕ひん死しの男に向かって駆けだそうとした。まずい。遅おそいか？　間に合わねえか。だが、なンでだ。どうして、オルソはこっちに？　背中に剣を突つき立てられても、かまわずに、俺のほうへ？　殺気を感じた。背後から……！　カルロはようやく理解した。その瞬間だった。オルソに突き飛ばされた。「──ばっ……」俺は、横向きに床に倒たおれて、何を言おうとした？　馬鹿、とでも？

　オルソは、馬鹿じゃねえ。

　それは、俺だ。

　俺自身だ。

　起きあがった男は一人だけじゃなかった。ぜんぶで三人いた。そのうち二人を──背後からカルロに迫ろうとしていた男二人を、オルソは長くて太い両りよう腕うでで抱えこんだ。そのまま、力任せにぎゅうぎゅう締しめた。きっと最後の力を振り絞しぼって敵を殺そうとしたのだろうそいつらは、すぐに全身から力が抜けた。オルソは二人を放してから、背中にへばりついているもう一人を引き剝はがし、大刀でそいつの頭をかち割った。そこでようやくオルソは低く呻いた。

　見れば、右の脇わき腹ばらに一本、鳩みぞ尾おちの近くにも一本、剣けんが深く突き刺さっている。

オルソはゆっくりとカルロに向きなおって、頭を下げた。

「すんません」

「……何、謝ってンだよ、てめえ」

オルソはカルロと同じく、ラフレシア第三帝てい国こくのカレーナ自治州出身だ。どうやってジェードリまで流れ着いたのか、よくは知らない。ただ、どうやら船に乗っていたらしい。もう十年も前の話だ。赤線地区で、同どう僚りようの気き性しようの荒い船乗りたちにリンチされて、死にかけていたオルソを、見かねてカルロが助けてやった。オルソはカルロの舎しや弟ていになった。しかし、オルソは力が強いし、鈍にぶくもないくせに、なぜか暴力に訴うつたえようとはしないやつだった。まだ若かったカルロは、それが歯がゆかった。喧嘩出入りがあると、必ずオルソをともなって、人間の殴なぐり方や蹴り方や斬きり方を仕込んだ。オルソはもともと強かったし、強くなっていった。ガタイのよさを考えれば、カルロより腕が立つはずだった。だが、オルソはずっとカルロの「舎弟」のままだった。親おや父じか、カルロの命令しか聞かなかった。人を使うことにも興味がないようだった。酒はカルロか親父がつがなければ飲まなかった。博ばく打ちは信じられないくらい下手だった。女にはさして執しゆう着ちやくがない様子だった。ただ、イビツが紹しよう介かいしてやった女は、二人ともオルソにベタ惚ぼれした。女が一いつ緒しよになろうと言っても、だが、オルソは頑がん固こに拒こばんだらしい。それで、女は泣きながら離れていった。イビツがもったいないとぼやいていた。

俺は――オルソの年齢としも知らない。

カレーナの、どこ出身なんだ？　親は？　兄弟は？　どうして故郷から出てきたンだ。

オルソ。

カレーナの言葉で、熊くま。名前を尋ねても、答えないものだから、俺がそう呼んだ。「それでいいです」とお前は言った。オルソ。お前の本名は？

「――兄貴に……」

オルソは妙みように満足そうな表情で、血ち反へ吐どと一緒にく

ぐもった声を出した。

「借り、返せました……かね……」

「まだだ」

　オルソは「すんません」ともう一度頭を下げた。いや。違ちがう。膝ひざを折った。オルソは前のめりに倒れた。間の抜けたことに、カルロはそのときになってやっと事の重大性に気づいた。

　オストロス神しん殿でんは、もうない。死んだらおしまいだ。オルソ。おい。オルソ。てめえ、わかってンのか。これで終わりだなんて、納なつ得とくできるか。貸しを返してもらうどころか、お前にでかい借りを作っちまった。俺は、どこで、どうやって、それを返せばいい。

Omenage 897 10th revolution 27th day

サンランド無統治王国ジェードリ・赤線地区

“もっと私に教えて(ティーチミーモア)”

chapter.6

罪は回る

あの炎ほのおが今でも瞼まぶたの裏に焼きついている。

聖なる炎。

浄じよう化かの炎。

美しい炎。

聖地ゲヘナにほど近い寒村で生まれたパオロは、当然のようにロシュに帰き依えして、幼いころからその教えを守って暮らしていた。毎日、起き床しよう後と食前と就しゆう寝しん前に贖しよく罪ざいの祈いのりを捧ささげ、月に一度、礼拝のため、第四日曜日にゲヘナの大聖堂カシードラルへおもむく。大聖堂カシードラルに毎月足を踏ふみ入れることができるのは、家がゲヘナに近い者の特権だ。パオロはその幸運に心の底から感謝していた。ただ、本当は━けっして考えてはならないことだが、疑問を感じていなかったわけではない。

大聖堂カシードラルのきらびやかさ。血色よく、福々しい主教様たちの、立派なお召めし物。ゲヘナ騎き士し団だんの騎士たちが身にまとう、磨みがき抜ぬかれた鎧よろい兜かぶとの輝かがやき。大聖堂カシードラルで年に一回、贖罪祭の折に供される、葡ぶ萄どう酒しゆの芳ほう醇じゆんな香かおり。そして、乾かわいた夏と厳しい冬とにいじめ抜かれる土地でとれたわずかな作物が、金に代わる寄進という形で、黄金で飾かざられたロシュ像の前に捧げられる。

あの野菜や穀物は、どうなるのだろう？　神様が食べるのだろうか？　まさか。では、捨ててしまうのか？　もったいない。豊かな者たちが寄進する金は？　何に使うのか？　大聖堂カシードラルを飾かざるため？　主教様たちの衣類を新調するため？　騎士の剣を買うため……？

パオロの家は貧しかった。妹が風か邪ぜをこじらせて死んだときも、どうしようもなかった。村に医術士はいなかったし、薬も買えなかった。妹はあまりに罪深いため、死んで浄化されたのだと信じるしかなかった。

ロレッタ。まだ六歳だった。かわいそうに。

でも、罪は生まれつき背負っているものなのだ。

人間は穢けがれている。穢れた人間にできるのは、せめてロシュに帰依して、〝計画〟の推進に尽じん力りよくすること。〝計画〟を実行するための準備を進めている大聖堂カシードラルに、できるかぎり寄進すること。そうすれば、罪は徐じよ々じよに落ちてゆき、穢れなき〝純じゆん粋すい者しや〟に近づける。〝純粋者〟になれば、死後、ロシュの使徒となって、〝計画〟に携たずさわることができる。

残念ながら、ロレッタは使徒にはなれなかった。

そのぶん僕が、がんばらないと。

ロシュの〝計画〟が完かん遂すいされれば、世界は穢れなき〝純粋世界〟に生まれ変わる。

そうなれば、ロレッタのような幼い子が、背負わされた罪のせいで苦しみ、のたうちまわって死んでゆくこともない。

パオロは信じていた。信じるしかなかった。だって、この世界に救いがなかったら、どうやって生きてゆけばいいのか。数百、数千、数万人、もしかしたらそれ以上のロレッタが、ただバタバタと倒たおれて死んでゆくだけの世界に、なんの価値があるのか。いつか、もっと美しい、すばらしい世界になるのだと信じなければ、ロレッタがあまりにもかわいそうじゃないか。

でも、〝計画〟の準備に使われるはずの寄進で、主教様たちが肥え太り、着き飾かざっている。

一方、ロレッタは無残に死んだ。もともと体が弱っていたのか、苦しむだけ苦しんで、あとはあっという間に死んでしまった。

その現実を──たぶん、それが現実なのだ──まのあたりにして、パオロは少なからず動どう揺ようした。正直、信しん仰こうが揺ゆらいだ。けれども、信仰を失って、立っていられる自信はなかった。

僕は弱い、と思った。

なんて弱いんだ。

やっぱり、生まれながらに穢れた僕は、背負った罪の重さで足あし腰こしが傷んでいて、とても弱いんだ。だから、すがらないと生

きてゆけない。捨てられない。ただ信じるしかない。信じて、日々生活してゆかないといけない。近所のこどもがロレッタのように死んでも、涙なみだをこらえて畑を耕すしかない。熱心に祈るしかない。

　罪ある身だが、いいこともあった。

　ゲヘナ騎士団の騎士マチウスが、敬けい虔けんな若い信者のなかから騎士見習いを募つのるとの話を聞き、思いきって応おう募ぼしてみた。そうしたら、なんと選ばれてしまった。騎士マチウスの屋や敷しきに住みこみ、身のまわりの世話をして、武芸と教義、教史を学び、給料までもらった。お金なんて、ほとんど手にしたこともなかった。たいした金額ではなかったが、食べ物と衣類を買えるだけ買って実家に届けた。家族は飛びあがって喜んだ。母はパオロの両手を押し頂くように握にぎって、むせび泣いた。「パオロ。騎士様のお言いつけをよおく聞いてね。騎士になるんだよ。出世するんだよ。そうしたら、たくさんお金をもらえるからね。もう苦労しなくてすむからね。いい暮らしができるからね。きっと、出世するんだよ。いいね。パオロ」

　金。

　金！

　金……！

〝計画〟の準備のためにも、金。

　いい暮らしをするためにも、金。

　もちろん、大聖堂カシードラルが一番欲ほつしている寄進も、丁てい寧ねいに洗って土を落としたところで、色や形の悪さは隠かくせない野菜なんかではない。金だ。

　ようするに、罪を落とすために必要なもの、それは金なのだろうか？　金をたくさん寄進すれば、罪はどんどん落ちて、〝純粋者〟になれるのだろうか？　だったら、金を多く稼かせぐ者ほど、ロシュの使徒に近いのか？　もしかして、ロシュ像が黄金でできているのは、そういう意味なのか……？

　パオロは騎き士し見習いとしてせっせと役目をこなすほどに、信仰から離はなれてゆく自分を自覚していた。不思議なことに、給料

が少しずつ増えるたびに、信仰心が薄うすれていった。しかし、それは何もパオロだけではないようだった。騎士マチウスは温おん厚こうで信心深い人だったが、主教を激しく非難し、大聖堂カシードラルの体制に不満を持つ騎士は大勢いた。ゲヘナ騎士団では、そうした騎士たちが主流派ですらあった。しかも、表向き「主教どもは神に背そむいている」などと言いながら、彼らの腹のうちでは、寄進で集まる金の管理を主教たちが独どく占せんしている仕組みが気にくわないのだった。「主教団ビシヨツプスの権限を縮小し、大聖堂カシードラル運営部にゲヘナ騎士団団長及および副団長を参加させよ」というのが彼らの要求だった。

金だ。もっと金をよこせというのだ。

主教団ビシヨツプスは、伝統と教義を盾たてにしてこれを拒きよ絶ぜつした。だが、彼らは武力を持たない。ときに妥だ協きようして、ゲヘナ騎士団の予算を増やすことを約束した。ただ、ときに強きよう硬こう派はの主教たちが実権を握って運営部を牛ぎゆう耳じると、「騎士団はあくまで大聖堂カシードラルの衛兵にすぎない」として、ゲヘナ騎士団の予算を削けずった。当然、騎士団はこれに反発して運営部に圧力をかけ、予算配分の見直しを迫せまった。騎士見習いとしてパオロが学んだ大聖堂カシードラルの歴史は、つまるところ、その繰くりかえしだった。金。金。金だ。大聖堂カシードラルは金でできている。

パオロは、しかし、絶望しなかった。そんな権利はなかった。パオロが稼いだ金で、家族が以前よりいい暮らしをしている。母が、父が喜んでいる。二人の弟と一人の妹がすくすく育っている。二人目のロレッタは出さない。少なくとも、自分の家族からは。このまま地道に努力を重ねて、いつか騎士になったら、ゲヘナの門前町に家を建てて、家族をそこに住まわせる。金があれば、それができる。罪は──落ちないような気がする。でも、いい。罪など落ちなくてもいい。金があればいい。騎士マチウスは、主流派から少しずれた思想の持ち主だから、騎士になった暁あかつきには、彼から離れる。主流派の有力者、騎士テオドラスあたりにすりよって、役職をもらう。そうすれば、もっと金が入ってくる。それでいいんだ。

僕らは穢けがれている。

罪だ。これこそが、罪。誰だれもが金に、あらゆる欲に負ける、罪。罪を背負うがゆえに弱く、その弱さ自体が罪である。どこまでいっても抜ぬけだせない。罪は回る。だから、『神は聖なる土地ゲ

ヘナで、汚お物ぶつ、愚おろかな動物、罪人等、穢れし者共全すべてを焼き払はらい、穢れなき純じゆん粋すい者しやとして作り直す』。所しよ詮せん、聖なる炎ほのおに焼かれなければ、僕らは〝純粋者〟になどなれないのだ。寄進で罪を落とせば〝純粋者〟になれるだなんて、金が欲しい弱い人間たちの詭き弁べんにすぎないのだろう。そう思っていた。

　けれども、あの日。

　あの日曜日。

　大聖堂カシードラルを炎が包んだ日。

　パオロは見た。

　真の信しん仰こう者しやの姿を。〝計画〟の遂すい行こう者しやを。

　彼は実際に、聖なる土地ゲヘナで穢れし者どもを焼き払ったのだ。

　がめつい主教たちを。

　欲深な騎士たちを。

　彼は「ロシュの御み心こころに従わぬ無む知ち蒙もう昧まいなる哀あわれな罪人たちよ。聖なる炎に焼かれなさい。ロシュは慈じ悲ひの心をもってあなたがたに浄じよう化かを与あたえるでしょう」と言い放った。

　パオロは炎に巻かれた大聖堂カシードラルに飛びこもうとした。僕は焼かれるべきだと強く思った。

　だが、止められた。

　止めてくれた異郷の騎士の勧すすめに従い、その場で彼の軍団に加わって、古い船に乗りこみ、航海の果てにここにいる。

　家族のことは忘れた。パオロは信仰に生きることに決めたのだ。いずれ、自分にできることをすべてやり終えたら、僕も死んで浄化される。終着点は同じだ。だから、また会える、とは思わない。おそらく、二度と会うことはない。でも、仕方ない。愛は変わらない

が、僕らは罪人だ。僕は回る罪を背負ったまま、粉ふん骨こつ砕さい身しんして主ロシュに尽つくす。

　主よ、いつか世界をお救いください。

　そのためならば、僕は、僕らは、なんでもする覚かく悟ごです。

「──とはいえ、何もサー・アンドリューがいらっしゃることはないではありませんか」

「いいだろ。べつに。だいたい、若い連中を顎あごで使って、後ろでふんぞり返ってるってのは、どうも俺の趣しゅ味みじゃなくてな」

　バルモア地区の市場で仕入れたジーンズにセーター、ダッフルコートを着たパオロと肩かたを並べて歩いているのは、あのときの異郷の騎士だ。もっとも、ぴしっとした背広の上にベージュのトレンチコートを羽織った今の姿は、まったく騎士らしくない。

「つーかな。パオロ。その呼び方はよせ。なんか変だろ。もともと、俺はイヤなんだよ。サーとかな。気持ち悪い」

「しょうがないですよ。御おん身みは東騎士館長なんですから」

「阿あ呆ほう。だから、よせっての。街のなかで、そんな呼び方はな。誰か聞いてて、なんだそれとか思われて、覚えられたらどうすんだ」

「きっと、冗じよう談だんか何かだと思われるのではありませんか」

「かもしれんがな。余計なリスクを冒おかすことはない。今日の俺はな。ちょっとばかり大人になった息むす子こと酒を飲みにきた、ヘンリー・ブラックモア三十七歳独身恋こい人びと募ぼ集しゆう中ちゆうだ」

「どうして独身なのに息子がいるんです」

「女によう房ぼうは男を作って出てったのさ。七年前にな。それ以来、ヘンリー・ブラックモアは男手一つで一人息子を大事に育ててきたってわけだ」

「僕、十九ですよ。ずいぶん若いときのこどもなんですね」

「若さゆえの、ってやつだな。だが、まあ、女房はいくらでもとりかえられるが、こどもはそうもいかん」

「奥さんだって、そうそうとっかえひっかえはできないと思います」

「馬ば鹿か。俺はこれでも結構もてるんだよ」

「だったら、なぜ恋人募集中なんですか？」

「ちょうど狭はざ間まなんだ」

　ヘンリー・ブラックモア。またの名をサー・アンドリュー。東騎士館長として大勢の騎士を統とう率そつする身なのに、物もの腰ごしが妙みように軽い。手て櫛ぐしでまとめただけの縮れた黒くろ髪かみや、まばたきの途と中ちゆうみたいな目も、なんだか雑な印象だ。今、自分で語っていた与よ太たば話なしも、それなりに説得力があるように思えてしまう。

「……でも、僕が息子というのは、やっぱり無理がありますよ。似ていませんし」

「女房が金きん髪ぱつだったのさ」

「顔だって違ちがいすぎます」

「そのうち似てくる。いや、実際、似てきてる。だんだんと、年をとるごとにな。お前はそれがイヤなんだ。俺もこんなオッサンになっちまうのか、ってな。だから、そんなことを言うんだろ」

「じゃあ、そういうことにしておきます」

　パオロは罪を感じる。家族を捨ててきた身なのに、こうしてサー・アンドリューと並んで歩いていると、心が浮うき立つ。なんだか本当にサー・アンドリューが父親であるかのように思えて、そのことが嬉うれしい。弱いからだ。僕の心が、弱いから。それが、罪だ。僕の、罪。

　罪を自覚するたびに、パオロの胸は凍いてつく。

　心臓が氷と化してしまったかのように、血の流れが止まり、やがて体が動かなくなる。

「どうした、パオロ」

「……いいえ。なんでもありません」

「そうか」サー・アンドリューはパオロから目をそらして頭をボリボリかき、少しの間、黙だまって歩いていたが、不意に足を止めた。「━罪は誰だれもが背負っている。地上に無む垢くな者などいない。肝かん心じんなことはな。それを自覚することだ。笑って、楽しめ。そして自分を責めろ。けっしておのれの罪を赦ゆるすな。パオロ。俺の知るかぎり、お前はそうしてる。だから、たとえ苦しんでも、迷うことはない。死んで浄化されるまで、主の御心に従ってひたすら働けばいい」

「……はい、サー・アンドリュー」

「父さんダツド、だ」

「え？」

「いいから、呼んでみろ」

「あ……ええと、その……父さんダツド」

「ふむ」サー・アンドリューは顎を撫なでながら、にやりと笑ってみせた。「なんだか、こそばゆいような、尻しりのあたりがむずむずするような、妙な気分だな。だが、せっかくだから、今日はそれで通せ。いいな。父さんダツド、だ」

「それ……命令ですか」

「ああ。命令だ。逆らうなよ？　俺は、命令に逆らうやつが嫌きらいなんだ。処しよ罰ばつするのが面めん倒どうだからな」

「わかりました、父さんダツド」

「いい返事だ」

　サー・アンドリューは父親のような手つきでパオロの後頭部を撫でた。今、僕らは親子に見えるだろうか。そうだといい。そのほう

が好都合でもある。赤線地区。ジェードリで一番栄えている歓かん楽らく街。男と女の群れが、噎むせるような快楽のにおいを嗅かぎながら狭せまい路地を行き交かい、金に飽あかして酒を飲み、虚きょ実じつの愛を語らい、情欲をぶつけあって、あるいはやりすごし、分別される街。息子は父親の後ろを少しおどおどと進む。と、しなだれかかってくる、まだ若い、毛皮のコートの下はきわめて薄うす着ぎの、化け粧しよう臭くさい女たち。「あらぼく、今日はお父さんと一いつ緒しよなのお？　いいわよお、サービスするからよってかない？」「あ・そ・び・ま・しょ。楽しいよお？」息子はたじろいで父親に救いを求める。父親は慣れた様子でそっと女たちを息子から遠ざけて、ちょっとだらしない笑えみを浮かべる。「悪いな。今日は息子の誕生日で、一いつ杯ぱいおごってやろうってだけなんだ」「お酒ならうちのお店でもいいのがあるよお？」「そうそう。ロンコ・ネッティとかあ。シダン・ド・ゴゥとかあ。リキャンテとかあ」「なんだ、そいつはまた、ずいぶんと馬ば鹿か高い酒ばかりだな。俺がそんなに金持ってるように見えるか？」「見える見える」「なんかあ、お金持ちってかんじの顔してるもん」「しかも、女によう房ぼうに逃にげられて、独身だったりするんだな、これが」「マジで？　きゃあー！　あたしと結けつ婚こんしてー！」「あたしもあたしも！」「あたしもって──お前ら二人と同時に結婚するわけにはいかんだろ」「だいじょぶだいじょぶ！」「あたしたち、プライベートでも仲いいし、うまくやれるもん。ねー」「ねー」「ねーじゃねえよ。まったく、しょうがねえな。本気にしたらどうすんだ。俺みたいなオッサンはな、結構繊せん細さいで、信じやすかったりするんだぞ」「信じていいよー」「信じて信じて。信じてくれないならあ、チューしちゃう」「ちゅっ」「おいおい、息むす子こが見てるっての」「じゃあー、あたしたちの未来の息子にもお、ちゅっ！」「ちゅっちゅっ」「馬鹿、やめろって。息子の息子がたいへんなことになっちまうだろ。暴走して暴発したらどうすんだ。ほら、離はなれろ離れろ──で、お前らの店、どこだ？」

──僕は、本当に罪深い。弱い、穢けがれた、人間だ。

パオロは女に挟はさまれて路地を歩いてゆくサー・アンドリューを、ちょっぴり、いや、結構恨うらんだ。女たちは、化粧が濃こいとはいえ、それなりにかわいらしい。二人とも赤い網あみタイツをはいていて、かなり奇き抜ばつな恰かつ好こうだと思うのだが、なぜかそれがパオロの色情をさかんにあおり立てる。年ねん齢れいは、パオロより少し上か。もしかしたら、同じくらいかもしれな

い。

　そんな女たちが、ふわふわした体をすりよせてきて、やわらかい唇くちびるをほっぺたに押しあててきたのだ。パオロだって健康な男子だ。なんともない、僕は石だと念じても、身体からだは言うことを聞いてくれない。勝手に反応する。それも、僕の罪だ。罪は認めなければいけない。だが、赦してはならない。そう言ったサー・アンドリューは、でも、なんだか──ものすごく、やたらと愉ゆ快かいそうで。

　いや。楽しむのだ。喜べばいい。そして、そうせざるをえない弱さの罪を、赦してはいけない。矛む盾じゅんしているようにも感じるけれど、人はそういうものだから。僕は、穢れを、罪を、よく知らなければならない。だって、それが罪だと知らなければ、罪を自覚することもできないじゃないか？

「はーい、二名様ご案内でーす！」「ごあんなーい」「いらっしゃいませ！」「いらっしゃいませー」「らっしゃいまっせー！」

　そうして連れて行かれたお店とやらは──故郷の寒村と、お行ぎよう儀ぎのいいゲヘナの門前町しか知らないパオロの想像を絶していた。店名「もっとテイー私にチミー教えてモア」。まず、色がどぎつかった。床ゆかも、壁かべも、天てん井じようも、赤だとかピンク色だとか紫むらさき色いろだった。羽毛のような飾かざりや、鏡でできた球体がそこかしこにぶら下がっていて、光が──さまざまな色の光が店内を躍おどり、そのなかを裸はだか同然の女たちが泳ぐように歩いていた。サー・アンドリューとパオロを連れてきた女たちも、毛皮のコートを脱ぬぐと、ほとんど下着姿だった。赤い網タイツが、やはり目に痛かった。顔が熱い。身体からだ中の血液が、下半身の一部分と、頭に集中しているように感じられる。パオロは立ちくらみを覚えた。ふらついたら、赤い網タイツの女に支えられた。手に、彼女の肌はだがふれた。ひんやりしていた。でも、やわらかかった。

「──きゃっ……！」突とつ然ぜん、女が悲鳴をあげ、両手でパオロの顔のあたりを押さえた。何が起こったのだろう。瞬しゆん間かん、わからなかったが、女の両手に目を落とすと、赤くぬれていた。血だ。血？　どうして？　僕は怪け我がでもしたのか……？

「おい、パオロ、鼻血、鼻血！」

「はな……ぢ？」

　ああ。

　そうか。鼻血か。

　理解したときには、サー・アンドリューがコートのポケットからハンカチをとりだし、それをパオロの鼻のあたりに押しあてていた。赤い網タイツの女は「だいじょうぶ？」と何度も訊きいてきた。心配そうだった。その手は、パオロの鼻血で汚よごれていた。もう一人の網タイツは、布だのなんだのを持ってきて、サー・アンドリューを手伝った。パオロはされるがままになっていた。呆ぼう然ぜんとしていた。鼻血が出たこともそうだが、不思議だったのだ。サー・アンドリューはともかく、女たちまでとても気き遣づかわしげだった。彼女たち以外の店の女も、何人かパオロに声をかけていった。いかにも堅かた気ぎではなさそうなスーツを着たオールバックの男は、サー・アンドリューに「医術士呼びましょうか」と訊いた。パオロの鼻血は、女の手を汚して、店の床を汚した。それなのに、誰だれもそのことを咎とがめなかった。気がつくと、
サー・アンドリューとパオロは奥のほうの席に座っていて、赤い網タイツの女二人が酒と食べ物を運んできた。

　パオロは、女が鼻の穴につめてくれた布の栓せんをそっとさわった。

　あの手つきは──やさしかった。

「あたしがニーシャでー」

「あたしがパーシャだよっ」

　赤い網タイツの女たちはそう名乗った。少しふっくらしていて、右目の下にほくろがある、パオロの手当てをしてくれた女がニーシャ。パーシャはニーシャより肉付きが薄うすくて、背も若じゃっ干かん低く、幼いしゃべり方をする。パオロとサー・アンドリューは、背もたれのある長いソファに並んで座り、女たちがその両側についた。パオロの側にはニーシャで、サー・アンドリューの隣となりにはパーシャだ。ニーシャはやたらとパオロに体を密着させてきた。これには緊きん張ちょうした。心臓がバクバクいって痛いほどだった。パオロが全身を縮こまらせていると、見かねたサー・アンドリューが苦く笑しょう混じりに言った。

「ニーシャ、お前、あんまりそいつにいたずらすんなよ。まだ餓鬼なんだからな。すぐその気になるぞ」

「えー。そんなこと言われたら、かえっていたずらしたくなるじゃん。てゆうかあ、パパってばそれ狙ねらってわざと言ってるんでしょお。悪いパパだねぇ。ねー。パ・オ・ロ・くん」

「……あ、は、はい」

「おい、パオロ。誰が悪いパパだって？」

「え、いえ、それは……」

「もお。やめてよ、パパ。パオロくんのこと、いじめないで。大だい丈じよう夫ぶだよ、パオロくん。安心して。あたしが守ったげるから。ね？」

「パーシャ前から思ってたけど、ニーシャってさあ、好きだよね。おとーとキャラ」

「うん。好き。すっごい好き。食べちゃいたいかんじ。ねーパオロくん、おねーさんと駆かけ落ちしない？」

「おいおい。そういうのって、親の前でする話じゃねえだろ」

「いいんだよっ！　パパはあ、パーシャと駆け落ちするんだからっ！」

「パーシャはファザコンだもんねぇ」

「パパだーいすきっ。ちゅっちゅっ」

「うはははは！　だったらいっそのこと、四人で駆け落ちしちまうか！　ああ？　どうだ、パオロ！　名案だろうが！」

「めーあんめーあん！」

「駆け落ちしちゃおー！」

「……そ、それは、いくらなんでも不道徳というか……」

　パオロはたじたじだった。しかし、これが仕事なのだろうニーシャとパーシャはともかく、サー・アンドリューは調子に乗りすぎ

じゃないのか。サー・アンドリューはパーシャに接せつ吻ぷんされてスケベったらしい表情を浮うかべ、馬ば鹿か笑わらいしている。ちょっと軽けい蔑べつしてしまいそうだ。

　けれども、周りを見れば、そんな男性ばかりだ。皆みな、半はん裸らの女性に甘く刺し激げき的な言葉を囁ささやかれ、肉体的な接せつ触しよく行こう為いで欲情をそそられて、鼻の下を伸のばしている。パオロだって、ニーシャに胸を押しつけられて、悪い気はしない。それどころか、もっと、もっとと、体が──いや、心までもが要求する。もっと、なんだ？　僕はどうしたいのか？　それも本当はわかっている。ごまかそうとしているだけだ。負けそうになる。負けてしまえば楽なのだと、誰かが耳みみ許もとで言う。誰か？　違ちがう。

　僕だ。僕自身だ。

　僕は負けたがっている。女の体に、自分の意思でふれたい。僕は僕に敗北してしまう。罪にのみこまれようとしている。ダメだ。いけない。

「どうしたのお、パオロくん？　なんかへんだよ。顔色。こういうところきたことないから、恥はずかしい？　じゃあ、お酒飲もっか？　飲んだら平気になるよ？」

「ワインなら飲んでもいいぞ、パオロ」

　ロシュ聖教において、原則、飲酒は禁じられているが、唯ゆい一いつ、葡ぶ萄どう酒しゆのみ許されている。ただ、パオロは贖しよく罪ざい祭さいのとき以外、葡萄酒に口をつけたことはない。なんとなく、幼いころから、葡萄酒は主教や騎き士しなどの飲み物だと思っていた。

　でも、僕はもう騎士だ。サー・アンドリューだって飲んでもいいと言っている。パオロはニーシャにすすめられるまま、グラスを手にとった。香かおりを味わう余よ裕ゆうはなかった。少しだけ口にふくんで、のみこんだ。熱かった。ふうっ、と、意識が遠のいてゆくような感覚があった。いつもパオロにのしかかっている重しが離はなれてゆく。それは、罪だ。罪が薄れる。いや。罪の意識が。罪はそのままで。それどころか、より深まって。

　パオロはニーシャの剝むきだしの肩かたに頰ほおをよせた。

　目を閉じて、忘れようとした。

　そのときだった。

「――あ。しまった」サー・アンドリューが懐ふところに手を突つっこんで何かを探す真ま似ねをしてから、ばつが悪そうに頭をかいた。「……財さい布ふ忘れた」

　パオロは見た。飛びのくようにサー・アンドリューからパーシャが離れる場面を。パーシャの顔は凍こおりついていた。そして、ニーシャの肩も強こわ張ばっていた。パオロは我に返った。主よ、と、ニーシャの肩から頬を引き剝はがして胸のうちで祈いのった。申し訳ありません。主よ。ロシュよ。僕は負けそうでした。罪を忘れてしまいそうになりました。やはり、僕は穢けがれています。僕は罪深い。ああ、でも、罪はそこらじゅうにある。世界は弱さの罪にあふれている。

「まいったな。最近、よく物を忘れるんだが、息子を連れて飲みにくるのに、まさか財布を忘れちまうなんて。おい、パオロ。お前、金――なんて持ってねえよな」

「は、はい……ほとんど……」

「パーシャ」ニーシャに低い声で名を呼ばれて、パーシャが小走りで店の奥に向かった。パーシャはそのまま戻もどらず、かわりにスーツ姿の男たちがぞろぞろと出てきた。パオロが鼻血を出したとき、「医術士呼びましょうか」と訊きいてきたオールバックの男と、他ほか三人。四人とも判を押したように肩を怒いからせて、靴くつを引きずるような不ぶ恰かつ好こうな歩き方をしている。さながら、その両足に罪という名の枷かせをはめられているかのように。

　ニーシャがパオロに一いち瞥べつもくれず席を立って、オールバックの男に何か耳打ちした。

　パオロはそれを横目で見ながら、胸のあたりに手をのばした。

　セーターの生き地じ越ごしに、硬かたいものが指にふれる。

　――主よ。

　すでに〝計画〟は準備の段階をすぎました。今は実行するときで

す。

「すみませんが──」オールバックの男がサー・アンドリューの前に屈かがみこんできて、両目をすぼめた。「ちょっとこちらへご足労願えませんかね。あいにく、うちは払はらった金のぶん楽しく遊んでもらう店なんで、現ナマお持ちでない方には座る席もご用意できかねるんですよ」

「──あ、いや、たまたま財布を忘れたってだけで、金はあるんだ。ほら、見てくれ。この時計だって安物じゃないだろ。少し時間をもらえれば……」

「そういう手口でトンズラこくやつもいないわけじゃないんでね」

「わからなくもないが、そこをどうにか信用してくれんかな。そうだ、ニーシャ。金を持ってそうだって、俺を連れてきたのはお前だろ。ここはお前に免めんじて──な？　ニーシャ、頼たのむよ。お前の目はたしかだ。金はあるって、本当に」

　ニーシャは返事をしないどころか、サー・アンドリューに顔を向けることさえしなかった。それで、気まずそうにしているかといえば、そんなこともない。ニーシャは呆あきれたような、すごく不ふ愉ゆ快かいそうな表情で、いらいらと髪かみをかきあげていた。さっきまでとは別人みたいだった。

　少しだけショックだった。自分でも愚おろかだと思うが、そんな彼女を見たくなかった。

　あのとき、彼女の手は、やさしかったのに。

「──ニーシャ。おい、ニーシャ。そっぽ向いてないで、なんとか言ってくれよ」

「よしなよ、お客さん。こっちも商売だからね。女の子は誰だれにでも同じようなことを言うんだよ。そっちの坊ぼつちゃんならともかく、いい年して、そんなことくらいわからねえはずがねえだろう。まあ、あんたの言ってることが本当か嘘うそかは、これからじっくり見み極きわめさせてもらうからよ。とりあえず、こいや」

「イ・ヤ・だ」サー・アンドリューはそう言ってオールバックをにらみつけたかと思うと、にやりと笑ってみせた。「──と言ったら？」

「べつに、こっちはかまいませんがね。お客さんには、ちょっとばかし痛い目に遭あってもらうことになるでしょうが」

「どっちかというと、俺はマゾってよりはサドでね」

「あんたの趣しゆ味みは関係ねえよ」

「だろう──」早はや業わざだった。サー・アンドリューは素す早ばやくテーブルの上に置いてあった酒さか瓶びんを手にとった。「な……！」すかさずそれでオールバックの額を殴おう打だした。人間の頭は硬い。瓶が割れ、破は片へんが皮ひ膚ふを傷つけ、血が流れ、なかの液体がそこらじゅうにぶちまけられた。それは、ワインではない。サー・アンドリューが注文した、かなりアルコール度数の高い蒸留酒だ。オールバックは、だが、悲鳴をあげることもなく、すぐさまサー・アンドリューにつかみかかろうとした。かわりにニーシャが「きゃあっ」と叫さけび、他の男たちはそれから一いつ拍ぱく遅おくれて気色ばんだ。そのときにはもう、パオロはジーンズのポケットから小型の着火器ライターをとりだしていた。

　ドラム式の火打ち石を、指で弾はじいて回転させると、火花が散って、気化した聖油が燃えあがる──それは、ロシュ聖教の主教や騎き士しが印として持つ聖具だ。

　銀でできた筐きよう体たいの表面には、十字が刻まれている。

　パオロは素早く立ちあがって、聖具を作動させた。オールバックの顔に向かって。火をつけた。バアアアッ。見る間に燃え広がった。赤々とした、火。火。炎ほのお。炎。炎。「うああぁっ」オールバックがのけぞって、床ゆかに転がる。「兄貴！」「火！　消せ！」「……おお！」男たちがあたふたしている。胸が、すっとする。身体中がしびれるような興奮と、頭の芯しんがつめたくなる冷静。パオロはその中間で立ちすくんだまま、ジーンズの裾すそをまくりあげて、脛すねに装着していたホルダーから、ナイフを抜ぬく。サー・アンドリューは、隠かくし持っていた聖油の小瓶を、店内のあちこちに投げつけている。泣き声がする。怒ど号ごうが響ひびく。狂きよう乱らんがこだまする。聖なる炎の熱気が押しよせてくる。パオロたちのあとから、客を装よそおって店内に潜せん入にゆうしていた同志たちも、これを機に行動を開始していた。

　行動を。

　実行を。

　僕たちは〝計画〟を実行する。

　パオロは逃にげようとする女の肩かたを左手でつかまえて、振ふり向かせた。

　やわらかい、肩だった。

　彼女は泣いていた。

　化け粧しようが落ちそうだ。

　怯おびえている。

　ひどく、怖こわがっている。

　かわいそうに。

　生まれつき罪にまみれて、なんて哀あわれなんだろう。

「……や、やめ……た、助け……て……」

「もちろんです」

　パオロは罪をおのれの胸に刻印するために、女を抱だきよせた。女は抵てい抗こうしなかった。むしろ、しがみついてきた。ニーシャ。ああ。きみはいいにおいがする。ぬめるような肌はだ。僕をたぎらせる肉体。告白すれば、僕はきみと交合したい。罪は今にも僕を押し流してしまいそうだ。僕の罪は、こんなにも、深い。僕は、汚きたない。苦しい。僕は、苦しくてたまらない。

　いつか、すべての人が、この狂くるおしいほどの苦しい罪から、解放されますように。

「──ニーシャ。あなたに救いを」

　パオロはナイフの切っ先をニーシャの首筋に埋うめこんだ。

　深く、深く。

　それはパオロによこしまな行こう為いを想像させ、このように人の罪はいたるところにあるのだと痛切に感じさせた。

だから、どうか、主よ。

この穢けがれし者どもに、浄じよう化かを。

役目を終えた僕にも、いつか浄化を。

──救いを。

僕は、病やんだ世界を救いたい。

interlude
穢れし者どもの国

あなたは穢れし者どもの国を知っていますか。

おそらく、知らないでしょう。

外でそれについて語る者はけっして多くありませんから。

それは西の海に浮うかぶ島にあります。

正確には、その島の地下にあるのです。

それは土着の者たちが建てた国ではありません。

ラフレシアにアナトール・ヴィトーという学者がいて、彼によれば国家を構成する要素は三つあります。すなわち、領土、統治権、そこに住む人間です。あるいは、レイモン・フランシスは暴力を合理化するための仕組みとしての国家論を唱えました。

いずれにしても、それが本来の意味での「国家」と呼びうるのかどうか、その点については異論があるかもしれません。

それは、場所なのです。

ようするに、場所にすぎないのです。

穢れし者どもの国。

そう呼ばれる場所が、西の海に浮かぶ小さな島の地下にあるのです。

そこには、王がいます。女王がいます。王子がいて、王女がいます。彼らは、しかし、あなたがたが思うような支配者の一族ではありません。かの国では、王や、女王や、王子や、王女は、むしろ奉ほう仕し者しやです。彼らは民たみへの献けん身しんを、文字どおり身を捧ささげることを要求されます。そして、彼らは必ずこたえねばなりません。拒きよ否ひする権利はないのです。それがために、王は、女王は、王子は、王女は、民に尊敬されます。深く、深く、敬われ、愛されます。それは献身の見返りなのです。正当な、ですが、たぶん不ふ釣つり合いな、報ほう酬しゆうなのです。

かの国を実質的に運営しているのは、修道士モンクたちです。

彼らは民のなかから王子や王女を選びだします。

王子や王女は、やがて王や女王と呼ばれるようになります。

修道士モンクたちは掟おきてを作ります。

民たちに掟を守らせます。

つまり、彼らこそ、かの国の支配者なのです。

ですから、彼らは、王や、女王や、王子や、王女を、敬ってはいません。その必要がないのです。何しろ、彼らは、王や、女王や、王子や、王女の献身を受けることがありませんから。彼らは修道士モンクとなるために、その権利を放ほう棄きしています。もしくは、始めからその機能を持ちません。彼らは不幸な支配者なのかもしれません。

穢れし者どもの国は地下にあるのです。

深い、地の底にあるのです。

もっとも、いくつか、天てん井じように穴があいています。どれも、伝って地上へとのぼることはちょっとできそうにない、あなたが上からのぞきこんだとしたら、深い、とても深い、深すぎて身が凍こおりついてしまうような、穴です。

そこから弱々しい光が射さしこみます。植物の種が落ちてきます。穴の下にはだいたい庭園があるのです。あなたが見たら、きっとたまげてしまうような、みじめな、みすぼらしい庭園ですが、それはたいせつな庭園なのです。庭園は修道士モンクたちが管理しています。かの国の重要な施し設せつは、だいたいそうなのです。

奥の秘ひ宮きゆうにしても、しかり。

もっとも深い場所にある門にしても、しかり。

修道士モンクたちは、王でも、女王でも、王子でも、王女でもなく、じつは真の王に仕えているのです。

真の王の手伝いをして、かの国を任されている者こそが、修道士モンクたちなのです。

それは、正当な行為でした。

なぜなら、かの国を生んだのは、真の王その人だからです。

それは神話ではありません。

歴史ですらありません。

ただの現実にすぎません。

あなたは知らないでしょうから、現実だとは思わないかもしれません。

ですが、それは現実なのです。

信じることで、それはあなたにとっても現実となるのです。

あなたにかの国のことを語ることができる者が、いくらかいます。

一人はかの国からみずからの意思で逃にげだしました。

一人はかの国から追放されました。

あなたはすでに知っているはずです。

とはいえ、彼らはあなたに何も語ろうとしないかもしれません。

それは穢れし者どもの国の話だからです。

それは今でも西の海の小さな島の地下にあるのです。

今日も、王が、女王が、王子が、王女が、民を慰なぐさめていることでしょう。

それを修道士モンクたちがゆがんだ欲望の眼まな差ざししで見つめていることでしょう。

Omenage 897 10th revolution 27th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ベアフット地区

〝ローラの家〟

chapter.7

僕は一人じゃない

世界は不平等だ。

本はたくさんの知識を与あたえてくれるけれど、正しいことばかりが書かれているわけじゃない。この前読んだエミール・ツァトラヴァリスという人の『幸福と平等の理論』なんて嘘うそだらけだった。ツァトラヴァリスは「人間は根源的に平等である」と論じていた。そんなはずがない。それくらいのことは、まだ十三年しか生きていないジョルジュにだってわかる。人間は、資質も、環かん境きようも、運も、何もかも、ばらばらだ。優ゆう劣れつといったら、何を基準にするかという問題が出てくるけれど、いずれにせよ、「根源的」なんて表現はくだらないと思う。根源も何も、人間はさまざまな形で生まれてきて、それぞれの環境で育って、いろいろな状じよう況きようで死んでゆく。けっして平等じゃない。徹てつ底ていして不平等だ。

たとえば、ジョルジュは、一つ上のラッチャはしょうがないとしても、同い年のテッドより十サンチも背が低い。体重もかなり軽い。ローラやステラはちゃんとご飯を食べないからだと言う。でも、どうしようもないんだ。おなかがすかないんだから。ラッチャやテッドみたいに、もりもりがつがつ食べられるやつの気が知れない。ジョルジュにとって、食事はたいてい苦行だ。ローラやステラがうるさいから、ある程度は胃におさめるようにしているけれど、本当につらい。食べなくても生きてゆけるのなら、楽なのに。

それに、体を動かすのも得意じゃない。客観的に見て、自分は鈍どんくさいと思う。オニごっこで逃げると一番先につかまったものだし、ジョルジュがオニになるといつまでも終わらなかった。足が遅おそい。よく転ぶ。石投げがうまくできない。動作が機き敏びんじゃない。すばしっこいラッチャや、体力のあるテッドを眺ながめていると、僕もあんなふうだったら、と思う。あんなに元気に動きまわれたら、僕も本の虫になんかなっていなかったかもしれない。そのぶん、ラッチャやテッドはガキっぽくて、物知らずで、落ちつきがなくて、バカだけど。

僕は騒さわがしいのが嫌きらいだ。

母さんは薬のやりすぎで幻げん覚かくを見るようになって、「もうどうしようもないね」と言い残して、自殺した。そのあと、母さんと同じ店で働いていたローラにひきとられて、この家にきた。あ

れからもう何年もたった。それなのに、慣れることができない。この家は、うるさい。僕は一人になりたい。べつに、たまらなく本が好きなわけじゃない。読書に集中していると、音が気にならなくなって、時間も忘れて、一人きりになれる。だから、僕は、ドーマンさんやミゲラばあさんの家から、次々と本を借りてきて、読む。古びて傷いたんだ本が多いけれど、とにかく読みあさる。この家で一人になるために、ひたすら本を読む。

　今も、ジョルジュはいつもの場所で本を読んでいる。窓まど際ぎわの寝ね椅い子すの上だ。そこで、体を横にしたり、仰あお向むけになったり、あぐらをかいたり、膝ひざを立てたり、いろいろと体勢を変えながら、読む。『ドラガン・ペンブローケン旅情詩集２』。詩は、よくわからない。でも、ドラガン・ペンブローケンは、世界中を旅した人で、暗黒大陸のナドキレー山や、ユニオン・カバナの白くホワイト長い海岸ロングコーストを描びよう写しやした詩を読むと、見たことのないその風景がありありと目に浮うかぶ。まあ、それがいくら美しくたって、実際に行ってみたいとは思わないけれど。

　たぶん、この目で見るより、想像する景色のほうがきれいに違いないんだ。

　だって、よくよく考えてみれば、母さんはひどい女だった。母さんが生きていたころは、結構嫌いだったりした。酒さけ癖ぐせが悪くて、麻ま薬やくにまで手を出して、生活費がなくなって、自分より年下のローラに頼たのみこんで、ご飯を食べさせてもらったりして。弱いひとだった。客に惚ほれて、当然、ふられて、ジョルジュに抱だきついて、泣いていた。愚おろかで、ろくでもないひとだった。

　でも──どうしてか、あのひとの笑った顔とか、誕生日に欲しくもないブリキの玩具おもちやを買ってくれたこととか、風か邪ぜをひいたときに仕事を休んでずっとそばにいてくれたこととか、そんなことばかりが思い浮かぶ。それが本当にあったことなのかどうかも、よくわからない。頭のなかで作りあげた、偽いつわりの記き憶おくかもしれない。きっと、あのひとが生きていて、目の前にいたら、早く死んじゃえこのババアとか、毎日そんなことばかり思っているだろう。

　もういないからだ。

現実じゃないから。

──現実なんて、たいしていいものじゃないから。

むしろ、母さんと同じように、ろくでもない。

それを、無理やりはしゃいだり、救いの神や平等を信じたり、幻げん想そうの愛だの恋こいだのにうつつを抜ぬかしたりして、みんな「捨てたものじゃない」と思いこもうとしている。僕も「母さんも悪いひとじゃなかった」と思いたがっているんだろう。現実は、その反対だから、そうでもしないと耐たえられないんだ。

この家では、そういう連中が身をよせあって、傷を舐なめあっている。

ステラの父親は、バルモア地区の貿易会社で働いている人らしい。でも、ちゃんと家族がいる。母親は赤線地区の娼しよう婦ふで、愛人としても扱あつかってもらえず、ある日、ステラをローラに預けたきり行方ゆくえをくらました。ステラは真ま面じ目めで、几き帳ちよう面めんで、約束を破らない人間を演じて、「自分は母親とは違う、いいかげんな人間じゃない、自分はあんなふうにはならない」と主張している。みんなに認めてもらって、自分を癒いやそうとしている。

ラッチャだって捨て子だ。この家にきたときは、暗い、攻こう撃げき的な目をしていた。まるで、何も信じられず、この世のぜんぶを恨うらんでいるみたいな目つきだった。ラッチャは見つけたのだろう。信じて、すがるものを。やさしいローラとか、家族とか。そのためなら、いくらでもがんばれるんだと、名人街で仕事を始めた。父親とおぼしき暗黒大陸の船乗りに置き去りにされ、回り回ってローラの家にきたテッドも、ラッチャに対たい抗こう意識を燃やしながら、やっていることはまったく一いつ緒しよだ。テッドはなんでもラッチャの真ま似ねをする。二人はよく喧けん嘩かをするけれど、あんなものはポーズだ。ジョルジュから見れば、気持ち悪いほど仲がいい。ああやって、わかりあって、認めあうふりをして、支えあっているのだろう。

一人じゃとても立っていられないから。

そう。

実際、一人では無理だ。

とくに、八歳のアンナや、もうすぐ三歳のミミは、ここから放ほうりだされたら、野垂れ死ぬしかない。ルカにしても、変な力を持っているせいで、ずいぶんいじめられてきたらしいけれど、あんなにとっつきが悪いと、赤線の仕事だって難しいだろう。一人でも平気で生きてゆけそうなのは、リクくらいのものだ。

悲しい、営みだ。

僕は、一人になりたい。

まだ二十時すぎで、ラッチャとテッドは起きている。何やら、仕事のことで、明日はあれがなんだとか、親方がどうしたとかしゃべっているようだ。ステラとアンナは、ミミを寝ねかしつけるために二階に行っている。アンナはそのまま眠ねむってしまうことも多い。ルカは玄げん関かんのドアの前に座っている。ステラに叱しかられるから、家のなかはそんなに騒がしくはない。

でも、なんだか、うるさい。うっとうしくてたまらない。

だから、ジョルジュは本を読む。文字を追う。ページをめくる。読む。マトゥーヤ霊れい国こくの霧きり深ぶかい幽ゆう幻げん峡きょうの景色が脳のう裏りに描えがかれる。想像のなかでなら、地じ獄ごくにだって行ける。そうだ。今度、ドーマンさんから、魔ま術じゅつ士しエリオットの『地獄巡めぐりぶらり一人旅』を借りてこよう。「本書の内容は総すべて事実に基づいている。お疑いの向きがあれば地獄に赴おもむいて確かく認にんされん事を。但ただし、某ぼう悪魔との約やく定じょうにより、地獄からの帰き還かん方法に関する質問には一いつ切さいお答えしかねる。悪あしからず」の序文。前に一度読んだけれど、あれは下手な小説よりもよほどおもしろかった。というか、きっとノンフィクションの体てい裁さいで書かれたフィクションなのだろう。そうでなくたって、嘘うそでも本当でも、どっちでもいい。あの本を読んで、想像の地獄を旅しよう。どうせ、現実なんてつまらないし、醜みにくくて、苦しいだけだ。いつか死神につかまるまでは、こうして想像の海を泳いで、どこまでもどこまでも、逃にげてゆけばいいんだ。僕は、あくまで、現実を拒きょ絶ぜつする。そのために、今日もただひたすら本を読む。読みつづけようとした。手が、止まった。

ステラが階段を下りてきた。足音はしのばせていたけれど、

ちょっと様子が変だった。慌あわてているようだ。ルカがステラをちらりと見て、ラッチャとテッドは顔を見あわせた。

「……なんかあったの？　ステラ」

「火事みたい」ステラはラッチャの問いに答えながら、壁かべにかけてあったコートを羽織った。どうやら、外に出るつもりらしい。「──赤線のほう。二階の窓から見えたの。すごい煙けむり。一軒けんじゃないみたい。何軒も」

「えっ！」「赤線って……」

　少し意外だった。驚おどろいて目をまん丸くしたラッチャとテッドより、それどころかステラよりも早く、ルカが無言で立ちあがって家から飛びだした。「──ちょ、ちょっと、待ちなさい、ルカ……！」すぐにステラがルカを追いかけた。その手にしっかりとルカのコートを持っているあたりは、ステラらしい。ラッチャとテッドも、部屋のなかをドタドタ走りまわって上着を捜さがしたり、着たり、脱ぬいだりして、ようやく用意が整ったようだ。それから、ルカとステラを追いかけるのかと思ったら、二人は出てゆかない。ドアのところで、不思議そうに、訝いぶかしそうに、ジョルジュを見ている。

「何？」

「いや、何、って──」

　ラッチャがそこで絶句すると、テッドが「お前さ……」とあとをついだ。髪かみと瞳ひとみが鳶とび色いろのラッチャは、わりとすっきりした目鼻立ちで、テッドは肌はだが黒く、黒い髪の毛は縮れている。外見は似ても似つかないけれど、二人は本当に息があっていて、まるで本物の兄弟みたいだ。

「──なんで、お前……そんな落ちついてんの？　なんとも思わないわけ？」

「だから、何が？」

「何が、じゃねーだろ。赤線で火事が起きたってことは、もしかしたら、ローラの店かもしれないわけじゃん。そうじゃなくても、赤線には古い建物がたくさんあるわけだからさ。木造とかも。燃え広がって、たいへんなことになるかもしれないわけだろ」

「まあ、そうかもね」

「そうかもね、じゃねーよ！　お前、心配じゃねーのかよ？　なんでそんなに平気そうな顔してられるわけ？」

「だって、僕が心配したって、べつにどうにもならないし」

「どうにもならなくたって、フツーそういう気持ちになるわけだろ？」

「そうなんだ。じゃあ、僕はフツーじゃないのかな」

「ぜんぜんフツーじゃねーよ！　だいたい、お前、いっつもそうだろ。本ばっか読んで、仕事もしようとしねーわけだし。少しはさ、ローラに感謝とかしてねーわけ？　俺らのこと面めん倒どうみてくれて、実際、母さんみたいなもんなわけだろ？」

「テッドがそう思うのは自由じゃない？　僕は違ちがうけど。それはそれで僕の勝手でしょ」

「なんだよ、それ！」

「なんだよって、そのままの意味だけど。僕、べつに難しいことは言ってないよね？　それとも、テッドくんの頭脳にとっては少々難解な表現だった？　そういうわけなら、僕ももう少し考こう慮りよしたほうがいいわけだったかもしれないわけだけど」

「──てめえ……！」

　いきり立ったテッドを、ラッチャが分別顔で押さえた。

「やめろって、テッド。ダメだよ、こいつ。マジで何言っても無む駄だっぽい。かわいそうなやつなんだよ。ほっとけって」

「でもよ！」

「いいから。おまえの気持ち、俺はよくわかるからさ。ステラとかルカも同じだってことだろ。それでいいじゃん。さ、行くぞ。急いで、ステラたちに追いつこうぜ」

「……わかったよ」

　渋しぶ々しぶといったかんじでうなずいたテッドが、ラッチャに押しだされるような恰かつ好こうで先に家を出た。ラッチャはドアを閉める前にジョルジュに、中指を立ててみせた。「死んじフアツまえクユー」それは柄がらの悪い連中ならよく使う罵ののしり言葉だけれど、よほど腹に据すえかねていたのだろう。そのときのラッチャは、ローラの家にきたときみたいな、かなり刺とげ々とげしい目つきをしていた。すごい嫌けん悪おだった。間違いなく、ジョルジュに向けられた感情だった。

　不当だ──と、思わないでもない。

　だって、僕は何かおかしなことを言っただろうか？　そんなことはないはずだ。僕は、ラッチャたちが家を飛びだしてゆくことを否定したわけじゃないし。ただ、僕が行っても仕方ないと言っただけで。仮に、ローラが何かたいへんな目に遭あっていたとしても、鈍どんくさい僕が役に立てるとは思えない。僕はたぶん、何もできない。かえって邪じや魔まになるかもしれない。

　だから、僕は家にいる。

　そして、寝ね椅い子すのクッションのなかから、隠かくしてあった折り畳たたみナイフをとりだす。

　それをそっと脇わきに置く。

　クッションに埋うもれさせて、けれど、いつでも握にぎることのできる場所に。

　僕はまた本を開く。臆おく病びような僕は、もう目で文字を追っていても、さっぱり内容が頭に入ってこない。外が気になる。人の気配。物音。貧しい人たちが住むベアフット地区は、おそらく、外の人間が想像するほど治安は悪くない。でも、安全とはいえない。とくに、流れ者には要注意だ。ベアフットの住人同士は、たいていお互たがいに顔見知りだったりするから、盗ぬすんだり殺したり犯おかしたりは滅めつ多たにしないけれど、そうじゃない者は何をするかわからない。ちょっと前に、母親が家をあけた隙すきに幼い女の子を陵りよう辱じよくして完全に殺した余よ所そ者ものの男が、パンカロ・ファミリーにつかまった。そいつはさらし首にされたけれど、それで女の子が生き返るわけじゃない。いや、もし生き返ることができたとしても──取り返しのつかないことって、ある。

癒いやせない傷。

消えない記き憶おく。

いっそ死んでしまったほうがマシだと思えるような人生。

そんなもの、探すまでもなく、そこらじゅうにごろごろしている。

母さんだって、そうだった。「がんばって生きてるつもりなんだけど、ぜんぜんいいことないよね」というのが口くち癖ぐせだった。あげく、なんのつもりかオストロス神しん殿でんにお参りに行った帰りに、人魚岬みさきから飛び降りて死んだ。二目と見られないような死体になった。

この道は閉じている。

歩いていったって、どうせ行き止まりで、どうしようもなくなるのが目に見えている。

それなのに、歩かなきゃならないなんて、馬ば鹿か馬鹿しい。

ときどき、一筋の光が射さしたような気がして、つい顔を上げてしまう自分が、もどかしい。

ジョルジュは本を閉じ、クッションの隙間に手を突つっこんで、ナイフを握った。いつも思うことだけれど、なんだかおかしい。こんなもので、僕は何をどうしようっていうんだろう。ひそやかな自じ嘲ちようの笑いは、でも、途と中ちゆうで凍こおりついた。

音がした。どこだ？　音は、どこから？

──上……？

二階か。

ジョルジュは深呼吸を二回して、下した唇くちびるを嚙かみ、ナイフから手を放して、本を開いた。

おそるおそる階段を下りてきたのは、パジャマ姿のアンナだった。

「……ジョルジュ、あの……みんな、いないみたいだけど。どこか、行っちゃったの？」

「みんな、そのうち帰ってくるよ。たぶん、なんでもないと思うから、アンナは寝てたら？」

「う、うん……でも、ね……」

「いいから、寝なよ。べつに、アンナを置いていなくなったりしないから。そういう人たちじゃないってことくらい、わかってるでしょ」

「そ、そんな……そんなこと、心配してるわけじゃ、なくて——」

「じゃあ、何？」

「何、っていうか」

「ミミが起きちゃうかもしれないよ。そばにいてあげたほうがいいんじゃない」

「う、うん……」

　アンナは、いつも何かを我が慢まんして、抑おさえつけているかのようだ。誰だれかに強い口調であれをやれ、これをやれと命じられれば、たいてい従うし、今も結局、おとなしく二階に戻もどっていった。アンナが口答えするのは、ラッチャに対してくらいだろうか。あの二人は仲がいい。というより、ラッチャは誰とでもそれなりにうまくやれる。僕とは正反対だ、とジョルジュは思う。だから、どうしたってこともないけれど。べつに、うまくやれなくたって、かまわないし。そんなことは望んでいないし。

　望んだって、無む駄だだ。

　けっして叶かなえられることのない夢や希望が、ほら、ここにも、あそこにも、無数にあって、それらは重なりあい、混じりあって、一つ一つは見分けがつかない。

　そうして僕らは埋もれてゆく。

　もう、埋もれている。

誰かに掘ほりだされることも、顧かえりみられることすらなく、いつか人魚岬から飛び降りるか、年老いるか、病気になるか、誰かに殺されるかして、死体になる。

僕は、そのときを待っている。

──無力なナイフをひそませて。

耳を澄すませて。恐おそれて。緊きん張ちようして。胸が張り裂さけそうで。自分が何ものかもわからなくなりそうで。夜は、怖こわい。母さんが帰ってこなかった夜。死体が見つかったと知らせを受けた夜。夜はいつも不ふ吉きつだ。夜なんかこなければいいのに。僕はせめて朝を待つ。なんでもない朝がやってくるのを。また夜に襲おそわれるまでの、束つかの間の朝と昼と夕暮れを。壁かべ越ごしに感じる。誰かが、何かが、近づいてくる。あれは、なんだろう。足音。人間。アンナを、ミミを汚よごして、殺そうとする、凶きよう暴ぼうな、でも、どこにでもいる恐ろしい人間だろうか。ジョルジュはナイフを手にとる。肋あばら骨ぼねがギシギシいう。寝ね椅い子すから離はなれる。いつか、母さんがくれた折り畳たたみナイフを手に、玄げん関かんのドアのすぐそばまで行く。ジョルジュはこのナイフで自分自身の憎ぞう悪おと願望ばかり切り刻んできた。生きているものなんか切ったことがない。だけど、僕はやるだろう。いざとなったら、やらなきゃならない。ジョルジュはナイフの刃はを出して、両手で柄つかを握にぎった。ドア。そうだ。みんな、さっき慌あわてて出て行ったから、鍵かぎがかかっていない。まあ、その気になれば、鍵なんて簡単に壊こわしてしまえる。たいして意味はない。ジョルジュはそのときに備える。壁に背中をつけ、片かた膝ひざを立ててしゃがむ。呼吸を整えようとする。だめだ。ぜんぜん整わない。ああ。鍵。ガシャガシャ音がする。え……？　鍵が？　どうして？　──力が抜ぬけた。

鍵はいったんかけられて、また開けられた。

ドアが開いた。

黒い髪かみが少し長めで、青っぽい服を着たリクが、家に入るなり、ジョルジュを見つけた。

「ただいま」

「……おかえり」

「みんなは？」

「赤線に──」ジョルジュは答えながら立ちあがって、とっさに折り畳んだナイフを後ろ手に隠かくした。もちろん、リクが気づいていないはずがない。わかってはいても、隠さずにはいられなかった。「火事、みたいで。それで、ローラが心配だからって」

「そう。やっぱり。おれも、さっき火事のことを知って、これからあっちへ向かうところなんだ。ちょうど途中だから、家によってみたんだけど。でも、ローラの店は大だい丈じよう夫ぶだと思うよ。場所が離れてるから」

「そっ……か」自然と、大きなため息が出た。「──ローラ、無事なんだ。そっか。よかったね。うん……よかった。リクは……最近、どこかの屋や敷しきの警備についてたんだっけ」

「うん」リクはうなずいて、階段をちらりと見た。「アンナとミミは寝てるんだね」

「え？　あ、うん」

「ありがとな」

　最初、何を言われたのか、よくわからなかった。それくらい予想外の言葉だった。リクの手に髪の毛をくしゃっとされても、なんのことやらさっぱり、というかんじだった。でも、すぐに──耳たぶが、ぼうっと、火であぶられたみたいに熱くなった。

「ジョルジュがいつも家にいてくれるから、安心して仕事ができる。女の子だけだと、ちょっと危ないしね」

「ち、ちがっ──」

　耳たぶだけじゃない。頰ほおもだ。熱は一いつ瞬しゆんで顔中に広がった。

「僕は、べ、べつに、そんな……こと、考えてるわけじゃ……」

　否定しようとしても、うまく舌が、唇くちびるが動いてくれない。しどろもどろだ。これじゃあ、なんだか、むきになっているみたいだ。かえって、あやしい。リクは穏おだやかに微笑ほほえんでいて、訝いぶかっている様子はないけれど。でも、自分の見解が間

ま違ちがっているとは思っていないように見える。

　リクは、いつもそうだ。なんでもわかっている、みたいな態度で。それなのに、ぜんぜん偉えらそうじゃなくて。だから、反発もしづらい。嫌きらいになれない。拒きよ絶ぜつできない。

　これがラッチャやテッドなら、憎にくまれ口をたたいて、遠ざければいいのだ。ステラのお姉さんぶった説教は、適当に聞き流していればいい。アンナにはつれなくすればいい。そうすれば、ミミも怖がって近づいてこない。ルカは人間関係に臆おく病びようで、深入りしてこないから楽だ。ローラは「ジョルジュはラッチャやテッドと比べて、ちょっと難しい男の子だ」と思っている。だから、少し距きよ離りをとって、様子を見よう。無理やり心の扉とびらをこじ開けるような真ま似ねはよそう。ジョルジュにとっては、ありがたい。僕は、放ほうっておいて欲しい。一人になりたい。

　――でも、怖いんだ。

　本当は、怖くてたまらない。

　周りに誰だれもいなくなって、一人きりになったらと思うと。

　朝、起きて、挨あい拶さつをする相手が誰もいなかったら。

　この家の、「人がいる」ぬくもりが失われてしまったら。

　僕は贅ぜい沢たくなんだ。みんなにぬくぬくと囲まれながら、一人になりたい。あたたかくつつまれたまま、誰にも干かん渉しようされたくない。いつか、何もかもが失われる日が、きっとくる。そのための準備をしたい。一人きりになっても、耐たえられるように。少しずつ、ならしてゆきたい。

　だから僕は、ラッチャやテッドと一いつ緒しよになってはしゃぐのなんてごめんだ。ローラも、こどもの面めん倒どうなんか見ていないで、誰か甲か斐い性しようのある男の人と暮らせばいいんだ。ステラなんて、やかましいだけで、うざったくて、消えてしまえばいい。アンナとかミミなんて、邪じや魔まくさい。ルカとリクは二人でどこかへ行って、勝手にしあわせになればいいじゃないか。

　そう思おうとしている。そうとでも思わないと、負けそうになる。

　離れられなくなってしまう。

　──なんて。

「……違う」

　僕は、認めたくない。

「違うよ、リク。僕は、そんなことなんて、ぜんぜん、少しも、考えてないし……」

　ジョルジュはリクの顔から目をそらした。背中に回した両手がナイフをいじっている。

「だいたい、さ──他人だよ？　たまたま、ローラっていう奇き特とくな人がいたおかげで、一緒に住んでるけど、結局、他人じゃないか。どうでもいいよ。赤の他人のことなんて。血のつながりも、あてにはならないけどね。僕の母さんだって、自分のこどもを置いて、さっさと自殺しちゃったし。親に捨てられるなんて、珍めずらしくもなんともない。ようするに、人間って──」

　そうだ。

　僕は、受け入れなきゃいけない。

「一人なんだよね。親とか、兄弟とか、親しん戚せきとか、友だちとか、恋こい人びととか、そういう人たちが周りにいて、錯さつ覚かくすることもあるけど、実際は一人なんだよ。滑こつ稽けいだよね。誰も彼もが一人きりなのに、そうじゃないって思おうとしてさ。群れて。馴なれあうふりをして。慰なぐさめあって。だけど、どうせ、死ぬときは一人だよ。みんな寂さびしく一人で死んでいくんだ。そのとき、どう思うのかな。きっと、馬ば鹿からしいって思うに決まってるよ。あんなことしなきゃよかったって。楽しいとか、あったかいとか、そんなの幻げん想そうにすぎないのに。それなのに、思い出せば、思い出すほど、たぶん、つらいでしょ。そんな記き憶おくが最初からなければ、静かに、一人で死ねるよ。安らかに。ねえ、リクもそう思わない？」

「そうかもしれないね」

　あっさり肯こう定ていされて、拍ひよう子し抜ぬけした部分がないとはいえない。同時に、そうなんだ、とジョルジュは思った。

やっぱり、そうなんだ。リクも同じ意見なんだ。

　やっぱり━━僕らは、一人なんだ。

「でも」

　と、リクは自分の右手に目を落とした。少しだけ、口くち許もとをゆがめた。

　少しだけ、苦しそうに。

「おれは、初めてだから。この家で、みんなと一緒に暮らして、楽しくて。たしかに、ジョルジュの言うとおり、それは幻想かもしれない。おれたちは、所しよ詮せん、一人なのかもしれない。だけど、それでもおれは、大事だよ。この時間が。みんなが。ローラや、ルカや、ジョルジュや、ステラ、ラッチャ、テッド、アンナ、ミミ。カルロさんや、エンツォさん。ファミリーの人たちも親切にしてくれる。おれは、もう絶対に忘れないと思う。誰のことも。だから、一人で死ぬときも、みんなのことを忘れないで、思い出して死のうと思う。そうすれば、きっと一人で死ぬときも寂しくないと思うんだ。できれば、おれは、もっと刻みつけたい。みんなとすごした時間を。そのために、これからも、楽しいこととか、嬉うれしいことが、もっとあればいいと思う。おれは欲張りかな？」

　リクは自分のことをあまり話さない。家族はいないようで、帰る故郷もないらしいけれど、過去にどんな生活を送っていたのか、何があって、どうしてジェードリの海岸に流れついたのか、知っているのはリク本人だけだ。

　でも、おそらくリクは、ジョルジュよりも、ずっと一人なのだ。だって、「初めてだ」と言った。リクにはきっと、ここしかないのだ。ジョルジュには、母がいた。ろくでなしだけれど、いい思い出もある、母がいた。母が死んで、悲しかった。もう二度と会えないなんて、考えたくなかった。僕は、今でもしがみついている。母さんの記憶に。だから、怖こわい。もう一度同じ目になんか遭あいたくない。失いたくない。

　リクにとっては、それがここなんだ。

　それだけじゃなくて。

　本当は、僕にとっても、ここがそうなんだ。

　ローラの家が。

　みんなが。

　腹が立ったり、うざったかったり、たまに嫌きらいだったりするけれど、それでも大事なんだ。失いたくない、傷ついて欲しくない、守りたい、たいせつなものなんだ。

「もうすぐローラの誕生日だね」

　リクの右手が、ジョルジュの頬ほおにふれた。

　その指が、ぬれた。

「おれ、バルモアでケーキを買ってこようと思うんだ。チーロさんに訊きいて、おいしい店を教えてもらったしね。ローラは甘い物が好きだから。それから、花もたくさん買うつもりだよ。ジョルジュ、おまえも何か考えてくれないか。ローラが喜びそうなことを。みんなで、考えよう。おれ、自分の誕生日をはっきりとは知らないから、みんなの誕生日はちゃんと覚えておきたいんだ。楽しい、誕生日にしよう。死ぬときに、あれは楽しかったって、みんなが思えるような、そんな日に」

「……うん」

　そうしたら、最さい期ごに目をつぶる瞬しゆん間かん、僕は一人じゃなかったって、思えるだろうか。

　ジョルジュには、わからない。でも、とりあえず、一つ年をとるローラに、何か贈おくり物をしよう。母さんって、みんなで呼んだら、ローラは喜ぶだろうか。それとも、まだ若いのにって、怒おこるだろうか。

Omenage 897 10th revolution 27th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ベアフット地区

〝ヴィラ・ア・ジョーカー〟

chapter.8

血が叫ぶ

「……あー。もーまいったな、ちくしょう」

　チーロ・パンカロは、短く刈かりこんだ頭を、ごつい両手でガシガシこすった。玄げん関かんホールの隅すみに置いた椅い子すの背もたれに体重をかけ、思いきり体を反り返らせると、ミシミシ音がする。

　──あー。このまま椅子ぶっ壊こわしちまいてえ。

　でも、ヒトサマの椅子だし我が慢まん我慢。マジ我慢が超ちよう必要。だけど、オレってば我慢苦手なんだよなあ、とチーロはギチギチ歯を食いしばる。女がびっくりするくらい早そう漏ろうだったりするしなあ。こないだも、「プ」ってかんじで笑われて。きれいな女だったのになあ。あれは正直、傷ついた。「気にしなくていいのよ」とか言われても気になるべ、そりゃ。けど、早いのは関係ねーのかな。どうなんだろ。体ビシバシ鍛きたえんのとかはわりかし平気だったりするし。微び妙みようだよなあ──って、関係ねーこと考えまくりじゃん？　オレ。これって逃とう避ひってやつ？　かもなあ。めんどくせえこと嫌いだからなあ、オレ。マメツブみてーにちっせーときから考えんのとかぜんぜん得意じゃねーし。かけ算とか割り算できねーし。三かける四は十くらい？　まあ、アバウトでいーべ、ってかんじで。しっかし困ったよなあ、とチーロは後ろの壁かべに頭をガンガンぶつけてみた。どうしよ。どうすりゃいいのよ？　実際。

　とりあえず、リクは行かせた。世話になっている女が赤線地区で働いていて、一応、店は火事が起きた場所から離はなれているみたいだが、やっぱり心配だろう。それに、リクは若いくせに、とにかく使えるやつだ。あっちにやれば、いろいろと役に立ってくれるに違ちがいない。火事ともなると、やらないといけないことはたくさんある。だいたい、遠くから見たところでも、火元は一カ所じゃないようだ。いくらチーロでも、そんな火事が偶ぐう然ぜんだとは思わない。

　きっと、放火だ。べつに証しよう拠こがあるわけじゃないが、ひょっとして、オルソを殺やった連中の仕し業わざか？　もし、相手が、カルロ兄貴の弟分を殺ったやつらの一味だとしたら。

　──復ふく讐しゆうしてえ。

　皆みな殺ごろしにしてやりてえ。全員殴なぐり殺してえ。あーたまらねえ。でも、なあ。

「……こっから離れんなって、親おや父じに言われてるしなあ。交代の時間でもねーのに勝手に離れたら、超怒おこるよなあ。マジ怖こえーからなあ、親父」

　チーロは壁に頭をガツンガツンぶちあてた。だけどよう、と思う。親父もどうかと思うよ。ジョーカーっちが大事なマブダッチンってのはわかっけど、屋や敷しきの警備とかいらねーだろ。そんなタマじゃねーって絶対。親父がジョーカーっちに助けられた話は、もう何回聞かされたか知れない。あの人、オレらよか強つええべ？　第一、警備とかオレには向かねーって。息むす子こなんだし、親父もそれくらいわっかんねーかな。無理だって。黙だまってんのとかダメだし。げんに、ここにいても、ひそかにスクワットとか、腕うで立たてとか、腹筋とかやりまくりだし。女呼んじまおーかなーとかまで思ってたし。エンツォ・パンカロのせがれってだけで、これが結構もてちゃうんだよな。早漏でも笑って許されちゃったりして。あー。また関係ねーこと考えてるし。

　だから、ダメなんだって。オレ、頭足りてないですから。それくらい、自分でもわかってますから。そんくらい、オレってバカチンですから。はっきしいって、脳ミソまで筋肉でできてますから。贅ぜい肉にくブヨブヨ脳ミソよりかはちったーマシだべ、くらいに思ってますから。

「うおー！　暴れてえ……！　ふん！　ふんっ！　ふんがっ！」

　さすがにこれ以上、壁に頭をぶつけていたら壊れそうなので（もちろん壁が）、チーロは自分の拳こぶしで側頭部をボカスカ叩たたいた。ちょっと気持ちが落ちつくまで──というか、疲つかれて馬ば鹿か馬鹿しくなるまで、さんざん殴った。だが、すぐにもやもやしたものが胸の奥底からわきあがってきた。エネルギーがね。ありあまってんだよな。まだ若いしね？　これでも二十三歳だから。そうは見えないっぽいけど。しゃーねえ──と、チーロは床ゆかに置いてあった鞄かばんから、アルコール度数八十五度の素す敵てきな蒸留酒スピリット、カリベ・アーツの瓶びんをとりだした。そして、一気に飲んだ。グイグイグイ。

「ぷはぁーっ。きくぅっ！」

……というほどでも、じつはない。特異体質なのか、十歳のころから酒はよく飲むが、一度も泥でい酔すいした経験がないのだ。それでも、なんとなく頭がぽーっとして、何もかもどうでもいいような気分にはなる。チーロはひとまず満足して、カリベさんがつくったカリベ・アーツ（ではないかもしれないが、チーロはそういうことにしている）を鞄にしまい、ネクタイをほどいて、ジャケットを脱ぬいだ。なんのつもりか、自分でもわからない。あ。腕立て？行動を後追いする形で気づいた。そっかあ。腕立てやんのか、オレ。んじゃ、いっちょやりますか。

「よっしゃあ！」

チーロは気合いを入れて立ちあがり、ジャケットを椅子の背もたれにかけた。それから、床に両手をついて、胸が床すれすれの高さになるまで両腕を曲げ、「いーち」の「い」まで言ったときだった。

「いったい何をやっているんだ、貴様は」

「……ち？」顔を上げると、革かわ製せいの鍔つば広びろ帽ぼうをかぶって、風変わりなデザインのサングラスをかけた男に見下ろされていた。ていうか、すげー恰かつ好こう。チーロは女受けを狙ねらってファッションには結構気を遣つかい、足りない頭で勉強もしているのだが、これはアブノーマルの域に達している。だって、ギョームのルーズでエレガントな東部風の上下に、秀ひで麿まろのきらびやかであでやかなカフタンなんて、それ、高級プレタ既製服ポルテじゃなくて、高級オートク注文服チユールだろ。ショウの世界じゃん。それに、ラハ・アジャディンの爪つま先さきが尖とがった革かわ靴ぐつ。モノ単体として見るぶんにはかっこいいけど、履はいたらどうなのよってかんじのやつ。帽子は、ある意味、正統派で、皮革製品の質感にあったデザインと品質のよさに定評があるバジリスクか。で、サングラスは、頭のイカれたイカしたデザイナーだって評判のデ・ロッソ。それから、金銀をあしらった黒くろ塗ぬりのステッキ。腰こしには、なんだかやたらと値打ち物っぽい刺し突とつ剣けん。それなのに、ああ、それなのに──なんだか似合っちまってるのが、たいそう不思議だ。

親父の恩人で、マブダッチンで、旅人で、名うての冒ぼう険けん家か（！）で、たまにジェードリを訪おとずれ、この別べつ荘そうに滞たい在ざいするものだから、チーロはガキのころから面識がある。ちょっと、いや、かなり理解不能系で、怖こわいかんじもする

が、基本的に昔から好感を抱いだいていた。やばいよなあ、と思う。ジョーカーっちは、ホント、マジやばい。

「──あ。えーっと……匍ほ匐ふく前進？　じゃねーか。腕立て伏ふせでもしよーかなー、なんて。はははは」

「馬鹿者め。そんなものは自分の家でやれ」

　ジョーカーのステッキがチーロの額を小こ突づいた。「イテッ」まあ、たいして痛くもないが。チーロはなんとなくそんな雰ふん囲い気きなのでちょっと痛がってみせ、慌あわてて体を起こして「たははは」と後ろ頭をかいた。ステッキで床を突きながら、首を傾かしげてため息をついてみせるジョーカーの三歩後ろには、悶もん絶ぜつ美女のクローディアがいる。彼女が道化者ジヨーカーの紋もん章しよう入りコートを羽織っているということは、二人して外出するつもりなのか。こんな時間に？　こんなときに？

　それにしても──クローディアもやばいよなあ。ジョーカーっちよりも、むしろやばい。段だん違ちがいに図ず抜ぬけてやばい。金色にも銀色にも見える髪かみとか目とか、ほっそりしてて、硝子ガラス細工みたいな顔とか、もうありえない。チーロは、いまだかつて、こんなに美しい生物を他ほかに見たことがない。この前、ジョーカーの見み舞まいに訪れたでかい犬連れの女も、たいそうな超ちよう絶ぜつ美人だったが、クローディアにはかなわない。

　だって、こんなに胸がバクバクいってる。いくら大酒かっくらっても顔色一つ変わらないオレが、クローディアを一目見ただけで、ゆでだこみたいになっちまう。

　じつは、初はつ恋こいの人だったりする。ていうか、今も十分惚ほれてる。

　しかし、やりたいとか、そういう対象じゃなくて。

　──神聖、なんだよなあ。

　まいるぜ、ちくしょう。

「や、ははは……すませんっす。腕立ては、なんつーか、オレの習性みたいなもんで。血と汗あせと涙なみだっつーか。よくわかんないっすね。で、あの、お出かけで？　く、クローディアさんも、ごーいつ緒しよっすか？」

「はい」

　クローディアはチーロの目を見て答えたが、こっちを見ているかんじがぜんぜんしない。あの稀まれにも見ない瞳ひとみには、チーロなど映っていないのだ。一人だけ。クローディアが本当の意味で「見て」いるのは、たった一人だけだ。だから、受け答えはきちんとしてくれるのだが、にこりともしてくれない。つめたい。かぎりなくつめたい。

　でも、それがいい。

　クローディアは、絶対に振ふり向いてくれない。最初からわかっている。そこがまた、たまらない。オレって変？

「そ、そっすか。へー。お出かけ。いいなー。愉ゆ快かいだなー……って、夜っすよ、夜！」

「それがどうかしたのか」

「やだなあ、ジョーカーさんったらもう、夜っていったら、やっぱアレじゃないすか。アレ」

「なんだ。聞いてやる。言ってみろ、単たん細さい胞ぼう生物」

「え？　タンホイザー？　なんすか、それ？」

「……即そつ刻こく忘れろ。貴様が理解するまで説明していたら日が昇のぼりそうだ。言いかえる。単細胞生物あらため、この阿あ呆ほうが」

「ああ、アホって意味なんすか。タンホイザー。なーんだ。それならわかりますよ。いくらオレだって、そんくらい。ははーん。アホかあ。たしかにオレはアホですけどね！」

「自覚があるぶんマシだな」ジョーカーは鼻先で笑って、自分の右みぎ肩かたをステッキでぽんと叩たたいた。「──とにかく、己おれは出かける。しばらく屋こ敷こをあけるから、貴様らは用済みだ。さっさと消えろ」

「消え……？」チーロはぶるんぶるん頭を振った。「ちょ、ちょ、ちょっと待ってくれ──くださいよ。シバラクって、どのくらいなんすか？」

「少なくとも、数時間は帰らん」

「なーんだ。シバラクってたいしたことないんすね。それだったら──」

「ああ、ついでだ。エンツォの白しら髪が頭あたまに伝えろ。警備なんぞいらん。己おれのことを気にかけている余よ裕ゆうがあったら、自分の面めん倒どうを見ろとな」

「はーい。了りよう解かいっす。親おや父じに──って、おいおい、待ってくれ──さいよ！　それはまずいっすよ！　オレ、親父に命令されてるんすから！　ジョーカーさんの屋敷を体張ってピシッと守れって！」

「それで、貴様は腕うで立たて伏せをしていたわけか」

「アイタタッ！　それを言われるとメチャクチャ痛い！　で、でも、それはひとまずこっちに置いといて──」と、チーロは実体のない何かを右側に押しやった。「やっぱダメっすよ！　そもそも、親父がこの屋敷に警備つけるって言いだして、それにウンって返事したのはジョーカーさんなわけじゃないすか！　いきなり消えろとか言われても！」

「気が変わった。だから、己おれの気がまた変わらないかぎり、貴様らの居場所はここにはない。もとより、己おれは好きにしろと言っただけで、警備してくれと頼たのんだわけではないのでな。貴様らがどうしても去らぬと言うなら、排はい除じよするのみだが？」

「ちょ、ちょちょちょっと待ってください！　えっと、十秒！　十秒考えるんで！」

　チーロは脳のう梗こう塞そくになりそうなくらい脳ミソをフル回転させた。あー、ようするに、ジョーカーっちの屋敷の警備をやめるってことは、これからオレたちフリーで、好きにしろってことで。けど、あとで親父に怒おこられるよなあ。親父マジ怖こええからなあ。ま、でも、我が慢まんすりゃいいか？　怒られたって、死にゃしねーし。イヤだけど。ていうか、フリーってことは、だ。赤線に行ってもいいよな？　火事。火事火事火事。あれ、絶対放火だよな？　犯人つかまえて殴なぐり殺せるよな？　おっ！　もしかしてこれって、噂うわさの願ったり叶かなったりってやつ？　ジョー

カーっちナーイスッ！　グッドタイミンッ！　いってらっさーい！

「──オーケーっす。わかりました！」チーロはジャケットを引っつかみ、鞄かばんのなかにネクタイをねじこんで、ジョーカーに思いっきり頭を下げた。下げすぎて、筋トレとあわせて行っている柔じゆう軟なん体操の成果か、自分の足に顔が激げき突とつしたが、なんてことはない。チーロの頭のなかは、もう赤線地区へ向かうことでいっぱいだった。「それじゃ、お気をつけて、ジョーカーさん。く、クローディアさんも。オレら、すぐに消えますんで。あと、親父にも伝えときます。親父、激ゲキ怒ドりそうっすけど、なーに、大だい丈じよう夫ぶっす。慣れてますから！　この世に生を受けて二十三年、親父には何発殴られたかわからねーし、これからも親父がくたばるまでさんざん殴る蹴けるされる予定なんで！　それもオレなりの親孝行ってことで！　ははははは！」

「貴様のような出来の悪い息子を持って、エンツォもさぞかし幸せなことだろうな」

「いやあ。そんな、幸せだなんて。たしかに出来は悪いっすけどね！」

「チーロ・パンカロ」

　不意にジョーカーはステッキを左手に持ちなおし、あいた右手でチーロの肩をつかんだ。強い、力だった。おっとパワフル。ジョーカーっち、オレよりかずっと細っこいのに、すげえ握あく力りよくじゃね？

「貴様の命を貴様のものとは思うなよ。貴様はとんでもなく愚おろかだが、その体は十分盾たてになる。貴様に命をくれた父親のために、貴様は死ね」

　またまた、いきなりジョーカーっちは何を言いだすんだか。

　今さら、そんなあたりまえすぎて、わかりきったことを。

　オレは、親父が好きだ。ガキのころ、暇ひまがあると遊んでくれて、羽目を外すと叱しかってくれた。やさしくて、でっかくて、厳しい親父が大好きだ。オレは親父を尊敬しまくってる。ベアフット地区の貧びん乏ぼうな連中にほとんど無む償しようで仕事を斡あつ旋せんするなんてクールすぎるし、敵対勢力の頭を暗殺ハネる指令

を出すときの渋しぶさったらないし、いいことも悪いことも黒いことも、必要ならなんでもやる姿勢がイイ。グッとくる。冷れい酷こく非情なのに、慈じ悲ひ深くもあるなんて、男のなかの男ってかんじだ。オレは、親父のことを、世界で一番偉えらい男だと思ってる。誰だれがなんと言おうと、オレにとってはオレの親父が一番だ。おふくろがいない今、オレは親父のためならいつでも死ぬ。そのためにオレはいる。親父には、おふくろのぶんもふくめて、もう永遠に生きていて欲しい。ていうか、生きると思う。すげえ長生きするに決まってる。

「了解っす。あ、でもね、ジョーカーさん」チーロはジョーカーに片目をつぶって、親指を立ててみせた。「心配には及およばないっすよ。だって、親父、不死身っすから。放ほうっといても、そう簡単には死にませんよ、うちの親父」

　ジョーカーは何も言わずに唇くちびるを笑う形にゆがめて、チーロの肩をぽんと叩いた。よくわからないが、わかってるよ、みたいなかんじ？　まーどうでもいいか。誰も知らなくたって、オレだけは親父の不死身さをちゃんとわかってんだから。チーロはジョーカーとクローディアにもう一度「じゃっ！」と礼をしてから、急いで屋敷を出た。「──おい、警備は終わりだ！　赤線行くぞ、赤線！　他ほかのやつらにも伝えろ！」玄げん関かんポーチにいた二人にそう命じるなり、門に向かって走った。走力には自信がある。なんでだっけなあ。あーそうだ。親父が、喧嘩出入りではとにかく走って走って走り抜ぬいたやつが勝つって教えてくれたからだ。それで、ガキの時分から、暇があれば走った。運動が好きじゃないっぽい長ちよう兄けいのウーゴは呆あきれ顔だった。次兄のニーノは逃にげ足ばかり速くなるとネチネチ嫌いや味みを言った。むかついて、ニーノのヘソクリを盗ぬすんでベアフットのガキどもにばらまいたら、親父にぶん殴られた。でも、ガキどもから金を取り返そうとしたニーノも、親父にぶん殴られた。あれは痛快だった。そんな昔のことはどうでもいいが、走るのって気持ちいい。全力疾しつ走そうは問答無用で善だとチーロは思う。そして、快楽だと思う。走っていると、どんどん気分がよくなってくる。チーロはあっという間に門のところまでたどりついた。そこにはさっきまでリクがいて、ハーヴェイがいたが、リクはもういない。リクのかわりには、四十がらみのナニーニが入っていた。そのナニーニは馬うま面づらをチーロに向けて「どうしたんですか、坊ぼつちゃん」と、こうきて、チーロとしては（バーカ！　だ・か・ら、坊ちゃんはやめろって！　イヤだっつってんだろ、その呼び方はよう！）と怒ど鳴なり

つけたいところだったが、ハーヴェイが変だった。ちょぼちょぼと似合わない髭ひげを生やしたハーヴェイは、チーロに気づく様子もなく、ぼうっと突つっ立って遠くを見ていた。

　たぶん、赤線地区の火を。

　それから、ハーヴェイは何かつぶやいた。

　よく聞こえなかったが、おそらく、火がどうしたとか、なんとか。

「おぉーい。ハーヴェェェーイ」

「──あ。は、はいっ！　あ！　ち、チーロさん！　あれ？　ど、どどどどうしたんすか？」

「いや、それ、こっちの台詞せりふ。おまえこそどうしたんだよ。ぼけっとして」

「ご、ごめんなさい！　ちょっと、えっと、その、火事に……見とれてて」

「バッカ、おまえ、裸はだかの女が大おお股また開いてカマーンしてるわけでもあるめーし、見とれてどーすんだよ。だいたい、赤線はうちがとりしきってんだぜ。見とれてる場合じゃねーよ。アホなことぬかしてると殴なぐっちまうぞ、このやろう。ていうか、行くぞ、赤線。ナニーニ、おまえもだ。いや、全員だ！　オールでゴーだ！」

「え？　でも、屋や敷しきの警備は……？」

「あー、それ終しゅう了りよう。ジョーカーさんにやめろって言われたから、もうしょうがねー。親おや父じには怒おこられるだろうけど、それはいい。オレが怒られりゃすむ話だからな。つーわけで行くぞ！　行くぞ！　行くぞ！　おらおら、トロトロしてんじゃねえ！」

　チーロはハーヴェイとナニーニの尻しりを軽く蹴け飛とばした──つもりだったのだが、蹴られたほうは飛びあがって痛がっていた。大おお袈げ裟さな連中だ。このくらいでマジで痛いんだとしたら、鍛きたえ方が足りねーんじゃね？　もっと戦えるやつを揃そろえなきゃな、とチーロは思う。べつに根こん拠きよはないが、戦争の予

感がする。それどころか、もう始まりかけているのではないか。
チーロは舌なめずりした。喧嘩は好きだ。殴るのが好きだ。蹴るのが好きだ。血を見るのが好きだ。お前は野や蛮ばんなんだ、と次兄のニーノにはよく言われる。お前を見ていると、自分と血がつながっているとはとても思えないよ、と長兄のウーゴは苦笑いする。

──奇き遇ぐうだよなあ。

オレもだよ。てめーらのことを兄貴だなんて思えねえよ。カルロのほうが、かまってくれたし、叱しかってくれたし、ずっと兄貴ってかんじがする。カルロが「チーロ坊ちゃん。いいかげんにしねえと、俺も黙だまっちゃいませンよ」と凄すごむときの迫はく力りよくときたら。親父も怖こわいが、カルロも結構怖い。ウーゴも、ニーノも、昔はともかく、最近はぜんぜん、さっぱり怖くない。あいつらのどちらかが率いるパンカロ・ファミリーなんて、想像もつかない。もちろん、チーロ自身は頭が悪すぎるから無理だ。

やっぱり、親父だ。親父が永遠にパンカロ・ファミリーに君臨しているのが、一番いい。

でも、親父がちょっと疲つかれて、どうしても潮時だというのなら、そのときはカルロが跡あとを継つげばいい。そのために、ウーゴやニーノが邪じや魔まなら、オレがサクッと突っ殺してやる。

まあ、なんにしても、まだまだ先の話だ。

チーロは走る。叫さけびながら、走る。まずは、オルソを殺やった連中だ。たぶん、あの火を放った連中だ。やつらを殺す。必ず残らずとっつかまえて、ギタンギタンのグッチョングッチョンにしてやる。血には血を。それがカレーナの掟おきてだ。チーロの体には、エンツォ・パンカロから受け継いだカレーナ人の熱くて情け深くて残ざん忍にんな血が流れている。それにしても──とチーロは思う。てめーのことながら、かなり頭が足りなすぎだけどなあ。そのあたりは、ご愛あい敬きようってことで。

Omenage 897 10th revolution 27th day

サンランド無統治王国大陸北横断道

“on the way”

chapter.9

この手がはなれても

「──はっ」と、目が覚めた。まだ暗い。夜中だ。僕は──毛布とタオルケットにくるまっている。不快なほどではないにせよ、振しん動どうを感じる。馬車のなかだ。エルデンージェードリ間を結ぶ高速乗合馬車フライング・ワゴン。そうだ。約一五〇〇キルメーテルの距きょ離りを移動中なんだった。ここは、後部二階寝しん台だい席。二段ベッドみたいな、けっして広くはない寝台だとはいえ、まず上々といっていい部類に入るのだろう。何せ、マリアローズはよく知らないが、荷馬車と大差ない、窓すらない客車につめこまれ、夜は雑ざ魚こ寝ねするスタイルの乗合馬車も珍めずらしくないらしい。それはさすがに耐たえられない。どんなに小さくてもいいから、一人きりになれる場所が欲しい。というか、必要だ。眠ねむるときは一人がいい。そのほうが安心できる。だから、だろうか。目が覚めたのは。

「……あのー……」

　狭せまいんですけど。

　てゆうか、なんでサフィニアが僕の隣となりで寝てるわけ？

　まあ、サフィニアの寝台はマリアローズの隣だ。何かで起きてしまい、寝台から出て、でも寝ぼけていて、間ま違ちがってマリアローズの寝台に入ってしまった。そう推理することはできる。昨日、サフィニアは一人でずっと魔ま術じゅつの訓練をしていたので、かなり疲れていただろうし。もうあたたかい季節ではないのと、やはり自分の家ではないので、ちゃんと着こんで寝ているし。びっくりはしたけれど、それだけのことで、何か不都合があるわけじゃない。

　いや、だけれど、問題はなくもないか。そうだ。これは問題だ。女の子と同じ寝台で寝ているというこの状じょう況きょうは、大いに問題視すべきだろう。

　──けど、よく寝てる。

　ワンピース型のパジャマを着て、ナイトキャップをかぶったサフィニアは、マリアローズのほうを向いて、静かな寝息を立てていた。マリアローズは横向きになり、壁かべに背中をくっつけて、できるだけサフィニアから離はなれようとしているが、何しろ狭い寝

台だ。サフィニアの顔は、わずか十五サンチほど先にある。暗がりのなかとはいえ、こんなに至近距離でサフィニアの顔をまじまじ見るのは、初めてかもしれない。だから、どうしたってことはないけれど。どう表現したらいいいか。

　そう━困こん惑わく、という言葉がぴったりだ。さて、どうしようかな。どうしたらいいかな、僕。やっぱり、起こすべき？　そんな気もするけれど、サフィニアがあまりにもぐっすり眠っているものだから。気持ちよさそうに。なんにも恐おそれていないかのように。無む警けい戒かいに。ああ。

　サフィニアは、信じてるんだ。

　仲間たちに囲まれていれば、ぜんぜん平気だって。安心しきってるんだ。

　━僕も、その仲間たちのなかに、入ってたりするんだ。

　変な気持ちだった。誤解を恐れずにいえば、今、マリアローズは、サフィニアがいとおしくてたまらなかった。もちろん、恋れん愛あい感情とはまるで違う。友情？　わからない。振ふり返ってみれば、友だちなんて、ほとんどいなかった。肉親の情には若じやつ干かん近いかもしれない。モリーにやさしくしてもらって、モリーにもやさしくしてあげたい、力になってあげたい、と思う気持ちにはかなり似ている。ふと、思いつく。もっと簡単な言葉がある。曖あい味まいだけれど、たぶん適切な言葉が。

　あのとき、アジアンに「キミだって彼らのことが好きなんだろう？」と訊きかれて、僕はかすかにうなずいた。そういうことなんだ。

　好き、なんだ。

　サフィニアだけじゃなくて、ＺＯＯのみんなのことが、僕は好きなんだ。

　好きになると、その人の━その人たちのことを、自分と切り離しては考えられなくなる。その人が傷つけば、自分も痛む。

　そんなの嘘うそくさいって思っていたときもあった。

　僕は僕だけが大事で、他ほかはどうでもよくて、目の前で誰だれ

かが殺されかけていて、助けを求めていても見すごして、平然としている。

　みんなそうじゃないか。他人に無関心で、自分以外がどうなろうと知ったことじゃなくて、自分の利益や快楽のためには、誰かを平気で傷つける。ときには奪うばい、蹂じゅう躙りんし、場合によっては殺すこともいとわない。そんなものだ。僕だってそんなものだ。それでいいんだ。

　でも、それこそが嘘だって、本当はわかっていた。

　他の人がどうかは知らない。極きよく端たんな自己中人間もいるかもしれないけれど、僕はそこまで図太くない。当然、嫌きらいなやつもいる。誰かを憎ぞう悪おすることもある。おまえなんか死んでしまえとたまに思う。けれど、やさしくされれば、やさしくしたくなる。油断すると、感情移入してしまう。気持ちが傾かたむく。僕は知っていた。だから、警戒していた。

　ダメだ。僕は、僕を止めないといけない。

　胸に手をあてて、深く呼吸をして、目をすぼめて、「世界は敵だ。誰にも頼たよっちゃいけない。信じちゃいけない。僕は一人だ。世界に僕は一人だけだ」と唱えていた。そうすると、世界はじつに寒々しく見えた。これがふつうなんだ、と僕はつぶやいた。慣れるよ。そのうち、大だい丈じよう夫ぶになるよ。僕だって、この氷の世界の一部なんだから。

　本当は、わかっていた。

　この世界には、氷に覆おおわれた大地もあれば、あたたかく湿しめった森もある。嵐あらしもくれば、晴れの日もある。敵はいる。でも、それだけじゃない。信じてはいけないものはある。一方で、信じるに足るものだってある。わかっていながら、たとえば、モリーに親切にしてもらっていながら、僕は目をつぶっていた。ずるくて、臆病者チキンの僕は、瞳ひとみをきつく閉じて、リスクの削さく減げんにつとめた。

　怖こわかったんだ。

　失うこと。つかんでいた手が、はなれてゆくこと。傷つけること。傷つくこと。望むこと。いつはなれてしまうかもしれない、手

をつなぐこと。誰かを──好きになること。

　今だって、怖い。

　引き返したほうがいいんじゃないかって、思うこともある。

　何もかもなかったことにして、ぜんぶ捨てて、一人になったほうがいいんじゃないかって。

　でも、たぶん、できない。帳消しになんてできない。

　──なくしたくない。

　サフィニアの髪かみの毛は、銀でできた糸みたいにきれいだ。病的なまでに白い肌はだは、化け粧しようをぜんぜんしないせいもあってか、赤ちゃん並みになめらかで、すごくきめが細かい。目をつぶった顔をすぐそばで見ているのって、不思議な気分だ。罪悪感と、やさしい気持ち。ちょっと気まずいけれど、いつまでも眠ねむらせていてあげたい。

　とはいえ、いくらなんでも、朝までこのままってわけにもいかないだろうし。

「サフィニア」小さく声をかけると、サフィニアは身じろぎして、唇くちびるをむにゃむにゃ動かした。マリアローズは少し迷ってから、サフィニアの肩かたを軽くゆすった。「サフィニア」名前を呼ぶたびに、サフィニアがむにゃむにゃするのがおもしろい。てゆうか、かわいい。そうやってひそかに楽しんでいるのも悪あく趣しゅ味みだろうから、ナイトキャップを引っぱり、体を近づけて、サフィニアの耳みみ許もとに唇をよせた。「サ・フィ・ニ・ア」

「……ふっ」どうやら、くすぐったかったらしい。サフィニアは身をよじり、寝ね返がえりを打とうとして、その途と中ちゆうで薄うす目めを開けた。「……みゃ……」いつもはやたらとトーンが暗いけれど、寝ぼけているからだろう、今はそんなこともなくて、なんだか仔こ猫ねこみたいな声だ。「──みゃぁ……にゃ……？」それからサフィニアは、翡ひ翠すい色の両目をバッと大きく見開いて、べつによだれが出ているわけでもないのに、口の周りを袖そでででぬぐった。「──まっ」

「おはよ」

「おっ……はっ……よ……ござい……ます」

「ええと──状じよう況きよう、わかる？」

「じょ、じょう、きょう……ど、どう、して……わたし、ここに……あれ……？」サフィニアは上下左右を見まわして、最後にマリアローズと顔を見あわせ、すぐにうつむいた。「……もしかして……わたし……間ま違ちがえて……？」

「みたい」

「……ご、ごめんなさい……」

「や、べつにいいんだけどね。僕もちょっと、びっくりしたけど。でも、どうせ間違うなら、僕じゃなくて、トマトクンのとこに──あ。トマトクンは寝しん台だい狭せまいからって、一階の床ゆかに寝てるんだっけ。体でかいもんね」

「え……？　は、はい……そ、そう……ですね、いいえ、その……はい……まあ……」

　なんだかサフィニアの態度がおかしい。やけにもじもじして、何か隠かくしてでもいるような。第一、どうせならトマトクンのとこに、みたいなことを言えば、むきになって否定するあたりがサフィニアの反応としては妥だ当とうなところだと思う。

「あ。もしかして」

「……ち、ち、ちが……違います。そんな……わたし……そっそんなつもりは……ぼ、ぼんやり、してて……ふらふらっと……は、半分、以上、寝ぼけて、ましたし……その証しよう拠こに、こ、こうして……マリアさんの……」

「僕は『もしかして』しか言ってないけど」

「だ、だ、だ、だ、だって……マリアさんが、そっ、そういう、言い方をするときは……い、いつも、だ、だいたい……」

「で、キスくらいした？」

「すっ、すすすすすすっ、する、わけ、なっ、ないじゃ……ないですか……そっ、そんな、どうして、わたしが……そっ、そんなの、

ぶ、ぶつり、てきに……ふっ不可能というか、ま、魔ま術じゆつでは解決できない、もっ問題……というか、わ、わたしには、ま、まだ……そっ、そもそも、き、きききす……？　き、きすって、なんですか……」

「え。キスはキスでしょ。知らないの？　してあげよっか？」

「な、なっ、なっ、なっなんで、わたしが、ま、マリアさんと……き、きっキスしないと、いけないんですか」

「だよねえ。僕なんかじゃなくて、トマトクンとしたいよね」

「あっ、あたりまえじゃないですか」

「あたりまえなんだ」

「ぁっ……」サフィニアはごろんと転がって、寝台から落ちそうな位置でマリアローズに背を向けた。全身が小刻みに震ふるえている。「──い……いじわる……」

「う。ごめん。ちょっと調子に乗っちゃったかも」

「……いっ……いじわる、です……わたしは、本当に、そっそういうのじゃ、なくて……」

「え？　違うの？」

「ち……ちっ違います……ち、違わない、のかも……しれませんけど……」

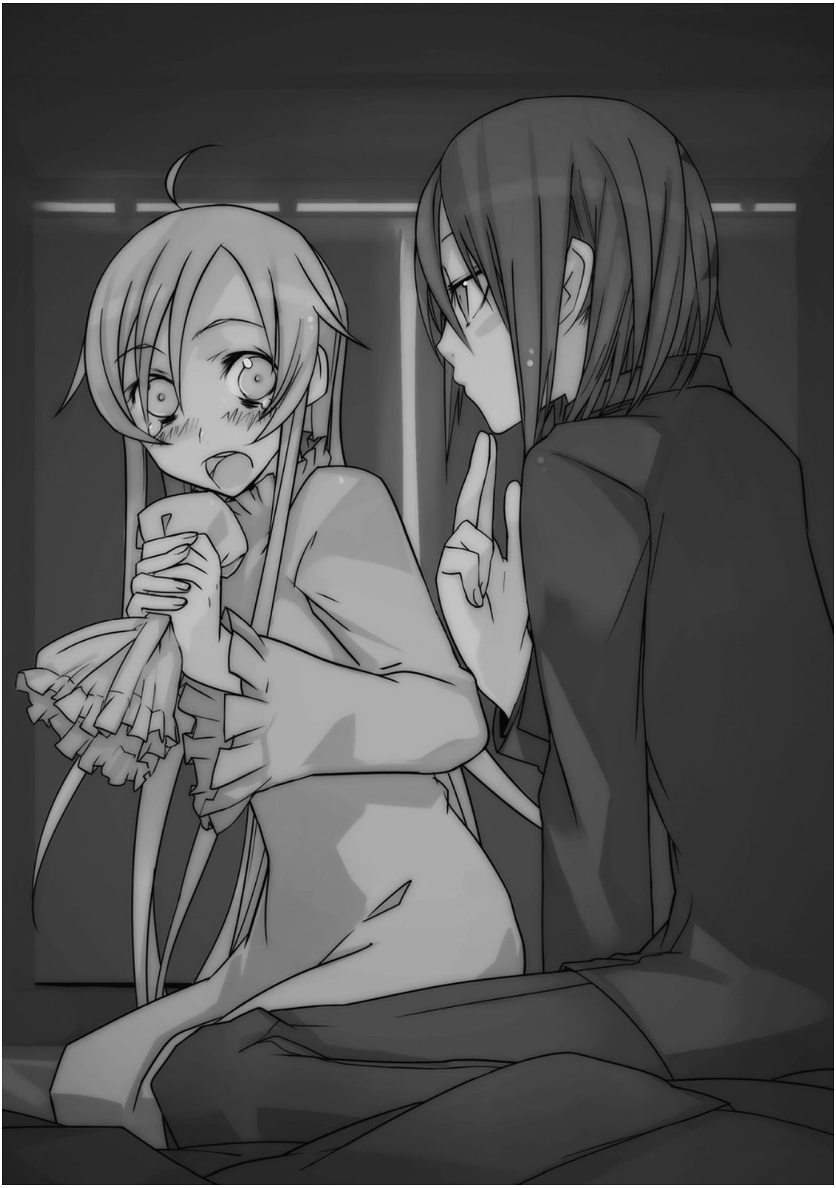
「どっち？」

「……わからない……んです」

　サフィニアはもう一度、小声で「わからないんです」と繰くりかえした。わからない。サフィニアがそう言う気持ちが、なんとなくわかるような気がする。マリアローズは、たぶん、少なくとも一いつ般ぱん的な意味でいう「恋こい」はしたことがない。きっとこういうものなんだろうとか、想像はできても、実体験がともなっていないから、どこかぼんやりしている。だから、わかる。

　わからないと言う、サフィニアのことが。

　その気持ちがなんなのか、説明できなくて。無理に規定してしまうのが、怖こわくて。これは恋だと言い切ってしまったら、後あと戻もどりできないかもしれない。それが怖い。



　だったら、今のまま、仲間のままで、いいんじゃないかって。

　おそらく、サフィニアはそう思っているのだろう。

「そっ……か。うん――」

　でも、結局のところ、僕にはわからない。

　それが寂さびしいことなのかどうかも、判断がつかない。

　ただ、サフィニアが胸の奥に押しこめようとしている思いが壊こわれてしまい、粉々になったその破は片へんで彼女が傷ついたら――僕も痛いだろう。

　そうならなければいいと思う。そうなって欲しくない。

　かといって、僕に何ができるだろう。たぶん、僕にできることなんて、たいしてない。

「だけど」

　空くう虚きよに響ひびくかもしれない、言葉をつむぐことくらいしか。

「どうなっても、さ――変わらないんじゃないかな。僕らが、その……仲間だってことは。だから、今は無理でも、いつか素す直なおにそう思えるときがきたら、そのときは……正直に、ありのままの気持ちを伝えたらいいと思うよ。なんて、僕が言うようなことじゃないけど」

「……そ、そんなこと……」

　サフィニアはまた転がって、こっちを向いて、上うわ目め遣づかいでマリアローズを見た。

　右手を、両手で、ぎゅっと握にぎられた。

「――そんなこと……ありません。ありがとう、ございます……すごく……勇気づけられました……」

「あ、あはは……そ、そう？　まあ、サフィニアにそう言ってもらえると、僕もほっとするっていうか」

「ま」

「ま？」

「ま、まっマリ……ア」サフィニアはそこでごくんと唾つばをのみこんで、今度ははっきりと「マリア」と発音した。「──って……呼びます。今度から」

　まだ手は握られたままだった。マリアローズは体の下した敷じきになっていた左手を、サフィニアの両手に重ねた。手を、つないだ。今なら、この手がはなれても、怖くない。はなれても、またつなげばいいんだ。

「うん。じゃ、とりあえず、トマトクンの寝ね込こみ、もっかい正式に襲おそっとく？」

「……ど、どうして、今の流れから、そんな話に……？」

「や。既き成せい事実をつくっておくのも、一つの手かなーとか」

「き、き、きっ既成、事実……」

　そのあと、二人で一階に下りて何をしたのか（サフィニアに何をさせたのか）については、下りたのかどうかをふくめて、誰だれにも言えない。

　こればかりは、仲間にも、ユリカにさえ、内ない緒しょだ。

Omenage 897 10th revolution 28th day

サンランド無統治王国ジェードリ・赤線地区
〝パンカロ家〟

chapter.10

ある朝

　━俺に言わせれば、と、パンカロ家のさして立派でもないリビングのソファで尻しりの位置を決めかねながら、ニーノ・パンカロは思う。ようするに、十年前におふくろが逝いってから、親おや父じは急に気が弱くなったんだ。

　だいたい、ベアフットの貧びん乏ぼう人にんどもに仕事を世話してやって、なんの得になる？

　当然、連中は這はいつくばってパンカロ・ファミリーに感謝するだろう。エンツォ・パンカロはベアフットでは今や英えい雄ゆう扱あつかいだ。数もかぞえられない餓が鬼きでさえ、エンツォの名は知っている。なかには、パパ・パンカロのためなら喜んで死ぬとかぬかすやつだっている。もちろん、信用はできないが。口ではなんとでも言えるのだ。つまり、こういうことだ。

　やつらは、いくらでも親父を褒ほめ称たたえ、崇あがめ奉たてまつることすらするだろう。べつに、それで損をするわけじゃない。だが、もし仮にこっちが「もうやーめた。お前ら、明日から自分の面めん倒どうは自分で見ろ」と言ったら？

　間ま違ちがいない。やつらはあっという間に掌てのひらを返す。必ずだ。エンツォ・パンカロはとんだ偽ぎ善ぜん者しやだったとかしましく叫さけび、所しよ詮せん、やつらは利己的なギャングなのだとそしる。実際、ファミリーがらみの仕事でへまをしてクビにされたあげく、「反パンカロ」を気どる馬ば鹿かがいる。親父は放ほうっておけという態度だが、頭が足りなくて血の気が多いチーロあたりがぶちきれて制裁を加えれば「口くち封ふうじだ」などと噂うわさが立つ。まったく、貧乏人のブタどもは始末が悪い。少し餌えさをやると、それが当然だと思いこみ、腹が減った、もっとよこせ、怠たい慢まんだと逆ギレする。いつ飼い主の手を嚙かむかもしれない、そんなブタどもを飼い馴ならしたところで、いったいなんの意味がある？　エンツォ・パンカロは、ブタに餌を与あたえて肥え太らせるために、ファミリーをここまで育てたのか？

　違うはずだ。

　ファミリーは、ファミリーのためにある。ファミリーの利益はすべてに優先する。ブタはブタでしかない。ブタはファミリーの一員とはなりえない。

親父は、おふくろが死んでから、変わった。

おふくろはベアフットの漁師の娘むすめで、若いころはとびきりの美人だったし、気立てのいい、やさしい女だったから、親父が惚ほれたのも無理はない。とても美男子とはいえない親父が、おふくろを射止めたことのほうが、むしろ不思議なくらいだ。おふくろなら、嫁よめのもらい手なんて、いくらでもいたはずだ。

しかも、よくできた女だった。おふくろは、赤線地区の一区画をとりしきる新興ギャング集団の頭という親父の商売について、一いつ切さい口を挟はさまなかった。ただひたすらよき妻であり、よき母親で、よき隣りん人じんで、よき友人だった。非の打ち所がない女だった。おかげで、ニーノたち息むす子こ三人は、そろって重度のマザコンだ。チーロはさらに重じゆう症しようのファザコンでもあるが、いずれにしても、兄弟全員おふくろのことが好きだった。愛していた。親父も、おふくろに惚れ抜ぬいていた。

だから、わかる。親父がショックだったのは、わかる。みんな、わかっている。

実際、いまだにパンカロ家では、命日以外、おふくろの話題は禁止だ。湿しめっぽくなるどころか、収拾がつかなくなるからだ。おふくろのことはできるだけ口に出さない。各人が思い出すだけにとどめておく。それがパンカロ家の、誰が言いだしたわけでもない、暗あん黙もくのルールだ。

しかし、おふくろが死んで以来、親父はベアフット地区に目を向けるようになった。タイミング的に、それは絶対に間違いない。そういえば、死ぬ前に、おふくろが親父に言った。「わたしは幸せです。あなたと一いつ緒しよになって。こどもにも恵めぐまれて。家族に愛されて、愛して。わたしは世界で一番の幸せ者です。ちょっと悪いと思うくらい。昔は貧しかったわ。父も、母も、生活するだけで一生懸けん命めいで。お友だちが何人も死んだわ。あの世では、あのこたちも幸せかしら。そうだといいと思うのよ。そうじゃないと、わたし困るわ。わたしだけこんなに幸せで。それくらい、わたし、幸せです」

あのときは、ニーノもさすがにもらい泣きした。あくまで、もらい泣きだ。何しろ、兄貴から、弟から、親父から、全員おいおい泣いているものだから、思わず涙るい腺せんがゆるんでしまった。ただし――でもな、おふくろ、と、内心で思った。その幸せのために、

親父もずいぶんあくどいことをやってきたからな。俺たちが幸せなぶん、不幸せなやつがいる。俺たちは、そいつらの幸せを奪うばって、自分たちのものにしてきたんだ。

　もっとも、俺はそのことを恥はじてはいない。世の中ってやつは、そういうものなんだ。誰かが損をして、誰かが得をする。勝者がいれば、敗者がいる。だとしたら、負けて損をするより、勝って得をしたほうがいいに決まっている。親父だってわかっているはずだ。何しろ、泣く子も黙だまるパンカロ・ファミリーを一代で築きあげたのは、親父なんだから。そう思っていた。

　それなのに、おふくろに逝ゆかれた途と端たん、親父は変節した。まず手始めに、ベアフットの餓鬼どもを集めて、赤線地区の掃そう除じをさせ、小こ遣づかいを渡わたした。そのなかで、よく働くやつを使い走りにしたり、つきあいのある船大工に紹しよう介かいしたりした。風ふう俗ぞく店てんの管理を厳しくして、あまりにどぎつい、やばいサービスはやめさせた。タチの悪い客は、どんどんぶん殴なぐって追いだした。本番行為のない、新しい形態の風俗店を提案したやつがいて、そいつの意見を採用した。売春を渋しぶるベアフットの貧しい女たちを、そこで次々と働かせた。これは悪くないアイディアだとニーノも思った。売るものといったらどうせ体しかないのに、ぐずぐずしている女どもをこっちの道に引き入れるためにも、いい手だ。で、がっぽりピンハネしてやれ──と思っていたら、手数料等によるファミリーの儲もうけは極力抑おさえられた。新風俗店の隆りゆう盛せいぶりを考えると、驚おどろくほど実入りが悪かった。ファミリーの紹介で何かの仕事をしたやつが問題を起こすと、その処理でまた金がかかった。

　ニーノは数字に強く、金の勘かん定じようが得意で、ファミリーの財務には深く関かかわっているから、痛感しているが──控ひかえめにいっても、苦労に見あうだけの利益は出ていない。感覚的には、マジで儲かってない。勝ち組で、人一倍得をしなければならないはずのファミリーが、いつの間にか損をしているのだ。我が慢まんがならない。

　それもこれも、親おや父じのせいだ。人によっては「改心した」なんて言葉を使うかもしれないが、ふざけるな。親父は弱くなっただけだ。昔の親父は、徹てつ底ていしていた。ファミリーの利益以外のことには、冷れい酷こく非情ですらあった。故郷が同じカレーナ自治州の者には同情的だったが、そういうやつはファミリーに加えた。とにかく、ファミリーがすべてだった。目の前で幼子が死に

かけていようと、若い哀あわれな女が物もの乞ごいしていようと、それがファミリーの一員かその身内でなければ、平然と無視した。かっこよかった。あの親父を尊敬していた。今はもう駄だ目めだ。親父は老いた。情に流されすぎている。あれだけ眼光鋭するどかった目が曇くもっている。おふくろが生きていれば、きっとこんなことにはならなかっただろうに。

だが、おそらく、親父自身も、そのことに気づいているのではないか。

親父は、そろそろ引き際ぎわを考えている。

それでいい。あとは俺がうまくやる。俺がもとのパンカロ・ファミリーに戻もどして、それからもっとでかくする。利益を出す。ガバガバ儲けてやる。親父の跡あとを継つぐのは、もちろん自分だとニーノは思っている。いくら親父が耄もう碌ろくしていたって、俺以外の誰だれかにファミリーを任せるはずはないじゃないか。何しろ、一番有能なのは、誰が見てもこのニーノ・パンカロだ。

たとえば、見るがいい。

リビングとつづきになっているダイニングで、朝っぱらから分厚いステーキを貪むさぼり食っている、チーロ・パンカロを。

やつときたら、もともとはおふくろに一番似ていて愛らしかったのに、成長するごとにどんどんごつくなって、今では麦むぎ藁わら色の髪かみの毛や、青い目や、こどもっぽい笑い方にかろうじて当時の面おも影かげが見いだせる程度だ。見た目どおり、とにかく腕わん力りよくだけが取り柄えで、笑えるくらい頭は弱い。餓が鬼きのころは「まったくお前は馬ば鹿かだなあ。あっはっはっは」ですんでいたが、二十三ともなれば、シャレにならないこともある。カレーナ人の荒あらっぽい気質を色いろ濃こく受け継いでいるのか、ちょっとした喧けん嘩かでも容よう赦しゃなく相手を半殺し（たまに全殺し）にするので、手に負えない。唯ゆい一いつの救いは、自分でもそれをわかっていることだ。だから、当然、自分が親父の跡を継ぐなんて考えもしないだろう。自他共に認める資格外ということだ。

そして、ニーノのはす向かいのソファにお行ぎよう儀ぎよく腰こしかけ、インテリぶっているつもりか、本なんぞ読んでいる、ウーゴ・パンカロ。

ニーノにとっては、こいつも眼中にない。だいたい、親父そっくりの凶きよう相そうをひっさげて、やれピアノだ、絵だ、彫ちよう刻こくだ、壺つぼだと、まるで似合わないし、滑こつ稽けいなことはなはだしい。しかも、やつは中年太りを警けい戒かいして、酒やら脂あぶら物ものを控え、ダイエットまでしているようだ。阿あ呆ほうめ。太るのは、親父の意見に追従することしか知らず、自分で動くのが嫌きらいで、部屋のなかでちゃらちゃら鍵けん盤ばんばかり叩たたいているからではないか。実際、チーロはそういう次元ではないから別としても、ニーノも、親父も、おふくろも、誰も太っていない。ふつうにしていれば、無む駄だな贅ぜい肉にくに悩なやまされるような家系ではないのだ。ようするに、ウーゴはふつうではない。下だ。下の下だ。名うてのギャングの長男が、四流以下の芸術家気どりで、ダイエット中なんて、まったく笑わせてくれる。いや、笑えない。笑い話どころか、恥はじだ。これまた親父譲ゆずりの黒髪を肩かたまでのばし、男色の気があるらしいとの噂うわさもあるこの男は、パンカロ・ファミリーの汚お点てんだ。

よって、自動的に、跡あと目めはニーノ・パンカロに転がりこむ。否。ニーノがやらずして、誰がやる。パンカロ・ファミリーの将来を背負しよって立つことのできる人材が、他ほかにいるだろうか？

いない。いるはずがない。

──というのがニーノの結論だが、どうもそう考えない馬鹿もいるようだ。

ニーノはおふくろが愛してやまなかったパンカロ家のリビングを見まわした。親父が赤線地区の外れにこの家を建てたのは、二十二年前のことだ。当時はまだ、マンフレッド一家が赤線地区の過半を支配していて、パンカロ・ファミリーはやつらに挑いどむ勢力の一つでしかなかった。だから、この家も、庭は別だが、今のファミリーの規模を考えれば、いかにも小さくて、質素で、古くさい。だが、他のことではけっして親父に異を唱えなかったおふくろが、この家についてはかたくなだった。おふくろは、家族がーいつ緒しよにすごしたこの家から出たくないと言い張った。何度か引っ越しや建て替かえを提案した親父も、そのうちあきらめた。おふくろが死んでからは、この家から出るなんて話題はタブーになった。なんだか、こんなことを思い出していると涙るい腺せんがやばくなりそうだが、とにかく、そういう家だ。ここはそういうリビングなのだ。

まあ、ダイニングの奥のキッチンで立ち働いているエヴェリーナは、べつにいい。彼女には、おふくろの具合が悪くなって以来、家事をやってもらっているし、女だてらにファミリーに入る儀ぎ式しきをすませていて、もう五十三だが、暴漢くらいは包丁をナイフみたいに使って楽々と退治してみせる。そんな剛ごうの者ものでもある。何より、死んだおふくろの親友でもあった女だから、信しん頼らいできる。

それから、チーロの隣となりの席で、オレンジジュースをちびちび飲んでいる白しら髭ひげ白はく髪はつのジョゼッペ・ザンニーニも、親父の幼おさな馴な染じみで義兄弟だし、ニーノたちにとっては伯お父じみたいなものなので、問題はない。かつては〝闘とう鬼き〟と呼ばれた男も、今は一線を退いて、親父の個人的な相談係みたいなものだ。もう六十五になるか。このじいさんが、殺しと拷ごう問もんのエキスパートだったとは、おそらく誰も思わないだろう。

だがしかし、やつがこのリビングにいることについては、なんとしても認められない。

──カルロ・ボッシ。

やつは、リビングのドアの横にカカシみたいに突っ立ったまま、微び動どうだにしない。相変わらず物ぶつ騒そうな目つきで、不景気な面ツラつきだ。容易に見せない腹の底で、いったい何を企たくらんでいるのか。十何年か前に初めて見たときから、あの反はん抗こう的な目と態度が、ニーノは気にくわなかった。

それでいて、ニーノが無理難題をふっかけても、カルロは文句一つ言わず、黙だまって頭を下げてみせる。いろいろ探さぐってみたが、陰かげで何かブツクサ言っているという証しよう拠こもつかめなかった。かわいげがないのだ。そこがあやしい。あやしすぎる。手下どもに、やたらと慕したわれているのも気味が悪い。チーロの馬鹿までカルロのことをたまに「兄貴、兄貴」と呼んでいる始末で、実じつ兄けいとしては面めん目ぼく丸まる潰つぶれとまではいかないが、やはりおもしろくはない。

何より、カルロは親おや父じにやたらと気に入られている。

おおかた、やつがここにいるのも、親父の指図なのだろう。だが、図ずう々ずうしい。いったいやつは、どういうつもりでここに

いるのか。若わか頭がしらなどと称しようされて、自分が重要人物だなどと思っているのだとしたら、それは大いなる勘かん違ちがいだ。パンカロ・ファミリーには、短いものの、歴史がある。エヴェリーナやジョゼッペはその歴史に多大な貢こう献けんをしているが、やつは脇わき役やく中の脇役でしかない。ここにいていい人間ではないのだ。それくらいわからないのか。わざわざ言わないといけないのか。遠えん慮りよというものを知らないのか。

「カルロ」

「はい」

「お前は外に出ていろ。親父がもうすぐくる。大事な話をするときに、お前は邪じや魔まだ」

「私も出席するよう、親父に言われていますので」

「俺の命令は聞けないってのか」

「申し訳ありません。親父の命令には背そむけません」

　何が、申し訳ありません、だ。さすがにニーノに向きなおって返事はしたものの、謝っているような顔ではない。

「親父、親父、親父、か。ふん。たいした忠誠心だ。だがな、パンカロ・ファミリーと親父はイコールじゃない。ファミリーと親父、どちらか一つを選ばなけりゃならんとしたら、お前はどっちをとる」

「私にとっては、ファミリーと親父はイコールです」

「それが違うと言っているんだ。親父だって、いつまでも生きていられるわけじゃない。だが、ファミリーは生きつづける。生きつづけさせなけりゃならん」

「おい、待てよ」

　かしゃん、と食器が鳴った。

　口を挟はさんできたチーロの唇くちびるは、ステーキの脂あぶらでぬらぬらしていた。

「今のは聞き捨てならねーな。親父がいつまでも生きてられるわけじゃねーって、それ、どういう意味だよ」

「どういう意味もこういう意味もない。どんな人間だって、いつかは年をとって死ぬ。親父が俺たちより先に死ぬのは、ごく自然なことだ。だったら、当然、そのあとのことも考えておかなけりゃならんだろうが」

「アホか。親父はまだまだ死なねーっつーの。死ぬっつったら、ニーノ、てめえのほうがよっぽど体弱よえぇーべ。毎年毎年季節の変わり目ごとに風か邪ぜひきやがってよう。風邪こじらしてさっさとおっ死ちんじまえ、バーカ」

「お前に馬ば鹿か呼ばわりされたくない！　だいたい、馬鹿だから風邪をひかないお前を基準に考えるな！　それに、体が弱いといえば、俺よりも断然ウーゴだろう！　牛や馬みたいに野菜ばかり食って、健康になるどころか顔色も悪いし、夜もよく寝ねられんとか言ってそこらじゅううろうろして、うるさくてかなわん！」

「……わ、私は、どこも悪いところなどない。体の調子はすこぶるいいし、夜寝られなかったのは、この間たまたまそういうことがあっただけで……」

「どーだかなあ。いや、ニーノの肩かた持つわけじゃねーけど、実際、ウーゴはやべえよ。ていうか、老ふけたよな。三十八だべ、ウーゴ。や一見えないね。十は上に見えるね。正直、オレらと兄弟ってより、親父の弟っつったほうがシックリくるね。マジで」

「いくらなんでも、それはひどい！　私は摂せつ生せいしている！　私のライフスタイルは、きわめて健康的だ！　お前たちこそ、自由気ままに飲み食いして暴れまわって、そのうち一気に老けこむぞ！」

「ハッ、エンツォ・パンカロの長男がよお！　ケンコーがどうとか、ライフラインがどうしたとか言ってんじゃねーよ！　暴飲暴食結構！　喧けん嘩か上等！　殺人最高！　ウーゴ、てめえのぶきっちょピアノで相手の息の根止められんのかぁ？　ああ？」

「ピアノは無ぶ粋すいきわまりない武器ではなく、音楽だ！　美だ！　芸術だ！　芸術を解さないお前のような野や蛮ばん人じんとは口もききたくない！　汚けがらわしい！」

「ふん。チーロはたしかに野蛮人だが──あのガタガタビョンビョンズンタッタが、何？　芸術だと？　俺にはそうは思えんな。あくまでそう言い張るのは、芸術とやらに対する侮ぶ辱じよくになるんじゃないのか？」

「に、ニーノォォ……貴様もかっ！　どうして私の兄弟はそろいもそろってこう無神経で野や暮ぼの阿あ呆ほうばかりなのだ！　ああ、私は不幸だ！　お前たちなど……お前たちなど……死にフアツくされクユー、くそっフアたれツク、くそフアやろうツク！」

「おお、お上品な芸術家殿どのが、ずいぶんとまた汚きたない言葉を並べ立てるものだ」

「ウワベだけなんだろ。所しよ詮せん、オレらと同じ血ィ引いてんだしよう。そんなに変わるわけねーって。ぎゃははは」

「……ウーゴはどうか知らんが、少なくともお前と俺はまったく違うと断言できるぞ。とりあえず、知能程度が天と地ほども違う。小鳥並みの脳しか持たんお前と同列に語られるのは、俺の人間としての尊厳に関かかわる。それに、俺はお前のように女たちを失望させたりはしない」

「おっとぉ──そっちかよ。そうきたか。そいつぁさすがにカチンときちまったぞ？　やんのか、こら？　ていうか、てめえ、ここ何年か、オレから逃にげまわってやがるよな？　ガキのころはさんざんいじめやがったくせに、オレがでかくなったもんだから、怖こわくて腰こしがひけてんだろ？」

「ああ？　怖いィィ……？」

　チーロはカチンときたらしいが、こっちはプチンときた。ニーノは猛もう然ぜんとソファから立ちあがった。同時に懐ふところからナイフを抜ぬくのを忘れない。もちろん、ぜんぜん怖くなどないが、チビだったチーロが気持ち悪いくらいよく育ったのは事実だ。ウーゴがたしか一七五サンチで、ニーノは一七九サンチ、チーロは一九〇以上あるだろう。体重もかなりある。そんなやつを素す手でで相手にするのは、厄やつ介かいとはいわないまでも、面めん倒どうだ──なんて、冷静な判断をしたわけでは、じつはない。

　単に習い性しようなのだ。ニーノは昔から切るのが好きだった。いつ初めてナイフを握にぎったのか覚えてはいないが、物心がつい

たときから解かい剖ぼうが趣しゅ味みだった。小動物からでかい動物から人間まで、そうとう切り刻んだ。じつにいろいろなものを切り刻んできた。この趣味が異常だということはちゃんと認にん識しきしているので、このごろは魚をさばいて衝しよう動どうをまぎらしているが、チャンスがあれば解剖したい。やれると思ってしまったら、口がカラカラに乾かわいて動どう悸きがして眼球が飛びだしそうになって我が慢まんできなくなる。皮ひ膚ふをすうっと切って脂し肪ぼうや筋肉をすっすっと引き裂さいて血管をぷつっと切断する感覚が蘇よみがえり、それを再現したくてたまらなくなる。

　たとえ、相手が弟でもだ。

　というか、チーロの体はさぞかし解剖のしがいがありそうじゃないか。

「──誰だれが、誰を怖がってるってんだァ！　ああ！　チーロォォォ！　言ってみろ、お兄ちゃんにィィィもう一度ォォォはっきりとォォォォ言ってみやがれェェェッ……！」

「何度でも言ってやらァ！　ニーノ、てめえはオレが怖こええんだ！　へっ、ナイフなんか持ちだしてよう、弟とやるのにそんなもん使おうってのが腰こし抜ぬけの証しよう拠こだってんだよ！」

「ハハハァァッ！　お前こそお兄ちゃんが怖いんだろうッ！　ナイフ持ったお兄ちゃんが怖くてションベンちびりそうなんだろうがァァッ！」

「怖いもんかよ！　よっしゃあっ！　じゃあ、こいや！　かかってこい！　おら！　きてみやがれ……！」

　チーロは素早くジャケットを脱ぬいで右みぎ腕うでにぐるぐる巻き、ダイニングテーブルの上にダンッと飛び乗った。テーブルの上には、食器だのなんだの、蹴け飛とばして牽けん制せいに使えそうな物がたくさんある。馬鹿だが、場数を踏ふんでいるだけあって、さすがに喧嘩の勘かんは悪くない。だが、経験ならニーノとて劣おとるものではないし、数年前までこの程度の諍いさかいはしょっちゅうで、兄の貫かん禄ろくを見せつけて全勝、しかも圧勝だった。ガタイがよくなっただけで、あの差が縮まったと考えているなら、大おお間ま違ちがいだ。

　今から、それを思い知らせてやる。

　ここにいあわせている連中は心得たものだから、その気配が満ちると、それぞれ邪じや魔まにならないように、さっさと隅すみのほうやキッチンの奥に逃げた。

　久しぶりだ。

　手加減などしてやらん。

　ぶち殺す。

「シィィィッ……！」ニーノは床ゆかを這はう寸前のような低い体勢で駆かけだした。ソファなどの障害物を回りこんでダイニングに飛びこむ間ま際ぎわだった。食いかけのステーキと肉にく汁じゆうをまきちらしながら、皿が襲おそいかかってきた。ニーノは、だが、それは予想していた。立てつづけに、フォークとナイフ、コショウの瓶びん。それから、ジョゼッペが飲んでいたオレンジジュースのコップ。陶とう器きだの硝子ガラスだのの破は片へんやオレンジジュースは甘んじて浴びた。汚よごれても、切り傷ができてもかまわない。ニーノはけっして目を閉じない。でかい物体は首をひねってかわし、直進。とにかく、突とつ進しん。「──ヌゥェッ！」そして、テーブルの上にいるチーロの足に向かって、素早くナイフを突つきだす。「シネェッ！」振ふりまわす。「ラァッ……！」再び突く。かわされる。馬ば鹿かめ。馬鹿チーロ。余よ裕ゆうこいて、見切ったつもりで、ひらひら踊おどるような身のこなしでかわしてみせるなんて、武芸者にでもなったつもりか。誰がそんなことを教えた。どうやって覚えた。お兄ちゃんは教えたはずだ。喧嘩は汚く、乱暴に、大おお袈げ裟さに、暴れて、暴れまくって、相手を圧あつ倒とうする。こんなふうに！　──と、ニーノはいきなりダイニングテーブルの下にもぐりこんだ。一気に持ちあげて、ひっくり返してやった。「ダッシャァァァァッ……！」「──うおおあっ」ガシャン。ドガシャガラガシャギシャン。テーブルは一部窓に激突して、窓硝子も割れた。ちょっと投げすぎたか？　おかげで、テーブルは三分の一くらい窓から突きだし、そこにもたれかかる恰かつ好こうになって、完全に転てん覆ぷくはしなかった。チーロはテーブルの下した敷じきにはならなかったということだ。当然、やつはすぐに転がるようにして飛びだしてきた。額やら頬ほおやらにでかい硝子のかけらが突き刺さっていて、血まみれだったが、元気なものだった。

「──てめえ、死んだらどうすんだ、こらぁ！」

「ハナから殺す気だ、ボケェッ！」

「てめえが死ねや……！」

　チーロが猪ちよ突とつ気味に突っかかってくる。ニーノは待たずに、右みぎ斜ななめ前に体を捌さばいて、ナイフは出さない。チーロが急に体を沈しずめて、足あし払ばらいに転じてきたからだ。猪ちよ口こオざいな。そういう小こ賢ざかしい技わざは、自分が達人級の使い手か、相手がよっぽどの素人しろうとでないと通じない。そんなことは餓が鬼きのころからさんざん体に教えこんできたってのに、まったく、しょうもねえ弟だ。お兄ちゃんは悲しい。情けない。恥はずかしくて、弟なんて呼びたくない。きっと、おふくろも草くさ葉ばの陰かげで泣いている。だから、さっさと俺に殺されて、あの世でおふくろにわびてこい──とばかりに、ニーノはその場で跳ちよう躍やくして、チーロの横っ面つらに右の回し蹴げりをぶちこんだ。

　かなりクリーンにヒットした。

　いいかんじで脳が揺ゆれたはずだ。

　チーロの目がイッている。

　ふらつく。

　やつは、倒たおれる。

「ハハハァッ！　死ねェェィ……！」ニーノは着地するなり、舌で唇くちびるを舐なめてナイフを突きだした。狙ねらうは、右の眼球だ。そこから脳をえぐって、ちゃんと殺してやる。弟だから、解かい剖ぼうはそれからにしてやる。ニーノは久々の快感が五ご臓ぞう六ろつ腑ぷにしみわたる喜びに興奮しつつ、ナイフを握にぎる手にさらなる力を送りこんだ。チーロ！　親おや父じより先に死ぬとは、親不孝者め！　結局、お前はどうしようもないやつだと決めつけるのは──だが、まだ早いようだった。

　チーロの目が生き返った。

　一時は間違いなく完全にグロッキーだったのに、完全に覚かく醒せいしていた。

　やつは、動いた。しっかりした動作だった。倒れこみながら、両

手で、左右から、ニーノが突きだしたナイフを──掌てのひらで、だった。

　挟はさんだ。

　がっちりと挟みこんで、「ぎゃは」と笑ってみせやがった。

「甘あめえよ、兄貴」

　次の瞬しゆん間かん、ズドン、ときた。

「──か……はぁっ……」

　強きよう烈れつに重かった。すごい重量の何かを腹に叩たたきこまれた。それがチーロの前蹴りだと気づく前に、ニーノは本能に従って左後方に身を投げだした。チーロが立ちあがって繰くりだしてきた回し蹴りを、なんとかそれでよけることができたらしい。だが、そのあとがつづかない。くそ。なんて、重い──いい蹴りを持ってやがるんだ。チーロめ。チーロのくせに。弟のくせに。お兄ちゃんだぞ。そうだ。兄だ。兄の俺が、弟に負けられるか。「──あぁフアァッ……！」ニーノは白目を剝むいたまま、おのれの手同然のナイフを闇やみ雲くもに振りまわし、たぶん、チーロを少しだけ遠ざけることに成功した。それから、愛するナイフを、自分の右みぎ腿ももに突き立てた。アハ。痛いてえ。しかし──これで、目が覚めた。シャキーン。ニーノは反動をつけて跳とび起き、刃はについたみずからの血を舐めた。鉄っぽい味がした。

「……さあて、準備運動は終わりだ。ここからは真しん剣けん勝負といくか、チーロ」

「そんじゃあ、お互たがい手加減なし、恨うらみっこなしってことで。死んでも化けて出てくんなよ、兄貴」

「なんだったら、お前は化けて出てきてもいいぞ。幽ゆう霊れいを解剖できるか、一度試ためしてみたい」

「ぎゃははは。んなもの、自分で試せっつーの」

「残念だが、そいつは無理だ。死ぬのはお前だからな」

「まー今のうちに、せいぜいでかい口たたいとけばいーんじゃね？　すぐにしゃべれなくなるん──だ……」と、そこでチーロの顔

色が変わった。目が泳いでいる。というか、ニーノではなく、ニーノの後ろに視線を向けている。ニーノはつられて振り向こうとしたが、できなかった。その前に、何者かの手によって襟えり首くびをつかまれた。「……ぐおっ！」すごい力だった。ニーノの体が浮ういた。持ちあげられて、吹ふっ飛ばされるように前進した。迫せまってくる。チーロが。チーロの顔面が！　どんどんどんどん近づいてくる……！　「よ、よけ──」ろよ。馬ば鹿か。チーロめ。なぜよけない？　だが、それは無理な相談だった。よけたら、さらにレベルが上の制裁が待っている。経験上、そのことを悟さとったニーノが、目をつぶった瞬間、ガツンと激突した。気がつくと、ニーノは床ゆかにうずくまって額を押さえていて、隣となりには同じようなざまで呻うめいているチーロがいた。

「馬鹿者どもが」

　それから、二人して仲よく脇わき腹ばらを蹴り上げられ、ゲーゲー吐はいた。恐おそろしく効果的なキックだった。痛くて、つらくて、泣けてくるが、まあ死にはしない。死なないが、死を身近に感じる。ああ、これ以上逆らったら、あっさり殺されるんだと思わざるをえない。暴力の効能を知り抜ぬいているのだ。

　──親父。

　ガウン姿のエンツォ・パンカロは、とびきりの悪相をゆがめて、古傷が痛むのだろう、左足をかすかにぶらぶらさせた。

「ニーノ、チーロ！　この脳のう髄ずい腐くされの屑くず虫むしどもめ！　この有様では話もできんだろうが！　いつまでも寝ね転ころんどらんで、さっさと起きて片づけろ！」

「……は、はい」「……ごめんなさい……」

「まったく、こんなときに──昨夜ゆうべの火付けアカウマも生きてはつかまえられず、相手の動機も目もく論ろ見みもさっぱりわからんのだぞ！　店の復旧！　女や従業員たちの保障！　調査シラベ！　警備マワリ！　当然、仕返しアイサツも打たねばならん！　やることはいくらでもある！　それが、朝っぱらから兄弟きょうだい喧げん嘩かとは何事だ！　恥はじを知れ！　いったい、誰だれに似たのか……」

　少なくとも、おふくろ似じゃないことは間違いない──と思った

が、もちろんニーノは黙だまっていた。親父に面と向かって何か言えるのは、古いつきあいのジョゼッペか、ド・ジョーカーか。あとは、いまいましいことだが、カルロ・ボッシ。今、無言でニーノを助け起こそうとしているこの野や郎ろうは、なんの権利があってか、生意気にも、たまに親父に意見しやがる。

　ニーノはカルロの手を振ふり払はらって、自力で立ちあがった。

　気にくわん。

　俺は、こいつが、心底嫌きらいだ。

Omenage 897 10th revolution 28th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ベアフット地区

〝集会場〟

chapter.II

世界の正しい救済法

朝方、赤線地区を駆かけずり回っての火付けアカウマ捜さがしからようやく解放されて、とりあえず午後まではオフということになった。

でも、状じよう況きようからして、これからめちゃくちゃ忙いそがしくなりそうだ。だから、へとへとの体を引きずって家に帰って、なんか食って、とにかく寝ねて。こういうときは、赤線の女なんかとつきあっているやつがうらやましくなる。俺なんて、家に帰ったところで、母ちゃんも仕事に出てるだろうし、一人きりだ。飯も、自分で用意しないとならない。女がいれば、と、ハーヴェイは思う。「おかえりなさい」なんて迎むかえられて、あったかい飯を食って、一発かまして、ぬくぬく寝る。たまに一いつ緒しよに出かけて、バルモアで買い物なんかして。そんな暮らしがハーヴェイの夢だ。まあ、でも、女ならなんでもいいってわけじゃなくて。真ま面じ目めな女がいい。こどもの面めん倒どうをよく見てくれて、料理が上手な女がいい。顔には、そんなにこだわらない。美人じゃなくても、俺がかわいいと思えればいい。早くファミリーに入れてもらって、そんな女と一緒になって、できれば母ちゃんにも楽をさせてやりたい。

—なんか、ささやかだよな、俺の夢。ちっぽけだよな。高望みなんかしてねえよな。これくらいなら、きっとなんとかなるよな……？

俺、まだ十七だし。これまでより、これからのほうが長いはずだし。喧嘩だって、そんなに弱くないし。顔だって、べつに不細工じゃないし。飽あきっぽくて、ちょっとこらえ性しようがないかもしれないけど、その欠点は自分でもわかってる。なんとかしようと思ってる。仕事も、職人なんかはたぶん向かないから、パンカロ・ファミリーの世話になってる。やれと言われたことは、だいたいきっちりやってる。たまに怒おこられることもあるけど、そんなに頻ひん繁ぱんじゃない。俺より年が上なのに無能なやつもいるし。評判は、そんなに悪くないはずだ。おそらく、「わりと真面目なやつだ」とか思われてる。前、イビツさんたちに風ふう俗ぞくに誘さそわれたときも、断ったし。俺、好きなこいるんで、とか、マジで言っちゃって。笑われたけど、「ええ若いモンが、今どき硬こう派はは流行はやらんで、ジブン。まあええ。その節、ファミリーにも通してくれるんやったら、ええ兵隊になるわ」と肩かたを叩たたかれた。少し後こう悔かいしたけど、虚きよ勢せいを張ったわけじゃ

ない。やっぱり、俺にはできない。好きでもない女は抱だけない。まあ、女を抱いたことなんてないけど。だからこそ余計に、守らなきゃならないものがあるっていうか──そう、思ってた。

　俺、よっぽど疲つかれてたのかな。

　目の前には女の背中がある。裸はだかだ。女は眠ねむっている。知らない女ではない。何度か、この女が働いている店の警備マワリをした。一度、仕事が終わった女に、飲みに行かないかと誘われた。何人かで飲みに行って、何なん杯ばいか飲んで、それっきりだった。昨夜、放火された店のうち一いつ軒けんが、この女が在ざい籍せきしていた〝もっとテイー私にチミー教えてモア〟だったのだ。

　チーロ・パンカロに解散を告げられたあと、帰りしなに、道の端はしでへたりこんでいる女を見かけた。

　女は泣いている様子で、煤すすで汚よごれていて、手足に少し火傷やけども負っていた。

　放ほうってはおけなかった。声をかけた。表参道の近くにある、女の部屋まで送る羽目になった。店の同どう僚りようと二人で住んでいたらしく、結構いい部屋だった。水道も、湯ゆ沸わかし器もあり、広くて、きれいな風ふ呂ろがあった。女は自力では歩くこともできない状態で、仕方なく、ハーヴェイは汚れた服を脱ぬがせて、風呂に押しこんだ。

　あのとき、帰ればよかったのに。

　だが、ハーヴェイは部屋にとどまった。女が風呂から出てくるまで、戸と棚だなにあった酒を勝手に飲んでいた。やがて、女が出てきて、ハーヴェイの隣となりに座ってつぶやいた。「メアリーが死んじゃった」と。

　メアリーなんて、ハーヴェイは知らなかった。

　ただ、ニーシャなら、知っていた。

　以前、飲みに行ったとき、女は店での名前を名乗った。パーシャ、と。一対一はなんだからと、ハーヴェイが同僚に声をかけたものだから、パーシャも他ほかの女を連れてくることになった。それがニーシャだった。ニーシャはパーシャの同居人だった。ニー

シャの本名はメアリーで、年はパーシャより二つ上で、姉みたいなものだったらしい。パーシャの本名は知らない。たぶん、聞いていない。聞いたかもしれないが、覚えていない。

　パーシャは瘦やせていた。でも、やわらかかった。ハーヴェイは、なんだか操あやつられるようにして、けれども、熱っぽく、欲望をたぎらせて、パーシャを抱いた。あのときは、それが正しいことのように思えた。これ以上の善行はないと確信してさえいた。

　今はわからない。

　でも、それが終わって、少しの間、抱きあっていたけれど、パーシャはすぐに体を離はなして、ハーヴェイに背中を向けた。二人の間にできた隙すき間まが、結局、真実なのかもしれない。

　俺は、弱みにつけこんで、パーシャとやって。

　パーシャは、悲しくて、つらくて、それをごまかすために、俺とやって。

　たぶん、それだけだ。それ以上でもそれ以下でもない。少なくとも、正しいことなんかじゃない。それどころか、きっと━間ま違ちがいだ。だから、思い出される快感だけが宙に浮ういていて、俺は言い訳しなきゃならないような気がしてる。何か悪さをしたあとみたいに。

「俺、帰るよ」

　ハーヴェイは一応、そう告げて部屋を出てきたが、パーシャは眠ったふりをしていた。おそらく、ふりだったと思うが、いっそありがたかった。できれば、このことは忘れてしまいたい。なかったことにしたい。二人とも黙だまっていれば、何もなかったことになるのではないか。暗あん黙もくの了りよう解かいめいたものが、そこにはあったような気がする。ハーヴェイは、しかし、それもふくめて、ぜんぶ忘れてしまいたかったのだ。寝よう。寝ちまおう。悪いけど、今日は仕事を休もう。最低でも丸一日は眠ろう。そんなことばかり考えながら帰り道を急いで、ぼろい家に駆かけこみ、習慣で「ただいま」と言いながら、ドアを閉めた。

　静かだった。

　予想に反して、人がいたのに。

　そこに、人がいるのに。

「……母ちゃん？」

　呼んだところで、返事をしてくれそうもないことはわかっていた。

　だって、倒たおれている。

　おそらく、そろそろ仕事に出ようとしていたのだろう。外出着で、ストールを頭にかぶっていた。うつぶせだった。ぴくりとも動かない。もう動いていない。もともと体は丈じよう夫ぶじゃなかった。とくに心臓が弱かった。ただ、気は強かった。女を作って出て行った父ちゃんを「あのロクデナシ」とけなし、「あたしがやらなきゃ誰だれがやるのさ」といつも息巻いていた。女手一つで息むす子こを育てるために、網あみを編んだり、干ひ物ものなんかの加工食品をつくる、安い仕事を精せい一いっ杯ぱいこなしていた。多少具合が悪くても休んだりしなかった。まだ三十八歳だった。

　──なあ、母ちゃんの三十八年って、どうだった？　楽しかった？　いいことたくさんあった？　最さい期ごは苦しくなかった……？

　きっと、苦しかったよな。そんな顔、してるもんな。

　──どうすりゃいいのかな、とか、考えながら外に出て、ローラの家に向かいかけたが、パーシャの感かん触しよくを思い出した。

　今、ステラとは顔をあわせたくなかった。ステラなら、きっと同情してくれて、あれこれ世話を焼いてくれるだろう。べつに、俺のことなんか好きじゃないかもしれないけど、近所で、母ちゃんのことも知ってるし、長いつきあいだし、たぶん、慰なぐさめてくれる。そういう女だ。それがわかっているから、余計にステラには頼たよりたくなかった。

　だって、ステラにやさしくしてもらう資格なんて、俺にはない。好きだったんだけどな。本気だったんだけどな。それなのに、水商売の女とやって。しかも、そんなことやってる間に、母ちゃんが死

んじまって。俺って──アホだ。ひどいやつだ。なんて罪深いんだ。

　俺、死ぬべきじゃねえ？　死んで母ちゃんにわびたほうがよくねえ？

　そんなことを思いながらも、時折、ちらりと、パーシャの部屋に戻もどろう、とか考えてしまう。もう、どうせ、ダメだから──なんだかよくわからないけど、たぶん、ダメだから、逃にげたい。どこかに行きたい。死んだ母ちゃんをどうすればいいとか、頭を悩なやませたくない。

　だいたい、すっげー疲つかれてんだよな、俺。徹てつ夜や明けだし。昨日だって、そんなに寝ねてないし。なんでだよ？　こんなときにかぎって、なんでこうなるんだよ？　俺のせいか？　俺が悪いのかよ？　俺が、罪深いから？　なんで母ちゃんみたいな善良な女が、あんなに苦労して、呆あっ気けなく、でも苦しんで死ぬんだよ？　やっぱり、罪深いから？

　初めて集会場を訪おとずれたのは、二巡じゅん月げつくらい前だった。最初は母ちゃんに誘さそわれて、半分無理やり連れてこられた。なんでも、ずいぶん前に、祭さい壇だんを持ちこんで寺院を開業しようとした連中が建てたらしく、外見は一階建てだが、深く掘ほり下げた大きなホールがあった。そこに集められたベアフットの住民たちが、愚ぐ痴ちを言いあったり、悩み相談をしたり──なんか変だな、というのが第一印象だった。食い物や飲み物が用意されていて、そんなに豪ごう勢せいではなかったけれど、量は十分だった。ここいらでは見かけない男たちが、数人か、十人くらい交じっていた。

　何これ、と母ちゃんに訊きいた。集会よ、あたしもアサコさんに誘われて、と母ちゃんは答えた。アサコさんは母ちゃんの同どう僚りようだった。ただで飲み食いできて、仕事や近所づきあいとは関係のない人と話をするのは、ストレス解消になると母ちゃんは言った。ここで友だちもできた、とも言っていた。まあ、母ちゃんもたいへんだしな。いいんじゃねーの、くらいに思った。性別年ねん齢れい問わず、いろんな連中が集まっていたから、ハーヴェイも話があいそうなやつと適当に談だん笑しようして、それなりに楽しかった。でも、誰が、なんの目的で、こんなことを……？

　奇き妙みようだった。明らかに、地元の人間じゃない若い男をつかまえて、集会って何、と尋たずねた。なんとなく、はぐらかされ

るんだろうなと思っていたが、男は、ハーヴェイが拍ひよう子し抜ぬけするくらい、堂々と教えてくれた。僕らは世界を救うために活動しているんです。その趣しゆ旨しをたくさんの方々に理解していただくため、各地でこのような集まりを主しゆ催さいしています。

　──世界を、救う？

　馬ば鹿かげていると思ったし、そのとおり言ってやったが、パオロと名乗った若い男は、気分を害した様子もなかった。そう思われるのも無理はありません。僕らも、すぐに皆みなさんにわかっていただけるとは考えていません。時間はかかるでしょう。でも、きっといつか、わかっていただけるはずだと信じています。だって、実際、世界は、病やんでいるのですから。罪はいたるところにこびりついています。ちゃんと目を開けさえすれば、僕らにはそれが見えるのです。

　パオロは変なやつだった。でも、パオロの青い目はいやに澄すんでいた。誰かを騙だまくらかそうとしているやつの目じゃなかった。それに、ぱさついた金きん髪ぱつや素そ朴ぼくな顔立ちが好感を持てた。リクみたいに、非常識なほど整った顔をしている男は、それだけで信用に値あたいしないとハーヴェイは思う。その点、パオロはふつうすぎるほどふつうだった。しゃべり方も穏おだやかで、丁てい寧ねいで、でも、なよなよしていなくて、しっかりしたやつなんだと思えた。パオロは、ハーヴェイに言った。またここにいらっしゃいませんか。べつに、僕らの活動に協力していただけなくてもかまいません。ただ、僕の話に少しだけ耳を傾かたむけて欲しいんです。それだけでいいんです。次は、僕の話をします。僕の罪の話を。ハーヴェイはその話を聞いた。

　だから、さ。今度は。

　──今度は、俺の話を聞いてくれよ。

「パオロ……！」

　集会は一週間に三度、月曜日と水曜日と金曜日に開かれる。曜日という概がい念ねんは一いつ般ぱん的ではないけれど、パオロに教えられて、いつの間にか覚えてしまった。今日は火曜日だから、集会はないが、集会場の扉とびらは施せ錠じようされていなかった。ハーヴェイはがらんとした古いホールのまんなかに立ちつくし、円形の天てん井じようを見上げた。初めて気づいた。前からあったの

だろうか。あったような気もするし、なかったような気もする。

　天井に、黒い塗と料りようで、巨きよ大だいな十字が描えがかれている。

　ハーヴェイは床ゆかに両りよう膝ひざをついた。

「……いるのか。いねえのか。どっちなんだよ、パオロ……？」

　そもそも、俺、あいつがここにいるって、本気で思ってここにきたのかな？

　わからない。

　はっきりと、明確な意思を持って、ここにきたのかどうかさえ。

　パオロが、こんなときに頼たよれるような相手なのかどうかも。

　でも、いないんだ。他ほかには、いない。母ちゃんは死んだ。ステラにはあわせる顔がない。ローラはいいひとだけど、ハーヴェイ自身はそんなに親しいわけじゃない。リクなんて論外だ。カルロさん。チーロさん。イビツさん。チェザーレさん。ファブリツィオさん。ルイージさん。ファミリーの人たちにだって、相談できない。できない、わけがある。

　俺は、見ちまった。あの火。あの炎ほのおを。

　俺を、黒い十字が見下ろしている。

　きっと、ずっと見下ろされていたんだ。知らなかったんだ。

　でも、俺は、今、思ってる。パオロ。俺も同じなんだ。お前と同じだ。俺は━罪深い。弱い人間だ。結局、ずっとロクデナシの父ちゃんを忘れられなかった母ちゃんも、どこか弱かった。パーシャも弱いから俺に抱だかれた。人間は、弱い。さまざまに、弱い。

「パオロ……！」

　聞いてくれよ。パオロ。お前の言うとおりなんだよ。俺もわかったんだよ。俺は気持ちよかったんだよ。パーシャとやって、気持ちよかった。気持ちよくなりたかったんだよ。だから俺はパーシャの部屋から出て行かなかったんだよ。風ふ呂ろで手首でも切るんじゃ

ないかなんて思ってなかったよ。俺はやりたかった。ステラが好きだった。でも、やりたかった。ステラはたぶん俺のことなんか好きじゃない。だったら、パーシャでもいい。我が慢まんなんてできなかったよ。俺は金が欲しいよ。貧びん乏ぼうはもういやだ。大金を積まれたら俺はたぶんなんでもやるよ。誰だれだって裏切るよ。いや、そんなことないって思いたい。でも、違ちがうんだよ。実際、俺はやっちまった。俺は負けた。いざとなったら、そんなもんなんだよ。どうしようもねーよ。

　でも、パオロ、お前は教えてくれた。

　それは、俺たちのせいじゃない。

　俺たちが背負わされてる罪のせいだって。俺たちは生まれながらに罪人なんだって。

　なあ。なあ？　だったら、どうすりゃいいんだよ？　どうすれば俺たち救われるんだよ？　誰が俺を赦ゆるしてくれるんだよ？　俺はやっぱりもうダメなのかな？　それとも、なんとかなるのかな？　パーシャとまたやりたい、ステラとやりたい、誰でもいいからやりたいって、この期ごに及およんでそんなことばっかり考えてる俺は、どこかにたどりつけるのかな？　それとも、俺はずっと苦しいままなのかな？　開きなおって、あきらめて、生きてくしかないのかな？　そのほうが楽かもしれないよな？　金稼かせいで、女はべらして、うまいものを食って、気持ちよくて、楽しくて、罪なんか忘れて、騒さわいで──でも、それでいいのかな？　本当にいいのかな？

「……パオロ……教えろよ……俺に、教えてくれよ……頼たのむよ……パオロ！」

　がたん、と音がした。ホールの奥からだった。

　そこには戸がある。小さな倉庫みたいな部屋に通じる引き戸だ。使われているのか、使われていないのかも判然としない。けれども、今、その引き戸が開いて、出てきた。金髪。迷いのない、澄んだ青い目。頰ほおと左手の指にガーゼが貼はりつけてあって、ダッフルコートを右手に持ち、ジーンズとセーターはところどころ黒く汚よごれていた。首くび飾かざりをセーターの外に出している。

　黒い、ロザリオだ。

「──お前……」

　ハーヴェイは下した唇くちびるを噛かんだ。まったく予想していなかったわけではない。やがて、聖なる炎が罪人たちを焼き払はらい、罪を落として、救いをもたらす。そんな話は、パオロの口から聞いていた。昨夜、あの火を遠くから目もく撃げきした瞬しゆん間かん、もしや、と思った。ただ、その先にまで思考は進まなかった。その先となると、もしや、ではなくて、まさか、の領域だった。

　だって、パオロがいくらみずからの弱さを語り、それが罪ゆえだと述べ、いつか自分は罰ばつされなければならないと断言しても、それはパオロ自身のことだ。どう考えようと個人の自由だし、誰かが迷めい惑わくするわけでもない。まあ、パオロはすごく生き真ま面じ目めなやつなんだろう、くらいに思っていた。

　ただし、世界中の人間が罪にまみれていて、しかも、死ななければ罪は消えず、救われないのだとなれば、話は別だ。

　そうなると、パオロだけの問題ではない。ハーヴェイもふくめたすべての人間に関かかわってくる。ハーヴェイはパオロに言った。でもさ、世の中、いいやつも悪いやつもいるじゃん。死んだほうがいいやつもいれば、そうじゃないやつもいるんじゃねーの？　パオロは微笑ほほえんで、そうかもしれませんね、と答えた。ですが──そうではないかもしれません。いずれにしても、罪を背負っているかぎり、人は苦しみつづけます。救われるための道は、そう多くはないんです。僕らは、一つしかないと思っているんです。

　その、一つの道が。

　あの火。

　あの炎。

「……お前が、やったのか。パオロ……お前が」

　パオロは、返事をするかわりに、ひっそりと微笑んだ。相変わらず、なんの迷いもない瞳ひとみの静けさだった。おかしなものだった。自分は弱い、罪深いと語ったパオロが、ぜんぜんそんなふうには見えない。あの火を放ったのかもしれない、もしかしたら、ニーシャが死んだのはそのせいかもしれない、そうしたら、パーシャと

あんなことにはならなくて、母ちゃんが一人で倒たおれることもなかったかもしれなくて──俺は、自分の弱さを、薄うす汚ぎたなさを、罪深さを、思い知らされなくてすんだかもしれない──すべての原因を、こいつがつくったのかもしれない、なんて、とうてい思えない。

「……マジで、ぜんぶ、お前のせいなのかよ……」

「僕は」パオロは黒いロザリオを左手でもてあそびながら、ゆっくりとハーヴェイに近づいてくる。「僕の罪をけっして赦しません。罪は、目をそらしても、ひた隠かくしに隠しても、必ずあらわれます。誰も逃にげることはできない。僕は罪深い人間です」

「……逃げ……られない……？」

「はい。絶対に」

「もう、無理なのか……？」

「はい」

「誰、も……？」

「はい」

「じゃあ──じゃあ、俺、いったい、どうすればいいんだよ……？」

「道は一つです」

　パオロは不意に大おお股またで一息に距きょ離りを縮めてきて、ハーヴェイの腕うでをつかんだ。引っぱられて、立って、ハーヴェイはのろのろと歩いた。抵てい抗こうする気にはなれなかった。何しろ、ハーヴェイは知っていた。俺は弱い。弱いから、自分の気持ちさえ裏切って、欲望に流されて、罪を──そう、罪を犯おかす。誰も彼もがそうだとはかぎらない。でも、そうじゃないともいいきれない。げんに、金、肉欲、人の弱さにつけこんで、誰かが笑い、誰かが泣く街が存在している。

　赤線地区。

　あそこで、女たちは嘘うそをつき、男たちは騙だまされ、あるいは騙されたふりをして、しぼりあげられた利益を、一部の者が手に

する。

　パンカロ・ファミリー。

　それが悪いことだなんて、思っていなかった。ファミリーのおかげで、ベアフットの貧しい連中にも仕事があって、なんとか生活してゆける。尊敬してさえいた。

　エンツォ・パンカロ。パパ・パンカロ。

　いつかあの人の役に立ちたい。リクよりも役に立って出世したい。金が欲しい。家が欲しい。

　そうして踏ふみしだいた地面を、最低限の暮らしで、いつも腹をすかせて、どうにかぎりぎり生きているような大勢の連中が支えているなんて、考えなかった。知っていたのに。だって、俺はまだ、こっち側にいるんだ。こっち側から、あっち側を眺ながめて、いいなあ、とか思ってる。一ひと握にぎりの金持ちがいて。大勢の貧びん乏ぼう人にんがいて。持てる者が、持たざる者を支配して。これが正常なのか？　まともな世界なのかよ？　まあ、そんなもんだと、弱い俺は肩かたをすくめて笑っていた。しょうがねーよ。どうしようもねーよ。変えようがないんだから。認めて、妥だ協きようして、流れにそって、生きてくしかねーんだよ。

　目を、そらして。

　見て見ぬふりをして。

　今もまだ、目をつぶろうとしている。

　パオロに引っぱられるまま、引き戸をくぐり、カビくさい部屋の床ゆか板いたが外されて現れた梯子はしごを自分の手足で下りていても、まだ否定しようとしている。

　知らねーよ。知ったこっちゃねーよ。関係ねーよ。俺は、ショックなんだよ。母ちゃんが死んだりして、茫ぼう然ぜん自じ失しつで。俺の意思じゃない。俺のせいじゃない。むしろ、パオロのせいだ。俺は悪くない。俺には責任なんかない。助けて。助けてくれ。慰なぐさめてくれ。ステラ。パーシャ。誰だれでもいいから。頼たのむから――やらせてくれ。嘘だ。嘘だって。違ちがうんだって。そうじゃなくて。俺は。俺は。俺は、やっぱり――どうしようもなく、弱くて。カスみたいな、罪人で。

「サー・アンドリュー。パオロです」

　梯子を最後まで下りると、そこは上の部屋よりもさらに手て狭ぜまな地下室で、照明はなく、かなり埃ほこりくさかった。パオロは壁かべに向かって呼びかけ、名乗った。壁だと思ったのだが、違ったらしい。ズ、ズ、と、壁の一部がずれて、その向こうから明かりがこぼれてきた。出てきた男が引き開けたようだ。縮れ気味の黒くろ髪かみを乱暴に撫なでつけ、ちょっと斜はすに構えたような笑えみを目め許もとにたたえている、三十代後半くらいの男だった。この男も。胸をはだけたワイシャツやスラックスが、パオロと同じように汚よごれている。こいつも昨夜ゆうべ、赤線にいたのか。火を、つけたのか。

「ふむ……」サー・アンドリューと呼ばれた男は、頭をボリボリかきながらハーヴェイを見て、パオロに目をやった。「──で、どちらさんだ？」

「ハーヴェイです。これまで何度か集会に参加してくださっています」

「ほう。そいつはありがたいこったな。だが、今日は集会の日じゃあないはずだろ」

「彼は、罪に深く苦しみ、道を求めています」

「道、か」

　サー・アンドリューは短く息を吐はいて、ハーヴェイに視線を戻もどした。気のせいだろうか。少し細められたその両眼に、一いつ瞬しゅん、哀あわれみのようなものがよぎったように思えた。
サー・アンドリューは、それを隠かくして、ごまかすみたいに背中を向けた。「入れ」そう言われて足を踏み入れた合成骨材コンクリート剝むきだしの部屋は、意外と広くて、人がたくさんいた。つめたそうな床に布を敷しいて、その上に横たわっている者。座って、壁に背をもたれさせている者。なかには集会で見かけたことのある者もいる。十人以上いるだろう。そのほとんどが怪け我がをしていた。見たところ、多くは火傷やけどらしかった。

　それなのに、この部屋はいやに静かだった。誰も呻うめいたり暴れたりしていない。表情も気味が悪いほど穏おだやかだ。もちろん、ハーヴェイに顔を向ける者はいる。だが、敵意や警けい戒かい

心しんのようなものは感じられない。一度、集会で口をきいたことのある男は、微笑ほほえみさえ浮うかべてみせた。そいつは横になっていて、頭と左腕に包帯が巻かれ、ひどく顔色が悪くて、ひょっとしたら死にかけているんじゃないかと思えるような状態なのに。

「──俺はな」

　サー・アンドリューは部屋の隅すみに腰こしを下ろして、ハーヴェイにも座るよう、目でうながした。なぜだか、一気に力が抜ぬけた。ハーヴェイは崩くずれ落ちるようにサー・アンドリューの前にしゃがみこみ、床に尻しりをついて、うなだれた。すぐそばに、パオロが座った。パオロはハーヴェイの肩をそっと抱だいてくれた。

「俺は……二十四のときに、自分の女にょう房ぼうを殺した。四つ上で、一いつ緒しょになるときは親に反対されたが、いい女だったんだ。顔はまずかったけどな。でも、いい女だった。俺にとってはな。愛してた。わかってもらえるかどうかわからんが、だから、俺は殺したんだ。病気だった。体がだんだん動かなくなっていって、そのうち呼吸さえできなくなって、死ぬ。そんな病気だ。原因は知らん。高い金を払はらって、有名な医術士に診みてもらったが、手に負えないと言われた」

　サー・アンドリューの口調は、淡たん々たんとしていた。きっと、そうして感情を抑おさえこまなければ、とうてい語ることのできない話なのだ。話の合間にもれたため息の深さが、真情を表していた。少なくとも、ハーヴェイにはそう思えた。

「まいったよ。家のことどころか、自分で自分のこともろくにできなくなってな。それなのに、目を離はなすと、ベッドから這はいだして、なんやらかんやらやろうとする。とくに、こだわったのが便所だ。生々しい話で悪いけどな。一人で行こうとするんだ。気にしないと俺が言ったところで、あっちはそうじゃないんだから、しょうがない。まあ、それでも、俺があいつをかついで便所に連れて行けばいいんなら、それはそれでよかった。けどな。病気は待ったなしだ。そのうち、体が動かせないだけじゃなく、自分の体に何が起こってるのかもわからなくなってくる。わかるよな？　我が慢まんもきかない。そもそも、いつ我慢すればいいかもわからない。あいつは泣いたよ。俺もさすがに泣きたかった。頼むから、殺してくれなんて、あいつがせがむもんだからな。困っちまって、泣いちまい

たかった」

　それで、楽にしてやることにした、と、サー・アンドリューは言った。

「──まだ二十八だったからな。余計に耐たえられなかったんだろ。見み舞まいにくる友だちだのなんだの、いくら同情してくれたって、やつらはあいつと同じくらいの年で、自分で歩けるし、化け粧しようだってできるし、旦だん那なの愚ぐ痴ちを言いながら、浮うわ気きの一つもできる。そんなの見せつけられてみろよ。耐えられるか？　生きてるかぎりは、まともな人間が目について、自分が不幸だってことをいやってほど思い知らされるんだからな。ちなみに、その代表格が俺だよ。俺がどんなにあいつの世話をしたって、あいつにはなれない。あいつも、俺も、そのことをわかってた。どうしても死にたいっていうなら、殺してやるのが人情ってものだ。当然、あいつを殺すのはつらかった。そりゃそうだ。好きで一緒になったんだし、いい思い出もあったし、女房を殺せば後ろに手が回る。まあ、結局、情状酌しやく量りようで、禁固一年のあと、騎き士し職にも戻ったんだけどな。冷や飯食いとはいえ、トレイン公国聖堂騎士団の騎士様だ。食うには困らない。いや、そんなことはどうでもいいな。俺は女房を殺した。楽にしてやった。そして──楽になった。誰がって？　俺が、さ」

　俺は愛してたんだぜ、女房を、という言葉は、言い訳には聞こえなかった。

「でもな。やっぱり、もういいや、ってな。そんな気持ちはあったよ。なんで俺がこんなことしなけりゃならねえんだと、思ったこともあった。当時、まだ俺は若くて、騎士っつっても下っ端ぱで、仕事も楽じゃなかったしな。女房が病気だってことはみんな知ってたが、気を遣つかってくれるやつもいれば、そうじゃないやつもいた。ああ、俺はもう出世できねえだろうなとも思った。有力な騎士のパーティーだのなんだの、出るに出られなかったからな。そんなくだらないことが、結構響ひびくんだよ。まあ、いいか、しょうがねえ、と思いながら──何もかもあきらめるには早すぎる年だったしな。でも、終わっちまった。女房絞しめ殺して、俺もお先真っ暗で、何も考えなくていい。考えたって無む駄だだ。反省したふりして、しょんぼりしてみせてたら、一年食くらいこむだけですんだわけだ。俺は飲む、打つ、買う、三さん拍びよう子しそろった駄目騎士になった。それでも、ちょうどファー・セルジナと激しくやりあってたころでな。俺みたいなやつでも、戦争に駆かりだされて、

退たい屈くつしなかった。我らが聖堂騎士団は、異教徒の敵には残ざん虐ぎやくきわまりないことで有名だったんだ。俺は、戦場でとっつかまえた女を犯おかして、身ぐるみ剝はいで、ぶっ殺した。まあ、さすがに最初はしりごみしたけどな。周りの連中がやってるのに、自分だけやらねえと雰ふん囲い気きが悪くなる。腰こし抜ぬけ扱あつかいされて、馬ば鹿かにもされる。で、おっかなびっくりやってるうちに、慣れる。慣れちまうのさ。みんなやってるしな。俺だけじゃない。俺だけが悪いわけじゃない。きっと、誰だれだって、俺の立場だったら──女房を殺して、それが本当は女房のためなんかじゃなく、自分のためで、自分が楽になるためで、じつは待ってた──殺してくれって頼たのまれるのを、じりじりしながら待ってたって、気づくはずだ。気づいて、開きなおって、こうして命いのち乞ごいする女を犯して、ぶっ殺して、奪うばった金の指輪がいくらになるか、なんて考える。たまに、女房に手をついてわびたくなる。後こう悔かいする。手にかけたやつらが夢に出てくる。俺は、必死で弁解する。悪かったよ。悪かった。でもな──お前らだって、俺と同じ状況だったら、同じことを同じようにやるだろ、ってな。その弱さこそが、俺の罪だ」

　そして、その罪が、罪を重ねさせる。

　罪が罪を助長する。

　罪は回る。いつまでも回りつづける。

「ハーヴェイ」サー・アンドリューの右手がのびてきて、ハーヴェイの頰ほおから顎あごのあたりにふれた。「目をそらすな。今、見なかったふりをしても、罪はまたいつか必ずお前を襲おそうぞ。俺たちは逃にげられない。俺たちが救われる方法は、結局、一つしかないんだ」

「……どうすれば」

「俺たちはあまりに愚おろかで、罪深すぎる。死ぬしかない」

「そんな──」

「俺だけじゃない。パオロも。お前も。誰も彼もだ。俺たちは死ぬことで浄じよう化かされ、世界がよりよく変わる。ハーヴェイ。考えてみろよ。そう思わないか？　世界を汚よごしてるのは、俺たち一人一人じゃないか？」

「……でも……」

「死ぬのはいやだ。だろう？　そりゃそうだ。誰だってそうさ。でもな。俺たちは、生きているかぎり、ずっと苦しみつづけるんだぞ。お前が今、苦しんでいるように、お前が愛する者も苦しんでいる。その周りにいる者も。俺も。パオロも。世界中が苦しみに満ちている。愛した女を、俺は殺した。今は、悔くいてないんだ。俺は馬鹿で、弱くて、あいつを殺したが、おかげであいつは苦しみから解放された。肉体的な、精神的な、耐えがたい苦痛から。罪がもたらす苦しさから。もちろん、それが善行だとは思わない。それも罪だ。でもな。さらに罪を犯さなければ、愛する人間を救うこともできない世界なんだ。この世界は、とっくに狂くるってる。俺たちが狂わせた。だから、俺たちの手で──」

　救う。

　世界を、救う。

「そして、ハーヴェイ。俺も、パオロも、お前も、いつかは死ぬ。死んで、浄化される。そのときまでだ。我が慢まんするんだ。罪のぶんだけ我慢して、〝計画〟のために精せい一いつ杯ぱい働いて、死ねばいい。怖こわがることはない。まずは、お前が愛する者を救ってやれ。苦しみをとりのぞいてやれ。お前には、できる。それができる」

「できる……」

「できますよ、ハーヴェイ」

「俺が……」

　できる。

　世界を、救う。

　俺が。世界を。

　──愛する者に、救いの手を。

　それは、ひどく正しいことのように思えた。

Omenage 897 10th revolution 28th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ベアフット地区

〝裸足の海岸〟

chapter.12

海辺

この海の向こうで、ロム・フォウは生まれた。

暗黒大陸Alune Dalmor。

バクー大陸と呼ばれたこともあるが、その名はα大陸の人間がつけた呼こ称しようだ。

彼かの地において、黒は聖色で、暗黒Aluneは神聖の意味もあわせ持つ。だから、肌はだも、瞳ひとみも、体毛も、黒ければ黒いほど「人間Lamun」に近い。ロム・フォウの父は、生きつ粋すいの――それも、古い血を引く暗黒大陸人だが、母はα大陸の人だ。そのせいで、ロム・フォウは肌の色がやや薄うすく、瞳の色は母譲ゆずりのエメラルドグリーンで、顔立ちも純じゅん粋すいな暗黒大陸の人間のそれとはずいぶん違ちがう。ずっと山暮らしだったが、ごくたまに人が大勢いる街に下りると、やはり奇き異いな目で見られた。そこはジェードリからの船も着く港町で、混血なんて珍めずらしくないのに、それでも聖なるAlu暗黒neに強くこだわる人々がいた。彼らは長い歴史を持つ結社の構成員たちだった。彼らは親が子に伝統と伝説を教えこみ、特権意識を植えつけて差別を正当化していた。彼らのうち過激な一派は、さまざまな理由で混血をつけ狙ねらい、ときに殺害した。しかも、彼らの存在は、なかば社会的に容よう認にんされてさえいた。

世界で一番美しいともいわれる言語。神秘と怪かい異いに満ちた自然。豊富な希少金属レアメタルと、宝石。それから、多くの秘宝伝説に彩いろどられた暗黒大陸は、けっして楽園ではなかった。

それが「人間Lamun」であれ、なんであれ、人がいるかぎり、血は流れ、土地は汚れるものなのかもしれない。

――あたしは、街が苦手だ。

裸足ベアフツトの海辺で、ロム・フォウは腰こしをかがめて砂に埋うもれかけた貝かい殻がらを拾った。貝殻を耳にあてると、海の音がする。そんな児じ戯ぎめいたことをやっていたら、アルファが大きなあくびをして、ぶるんと体を震ふるわせた。さすがに最初はやや神経過か敏びん気味だったみたいだけれど、もうすっかり街にも慣れている。たいしたイヌだと思う。もしかしたら、ロム・フォウよりも適応能力が高いかもしれない。

あたしは、ダメだ。相も変わらず、山野や森で風雨にさらされているほうが、何倍も、何十倍も落ちつく。あの人と一いつ緒しよに船に乗って、海を渡わたって、この街にきて。あれからもう十四年。流れた時間は何をもたらしたのだろう。あたしはどれだけ変わっただろうか。

父と母が眠ねむる故郷は、遥はるか遠く。

あたしはいつか、あの山に帰るのだろうか。

なぜだか、思い出しても、懐なつかしくはない。

あたしはあの山で涙なみだを流しすぎた。一人きりで寂さびしかった。父がくれた黒い肌や髪かみの毛と、母がくれたエメラルドグリーンの瞳は、二人を失ったあたしを余計に孤こ独どくにした。そう。たぶん、あたしは帰らない。あの山には戻もどらない。父と母はあたしの胸のなかで眠るだろう。それでいいと思う。あたしは一人で追いかけてゆくのだ。あの人を追いかけてゆく。離はなれることでしか、追いかけられない。あたしはいろいろとへたくそだ。

思い出す。

胸むね一いつ杯ぱいにすいこんだ潮のにおいが、どこかに引っかかっていた記き憶おくを、不器用に、ぶしつけに、呼びさます。

あのころ、通りを歩くときは、あの人の外がい套とうをぎゅっとつかんで、下ばかり見ていた。最初、あの人は歩きづらいとかなんだとか言っていたけれど、すぐに気にしなくなった。そういう人だ。物事にあまりこだわらない。お金も、物も、ためらいなくぽんと他人にあげてしまう。やさしさもくれる。守ってくれる。この命は、あの人に救ってもらった。

あの人のおかげで、今の自分があるのだと思うと、胸が熱くなる。

それで十分だと思う。あの人は、この空の下のどこかに、間ま違ちがいなくいる。それだけで。

それだけで、いい、なんて──嘘うそだ。

会いたい。

会いたいよ。

あの人に、会いたい。

気の向くまま旅をして、補給のために立ちよったジェードリの定宿で、一通の手紙を受けとった。

差出人はジャン・ジャック・ド・ジョーカー。

縮めて、〝３Ｊ〟。あるいは、〝いかインさま師パスタ〟。〝でたらハプハザードめ貴族アリストクラツト〟。〝密教カバ伝道師リスト〟。いや、当時はたしか──そう、〝盗掘師ロバージョー〟だ。たまたま山を下りたときに、「すごい美人を連れたジョーと名乗る白い男Ragoa Modoが、クァド・ア・キュスの秘宝を探しているらしい」という噂うわさを小耳に挟はさんだ。それからしばらくして、盗掘師ロバージョーは女連れでロム・フォウが暮らしていた山小屋を訪おとずれた。彼は尊大な態度で、じつに流りゆう暢ちような黒き聖Alune なる言語wiz Yewを話した。「──古き血をLa Ulene rur 引く娘よeshen Adra.。クァドLecta ア・Necnoar キュスのlan Quado 秘宝はどa Cuss こにあるXerra.。おまえはYo 知っていcia るはずだAdrem.」

あの男のことは、昔からあまり好きじゃない。好きになれるような出会い方ではなかったし、考えてみれば、いまだにあの男と縁えんが切れていないことのほうが不思議だ。あの男に「ロム・フォウ、深い森のAlune owin 黒真珠よmor Talnanoer.」などと呼ばれると、怖おぞ気けが走る。きっと、あの人が間に挟まっていなければ、仲間といえるような関係にはなっていなかっただろう。

でも、手紙を読んでしまうと、無視することはできなかった。それに、ジョーカーはともかく、クローディアは嫌きらいではない。まるで仮面でもかぶっているかのように、主あるじ以外には愛あい想そ笑わらいさえ見せない彼女だが、それでも女同士だ。あのとき、あの人や、トワニングや、ジョーカー、男ばかりのなか、彼女がいてくれたことはやはり心強かった。彼女も彼女なりに、かなり控ひかえめにだが、ロム・フォウに気を遣つかってくれた。守るべきものがあり、そのためだけに生きている彼女にとって、たぶん、あれは最大限だったのだと思う。

そうして、仮け病びようかそうでないのかも判然としないジョーカーを見み舞まったあとは、予定どおり、すぐにジェードリをあと

にするつもりだった。そのつもりだったのに。

「──ジョーカーが、おかしなことを言うから……」

　やつは、くるぞ。予感がするのだ、なんて。

　でも、ジョーカーの予感は結構あたる。何しろ、勘かんのいい男だ。その勘も、ジョーカーに言わせれば、「容易には言語化しがたいさまざまな要因を整理して分ぶん析せきし、ある一いつ貫かんした合理性にもとづいて判断した結果」らしい。そうした言い回しは嫌いだが、言っていることはロム・フォウも理解できる。ある予感には、必ず原因がある。

　じつは、ロム・フォウもそんな気がするのだ。

　あの人は、くる。ここにとどまれば、あの人に会える。

　だから、本来は苦手な街から、この足が離れようとしない。アルファが訝いぶかっている。明らかに行き場がなくて、さながら逃にげ場所を探すように街をさまようロム・フォウに、馬ば鹿かかおまえは、とでもいうような視線を投げてよこす。わからないな。さっさと戻ればいいだろうに。山に。野に。おまえにふさわしい大地に。それとも、この海を泳いでどこかへ行くか。

「もう水が冷たいよ」

　たいしたことはなかろう、と、アルファは駆かけだして、躊ちゅう躇ちょせずに打ちよせる波に身をさらしてみせた。ほら見ろ。気持ちいいくらいだ。

「きみは寒さに強いんだよ」

　おまえが弱すぎるだけだ。

「またそうやって挑ちよう発はつして。遊んで欲しいのなら、そう言えばいいのに」

　誰だれが。

「ふふ」

　ロム・フォウは砂の上に腰を下ろし、顔の上に手をかざして目を

細めた。秋晴れの上天気だ。遠くを見やると、たくさんの小さな漁船が波に揺ゆられている。砂すな浜はまにはもう使われなくなった船が何なん艘そうも打ち棄すてられ、また、体を休めているまだ現げん役えきの漁船も多くあった。人ひと影かげはまばらだ。アルファが海水を跳はねあげながら走りまわっていても、目をとめる者はいるけれど、騒さわぎにはならない。

　それにしても、気高き白い種族の血を引く、生まれながらのイヌの王が退たい屈くつしのぎに運動している姿に慰なぐさめられるなんて、ちょっとおかしい。

　その前に、アルファがここにいること自体、奇き妙みようといえば奇妙だが、どうして、とか、なぜ、とか、ロム・フォウはあまり考えない。そういう習慣がないのだ。おまえはけものだ、と、アルファに言われたけれど、たしかにそうなのかもしれない。この身体からだに流れている古い血は、おそらく、あたしで絶えるだろうこの血は、けものに近いのかもしれない。

　少し遊ぼうか。

　アルファと一いつ緒しよに、難しいことは何も考えず、体を動かそうか。

　そう思い、立ちあがりかけたとき、覚えのある悪お寒かんが背筋を伝った。アルファも感じたようだ。後ろか。振ふり返った。まだ遠い。三十メーテルほど離はなれている。

　あれは。

　あの赤い双そう眸ぼうは。

　──リク、といったか。

　彼は、ロム・フォウと目があうと、軽く会え釈しやくしてみせた。やはり、存在としての脅きよう威いとは裏腹に、まったく敵意や悪意が感じられない。まるで、きわめて善良で純真な心を持たされた、よく切れる刃は物もののようだ。アルファが毛を逆立てて唸うなり声をあげる気持ちもわかる。彼はとてもあやうい。だけれど、彼はそのことを自覚して、覚かく悟ごを決めているかのように、落ちついている。

「大だい丈じよう夫ぶだよ、アルファ」

……そうらしいな。

「うん。あたしたちに用があるわけじゃなさそうだし」

リクはロム・フォウから目をそらして、別の方向へ足を進めた。その行く手には、中ちゆう途と半はん端ぱな長さの亜あ麻ま色いろの髪かみを風に吹ふきさらし、砂浜に膝ひざを抱かかえて座っている、線の細い──少女、だろうか。男の子のような服装だけれど、体つきや仕草が女の子のそれだ。

でも、変だ。

何が？

──風。

そう、風だ。あんなに髪がなびくほどの強い風なんて、吹いていない。

彼女は、地平線の彼方かなたをじっと見つめていて、リクには気づいていないようだ。

彼女の右手が、ゆっくりと持ちあげられる。

指さす。

海の、一点を。

折しも、それまでより高い波が押しよせてきた。

それが。

はじけた。

ぱん、と。

見えない壁かべにぶつかったかのように、波が砕くだかれ、飛び散った海水が降りそそいで、彼女をぬらした。

「ルカ」

リクにそう呼ばれても、彼女はしばらく振り返らなかった。

　やがて、彼女の右手が砂をつかんで、ぎゅっと握にぎりしめた。

「……すごく、やでさ。こんなこと、できるのが。自分でうまく、コントロールっていうか、加減とか、できなかったし……」

「うん」

「いやなことがあると、勝手に、ね。あたしって、ほら……わがままだから。昔からそうだから。周りの人に、すごく迷めい惑わくかけて。怪け我がとかも、させて。お父さんにも、肩かた身みの狭せまい思いさせちゃって。男手一つで、それだけでもたいへんなのに、あたしみたいなすごくめんどくさいこが娘むすめで、お父さん、運が悪かったよね。死んじゃって、よかったのかもって思った。海の男だし。海で死ねたんだから本ほん望もうかな、とか。もうあたしの面めん倒どう見なくていいし。でも、どうせだったら、あたしも連れてってくれればよかったのに、って──ずっと、思ってた。どうしてあたしを置いてったんだろって。だけど、ね」

　彼女は──ルカは、砂を握った右手を肩の高さまで上げて、開いた。

　砂は、しかし、落ちてゆかなかった。静止していた。

「やっぱり、生きててよかった。お父さん、置いてってくれてありがとうってかんじ。だって、ちっちゃいころなんて、お父さんが漁に出てる間はいっつも一人で、誰だれも遊んでくれなくて、いらいらして、むかついて──さみしかった。なんか、お父さん以外、世界ぜんぶが敵みたいに思ってた。でも、あたしにとっては敵でも、みんなにとっては、モノっていうか……ないほうがいい、邪じゃ魔まな物体っていうか。かみあわなくて。すれ違ちがってて。あたしだけ、別の世界に住んでるみたいで。今も、みんなにはうまくあわせられないけど、違うもん。あのころとは、ぜんぜん違う。あたし──あの家が、好き。いつかはみんなばらばらになっちゃうかもしれないけど、今はあそこにいたい。あたし、きっと嫌きらわれてると思うけど、それでもいいよ。無視されるよりはずっといいよ。ね、リク、知ってる？　ローラって、キレて叱しかることはあっても、出てけって言ったことは一度もないんだよ。誰にもだよ。誰かが誰かに出てけって言ったら、すごく、本当に、怒おこるんだよ。あたしは、あそこにいてもいいんだよ。それって、たぶん、すてきなことだよ」

「うん」

「うん、ばっかり」

「ごめん。でも、ルカの言ってることは、よくわかるよ。おれも同じだから。おれも、居場所がなかった。やらないといけないことを、おれがちゃんとできなかったせいで。だから……ルカとおれは、似てるんだ」

「似てる……？　あたしと、リクが？」

「たぶんね」

「それって、いいことかな」

「どうだろう。わからない」

「悪いことではないよ」

「そう」

「きっと、ね」

　ルカは一度掌てのひらを上に向けて、それから斜ななめにした。

　今度は、砂がさらさらとこぼれ落ちていった。

「――あたしにも、できること、あるんじゃないかって思うんだ。ローラ、なんでもなかったけど、何かあったらどうしようって考えたら、すごく怖こわかった。怖いの、やだよ。怖がってるだけで、何もできないのが、やだ。あたし、守りたいな。守れるかな」

「おれたちは一人じゃない。もちろん、ルカ、おまえもだよ。みんなで守ればいいんだ」

「みんなで、かぁ……」そう呟つぶやいて立ちあがったルカは、少しせつなげな表情で、けれども、笑っていた。「――そだね」

「帰ろう、家に」

「うん」

　何かを吹ふっ切るように、ルカが先に歩きはじめた。

　リクはルカを追おうとして、足を止めた。

　どこかを見ている。

　その視線の先にあるのは──

　あれは、大海王神オストロスの神しん殿でん、か。いや、くわしいことは知らないが、つい先日、オストロス神殿は正体不明の武装集団に襲しゆう撃げきされ、占せん拠きよされたらしい。

　元神殿最上部の灯台に、旗が掲かかげられている。

　──赤地に、黒十字。

「街は、苦手だよ」

　ロム・フォウはそうつぶやきながら、近づいてきたアルファの背を強めに撫なでた。だったら離はなれればいい、と、アルファが言う。そうなのかもしれない。もし、あたしが世界から切りとられた断だん片ぺんにすぎなくて、どこにも、何にもつながっていない切れ端はしなら、今すぐ立ち去るべきだろう。でも、そうじゃない。

　古い血の呪じゆ縛ばくでがんじがらめにされた、孤こ独どくな秘宝の守り手だった父も、母を求めた。父と母を失ったあたしは、風の音や鳥の声を聴きいて、木々や草花の匂においを嗅かぎながら、いつも人のぬくもりを欲ほつしていた。人は一人ではいられないのか。それはわからない。ただ、人は人と交わり、人を残して、つづいてゆく。この広い世界で、誰も自分を知らず、誰の声も聞こえず、誰にもふれることができないとしたら、あたしはやはり絶望するだろう。あの人にもう二度と会えないとしたら、あたしは泣いて、泣いて、泣くだろう。

　リクはすぐにルカに追いついた。

　二人の後ろ姿が遠ざかってゆく。

「ジョーカーのところに行こう。あたしには街のことはよくわからない。でも、神殿のことといい、昨夜ゆうべの火事といい、この街は何か変だよ」

　勝手にするがいい、とアルファが言う。

　俺も、勝手についてゆくからな。

「心強いよ」

　……馬ば鹿かめ。

「行こう、アルファ」

Omenage 897 10th revolution 28th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ベアフット地区
〝ローラの家〟

chapter.13

苦しみの在処

でも、よかった。本当に、よかった。ローラが無事でよかった。

昨夜から、何度同じことを思ったか知れない。

赤線地区を走りまわって。被ひ害がいを受けた知りあいが働いている店に駆かけつけ、医術士の手伝いや、ショックを受けて混乱している人の保護などにあたっていたローラをようやく見つけて。一いつ緒しよに家に帰って、床とこにつくまで──そして、数時間眠ねむっただけで目が覚め、どうにも寝ねつけないので、仕方なく六時前から掃そう除じを始めたりして。その間も、何回も、何回も、思った。

よかった。ローラが無事で、本当によかった。

七時くらいに、ローラが一階に下りてきて、「ステラ、あんた、ずいぶん早起きね。ちゃんと寝ないと、肌はだが荒あれるわよ」とかなんとか言って、水を飲んだだけで、ジョルジュの寝ね椅い子すに座ったまま、寝入ってしまった。眠っているローラに、毛布をかけながら、また思った。

よかった。ローラが死んでしまったりしたら、わたし──困る。すごく、困る。

ローラみたいに、毎日働いてみんなを養うなんて、わたしにはできない。今は、リクやラッチャやテッドが給料の半分以上を家に入れてくれているけれど、お金だけの問題じゃない。

ここはローラの家だ。

ローラがいるから、この家があって、この家があるから、みんなが暮らしていける。

ようするに、と、ステラは思う。わたしには、お姉さん役はできても、お母さん役は無理だ。そこまで責任を持てない。正直なところ──自信がない。所しよ詮せん、わたしはあの人の娘むすめだから。わたしをローラに預けたまま、どこかに行ってしまった、あの女の娘だから。

違ちがう、と思いたい。わたしは、あの女みたいにはならない。

　だけど、わたしは覚えてる。帰ってこないあの人を、馬鹿みたいにこの家で待っていたとき、わたしの態度はひどかった。ローラに八つ当たりした。あの人をあきらめてからは、どうせあんたもわたしのお母さんと同じでしょ、汚きたない女でしょ、なんて、言ってはいけないことをさんざん言った。ただ泣いて、叫さけんで、わめいていた。ローラはじっと我が慢まんしていた。休まずに、仕事をしていた。わたしはそれが気に入らなくて、さらに暴れた。わたしは我が儘ままだった。あの人もローラも嫌きらいだった。わたしのことだけを見て、わたしのそばにずっといてくれないから。おそらく、理由はそれだけだった。思いどおりにならない世界が、わたしは大嫌いだった。

　ローラはいい人だって、わかっていた。

　だから、そんなローラに甘えて、わたしは泣きじゃくった。甘ったれだった。ローラに抱だきしめられて、あったかい、やわらかい胸に涙なみだを吸いこんでもらいながら罵ば声せいを浴びせる、醜みにくい人間だった。

　たぶん、今も、本質は変わっていないと、ステラは思う。

　わたしは、一つ一つきちきち決めて、そのとおりにやるんだと自分に言い聞かせて、絶対にやるんだと心に決めないと、何もできない。いざやっても、少しでも何かうまくいかないことがあると、頭にきて、怒ど鳴なりちらしたくなる。必死にこらえる。いらいらして、たまらなくなる。ぜんぶ放ほうりだしたくなる。叫びたくなる。なんで？　どうして、みんな、わたしの言うこと聞かないの？　どうして、思ったとおりにいかないの？　ふざけないでよ。いいかげんにしてよ！　毎日、そんなことを繰くりかえしている。

「進歩ないな、わたし……」

　ステラはダイニングテーブルに頬ほおをくっつけて、目を閉じた。ローラはまだ寝椅子で寝ている。ラッチャとテッドは少し前にいつもよりだいぶ遅おそく仕事に行った。ローラに定位置を奪うばわれたジョルジュは、階段のなかばくらいのところで、相変わらず本を読んでいる。アンナとミミは二階で遊んでいるようだ。バタバタ音がする。古い家で、いろいろガタがきてるから、家のなかでは騒さわがないでっていつも言ってるのに。どうして何回言ってもわからないんだろう。

ルカは━ルカのことなんか、知らない。八時くらいにふらっと家から出て行ったきり、帰ってこない。ついさっき帰宅したリクは、ルカを捜さがしに行った。リクも、夜通し働いて疲つかれてるはずなのに、よくやるわよ。やっぱり、あの二人、つきあってるのかな。家のなかじゃ、あれだもんね。だから、たまに外で二人きりになるのかな。いいな。うらやましい。馬鹿みたい。一つ屋根の下に住んでいるんだし、小さいこどもだっているんだから、そのあたりもちゃんと考えて欲しい。

いっそ、二人で出て行けばいいのに。

でも、こんなことを思うわたしを、ローラは許さないだろう。

わたしだって、許したくない。認めたくない。

━ルカ。

初めて会ったとき、ずいぶんきれいなこだって思った。

とても悲しそうで、寂さびしそうで、自分一人だけ傷ついているみたいな顔をしていて、それがちょっぴり、気に入らなかった。

でも、これから一緒に生活するんだし、仲よくならないと。ローラはずっと家にいるわけじゃないし、わたしがいろいろ教えてあげないと。そう思って、精せいーいつ杯ぱい、やさしくして、努力したつもりだった。我慢もした。ひっぱたきたくなっても、こらえた。結果的には、無む駄だだった。ルカはぜんぜん歩みよってこようとしなかった。なんだか、見み透すかしているような態度で、いやだった。ステラは、言ってやりたかった。そうよ。はっきりいって、あんたのことなんて、好きじゃない。そのきれいな顔も、余よ裕ゆうぶって容姿とか服装を気にしないところも、自分だけ不幸だと思ってるような目つきも、こっちが折れてやってるのに、まったく妥だ協きようしてこない傲ごう慢まんさも、ぜんぶむかつく。当時は、ここまではっきりと言葉にはできなかったけれど、つまり、そういうことだったのだと思う。

そして、ルカは変わろうとしない。

わたしはこんなにがんばってるのに。

ルカはずっと同じだ。変に頑がん固こで、意い固こ地じで、そのままで許されている。

ずるい。

そんなのって、不公平すぎる。

わたしのほうが、この家の役に立ってるのに。ルカなんて、いなくても、たいして困らないのに。みんなに必要とされるように、好かれるように、わたしは一生懸けん命めいなのに。

──ルカなんて、いなくなっちゃえ。

小声でそうつぶやいてみる。もちろん、誰だれにも聞こえないように。

ルカも同じことを思っているのだろうか。ステラなんていなくなっちゃえ、って。

ずん、と。

胸が重く軋きしんだ。

変なの。

わたしはルカが嫌いで、いなくなればいいと思うのに、ルカにもそう思われているんじゃないかって考えただけで、苦しくなる。

ステラは目を開けて体を起こした。まだ二階から音がする。キャアキャアはしゃぐミミとアンナの声も聞こえてくる。「アンナ、うるさいわよ！」音はすぐに静まったけれど、アンナが「ごめんなさい」と返事をよこすまで、少し間があった。ちょっと声が大きすぎたかもしれない。ローラは起きなかったみたいなので、よかったけれど、ジョルジュが本から顔を上げてステラを一いち瞥べつした。なんだか、軽けい蔑べつするような視線だった。気のせい？　わからない。急に不安になった。嫌われたらどうしよう。でも、わたしはみんなのために、がんばってる。だから、本当は自分勝手で怠なまけ者のわたしが、がんばれる。みんなのため。それが、わたしのためで。わたしは──わたしのために。

不意に、玄げん関かんのドアがノックされた。

驚おどろいたけれど、おかげでいやな気持ちがすっと引っこんでくれた。

　ステラは立ちあがってドアへ向かった。「はい、どちら――」言い終える前に、「ハーヴェイだけど」とドア越ごしに声がした。ハーヴェイ？　たしかにハーヴェイの声だったけれど、若じやつ干かん違い和わ感かんがあった。ハーヴェイはローラの家のすぐ近くに母親と二人暮らしで、昔からつきあいはある。ただ、もうパンカロ・ファミリーの仕事をしていて、こどもではないのだし、遊びにくるでもないだろう。昼前に訪ねてくるなんて、珍めずらしいというより、不思議なかんじがする。もしかして、リク？　そうかもしれない。考えてみれば、何度かリクを呼びにきたことがあるような気もする。ステラは鍵かぎを開け、ドアのノブに手をかけて、回して、押した。リクなら今いないわよ、と、言おうとした。なぜだか、喉のどがつまったように、声が出なかった。

「おっす」

　何か、おかしかった。

　ハーヴェイは、十七歳にしてはちょっと幼く見えて、でも、背はステラよりずっと高いし、肩かた幅はばも結構広いので、アンバランスで――本人もそれを気にしているのか、ファミリーの人たちがよく着るような堅かた気ぎっぽくないスーツを身につけて、髭ひげを生やしている。ただ、せっかくのばしている髭も薄うすいから、効果のほどはあやしい。中身のほうも、本人は大人ぶろうとしているみたいだけれど、かなり無理がある。もともとお調子者だし、浅はかで、浮うわついているところがあるのだ。そのはずが。

　ハーヴェイの茶色い目が、少しも揺ゆらがずに、まっすぐステラを見つめている。表情がない。

　怖こわい、と思った。

「なんでびびってんの」

「……え、だって」

　ステラが一歩あとずさると、ようやくハーヴェイが口くち許もとに笑えみを浮うかべた。

「そんなに俺のこと、嫌きらい？」

「そういうわけじゃ……ないけど」

　やっぱり、おかしい。話に脈みやく絡らくがない。でも、そもそもハーヴェイは、きっちりと筋道を立てて話す男の子じゃない。一方、ステラは、これがこうなって、だからこう、と、論ろん旨しが明確でないと気がすまないタチだ。そのあたりで、どうもかみあわないから、つきあいの長さほど親しくはなれないのかもしれない。

　べつに、嫌いではないけれど。

　ハーヴェイの境きよう遇ぐうには、同情だけでなく、共感もする。ただ、それ以上は踏ふみこめない。結局、ハーヴェイの母親は健在で、すごくいい人で──だから。

「リクは？」

「……いないわよ。ルカのこと、捜さがしにいったんじゃないの」

「そうなんだ。よかった」

「よかった……？」

「ああ。あいつがいると、いろいろとな」ハーヴェイは訝いぶかって眉まゆをひそめたステラから目をそらして、首の後ろのあたりをかきながら、天気のことでも話すように言った。「──じつは、母ちゃんが死んじゃってさ」

「……は？」

「いや、だから、俺の母ちゃんが死んだの。帰ったら、倒たおれてて、動かなくて」

「お、おばさん……が？」

「でも、よかったんだよ」ハーヴェイは足許に目を落として、一つ息をついた。「どうせ、生きてたって、いいことなんてないしな。父ちゃんには逃にげられるし、体もつらそうだったし、俺も、ほら、こんなんだろ。出来の悪い息むす子こでさ。どうしよーもねーっつーか、八はつ方ぽう塞ふさがり？みたいな。苦しんで、苦しんで、我が慢まんして、生きてるかぎり、それがずっとつづくだけなんだよな。ステラもそう思わね？」

「わ……たしは、そんな──」

「俺はそう思うよ。そりゃあ、金持ちは楽しいだろうけど。力があるやつ。強つえぇやつ。そんな連中は、いいよな。なんとでもなるよ。でも、そうじゃないやつは、どうすりゃいいんだ？　どうにもならねーよ。なんか、間ま違ちがってるよな、こんな世の中」

「そんなこと、いきなり言われても……」

「だって、おかしくね？　おかしいよな？　俺たちはみんな罪を背負って生まれてきたのに、不平等でさ。その不平等も、欲とか、我が儘ままとか、そんなもので──罪のせいで、ふくらんでくんだよな。結局、ダメなんだよな。俺たちは、抜ぬけだせねーんだよ。生きてるかぎり、同じなんだよ。自分より金を持ってるやつ、女にもてるやつ、強いやつをねたんで、自分より劣おとってるやつを蔑さげすんで、そんなことばっかり繰くりかえして、馬ば鹿かじゃねーのとか思っても、やめらんなくて……苦しいよな。ステラ、俺は、すげー苦しいよ。お前は？　苦しくね？」

「……わたし、は……」

　苦しい。

　苦しいよ。苦しくてたまらない。苦しい。いやだ。もういや。自分がいや。

　わたしは──もっといいこに生まれたかった。なんのこだわりも持たずに、誰だれにでもやさしくできて、いつも笑っていられて、汚きたない、気持ち悪い、いやな感情なんて抱いだかなくて、ちょっとやそっとのことでは腹を立てない、飾かざらなくても、無理をしなくても、誰からも好かれて、愛される、そんな人間に生まれたかった。がんばれば、そんな人間になれるんじゃないかって。

　でも、やっぱり無理かもしれないって。

　夢見て。疑って。絶望して。また望んで。自分に期待して。裏切られて。

　努力すれば報むくわれるって、信じたい。

　信じてる。

　でも、必ずしもそうじゃないかもしれない。

薄うすうす気づいている。

必死に、否定する。

ステラは鏡に向かって言う。「わたしでも、毎日一生懸けん命めい生きていれば、お姫ひめ様みたいになれるかしら？」「バッカじゃないの。あんた、頭悪いんじゃない？　だいたい、何？　お姫様って。幼よう稚ち。無理。絶対、無理。あんたは一生、このまま。ローラの家でガキの面めん倒どう見て、いつか適当な男見つくろって一いっ緒しょになって、こどもバンバンこさえて、その世話をするので手一いっ杯ぱいで、年食って、今よりもっと醜みにくくなって、病気か何かで死ぬ。それだけ。それだけの人生。残念でした。せいぜい、あんたなりの小さなしあわせでも見つけて、それで満足しなさいよ。きっと、それでも、あんたの――わたしのお母さんよりはマシ。あの人はきっと、ろくな死に方しないから。もう死んでるかもしれないけど。どっちにしても、お母さんよりはいい。それでいいじゃない？　そのためでしょ？　善人ぶって、世話好きぶって、誰にも非難されないように、わたしは悪くない、わたしはお母さんと違う、あんなふうにならないって思いたいんでしょ？　今のところ、そこそこ成功してると思ってるんでしょ？」

――やめて。

やめてよ。

聞きたくない。知りたくない。あたしが本当は何を考えてるのか、なんて。

「ステラ、苦しそうだ」

「そんな……こと、ないわよ。ぜんぜん、わたしは……」

「罪が、お前を苦しめるんだよ。かわいそうに」

ハーヴェイがくしゃくしゃに顔をゆがめた。はっと胸を突つかれた。涙なみだ。ハーヴェイは泣いていた。「――ちょっと、ハーヴェイ……」ステラは慌あわてて外に出て、後ろ手でドアを閉めた。ジョルジュがじっとこっちを見て、話を聞いていたからだ。なんだか、恥はずかしいというか、気まずい。ハーヴェイだって、ステラはともかく、ジョルジュに泣き顔を見られたくはないだろう。少し迷ったけれど、ステラはいつも持っているハンカチを出して、ハー

ヴェイの頬ほおをぬぐおうとした。その瞬しゅん間かんだった。

いきなり両りよう腕うでで抱きすくめられた。

それこそ、苦しいくらい、強い力だった。

息ができない。気が遠くなる。頭がぼうっとする。

でも、不思議と、いやではない。

いっそ、このまま、壊こわして欲しい。

「──好きだ、ステラ。ごめんな。お前のことが、好きだったんだ」

ああ。

やっぱり。

なんとなく、そうなんじゃないかと思っていたけど。

「俺は、お前を……救いたい」

じゃあ、救ってよ。救ってみせてよ。

できるの？　そんなこと。

ふと、ハーヴェイの腕の力がゆるんだ。

違う。

右腕が外れたのだ。

ステラは、自分が見たものが何か、よくわからなかった。

ハーヴェイは、それを、ベルトか何かに挟はさんで隠かくし持っていたらしい。おそらく、腰こしの後ろあたりに。だから、ジャケットがめくれあがって、ハーヴェイはそれを振ふりあげ、キラリと光って、なんだか熱い、かたまりのようなものが、ステラの左の肩けん胛こう骨こつの上あたりに埋うめこまれた。痛い、というより、響ひびいた。「あっ」と声がもれた。全身が震ふるえた。「あ、あ……」視界がぐらぐら揺ゆれる。抜ぬかれた。そのあとに、空気がふれた。痛い。痛い、痛い。痛い痛い痛い。

「きゃああああああっ……！」

「ごめんな、ステラ。ごめんな」

　ハーヴェイは、泣きながら、もう一度それをステラに突き刺さそうとした。冗じよう談だんじゃないわよ。やめてよ。なんで謝りながらそんなことするのよ。ステラはとっさに両手でハーヴェイの右手をつかまえた。懸けん命めいに、押し止とどめた。同時に、身をよじって、ハーヴェイの左腕から逃のがれようとした。「はっ、放し、て……！」「ごめんな、でもさ……」「やめて！　痛い！」「ごめん、ステラ、ごめん」しかし、ステラが必死で抵てい抗こうしても、体格にまさるハーヴェイの力はなかなかはねのけられない。わけがわからない。どうしてこんなことに？　ダメかもしれない、と思った。「──た……」たすけて。そうだ。誰か。お願い。「助けて……！　誰か！　助けて、助けて……！」「やめろよ……やめろ！」すると、泣いていたハーヴェイが、急に怒ど気きをみなぎらせた。「やめろ！　俺が助けるって！　ステラ、お前のことは、俺が！　だから、おとなしくしろよ！　今、救ってやる──俺たちが救われるには、もうこれしかねーんだよ！」これしか？　こんなことしか？　そんな。そんなことって。違う。そんなはず、ない。狂くるってる。ハーヴェイはおかしくなっている。ああ。勝てない。この力には、逆らえそうもない。「助けて……！」叫さけんでも、あらがっても、暴れても。わたし一人の力じゃ。

　ハーヴェイの右手に握にぎられている刃は物ものが──それほど大きくはないけれど、殺傷能力は十分ありそうなナイフが、迫せまってくる。止められない。もう首の皮ひ膚ふにふれようとしている。つん、と先せん端たんが刺さる。ステラは、あきらめそうになった。あきらめてしまったほうがよかったのかもしれない。でも、怖こわくて、痛いのはいやで、死にたくなくて、ねばった。バンッ、と、ドアが開いた。「──何してるんだよ……！」振り向く余よ裕ゆうはなかった。ただ、ジョルジュだ、と思った。ジョルジュはステラの横をすり抜けるようにして、ハーヴェイに体当たりした。「うわあぁぁ……！」それで、ナイフが引っこんだ。ハーヴェイは、弾はじき飛ばされはしなかったものの、ステラを放した。助かった……？　ジョルジュはまだハーヴェイにしがみついている。ハーヴェイの顔色が変わった。「……ぐっ……」

　血。

　血だ。

　ステラは開いたドアのすぐ脇わきにへたりこんだ。

　ジョルジュまで。

　どうして、ジョルジュまで、ナイフを？

　結構前から、ラッチャやテッドが、護身用と称しようして、刃物を携けい帯たいしていることは知っている。あまりいいことではないけれど、物ぶつ騒そうな世の中だし、男の子だから、それくらい仕方ないことなのかもしれない。でも、ジョルジュはいつも本ばかり読んでいて、口くち喧げん嘩かはしても、暴力は振るわない。ラッチャやテッドに叩たたかれても、けっして殴なぐり返さない。そのあたりは徹てつ底ていしていたし、刃物にも興味はなさそうだった。ステラはそう思っていた。

　けれど、実際、ジョルジュはナイフを持っていて、ハーヴェイの脇腹に深々とそれを突つき刺していた。

「──て、めえ……ジョルジュ、てめえも……！」

　ハーヴェイが、左の握にぎり拳こぶしでジョルジュの頭を殴りつけた。ごつん、と、かなり大きな音がした。ジョルジュはそれでも離はなれなかった。というより、思うように体を動かすことができないようだ。全身が硬こう直ちょくしている。でも。まずい。だって、ハーヴェイは。「──だめ、ジョルジュ……！　逃にげて……！」ステラはそう叫んだつもりだった。もっとも、本当に声がちゃんと出たかは、わからない。それに、大声を出すより、もっと他ほかにやるべきことがあったはずだ。ハーヴェイは、ジョルジュの背中に、両手で握ったナイフを振り下ろそうとしているのだ。ジョルジュは、助けてくれたのに。わたしは、何もできなくて。足が萎なえて。力が入らなくて。どくどく血があふれでる肩かたが痛くて。怖くて。見ているだけだった。行動できなかった。ローラみたいには。

　家から飛びだしてきたローラは、猛もう然ぜんとハーヴェイに向かっていった。

　たぶん、ローラは、ジョルジュを助けることしか頭になかったのだろう。

　無茶だった。無茶すぎた。

　ハーヴェイにしがみついているジョルジュにおおいかぶさるようにして、体を突っこませたローラの背中に、ナイフが突き立てられた。

　しかし、ローラはそのまま、かまわずに、ハーヴェイを突き飛ばしながら、ジョルジュを引っぱった。ハーヴェイは、しぶとくナイフを手にしたまま、それでもバランスを崩くずした。ローラはジョルジュを抱かかえるような恰かつ好こうで尻しり餅もちをついた。ステラは、場ば違ちがいだけれど、なんだかぽかんとしていた。これは、夢？　悪い、夢。目が覚めたら、汗あせをびっしょりかいていて、ああ、でも、夢でよかった、って──そうとしか思えない。心当たりがない。こんな目に遭あわないとならないほど、悪いことをした？　ハーヴェイは、どうしてこんなことを？　おばさんが死んだから？　それが、なんでこうなるの？　理由は？　原因は？　罪のせい？　罪って何？

　わからない。

　もしかしたら、ハーヴェイも、わからなくなっていたのかもしれない。

「……俺……ローラ……なんて、こと……違う……俺は……！」

　いずれにしても、目を開ければ、なかったことになるのは、夢だけだ。

　現実は、いつだって取り返しがつかない。

　ハーヴェイは左手で自分の傷を押さえて、呻うめき、あとずさって、二、三度、頭を揺すったあと、ステラを見た。教えてくれよ、と、その目が言っていた。無理よ、と、ステラは首を振ふった。わかんないわよ。わたしに、わかるわけないじゃない。あんたがやったことじゃない。こっちこそ、訊ききたいわよ。どういうつもりよ？　なんてことしてくれたのよ？　でも、声にならない。涙なみだしか出てこない。いや、それと、血だ。痛い。痛い。肩が、痛い。

　ハーヴェイは、がっくりとうなだれた。

　少し、安あん堵どした。

　ナイフを握るハーヴェイの手に、まだ力がこめられていたことに

気づかずに。

　それから、ハーヴェイは、自分を説得するようにつぶやいた。

「……死ねば、救われるんだ」

　だから？　そのために？

　ハーヴェイは躍おどりかかった。

　ステラにではなく、ジョルジュを抱だいたままの、ローラに。

「死ねよ……！　死んだほうが！　死んじまったほうが、いいんだ……！　ローラ！　ジョルジュ！　死ね！　死なないと、俺たちは！　お前らは……！」「やめ……！」「うるせえ！　やめたって、もう、俺は……！」「くっ、ジョルジュ！」「ローラ、放して！　ローラ！　僕はいいから……！」「死ねば、お前ら二人とも……！」ステラはよろよろと立ちあがった。どうしよう。止めないと。助けないと。ジョルジュをかばって腹ばいになっているローラに馬乗りなって、狂ったようにナイフを振るっているハーヴェイを止めないと。ナイフが突き刺さるたびに、ローラは「ふっ」「あぐ」「ひっ」と短い悲鳴をもらす。背中。肩かた口ぐち。後頭部。ナイフは素す早ばやく、力強く、容よう赦しやなく、ローラを貫つらぬく。ステラは後ろからハーヴェイを羽は交がい締じめにしようとした。ハーヴェイが上半身だけ振り向かせて、涙と鼻水と返り血でぐしょぐしょになった顔で何か叫さけんだ。がん、と、何かが額にあたり、目の前が真っ暗になった。気がつくと、ステラは横向きで倒たおれていた。でも、すぐに、起きあがらないと。立たないと。

　あたりは血だらけだった。

　ステラも血まみれだった。

　ハーヴェイはナイフを高々とかかげたまま、動きを止めていた。

　のしかかられているローラは、動かない。

　ローラの下から、ジョルジュが這はいだそうとしている。

　ステラは立ちあがろうとしたけれど、ふらついて、しゃがみこんでしまった。

　ハーヴェイがようやくローラの上からどいて、左手で顔をぬぐい、ステラに向きなおろうとした。その途と中ちゆうだった。

「──ハーヴェイ……」

　声の主は、信じられないほど速かった。まるで、いきなりそこに現れたかのようだった。

　リクだった。リクは目にもとまらぬ早はや業わざでハーヴェイの背後をとって、ナイフを奪うばい、両手をねじりあげていた。

「どうして……こんな、ひどいことを。ハーヴェイ、なんでだ」

「……リ、リク……くそっ！　は、放せ……！」

「なんでかって訊いてる！　ハーヴェイ！　答えろ！」

　目をつりあげて怒ど鳴なるリクを、ステラは初めて見た。リクは取り乱していた。あたりまえだ。ステラも、自分が正気だとは思えない。だって、明らかに何かしないといけないのに、何をすればいいのかわからないし、考えるのも面めん倒どうだ。もう、ぜんぶ終わっちゃえばいい。世界なんて、吹ふき飛んでしまえ。なんでとか、どうしてとか、いいじゃない。そんなの問い質ただしたって、無む駄だでしょ。理由がわかったところで、時間を巻き戻もどすことができるわけじゃない。

　きっと、だからなんだろう。

　ハーヴェイは、後あと戻もどりができないところまで行ってしまって、もう進むしかなかったんだ。

　──バカ。

　ハーヴェイの、バカ。

　ハーヴェイなんか、死ねばいい。

「リク……ハーヴェイを、放して」

　とことん気があわないのに、このときは見事に意見が一いつ致ちしたみたいだった。

　走ってリクを追ってきたルカは、息を切らしていた。

　風もないのに、髪かみの毛がざわざわと波打っている。

　なんだか、ルカの周りの景色が、陽かげ炎ろうみたいに揺ゆれて見えた。

　リクが「ダメだ、ルカ」と言った。

　ステラは、やっちゃえ、と思った。

　ルカは、そうした。

「あたしにも、何かできるかもしれないって、思ったのに……！」

　ハーヴェイが、リクに両手をとらえられたまま、上を向いて、両目を一いつ杯ぱいに見開き、舌を突つきだし、つま先立ちになって、全身を硬こう直ちよくさせた。「おおぉあぁぁうぅぅおぅ」と意味のない呻うめき声がもれた。「──よせ、ルカ！」「やだ！」変化は、ルカにも起こった。まず、鼻血が出て、目には涙ではなく血がにじんだ。ハーヴェイも、鼻から、目から、耳から、赤い液体をだらだら垂れ流した。頭が前後に激しく震ふるえた。眼球が飛びだしそうだった。突きだした舌をがちんがちんと何度も嚙かんだ。ハーヴェイは苦しそうだった。とても、とても、苦しそうだった。その苦しみは、すぐには終わらなかった。五秒。十秒。それ以上。リクも、もう何も言わなかった。言えなかったのだと思う。「──こんなことしか、できないなんて……！」ルカが歯を食いしばって、頭を抱かかえてそう叫ぶと、ハーヴェイは、臓ぞう腑ふからしぼりだしたようなおぞましい奇き声せいを発して、ようやくその全身から力が抜ぬけた。ハーヴェイはリクの腕うでのなかに崩くずれ落ちた。力を使い果たしたのか、ルカもその場に座りこんでしまった。ステラはただ見ていた。身じろぎ一つできなかった。ジョルジュがローラを呼ぶ声も、最初、やけに遠く聞こえた。

「……ローラ……ローラ！　ローラ！　返事、してよ……ローラ！」

　はっとした。

　──ローラ。

　そうだ。ローラ。

　ステラは這うようにしてローラに近づいた。ローラはジョルジュに抱だきかかえられていた。目を閉じていた。傷はいたるところにあった。顔も少し傷ついていた。ジョルジュは必死に血をぬぐって、何度も名前を呼んでいた。ステラもローラにすがりつくようにして声を張りあげた。でも、不思議と、自分の声が聞こえなかった。ジョルジュの声もあまり聞こえなくなった。ローラ。ローラ。ローラ。こんなに呼んでるのに。どうして答えてくれないの？　すごく、ものすごく遠くのほうで、リクが、医術士がどうとか、言っている。物もの陰かげからこっちをこそこそうかがって、おろおろして、近よってもこなかった近所の人たちのうち何人かが、それでやっと動いてくれた。早く。早く。ローラが。ローラが。ねえ。ローラ。ローラ。ローラ！

「……あ、みん……な……」

　でも、その声は、はっきりと聞こえた。

　ローラの声だった。

　気のせいなんかじゃない。幻げん覚かくでも、幻げん聴ちようでもない。ローラは薄うす目めを開けたし、ローラの唇くちびるが動いていたし、間ま違ちがいなくローラの声だった。ローラは、焦しよう点てんがあわない目でステラを見て、それからジョルジュを見た。

「だい……じょう……ぶ……？」

　大だい丈じよう夫ぶ。平気。わたしは痛くない。たいした怪け我がじゃないから。ジョルジュも大丈夫。大丈夫って言ってる。何回も、うなずいてる。ローラは、かすかに笑ってくれた。

「よか……った……」

　そうして、目を閉じようとする。待って。待ってよ。がんばってよ。ローラ。ローラ。ローラ。ダメだよ。まだ、ダメだよ。もうすぐ、医術士がくるから。マーカーさんか、オードリーさんか、どっちかがきっとくるから。ローラ。ローラ！　ローラってば……！　ジョルジュがローラのほっぺたをこするように強く撫なでながら、叫さけんだ。そうだ。そう。昨夜、もう日付が変わってたけどね。寝ねる前にね。ジョルジュが、わたしに言ったんだよ。ローラの誕生日に、みんなでね。ローラのこと、そう呼んでみようかって。

ジョルジュがそんなこと言うなんて意外だったけど、ローラの反応を想像したら、なんだか楽しくなって、いいかもね、って、わたしは答えた。あと五日で、ローラは二十九歳になるはずだった。わたしは十七歳で、二十九歳のローラをそう呼ぶなんて、ちょっとおかしい。でも、おかしくたって、ぜんぜん、かまわなかったのに。

　ジョルジュは何回も何回も叫んで、呼びかけた。

「──母さん……！」

Omenage 897 10th revolution 28th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ベアフット地区

〝ローラの家〟

chapter.14

人生の喜び

おかしな気分だった。このまま暗い場所に落ちてしまえば、もう二度と明るい日向ひなたには戻もどれないだろうし、恐きょう怖ふは当然ある。けれども、同時に、恍こう惚こつ感かんとでもいえばいいか。気持ちいいというより、心ここ地ちいい。こんなものなのかな、と思う。もっと恐おそろしいことなんだろうと想像していたのに。考えていたより、ずっと呆あつ気けないし。わりと、簡単なんだ。あのこも、そうだったのかな。だったら、いいんだけど。

十五のときに、赤線で働きはじめる前から、あたしは商売をしていた。ベアフットには、女ならそうやって稼かせぐのがあたりまえだと、誰だれもが思っている地域がある。あたしはそこで生まれて、父親はもちろん誰か知らないし、母親とも他人以下のつきあいだった。かわりに、年上の女たちにはよくしてもらった。あたしは賢かしこかった。すぐ娘むすめに暴力を振ふるう母親には早々に見切りをつけて、姉さんたちの機き嫌げんをとった。最初だけは好きな男に捧ささげて、早く女になって商売を始めるという妙みような儀式も、姉さんたちに教えてもらった。あたしは十四でバルモアにある商社の重役の変態の上客を見つけて荒あら稼かせぎしたけれど、調子に乗って赤線で遊びまわっていたら、あそこの女たちに目をつけられた。脅おどされて、ひどい目に遭あって、仕方なく、赤線の店で働くことにした。

十六から十八までは、あたしが一番稼いだ時代だった。小さいころから姉さんたちの話を聞いて育ったあたしは、男がどうすれば喜ぶか知り抜いていたし、かわし方も、気の持たせ方も、焦じらし方も、考えついたことはぜんぶ試ためして、だいたい成果を挙げた。好きな男も、何人かいた。でも、金をもらう相手とは、絶対につきあわなかった。それはそれ。これはこれ。たまにせつなくなって、泣いてみたりなんかしても、じつのところ、それほど深刻じゃなかった。悲しいことの一つや二つないと、つまらないし。たまには一人で泣く夜があってもいい。人生のスパイスみたいなものだ。それくらいに思っていた。

ところが、十八の終わりに、たぶん、初めて、あたしは重苦しい問題に直面した。

実際、重かった。

身重になったのだ。

避ひ妊にんはもちろんちゃんとしていたから、心当たりはなかった。ただ、稀まれにそういうことがあるという事実は知っていた。柄がらにもなくパニくったあたしは、姉さんたちに相談した。当然、堕だ胎たいするしかないと言われた。あたしもうなずいた。そうだよね。うん。仕事に差し障さわるしね。どいつの種かもわかんないしね。生まれたって不幸かもしれないしね。そう言いながらも、あたしの混乱はまだ収まっていなかったのだろう。何を思ったか、あたしはよりにもよって母親に言いに行った。じつは、しくじって、できちゃってさ。堕おろすけどね。

年より老ふけた母さんは、戸と惑まどったようにしばらく黙だまっていたけれど、やがて、ぽつりと言った。後こう悔かいだけは、しないようにね。あたしは、あんたを産んだこと、後悔してないから。あんたがそうやって生きてるだけで、あたしは嬉うれしいよ。あんたは信じないだろうけどね。

結局、あたしはあのこを産んだ。

ぎりぎりまで、馬ば鹿かじゃないのやめなさいよとうるさかった姉さんたちや、なぜかあたしの決断に好意的だった同どう僚りょうたちに助けてもらって、あのこを生んだ。

男の子だった。

かわいかった。それはもう、かわいくて、かわいくて、たまらなかった。

生んでよかったと思った。姉さんたちも喜んでくれた。お祖母ばあちゃんになった母さんも嬉しそうだった。父親は誰か知らないけどさ、と母さんが顔をほころばせた。あんた似だね。あんたに似て、かわいいね。目と、口が、とくに似てるよ。言われてみれば、そんな気もした。そりゃあそうだ。あたしのこどもなんだから。あたしだけのこ。あたしだけのベイビー。目に入れても痛くない。きっといい男になる。母親のあたしもくらくらするくらい。でも、いい。そんなことはどうでもいい。元気に、健康に育ってくれればいい。それだけでいい。あたしの願いは、それだけだったのに。

死んじゃったんだ。

あのこは、一歳にもなれずに、死んじゃった。あたしが重い風か邪ぜをひいて、それがうつっちゃって、医術士は無能で、脳になん

だかがどうしたとか、手の施ほどこしようがないとか言われて。

　死んじゃったんだ。

　あたしも死んじゃおうかと思った。

　でも、これは本当。嘘うそじゃなくて、少なくとも、あたしにとっては本当の話。致ち死し量りようの睡すい眠みん薬やくを飲んで、手首の静じよう脈みやくぶち切った左手をバスタブに突つっこんで眠ねむりこんだあたしの夢のなかに、あのこが出てきて、ママ、死んじゃダメ、って、はっきり言った。言葉じゃなくて、心で伝えてくれた。そっか──と、あたしは思った。死んじゃダメか。そっかそっか。ベイビー。あんたがそう言うならしょうがない。ママ、生きるよ。生きてみせるよ。あたしが夢うつつでそうつぶやいているところを、部屋に踏ふみこんできた同僚のこが発見したらしい。ていうか、あんた死にかけてるじゃん、と、そのこが叫さけんだ声を、ぼんやりと覚えている。まあ、そうだったんだけど、あたしは生きた。出血なんかより薬のほうがかなりやばかったみたいだけど、なんとか生きのびた。ステラを引きとったのは、その一年くらいあとだったっけ？

　当時のあたしは、すっかり姉あね御ご肌はだで、誰からも頼たよられる女だったから、年上の同僚の頼たのみを断ったりしなかった。ちょっと田舎いなかにさ、帰ってこようと思ってさ、その間、ステラ、預かってくれない？　いや、あんたくらいしか、頼める人、いなくてさ。あたしは二つ返事で引き受けた──けれど、正直、あ、こいつ、ばっくれるつもりかな、と、内心、疑っていた。でも、ま、いっか、という気持ちがどこかにあったんだと思う。

　情けない話だけどね。ママはさみしかったんだよ。生きてみせるとあのこに誓ちかったものの、やっぱり、心にできた隙すき間まに吹ふきこむ風はつめたかった。同僚と飲み歩く回数も増えたし、母さんとはまた疎そ遠えんになっちゃったけど、姉さんたちともよく遊んだ。一人でいるのがつらかった。それで、つい。それに、こども一人くらい、どうってことない──と思ったんだけど。

　手のかかるこだった。ジョルジュ。ラッチャ。ルカ。リク。テッド。アンナ。ミミ。一番最初だったせいもあるだろうけれど、誰と比べても、ステラには手を焼いた。「この売女ばいた！」とか「娼しよう婦ふのくせに！」とか、その程度はいいとしても、「メスブタ！　さわるな！」とか言われると、さすがにズキッときた。物も

結構壊こわされた。あたしも口は達者なほうだし、本当は言い返したかったけれど、言ったら止まらなくなるから、ぐっとこらえた。かわりに、あてつけるみたいに仕事をきっちりやって、遊びは控ひかえた。あえてやさしくしてあげた。意地の張りあいだった。ステラが折れて、泣いて謝ってきた夜は、勝った、と思った。途と端たんに、ステラがかわいくてかわいくて仕方なくなった。ママ、こどもじゃないんだから、と、あのこに言われたような気がした。大人にならないといけないと思った。

　ジョルジュは気むずかしくて、素す直なおじゃないけれど、ひねくれている男の子は嫌きらいじゃない。昔、好きだった男もへそ曲がりが多かった。いつも家にいて、女たちを守っているつもりなんだろうけど、そういう気き概がいもかわいい。でも、あたしは黙っている。そうなんでしょ？　なんて、わかったようなことを言われたら、恥はずかしいだろうし。ジョルジュの母親はだらしなくて弱い人だったけれど、息むす子このことは大事に思っていた。ただ、どう大事にしたらいいか、わかっていなかった。あたしは賢かしこいから、ジョルジュをそっと見守ってあげる。ジョルジュも聡さとい男の子だから、何も言わなくても、迷いながら、つまずきながら、少しずつ前に進んでいく。

　ラッチャは、きかなくて、やんちゃだけれど、根がまっすぐで、曲がったことが嫌いで、基本的には人に好かれるタイプだ。ただ、融ゆう通ずうがきかないから、暴走しがち。とはいえ、しっかり目を見て話せば、ちゃんと聞いてくれる。

　テッドは、ラッチャと相あい性しようがいい。二人が別々だとうまくいかないことも、一いつ緒しよだと丸く収まる。だからこそ余計に、テッドとラッチャの喧けん嘩かが、一番要注意だ。ふだん仲がいいだけに、いったん仲なか違たがいすると、あとを引く。適当なところで仲ちゆう裁さいに入らないと、二人ともそのタイミングがつかめない。

　アンナは、ミミの面めん倒どうをよく見てくれる。引っ込み思案に見えるけれど、じつは気が強い。あの年で、言うべきことははっきり言う。もしかしたら、あたしよりしっかりした大人になるかもしれない。でも、本当は寂さびしがり屋だから、たまに甘えさせてあげる。たっぷり、抱だきしめてあげる。そろそろ、ミミの世話がアンナにとって負担になりすぎないように、ステラやルカに言って聞かせないと。たいへんだから。こどもの面倒見るのって。

それから、ルカ。

ルカは、絶対、すごい美人になる。あまり気にしていなくて、無む警けい戒かいだから、いろいろとあぶない。べつに、赤線の商売が悪いと思っているわけじゃないけれど、やっぱり、ルカにはさせたくないな。やらなくていいなら、やらないに越こしたことはないと思うよ。どうしてもやるっていうなら、止めないけど──いや、止めるかな。ルカは、自分に自信がなくて、ここにいてもいいのかってびくびくしてて、大だい丈じよう夫ぶって言っても信じない強ごう情じようっ張りで。そういう人間があの商売をやると、男がつける値段と自己評価を混同して、自分を見失う。ルカは、ルカのことを誰だれよりも大切に思って、大事にしてくれる人を見つけたほうがいいよ。あたしはそう思うな。人生の先せん輩ぱいとしてね。たいした先輩じゃないけど。

あと、リクは──正直、よくわからない。あたしは、リクの心にも、過去にも、踏みこめていない気がする。ひょっとしたら、リク自身も、まだ整理がついていないのかもしれない。裸はだかで海に流れついて、自分についてはほとんど何も語らない、リク。いつか、話せるといいね。あたしじゃなくてもね。誰かに。心、開いてさ。そうしたら、きっとお祝いしてあげる。

──あ。

無理か。

できないんだ。

もう、終わりなんだ。

残念。

考えてみたら、心残りがいっぱいあって。

あたしなりに精せいーいつ杯ぱい駆かけ抜ぬけた、二十八年。

あとちょっとで二十九年だった。

贅ぜい沢たくをいえば、もう少しだけ欲しかったな。

時間が、欲しかった。

　でも、終わりなんだ。

　もう、無理みたい。

　ごめんね。

　ママ、でも、がんばったよね。

　──そんなあたしの人生の、最後の最後に。

「母さん……！」

　と、呼ばれた。

　目が、勝手に開いた。

　今、母さん、って呼んだ？　あたしのこと？

　ジョルジュ……？

　ステラも？　ルカはそこにいる？　リクも？

　アンナは？　ミミは？　ラッチャ？　テッド？　みんな……？

　ああ。

「……それ……なんか……うれ……し……」

　うん。

　嬉うれしい。

　とっても、嬉しい。

　最高に嬉しいよ。



Omenage 897 10th revolution 28th day

サンランド無統治王国ジェードリ・赤線地区

〝unknown〟

chapter.15

嘘八百

彼は先まず偽いつわりの神に誑たぶらかされし愚おろかな者共を悉ことごとく殺させた。

其その後小さき火を方々に放つよう命じ哀あわれな罪の深い売春婦共を逃にげ惑まどわせた。

翌晩彼が熾おこさせた大いなる浄じよう化かの火は彼女らの売春宿を隅すみ々ずみまで焼き払はらった。

――〝預言者ザ・プロフエット〟ユーバー・マリックが、モトローリィの北西部に聖地ゲヘナを建設した際の記録には、たしかそう記されているはずだ。その手順を真ま似ねているのか、どうか。そんなことは知ったことじゃない。うちの大将がそうだと言うのならそうだろうし、そうじゃないと言うのならそうではないのだろう。そのあたりは俺の仕事じゃないからな、とヘンリー・ブラックモアは思う。信しん仰こうだの、正義だの、神だの、なんだの、そんなのどうだっていい。これはさすがにおおっぴらには言えないが、じつのところ、俺は無信仰だ。神は、そりゃあどこかにいるんだろうが、信じるとか、すがるとか、アホらしい。

だいたい、俺たち人間が蟻ありを踏ふんづけて、かわいそうだとか、哀れな連中だとか思うことはあっても、救ってやろう、連中の生活をもっとよくしてやろう、なんて考えるか？　よしんば考えたとして、何にも踏み殺されないように、柵さくで囲った蟻の王国でも作ってやるのか？　だが、蟻がどれだけいると思う？　数えるのも馬ば鹿からしい。

人間だってそうだ。腐くさるほどいて、どんどん殖ふえる。殺しても、殺しても、殖えやがる。もし、救いの神なんてのがいたとしたら、さぞかしたいへんだろう。救った先からどんどん生まれて、育ち、俺を救ってくれ私も救ってくれと泣き叫さけぶ。まったく休みのとれない重労働だ。いっそ、交代制にするか。交代してくれる物好きを確保するのも、骨が折れそうだが。

餓が鬼きのころ、蟻だの蠅はえだの蜻蛉とんぼだのをプチプチつぶしながら、俺もこいつらと大差ないんだろうな、と思ったものだった。ヘンリーは九人兄弟の八番目で、騎き士しの家だったが、父親があらゆる意味において無能で、しかも放ほう漫まんだったせいで、家計は逼ひつ迫ぱくしていた。家庭なんてものはなかった。

大おお袈げ裟さにいえば、そこは戦場だった。ヘンリーは両親や兄や姉たちに殴なぐられ、罵ののしられ、搾さく取しゅされて育った。何しろ相手は数が多く、弱者を虐しいたげることにかけては結けつ託たくするから、抵てい抗こうは難しく、むなしかった。反はん抗こうすれば、倍以上になって返ってきた。ヘンリーはやがて楽な方法を編みだした。

あきらめることだ。俺は虫と同じだと考えて、じっとしている。ストレスがたまって、どうしようもなくなったら、虫でも殺して憂うさ晴らしをする。そのうち、自分が馬鹿に思えてきて、どうでもいいような気がしてくる。

いや、そうでもなさそうだ──と、気づいたのは、晴れてトレイン公国聖堂騎士団の騎士になり、何回か本物の戦場を経験してからだ。最初は半信半疑だった。あれ？　ひょっとして、俺って有能？　まさか、と思った。

何せ、父親も、兄貴たちも、軒のき並なみ使えない。なんとか騎士になれた兄は一人だけで、あとは商売に手を出して失敗して借金を作って行方ゆくえをくらまし、姉は結けつ婚こん離り縁えんを繰くりかえして餓鬼だけ何人もこさえ、違い法ほう賭と博ばくやら違法薬物所持で逮たい捕ほされた馬鹿兄貴もいて、四番目の兄にいたっては、つるんでいたチンピラに殴り殺された。癇かん癪しゃく持もちの母親は、いつも些さ細さいなことで大暴れして泡あわを吹ふいて倒たおれ、とうとうくたばった。

そんななかで育って、俺だけは違ちがう、なんて信じることはできなかった。

俺が人よりいくらかすぐれているとしたら、せいぜい、嘘うその巧たくみさくらいか。

ところが、いまわしい親おや譲ゆずりの見み栄えっ張りと、本当の現実と自分が信じたい現実とのギャップを埋うめるための方便として、磨みがきをかけてきた、口八丁。それに、自分でも気づかなかった手八丁が加わって、あきらめが転じた怖こわいもの知らずが作用すると──驚おどろいたことに、軟なん弱じゃくな騎士たちを威い勢せいのいい言葉で鼓こ舞ぶし、平気で上司にごまをすり、女たちを口説いて、敵を出し抜ぬき、先頭切って突とつ撃げきして、切り崩くずし、殺しまくる、将来有望な若き聖堂騎士が誕生した。血筋には少々難ありだが、そのぶん強力な後ろ盾だてを欲ほっしてい

るはずだと、有力な騎士が次々とヘンリー・ブラックモアにすりよってきた。当時、トレイン公国は、ファー・セルジナ王国との泥どろ沼ぬまの戦争に足を突つっこんでいて、強い騎士が求められていた。そんな時代の風もヘンリーに味方した。人当たりがよく、腕うでが立ち、人望も厚い、嘘つきヘンリーは、引く手あまただった。

ただ、それだけに、嫉しつ妬とも買いまくった。誰だれが手を回したのか知らないが、おかげで、五巡じゅん月げつの間に九千人の死者を出したトーロク山さん岳がく戦では、騎士団一の変人として有名だったある騎士の副官に任命され、囮おとりや強きよう襲しゅう偵てい察さつなどのやばい任務を何度もやらされた。

それ以来、その騎士とは切れずに、今もこうして文字どおり轡くつわを並べているのだから、人生、わからないものだ。

──元トレイン公国聖堂騎士団東騎士館一等騎士。

現在は、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの団長グランドマスター。

アロンズ・ニードルスピア。

洗礼名に騎士の敬けい称しょうをつけて、サー・ジューダスとも呼ばれる。

昔はよく「静せい謐ひつなる顔がん貌ぼうの裏に狂きよう気きを秘ひめ……」などと評する者もいたが、なんということはない。ようするに、激しく純じゅん粋すいすぎる信仰心と、戦場での無む慈じ悲ひで強きよう烈れつな戦士としての顔をうかがわせない、かなりの美男子なのだ。

鞍くらには〝壮絶なヒロイツク復讐の槍・アヴエンジヤー〟、別名〝長大ロンなる槍ギヌス〟。

身にまとうは〝血の鎧ブラツドアーマー〟と〝執行者のエクスキユーシヨ陣羽織ナーズ・タバード〟。

背中には〝裏切りペトレイヤーズ者の刃・フアング〟。

乗馬は美しい黒くろ鹿か毛げの堂々たる稀まれな巨きよ軀くを誇ほこらしげに進める、アバドン。

アバドンの馬うま鎧よろいには、特とく殊しゆな装具が据すえつけられていて、そこに巨きよ大だいな十じゆう字じ架かが斜ななめに立てられている。

見ようによっては、まるでサー・ジューダスが十字架を背負っているかのようだ。

その十字架に掛かけられた女の罪ごと。

女はフードがついた黒と白の僧そう服ふくを身にまとい、わずかに顔面のみ肌はだが露ろ出しゆつしている。

彼女の両目は、きつく縫ぬいあわされていて、けっして開くことはない。

その罪ゆえに。

彼女はみずからこう名乗り、また呼ばれている。

〝罪深い女ジ・アンゴドリイ〟、あるいは、〝罪そのザ・ものシン〟、と。

「……罪、ねえ」

ヘンリーはひっそりとつぶやいて苦く笑しようし、すぐにそれを押し隠かくした。

罪。

罪。

罪、か。

正直、ヘンリーは罪を自覚したことなど一度もない。もちろん、重病の女によう房ぼうを殺しただとか、非ひ戦せん闘とう員いんを強ごう姦かんして略りやく奪だつして殺して後こう悔かいしたとか、たまに若い連中にしてやる話も、すべて嘘っぱちだ。女とはずいぶんつきあったが、結けつ婚こんなど考えたこともないし、女は快楽をともにする遊び相手で、愛を捧ささげる対象ではないと思っている。また、トレイン公国聖堂騎士団には、異教徒の強姦、略奪、殺害をよしとする空気がたしかにあったものの、有力者たちと交際以上の交際があったヘンリーは、金には困っていなかったし、

女にも不自由していなかった。その気になれば、浮うわついた「愛」とやらがこもった愛あい撫ぶをいくらでも受けられるのに、どうして泣き叫さけぶ女を無理やり犯おかす必要がある？　それが趣しゆ味みで性せい癖へきだといわれれば納なつ得とくするしかないが、ノーマルな性的嗜し好こうしか持たないヘンリーには縁えんのない話だ。

　ちなみに、今まで他人に披ひ露ろうしてきた作り話を数えたら、たぶん百や二百ではきかないだろうが、そのことで罪悪感を覚えたこともない。ばれそうな嘘は、さらなる嘘で補強して、あらを隠すために、もっと嘘をついて──そんなことをやっているうちに、自分でもなんだか本当らしく思えてくるものだ。何年も前の話になると、虚きよ偽ぎだという証しよう拠こを探すほうが、かえって難しいくらいだ。

　サー・ジューダス。

　アロンズ・ニードルスピア。

　いったい何を考えて、俺みたいな男を重用しているのか。

　どうやら、信しん頼らいされているらしいことはわかるが、サー・ジューダスの心のうちは推おしはかれない。しゃべることはすべて確信に満ちているものの、ふだんはとにかく物静かな男だ。十年つきあっても、底が知れない。

　ただ、一言だけいえることがあるとすれば──この男は、神懸かっている。

　聖堂騎士団で、またロシュ聖教トレイン公国教会で、はたまたゲヘナ騎士団で、そしてロシュ聖教の総本山、大聖堂カシードラルで、多くの聖職者や騎士を見てきたが、この男ほど「神に近い」と感じる者はいなかった。信心のきわめて薄うすいヘンリーにも、それは一いち目もく瞭りよう然ぜんだった。火の日曜日に大聖堂カシードラルを焼き討うちしたあと、その印象はさらに深まった。あのとき、サー・ジューダスは大だい胆たんにも〝真のザ・リ預言者アルワン〟を自じ称しようしたが、非難する者は絶無だった。ヘンリーは、そうきたか、と思っただけだったが、信心深い連中は一いつ斉せいに涙なみだを流し、二代目にして真の預言者の前にひれ伏ふした。ロシュの教えに従って、世界に完全な救済をもたらすべく、血塗れブラツド聖堂テンプル騎士団ナイツが生まれた瞬しゆん

間かんだった。

　今、そうして誕生した血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの、全員ではないにしても主要なメンツのほとんどが、〝罪そのもの〟を背負ったサー・ジューダスに付き従っている。

　左に、ヘンリー・ブラックモア。嫌きらいな呼び名ではあるが、サー・アンドリューとも呼ばれる。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ東騎士館長。三十七歳独身。

　右に、ロイ・チャーチル。サー・ピーター。同西騎士館長。すらりとした金きん髪ぱつ碧へき眼がんの二十九歳。いつも笑えみを絶やさない、涼すずしげな目め許もとの優やさ男おとこだ。見てくれどおり家いえ柄がらがよく、ゲヘナ騎士団の一等騎士だったが、サー・ジューダスの信しん仰こう心しんに胸を打たれたとかいって、大聖堂カシードラルではいろいろと便べん宜ぎを図はかってくれた。まあ、結果的には、大聖堂カシードラルと、その守護者であるゲヘナ騎士団を裏切ったわけで、用心の意味もこめて、ヘンリーは心底から信用はしていない。ただ、ゲヘナ騎士団からの合流組の統とう率そつには、一役も二役も買ってくれている。貴重な人材であることは間ま違ちがいない。

　それから、後ろに、リリアン・イヌテロ。サー・フィリップ。同副団長兼けん中央騎士館長。暗黒大陸出身の三十四歳。この黒い肌の男とも、七年ほどのつきあいになる。万ばん事じ控ひかえめなやつだが、気心が知れているし、器用だし、感情で判断を曇くもらせることがないので、ヘンリーが副団長に推おした。イヌテロがやらなければ、ヘンリーがやらざるをえなかっただろうから、文句を言わず引き受けてくれたことには感謝している。また、よくやってくれてもいる。あとは、時折にこりともせずにオヤジギャグを吐はく癖くせさえなければ、完かん璧ぺきなのだが。

　そして、これに加えて、選えり抜ぬきの騎士、十五名。内訳は、東騎士館から十名に、西騎士館からは三名、中央騎士館の者が二名だ。

　血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの騎士たちは、闇やみのなかを無言で進んでゆく。

　といっても、目立たないようにとか、音を立てないようにとか、特別の気き遣づかいは一いつ切さいしていない。だいたい、サー・

ジューダスやヘンリーら、貴重だったり上等だったりする鎧よろいを着用している一部の者をのぞいて、騎士の鎧よろい兜かぶとはガチャガチャうるさいし、馬の息づかいや蹄ひづめの音もやかましい。街中で隠おん密みつ性を重視したいなら、重装備で騎き乗じようするなど愚ぐの骨こつ頂ちようだ。たまに行き違う者や家々から顔を出す者がいて、不ふ審しんがられようが、驚おどろかれようが、気にせずとにかく前進する。脇わき目めを振ふらず、だが急がずに、ひたすら粛しゆく々しゆくと目的地へと向かう。

　すべてサー・ジューダスが決めたことだ。何せ、〝真のザ・リ預言者アルワン〟のおっしゃることなのだから、従えば必ずうまくゆくはずだし、そうならなければならない。

　だから、無茶でもなんでも、どうにかして実現させる。聖堂騎士団団長以下、二百名の聖堂騎士、文官武官を惨ざん殺さつした〝血のブラッディ水曜日・ウエンズデイ〟も、大聖堂カシードラルとともに腐ふ敗はいしたロシュ聖教の体制を焼失させた〝火のバーニング日曜日・サンデイ〟も、そうやってなしとげた。これから始まる第二のゲヘナ建設も、きっと成功する。絶対に、させなければならない。

　それがヘンリーたちの仕事だ。やりがいのある、ときにありすぎて困るくらいの、おもしろい仕事だ。しかも、やりとげた暁あかつきには、このくだらない、幼いころにとっくにあきらめた世界が、きれいになるのだ。

　国のためだとか、神がどうしたとか、信仰だとか、愛だとか、家族だとか、所しよ詮せんすぐに忘ぼう却きやくの彼方かなたへと追いやられる一時の快楽のためなら、すべてがむなしい。俺には、独特な目標が必要だ。心底から楽しむためには。たぶん、そのために、俺はサー・ジューダスにくっついている。俺はやつから離はなれない。離れられそうもない。死が、俺の罪とやらを浄じよう化かするまで。

「止まりなさい」

　やわらかくて低く、やたらと耳ざわりのいい、けっして音量は大きくないが、なぜかよく通る声だ。サー・ジューダスが右手をあげると、アバドンが足を止めた。

　ここから少し行けば、金と色情が入り乱れる赤線地区──隅々まで

焼き払われるべき売春宿がひしめく一帯だ。

　二十三時。

　機術の産物である、けばけばしいネオンサインが目に痛い。

　赤線地区で働く男女の多くが、ベアフット地区の貧ひん困こん層出身だということは、調査にあたった東騎士館長のヘンリーだけでなく、サー・ジューダスも、他の幹部たちも知っている。あの街をとりしきっているパンカロ・ファミリーの内ない偵ていは、主にロイ・チャーチル率いる西騎士館の担当だが、彼らが弱者救済めいた活動に励はげんでいる事実もすでに把は握あくしていた。

　ベアフット地区の住民にとって、パンカロ・ファミリーは、少なくとも敵ではない。それどころか、ファミリーの長、エンツォ・パンカロは、パパ・パンカロと呼ばれ、尊敬さえ集めている。赤線地区の店も、ピンキリだが、まあ、大半が非常識な価格設定ではない。サービスの質もいい。さすがのヘンリー・ブラックモアも、腰こしを抜かすような斬ざん新しんな商売が多くある。さらに、金さえしっかり払えば、おかしなトラブルに巻きこまれることはまずない。サンランド無統治王国のお国くに柄がらを考えれば、奇き妙みょうなほど安全に遊べる歓かん楽らく街がいといっていいだろう。あえていえば、ひどく健全だ。おそらく、ユーバー・マリックが焼き払った売春宿とは、まったく似ても似つかないに違いない。

　だが、まあ、しょうがない、あきらめろ、とヘンリーは胸のうちでつぶやく。生きているだけで、罪深いらしいからな。聖なる炎ほのおに焼かれるがいいさ。

「その前に、か……」

　前方約十五メーテルに、スーツ姿の男たちが壁かべをつくって、行く手をさえぎろうとしている。おそらく、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの進軍を目もく撃げきした誰だれかさんが、パンカロ・ファミリーの者に知らせたのだろう。こっちは並足とはいえ騎き馬ばなのに、対応が早い。昨夜の件もあって、厳重な警けい戒かい態勢が敷しかれていたのか。男たちは、それぞれ得物を手に続々と集まってくるが、皆みなが皆ではないものの、やや及および腰ごしだ。それはそうだろう。喧けん嘩か慣れしていても、数でまさっていても、戦場で騎馬を相手にしたことがなければ、そんなものだ。

　それに――と、ヘンリーは、サー・ジューダスが背負っているかのような、巨きよ大だいな十じゆう字じ架かをちらりと見た。〝罪そのもの〟は、うなだれたまま、ぴくりともしない。ユーバー・マリックの傍ぼう系けいトトゥーア家に生を受けながら、不運にもある魔導師マジスタにさらわれ、魔ま術じゆつ士しに仕立てあげられて、ゲヘナ騎士団の魔ま女じよ狩がりに遭あい、処しよ刑けいされる寸前――特とく徴ちよう的な痣あざのせいで身元が判明し、死罪をまぬがれたという、数すう奇きな運命に翻ほん弄ろうされた女。モニカ・トトゥーア。

　悪名高い改心司教どもが、大聖堂カシードラルの氷結牢獄コキュートスで、彼女にどのような拷ごう問もんを加え、改心を迫せまり、いかなる手段で思想改造を行ったのか。それはわからない。かなりの美女だったらしく、今もそれはうかがえるが、綴とじられた瞼まぶたの奥の瞳ひとみはすでに光を失っているだろうし、まだ若い女の肢し体たいは見るも無む惨ざんな異形になりはてているという。さいわい、というべきか。僧そう服ふくのおかげで、むごたらしいその「罪の証あかし」は隠かくされているものの、女が十字架に掛かけられているというだけで、十分異様だし、衝しよう撃げき的だろう。こいつを見たら、そりゃあびびるよな。ふつうのやつは、まともじゃねえと思うだろうさ。実際、そのとおりだ。

　俺たちは、まともじゃねえんだよ。

「あの罪人たちを蹴け散ちらしなさい」

　サー・ジューダスの静かな命令を受けて、ヘンリーは鞍くらから騎兵槍ランスを外して右手に持ち、左手で盾たてを支えた。自然と、笑えみがこぼれた。そういや、騎士らしい戦せん闘とうは久しぶりか。まあ、あっという間にケリがつくだろうが、やっぱいいな。騎馬で徒歩カチを蹂じゆう躙りんするってのは、気分がいい。

「突撃用意Ready for charge.」

　ヘンリーの号令一下、ザッ、と、サー・ジューダス以外の全員が一いつ斉せいに槍やりを構える音がした。その瞬しゆん間かん、明らかに敵が怯ひるんだ。声ともいえない声を発して重心が後ろにかかる。背中を向けて逃にげだそうとする者もいる。所詮はチンピラか。たわいねえな。そう思い、下がりかけたテンションが、一気に持ちなおした。「ひがぁっ」逃げようとした男が一人、夜空に舞いあがったのだ。おい。どうやったらあんな飛び方するんだ？　意

表を突つかれて、眠ねむ気けが吹ふっ飛んだようなかんじだった。男をぶん投げたやつが、落ちてきたそいつを抱だきとめる──かと思いきや、今度はドカッとぶん殴なぐって、ズドンと足あし蹴げにして、グリグリ踏ふみつけた。いいけど、あれ、死んだんじゃねえの？

「この……どぅあほうどもがっ！　逃げんじゃねーっつーの、バカかてめーら！　見ろ、あの赤に黒十字！　こいつらオルソとか殺やりやがった連中だぞ！　火付けアカウマもこいつらだろ！　ケツまくろーなんて臆病者チキン野や郎ろうはこのオレがぶっ殺す！　オレに殺られるか、こいつらに殺られるか、どっちか選べや！」

　そこまで言われてずらかろうとする者は、さすがに一人もいなかった。

　それにしても、ごつい男だ。まだ若いようだが、度胸はありそうだし、スーツがパツパツで、すごい体をしている。あの肉体が見かけ倒だおしではないことは、すでに証明ずみだ。他の連中と違ちがって得物さえ持っていないのは、よほど自信があるのか、無む謀ぼうなのか、ただの馬ば鹿かか。まあ、確かめてみればわかることだ。ヘンリーは乗馬の腹を蹴って叫さけんだ。

「Ｃｈａａａａａａａａａａａａａａｒｇｅ……！」

　馬よ、走れ。走れ。とにかく走れ！　ヘンリーは女を愛することがないように、馬も愛さない。馬はよく走ればいい。怯おびえない馬であればいい。馬体がでかくて、従順ならなおいい。正直、俺が敵を突っ殺すためのいい道具になってくれるなら、豚ぶたでも山や羊ぎでも鼠ねずみでもかまわない。

　突撃は、サー・ジューダスをのぞく全ぜん騎きがほぼ同時に開始した。総勢十八騎とはいえ、道みち幅はばはせいぜい十メーテルほどしかないから、相手にしてみれば、津つ波なみが押しよせてくるようなものだろう。逃げるのはなんとか我が慢まんしても、どうしたって腰こしが引ける。戦場でも、歩兵が騎兵の突進を止めるには、十分な訓練とそれなりの備えが不可欠だ。やつらにそれがあるとは思えない。いや、絶対にないと断言してもいい。

　そんなときに、可能性の高低は別として、絶望的な不利をはね返すための手段が、一つだけないでもない。あのごつい男は、それをやった。

「──オレがチーロ・パンカロだぁっ！　夜よ露ろ死し苦く死にさらせ……！」

　やつは、向かってきたのだ。こっちに。ヘンリー・ブラックモアに。まっすぐ、ためらいなく、駆かけてきた。いいぞ。いい……！　そうこなくっちゃな！　お前みたいな敵は嫌きらいじゃない。ヘンリーは馬の腹を挟はさんでいる両足に力をこめて、微び妙みように進行方向を変えさせる。チーロ。そうか。チーロ・パンカロ。エンツォ・パンカロの三男か。そのチーロの真正面ではない。少しずらした。このままいけば、勇ゆう気き凜りん々りんの天あつ晴ぱれなチーロ・パンカロと、ギリギリすれ違うコースだ。実際、すれ違いそうだった。その間ま際ぎわだった。「──シュッ……！」ヘンリーは、口をすぼめて短く息を吐はきながら、騎兵槍ランスを突きだした。おおっ。手て応ごたえがねえ！　よけられた。速いな。というか、この速度でぶつかっていって、狙ねらいすまして繰くりだした騎兵槍ランスを、間かん一いつ髪ぱつでかわして脇わきに挟むなんてしゃれた真ま似ねは、そうそうできるもんじゃない。そうしてチーロは、ヘンリーを馬から引きずり落とそうとする。一瞬でやばいとわかった。力比べに持ちこまれたら、あっという間に負ける。ヘンリーはすかさず騎兵槍ランスから手を放して、腰から大刀を抜ぬいた。名めい匠しようダグラス・トゥースの作で、銘めいは「庸よう明めい」。道具に愛着はないが、聖堂騎士団にいたころ、ある騎士の奥方から贈おくられたこのモトロール刀は、もうずいぶん長く使っている。何しろ、やたらと頑がん丈じようで、べらぼうに斬きれる。ヘンリーは庸明の刀身の平で、馬の尻しりを叩たたいた。馬が竿さお立だちになりかけ、騎兵槍ランスを抱いて尻しり餅もちをついたチーロが素す早ばやく横に身を投げだしたところで、もう一度尻をぶった。

「待ってろ、お前さんはあとだ……！」

　馬が走りだして、立ちふさがる者をはね飛ばし、蹴け飛とばして、踏みにじった。馬上から庸明を振ふり下ろして人間の頭をかち割り、首を斬り飛ばして、思うさまに血肉をまき散らしても、刹せつ那なの快楽はすぐに消え去って、むなしさだけが残ると知ってはいる。だが、俺は──そう、白状するが、それでも俺は、戦いが好きだ。戦いは俺に向いている。餓が鬼きのころ、抑よく圧あつされた精神を慰なぐさめるために、自分より弱いものがいることを確かく認にんするために、安心するために、プチプチ虫をつぶしていた俺は、知らなかった。戦いくさで人間を殺して、ようやくわかった。

気づかされた。俺は戦いが好きだ。大好きだ。正確にいえば、戦いよりおもしろいことを、俺は知らない。戦場での命のやりとりに匹ひつ敵てきするほどのスリルは、快楽は、どこでも味わったことがない。

　数えきれない嘘うそをついて、女や金品を手に入れ、出世もある程度約束されていて、ようするに富と名めい誉よに祝福された未来を捨て、サー・ジューダスに荷か担たんしたのは、つまり、そういうことだった。

　あのころ、ファー・セルジナとの間に和平が成立して、大好きな戦争のにおいが、ふっと遠のいた。俺は内心、焦あせっていた。戦争。戦争。戦争。俺はもっと殺したい。戦って、殺して、殺しまくりたい。もちろん、誰だれにも言っていない。俺自身、ふだんは意識していない。たぶん、誰も知らないはずだ。もしかしたら、サー・ジューダスは見み透すかしているのかもしれないが。

　いずれにせよ、平和なんて冗じよう談だんじゃなかった。糞くそ食くらえだった。法も、秩ちつ序じよも、国も、神も、俺はいらなかった。俺が欲ほつしていたのは、戦いで、殺すことで、命を粉々に砕くだいたときの、否定しようがない、リアルな、夢にまで見る刺とげ々とげしい手ざわりの輪りん郭かくだった。

　サー・ジューダスの狂きよう信しんは、それを俺に約束してくれる。

　だから、離はなれない。離れられるはずがない。いってみれば、それが俺の罪ってやつか。

「転進Turn aboutッ……！」

　敵を存分に轢ひき殺し、突つき飛ばし、斬り殺して、すべて追い抜いたあと、ヘンリーは庸明を振りあげて馬を止め、回れ右をさせた。ロイ・チャーチルやリリアン・イヌテロら、他の騎士たちもそれに倣ならった。さすがに選び抜かれた精せい鋭えいたちだ。ざっと見たかぎりでは、主あるじを失った馬が一頭走りまわっているだけで、それ以外に損害はない。対して、敵はもう崩ほう壊かいしつつある。が、まだだ。まだやつがいる。

　──チーロ・パンカロ。

ヘンリーは盾たてを捨て、左手で手た綱づなを握にぎった。

チーロは、ヘンリーの騎兵槍ランスを手に、仁に王おう立だちして、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの精鋭をにらみつけている。足あし許もとには轢れき死し体たいや斬ざん殺さつ体たいがごろごろ転がっていて、なんとか生きている十人かそこらの手下たちがそのへんをよろよろしているが、一いち瞥べつもくれない。しかも、やつは、敵を、俺たちを憎ぞう悪おして、激げき怒どしながら━笑ってやがる。心底から楽しそうに。この異常者め。

そんなに俺を喜ばせてどうするつもりだ。

「やつは俺にやらせろ！　Ｃｈａａａａａａａａａｒｇｅ……！」

手綱で合図を送る。鐙あぶみを蹴ける。剣けんの平で尻を叩く。あらゆる手段で急せかされた馬は、跳はねるように駆けだした。チーロ・パンカロ。さあ、どうする。どう出てくる？　いくつかの予想が頭をよぎり、そのうちいくつかが否定され、すぐにぜんぶどうでもよくなった。こい。行くぞ。あと十メーテル。五メーテル。「━ははははッ……！」そうか。そうきたか。チーロは騎士ではちょっと考えつかないような騎兵槍ランスの使い方をした。突くのではなく、ぐっと体勢を低くして、振りまわしたのだ。馬の足をすくう気か。いや、叩き折るつもりか。どっちにしても、黙だまってやられてやる義理はない。ヘンリーは手綱を引いて、馬を竿立ちにさせようとした。あれ、と思った。なんかさっき、同じようなことしたよな？　なんとなくだが、分類するとしたら、悪い予感がした。あたった。読み違ちがえだった。チーロはただ騎兵槍ランスを振りまわしたのではなかった。投とう擲てきの準備動作だった。横投げだ。騎兵槍ランスが猛もう回転して襲おそってくる。バキンと音がした。なんだ？　何かが折れる音か。たとえば、骨とか。「おおっ……！」落馬は久しぶりだったが、むろん、初めてではない。体が勝手に動いて、受け身をとり、即そく座ざに起きあがろうとした。

「━どぁっ！」

殴なぐられた？　それとも、蹴られたのか？　わからなかった。速いな。人間っぽくねえ。地面に倒たおれこみながら、ヘンリーはそんなことを考えていた。そして、すぐそばを駆かけて抜ぬけてゆく馬ば蹄ていの音を聞きながら、突とつ貫かんで頭の切り替かえ作業を行った。地べたを這はいずって、騎士も何もないもんだ。騎士

ごっこはもうやめだ。ヘンリーは立ちあがる前に庸明を振るって、チーロの足首を狙ねらった。これは軽々とよけられたが、片かた膝ひざ立だちになる時間は稼かせげた。立つまでは無理だった。チーロはやはり速かった。矢や継つぎ早に突きだの蹴りだのを繰くりだしてきて、ヘンリーの不十分な体勢からの斬ざん撃げきはことごとくよけられた。この喧けん嘩か上手は天性か。素す手でなのに刃は物ものをまるで恐おそれていないのは慣れか。もしかして、負ける？　まさか。いや。負けるな。やつはむかつくほど若くて、俺はもう若くない。それに、俺は重い。鎧よろいが重い。

「とんでもねえやつだ……！」

「ぎゃはっ！　てめーは弱よえぇな！　オレのクソ兄貴のほうがまだ強つえぇ！」

「──そいつは……！」いい話を聞いた。ヘンリーはチーロの回し蹴りをかいくぐって地面に転がり、右籠こ手ての留め具を外した。さらに、踵かかと落おとしから逃のがれて、庸明を左手に持ちかえ、左籠手も外した。そこで、なぜだか追撃がやんだ。

　少し離れたところで、チーロは首をポキポキ鳴らしながら、待ってくれている。

　アホだな。こいつはアホだ。たぶん、もうなんのために戦っているのかさえ忘れているだろう。ヘンリーは立ちあがって手早く鎧を脱ぬぎ捨て、庸明の柄つかを両手で握った。まあ、俺だって他人のことは言えないが。

「後こう悔かいするなよ」

「いいからこいって」

「餓が鬼きが」

　ヘンリーは三歩で距きょ離りをつめ、チーロの顔面めがけて突きを放った。チーロは首を曲げてかわそうとしたが、頬ほおがズバッとえぐれた。チーロの驚おどろきと歓かん喜きが伝わってくるようだった。俺も嬉うれしいし、楽しいよ。しかも、これで終わりじゃない。切っ先をずらしながらの、突き三連。高価で軽くて動きやすいとはいえ、鎧を着たままではできない芸当だ。突きはすべてチーロの顔面を少しずつ削けずった。三発目は骨まで達した。それでの

けぞり気味になったチーロの左足を踏ふんづけ、動けなくして、首を刎はねてやろうとしたが、やつの瞬しゅん発ぱつ力りよくのほうがまさった。チーロはとっさに体を倒して回転させながら、右足でヘンリーの右みぎ膝ひざを蹴り砕こうとした。ヘンリーは下がるしかなかった。下がって、すぐまた前に出た。ちょうど背中を向けているチーロの脳天を狙い、前に飛んで逃れて振ふり向いたところを逆ぎやく袈け裟さに斬きり上げた。感かん触しよく的に、これはかなり惜おしかったが、チーロは怯ひるむどころか、皮ひ膚ふ一枚斬らせて体ごと突っこんできた。「ウラァァッ！」「──馬ば鹿かめ！」身軽になったヘンリーは、だが、慌あわてず騒さわがず、弧こを描えがくように移動して、きれいにチーロの体当たりをかわした。すれ違いざまに、やつの首筋を狙って横よこ薙なぎに庸明を振るった。もうちょっとだった。斬ったが、浅い。頸けい動どう脈みやくは結構深い場所にある。ただ、もう少しだ。届く。勝てるな。体を軽くして、同時に鎧を着ることによって生じる心理的なルーズさを捨てたおかげで、ほんのわずかの差だが、天てん秤びんがこっちに傾かたむいた。その優勢を、慢まん心しんではなく、勝利につなげるための方法も、経験が教えてくれる。やつを、のんでやる。

「スウウゥゥゥ……！」

　必殺の技わざ。呼吸法。そんなものはない。ようは、自己暗示だ。これで決める。絶対に決められる。その確信が、相手にとっては絶大な脅きよう威いとなる。ヘンリーは庸明を上段に構えるなり、チーロにつめよった。準備するいとまは与あたえなかった。必ず一刀両断する。気合いも力も速度も完かん璧ぺきだった。庸明は最短距離でチーロの頭頂部に吸いこまれた。そう見えたのに。嘘うそだろ？

「──へっへっへっ。嘘だろ、みてーな顔してやがんな？」

　そりゃそうだろ。あたりまえだ。物の本で読んだことはあるが──真しん剣けん白しら刃は取り、ってやつか。頭すれすれの位置で、両手で剣をがっちり挟はさんで、止めるなんて。やっぱり、こいつはアホだ。真性の、アホだ。どえらい、アホだ。

「これやんのは二回目だからよう。前よりもうまくいったなあ」

「……そうかよ」

「そうなんだよ──っと！」

完全に気が抜けていたせいで、がらあきになっていた股こ間かんに、重い蹴りをズドンと食くらった。痛いとか、息ができないとか、それもあったが、こりゃつぶれちまったかな、と思った。ていうか、死ぬのか。呆あつ気けねえ。まあ、いいか。ところが、身体からだは心を裏切って、うずくまっても、すぐに起きあがろうとする。庸明はチーロに奪うばわれたが、そこらに転がっていた長刀を拾って、最後まで悪あがきしようとしている。死にたくねえ、とか、そういうのはないはずなんだが。

「んじゃ、死ねや、オッサン」

いやだよ。

──だが、庸明を振りあげるチーロを仰あおぎ見るくらいが関の山だ。情けねえな。舌打ちも満足にできやしない。ヘンリー・ブラックモア三十七歳独身恋こい人びと募ぼ集しゅう中ちゅうもこれまでか。でも、何か変だ。遅おそい。まだか。チーロは、庸明を突つきあげるように構えたまま──止まっていた。いや、顔をしかめて低く呻うめきながら、小刻みに震ふるえている。その腹部から、斜ななめ下を向いて、何かが飛びだしていた。あれは──騎兵槍ランス？　誰だれかが投げたのか？　そう思った瞬間、また身体のやつが勝手に動いた。

ヘンリーの身体は、長刀でチーロを右から左に斬り上げようとしたらしかった。いや、インチキくさい心身二元論を持ちだして、自己弁護するようなみっともない真ま似ねは、ここまでだ。戦い慣れたヘンリーは、自分の危機を認にん識しきしたうえで、敵の隙すきを察知し、条件反射のように相手を殺そうとした。それだけの話だ。

もっとも、火事場の馬ば鹿か力ぢからというやつか、悪い斬撃ではなかったが、目測はかなり狂くるっていた。チーロもなんとか反応して、庸明でヘンリーの長刀を防ごうとした。手を、出した。その右手首から肘ひじの間くらいに、長刀がすうっと食いこんで、思いがけず、きれいに斬れてしまった。ほとんど抵てい抗こうを感じなかった。切断された右手が地面に落ちた。そのあとのチーロ・パンカロが傑けつ作さくだった。

「うわ、やべっ」

やつは血が噴ふきだす右手の切断面を見てそうもらすと、腹に突

き刺ささった騎兵槍ランスが多少邪じゃ魔まそうではあったが、近くの細道に全力疾しっ走そうで逃にげこんだのだ。ヘンリーは思わずやつの右手を拾って、その背中に「おい、忘れ物だぞ」と声をかけそうになった。さすがに、やめておいたが──チーロの右手を投げ捨て、股間を押さえてぴょんぴょん跳はねながら、機き嫌げんはかなり斜めだった。チーロ・パンカロとの一いつ騎き打うちにうつつを抜ぬかしている間に、すっかり仕事が終わっていて気まずかったし、涼すずしい顔で近づいてきた命の恩人が、「大だい丈じよう夫ぶですか」などと見ればわかることを訊きいてきて、腹が立った。

「すまんな、サー・ピーター」

「いいえ、サー・アンドリュー。このようなところで東騎士館長を失うわけにはゆきませんし、罪ある者の勝手ながら、私個人としても、あなたには死んで欲しくありません。ところで、これまでも何度か申しあげていることですが、私のことはどうかロイとお呼びください。できれば、親しみをこめて」

「そいつは無理な相談だ」と言いたいところだったが、ぐっとこらえた。

「覚えておこう。なにぶん、頭が悪いから、忘れちまうかもしれないがな。そのときは、大目に見てくれよ、ロイ」

「はい、サー・アンドリュー」

　ロイ・チャーチル。何を考えているのか読めない野や郎ろうだ。さっき、かなり離はなれた場所から騎兵槍ランスを投げて命中させた手並みからもわかるように、腕うでは立つし、物もの腰ごしはやわらかいし、部下の掌しようあく握もうまいのだが、どうも不信感がぬぐえない。だいたい、顔がよくて、家いえ柄がらもよくて、能力もあるというだけで、十分うさんくさいのだ。そのうえ、嫌きらわれているとわかっているくせに、「できれば、親しみをこめて」などといってのける。まったく、しぶといというか、図太いというか、いやみたらしいというか、なんというか。

　だが、そんなやつも、あんなやつも、こんなやつも巻きこみ、あるいは踏ふみにじって、〝計画〟は進行する。

　血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの騎士たちがあけた血染めの道を、サー・ジューダスを乗せたアバドンがゆっくりと前進

してゆく。

　十じゆう字じ架かに掛かけられた〝罪そのもの〟が、ようやく顔をあげた。

　とはいえ、むろん、彼女の瞼まぶたは縫ぬいあわされていて、その目で何かを見ることはできない。それだけでなく、手首、足首と首、腰こし、胸に金属製の枷かせをはめられて、ほとんど身動きがとれない。だが、本当は、そんな緊きん縛ばくに、たいした意味はない。実効がない。彼女はみずから望んで十字架にその身を縛しばりつけているのであり、誰かが強制しているわけでも、その必要があるわけでもない。

「〝罪そのもの〟よ」

　サー・ジューダスが馬上で上半身だけ振ふり向かせ、十字架を右手で握にぎった。ただ、握るといっても、十字架は手がちゃんと回るような太さではない。手を添そえた、といったほうが正しいかもしれない。

　そんな状態から、あの巨きょ大だいな、何キルグラハムあるか知らないが、とにかく大きさは人間の倍以上ある十字架を持ちあげてしまうなんて、どう考えてもおかしい。

　しかも、サー・ジューダスは十字架を軽々と投げてみせた。

　十字架はゴオッと音を立てて飛び、五メーテルほど先に突き刺さった。

「汝なんじのなすべきことをなして、〝計画〟を援たすけなさい」

「仰おおせのままにいたします」

〝罪そのもの〟は、罪ざい業ごうのうれいをふくみ、禁きん忌きにふれた魔ま女じよの涙なみだに潤うるんだ声で答えた。ヘンリーたちは、サー・ジューダスの後ろに列をなして、そのときを待った。見れば、道の向こうから、パンカロ・ファミリーの者とおぼしき男たちが駆かけてくる。だが、遅い。いかにも遅すぎる増ぞう援えん部隊だ。残念ながら、彼らは間に合わない。〝罪そのもの〟の歌が始まってしまった。それは、共通語ではない。無む駄だな多様性を誇ほこる上古ハイロ高位語メオンから派生したという、各地の地域言語とも違ちがう。では、なんなのか。ヘンリーにはわからない。

当然、意味も不明だ。

　ただ、美しく、聞く者の胸を揺ゆさぶる声で、〝罪そのもの〟は切々と何かを訴うつたえかけている。そのことだけはわかる。それは、清純ですらあるのに、なぜか男の欲情をそそってやまない、哀あわれな、へりくだった、すべてをなげうった、希求の歌だ。

　それに、こたえるものがあった。

　別の声だ。

　こちらもまた、じつに麗うるわしい。少々高すぎるが、女の美声だ。ただ、布か何かを一枚通しているかのように、くぐもって聞こえる。やはり意味不明で、歌のようでもあるが、それにしては抑よく揚ようがやや少ない。彼女は唱えているかのようだ。ロシュ聖教においては禁忌とされる、魔術の呪じゅ文もんを。しかし、誰だれが？　〝罪そのもの〟以外の、何ものが、どこにいて、呪文を詠えい唱しようしているのか？

「主に忠誠を誓ちかう罪ある者たちよ。せめて、目を伏ふせていてあげなさい」

　サー・ジューダスの命令には、従わざるをえない。ヘンリーはそっと目をつぶった。閉じた瞼の向こうで、何かが生まれ、何かが起こりつつあった。二人の女の声はどんどん高まってゆき、絡からみあい、とけあって、ついには区別がつかなくなった。

　引きちぎれて、はじけ飛び、壊こわれる音がした。

　始まった。

　男たちはそれを目もく撃げきしたのだろう。悲鳴があがった。熱風が押しよせてきた。瞼の裏が、さあっと深しん紅くに染まった。熱くて、思わず目を開けてしまった。見てしまった。二度目だから、さほど驚おどろきはしなかったが──つっても、やっぱ、すげえな。十字架の向こうでこちらに背中を向けている巨大な生き物を見て、ヘンリーは短く笑った。ていうか、あれ、生き物かよ？

Omenage 897 11th revolution 1st day

サンランド無統治王国ジェードリ・赤線地区
〝パンカロ家〟

chapter.16

血には血を

父の稼か業ぎようが好きかと訊きかれれば、首を横に振らざるをえない。

それでは、父を愛しているか？

答えは「もちSi', ろんSi', だSi'」。ウーゴ・パンカロは、物心がついてから、父に対する崇すう拝はいに近い尊敬の念を片時も忘れたことはないし、それを疑ったこともない。

だったら、長男として、父の跡あとを継つぐか？

──できない。不可能だ。父と自分とは違いすぎる。

ウーゴはずっと思ってきた。私は、何か大事なものを母の胎たい内ないに置き忘れて生まれてきたのに違いない。それは、おそらく、他ほかの誰のせいでもない。私のせいだ。すべて私の過失だ。

私は父を、母を失望させ、弟たちのよき手本になることもできなかった。私は自分を責めたが、その重みにも耐たえられず、結局は音楽や絵画の世界に逃にげこんで、ひ弱な心を慰なぐさめる方法をそこに求めた。上の弟は、狭きよう量りようだがそれなりに優ゆう秀しゆうで、長ちよう兄けいの仕事を肩かた代がわりしてくれた。下の弟は、きわめて乱暴だが情愛深く、侮ぶ蔑べつしながらも、一応、長兄を足あし蹴げにはしないでくれた。母はあくまでやさしかった。父は早々にあきらめてくれた。

だから、このままでよいのだと思っていた。たまに、どうしても父や弟たちの手が回らないときに、手伝いくらいはする。最近は、カルロ・ボッシがずいぶんよくやってくれているから、そのような役回りを引き受けることも減った。私は下手な絵でも描かいていればいい。耳みみ汚よごしのピアノを弾ひいて、弟たちに馬ば鹿かにされているくらいがちょうどいい。私が役立たずだということをのぞけば、我がファミリーはおおむね順風満まん帆ぱんだ。パンカロ・ファミリーに栄光あれ。願わくば、パパ・パンカロよ、永遠なれ。私は人生の終わりまでに、我がファミリーの繁はん栄えいを讃たたえる曲を作ろう。その曲だけは、どうかいくらかマシな出来でありますように。

だが。

　ところが。

　ああ、なんたることだ……！

　焼け落ちた建物の痛ましい残ざん骸がいが目に入るたびに、胸がつまる。あちらを見ても、こちらを見ても、どこを見ても、むしろ無事な建物のほうが圧あつ倒とう的に少ない有様だから、この胸はつまりっぱなしだ。焦こげくさい空気が目にしみて、空の色までくすんでいるように思われる。

　かつて、この街は、エルデンのクァラナド歓かん楽らく街に匹ひつ敵てきする無法地帯だった。

　赤線地区の呼び名は、その昔、コルネオ・ファミリーとチッチオ・ファミリーが、熾し烈れつな縄なわ張ばり争いのなか、建物の外がい壁へきにそれぞれのシンボル・カラーで線を描いて所有権を主張し、最終的に「赤のコルネオ」が勝利したことから生まれた。だが、そのあとも、ひっきりなしに新たな勢力が台頭して、いがみあい、抗こう争そうし、勝っては敗れ、誰かが誰かにとってかわった。エンツォ・パンカロが赤線地区全域の支配権を確立したときは「奇き跡せきだ」といわれた。「まあ、三日天下だろう」とも。

　実際、父の首を狙ねらう者は大勢いた。父はあらゆる手段で襲しゅう撃げきされ、何度も死にかけた。それでも父は生き残り、勝ちつづけて、赤線地区に秩ちつ序じよを築いた。中心部の老ろう朽きゅう化かした建物を次々と改築し、けばけばしくて猥わい雑ざつだが陽気な街並みに変えた。

　ウーゴは、父が心血をそそいでつくりあげた赤線地区が好きだった。そこで働く女たちの愚おろかさと賢かしこさと、明るさと哀あい愁しゅうと、さまざまな強度の気高さと卑ひ屈くつさを愛した。彼女たちの間を通りすぎ、また傷つけ、もてあそび、ときに守り、散ってゆく男たちの生き様に胸が震ふるえた。

　それが。

　それが！

　それが……！

　燃えてしまった。焼かれたのだ。おお！　なんたること！　なんたることだ！

今日、父は、まだ復興の目め途どが立つどころか、ようやく鎮ちん火かしきったばかりのこの焼け野原のどまんなかに、ありったけのテーブルと椅い子すを運びこませて、家族だけでなく、ファミリーの者すべてを呼び集めた。その心中いかばかりか！　察するにあまりある、否、察することなどできぬ、私は、私は──今ほど自分の無能さを呪のろったことはない。考えずにはいられない。私がもっと賢けん明めいな男であったなら、父を補ほ佐さするに足る長男であったなら、弟たちの目標となりうるような長兄であったなら、この事態はさけられたのではないか？　この街は、父の街は、焼かれずにすんだのではないか？

母よ。亡なき母よ。ママ。ママン！　お願いです。教えてください。これは私のせいでしょうか？　私がいたらぬばかりに招きよせた災さい禍かなのでしょうか？　私が生まれつき同性しか愛せないことを告白したとき、ママンはためらわずに私を抱だきしめてくれましたね。「だからなんだというのです。あなたはわたしの息むす子こです。愛する、大切な、息子です。ありのままに、無理などせず、あなたはあなたとして生きなさい。それで十分なのです」ママンはそうおっしゃってくださいました。あの言葉でどれだけ救われたことか。

ですが、今、私は後こう悔かいしている。私は、ママンの言いつけを守り、私として、私らしく生きることを決意した。結果的に、これまでの私の人生は、ママン、あなたを失ったことをのぞけば、それなりに満ち足りていた。しかし、私は長男で長兄だ。私は、私の幸福を考えるだけでよかったのか？　本当に、それでよかったのか？

「──尋問では、結局、たいしたことはわからずじまいでした」拷問のスペシャリストであり、父の幼おさな馴な染じみで、義兄弟でもあるジョゼッペ・ザンニーニが、オレンジジュースをちびちび飲みながら、疲つかれきった声で報告している。「ハーヴェイ・クロドウェルと、その母親アルマ・クロドウェル、並びにその友人アサコ・デッカーが出入りしていた第十一集会場を皮切りに、市内の集会場五箇か所しよを順次襲撃して、捕ほ縛ばくした血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの関係者が六名。うち四名が、第三大臼きゆう歯しにしこんであった薬物を用いて自死。残り二名を捕ほ虜りよとしてただちに尋問しましたが、ほとんどロシュ聖教の教理を滔とう々とうと語るのみで、かの組織については、中央騎士館、東騎士館、西騎士館で構成され、サー・ジューダスなる人物の指示で

動いているらしいこと以外は、何も。ただ──そう、そうでした、捕虜の一名が、気になることを口走りまして」ジョゼッペは、ジャケットの内ポケットから紙切れをとりだし、老眼鏡をかけて読み上げた。「──『聖なる炎ほのおは、貴様らはもちろん、この街のすべてを、いずれは全世界を覆おおいつくすだろう。罪あることを知らぬ哀あわれな罪人どもめ、浄じよう化かのときを待つがいい』、ですな」

「なんと奇き怪かいな……」

　ウーゴもロシュ聖教のことは調べた。ゲヘナ思想についても理解しているつもりだ。『神は聖なる土地ゲヘナで、汚お物ぶつ、愚かな動物、罪人等、穢けがれし者共全てを焼き払はらい、穢れなき純じゆん粋すい者しやとして作り直す』。その〝預言者ザ・プロフエツト〟ユーバー・マリックの言葉は、しかし、時がたつごとに解かい釈しやくが変化していった。最近では、「聖なる炎」から逃のがれるため、教会に寄進して罪を落とさなければならないという、ほとんど集金システムを正当化するだけの思想になりさがっていたはずだ。

　それは堕だ落らくなのかもしれないが、初期のゲヘナ思想は、極論すると「死んだ人間だけがいい人間だ」という話で、あまりにも救いがない。ウーゴのように、おのれの惰だ弱じやくを自覚する者にしてみれば、ロシュ聖教の変質はむしろ自然のことのように思える。何しろ、人間は欲望に脆もろいものだ。また、現実問題として、教会であれ、ギャング集団であれ、軍隊であれ、維い持じするには金がかかる。発展させようとすれば、さらに金がかかる。そして、金きんは腐くさらないが、金かねは腐ふ敗はいを招きよせる。腐乱や退たい廃はいのなかにも美を見るウーゴは、必ずしもそうしたありようが悪だとは思わない。それも人であり、世界なのだ。認め、受け入れなければ、芸術は生まれない。芸術を生まない人や世界など価値がないだろう。

　まさか、彼らは──血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツは、古き思想を純化させて、この世のすべてを焼き払おうとしているのか。それが彼らの目もく論ろ見みなのか。我々は最初の生け贄にえで、この街は我々を浄化するための火で焼かれたのか。

「……ホント、まいったよなぁ」末まつ弟ていのチーロが、椅子の背もたれに体重をかけてミシミシいわせながら、左手の指でテーブルを叩たたいている。「何がいっちゃんまいったかって、せっかく

コツつかんだ真しん剣けん白しら刃は取り、もう二度とできねーかもしれねーべ。このざまじゃよう。それがショック百乗なんだよね。カルロぉ、オレのこの気持ち、わかっかよ？」

「正直申しあげて、わかりかねます」

　カルロは律りち儀ぎに椅子には座らず、イビツとリクを従えてチーロの後ろあたりに立っている。あまり感情を表に出さない男だから、いつもどおりの仏ぶつ頂ちよう面づらだが、この三日間はカルロもほとんど寝ねていないはずだ。疲れているに違ちがいないし、それは誰だれも彼も一いつ緒しよだろう。

　実際、この一番大きなテーブルには、上座にエンツォ・パンカロ、その左にウーゴ、右にニーノ、あとはチーロと、ジョゼッペ・ザンニーニにエヴェリーナ、他ほか、親しん戚せき筋すじなどの幹部連が席についているが、チーロみたいにのんきな表情を浮うかべている者はいない。このテーブルだけでなく、他のテーブルにも、色いろ濃こく漂ただよっているのは、疲ひ労ろう、悲ひ哀あい、不安、そして、絶望だ。

「まったく、お前は──」

　だから、ニーノがカリカリするのも無理はない。

「右手一本なくして、白刃取りができないのが一番ショックだと？　いったい、どこまで阿あ呆ほうなんだ。お前の馬ば鹿かさ加減は際限なしか。このクズめ。もっと他にないのか。あるだろう。この際、お前の右手なんてどうでもいい。見ろ。この無残な風景を。パンカロ家の者として、何か思うことはないか」

「あー……うーん。まー、右手がねーと、恋こい人びと一人失ったかんじっつーか──」

「右手のことはもういい！」

「よくねーよ！　一応、利きき手だったんだからよ！　いろいろ不便だっつーの！」

「一応とはなんだ、一応とは！　利き手に一応も糞くそもあるか！　お前のそういういいかげんなところが、俺は我が慢まんならないんだ！」

「うっせーなぁ。利き手なんて気のせーみたいなもんだろ？　慣れりゃ右手も左手もたいして変わんねーよ。だいたい、てめえは杓しやく子し定じよう規ぎにモノゴト考えすぎ。お。杓子定規だって。なんか、難しい言葉使った？　オレ？　今？　もしかして、オレ、いきなり頭よくなった？」

「たとえ夜に太陽が昇のぼることがあっても、お前の頭がよくなることは絶対にない。この俺が保証してやる」

「ふーん。じゃあ、オレも保証してやるよ。オレの頭がよくならねーように、ニーノ、てめえの額が広くなることも絶対ありえねー」

「額のことを言うな！　それに、最近計測したら、前よりも三ミルは確実に広がった！」

「ぎゃはははっ！　いちいち計ってんじゃねーよ！　だいたい、広がったって、それ、ただ禿はげてきて生え際ぎわ後退してるだけだろーが！」

「何をォォ！」

「──お前たち……」

　と、エンツォ・パンカロがテーブルを叩こうとした。その手が、止まった。父に先んじてテーブルをぶっ叩いた者がいたからだ。グワッシャン！　ものすごい音がして、テーブルの上に並んでいた酒や水の瓶びんやグラスがひっくり返った。しんと押し静まって、こぼれたワインがテーブルの端はしからぽたぽた流れ落ちる音だけが聞こえる。いったい、誰だろう？　そんなことをしたのは？　ウーゴにはわからなかった。ただ、気がつくと、テーブルに両手をついて立ちあがっていた。ということは、と、ウーゴは考えた。この状じよう況きようからすると、よもや私が……？

「……あ……いや……」

　ウーゴは両手を握にぎりあわせて、一つ咳せき払ばらいをしてから、そっとニーノとチーロの表情をうかがった。二人とも、呆あつ気けにとられたように、ぽかんと口を開けている。その顔を見た瞬しゆん間かん、胸の底から何かがわきあがってきた。これは──また、ずいぶんと懐なつかしい。そんなものがあることを、もうかな

り長い間、忘れていた。すでに、自分にはないものとさえ思っていた。自分から放ほう棄きしたはずのものだった。

　だが、捨ててはいけなかったのかもしれないと、悔くいている。

　今こそ、私はそれをとりもどすべきなのか。

　長ちよう兄けいとしての誇ほこりと、責任感を。

　そのようなことが可能なのか。

　ウーゴは深く呼吸をして、胸に手をあてた。ママン。私は、どうすればいいのですか。

　当然のことながら、返事はない。答えは自分で出すしかないのだ。

「ニーノ、チーロ。少し考えてみて欲しい。私たちは何者だろうか」

「……いきなり、なんだ」

　ニーノは訝いぶかしそうに眉まゆをひそめた。チーロにいたっては「はあ？」と首を傾かしげて、ウーゴを軽けい蔑べつしきっている様子だ。ああ、弟たちよ。それもやむをえない。私は、兄たる者のつとめを果たしてこなかった。今さら長兄面をしたところで、その能力も資格もないことは自覚している。ただ、父の街がこうなってしまった以上、何もしないわけにはゆかないのだ。

「私たちは、ここにいるエンツォ・パンカロの息むす子こだ。まして、今がどのような時か、お前たちも理解しているだろう。場にそぐわぬくだらない言い争いで父の名を汚よごすような真ま似ねは慎つつしむべきだと思わないか。それとも、いつものように、父に叱しかられなければわからないのか」

　ニーノはいまいましげに舌打ちをして顔をそむけ、チーロは「へいへい」とふてくされたように頭をかいた。両者とも、理想的な態度とはいえないが、情けない長兄、ウーゴ・パンカロでは、まあ、このあたりが限界だろう。何しろ、膝ひざはガクガクで、掌てのひらは汗あせでびっしょりで、声が震ふるえなかっただけ上出来だ。むしろ、よくやったと自分では思う。

　とはいえ、ニーノにしても、チーロにしても、さすがに父の前で暴れたりはしないだろうが、あとで何をされるか。いや。いやいや。もうあとのことなど考えている場合ではないのだ。

　ウーゴは頬ほおに落ちかかってきた髪かみをかきあげて、各テーブルを見まわした。ぜんぶで何人集まっているのだろう。四百から五百人といったところか。老ろう若にやく男なん女によさまざまで、よく知っている顔もあれば、知らない顔もあったが、一部をのぞいて、皆みな、エンツォ・パンカロと〝子の親にマルフエなる儀式ツトウ〟を交かわし、親子の契ちぎりを結んでいるはずだ。つまり、ウーゴの兄弟たちだ。私にはこれほど多くの兄弟がいたのだ。

　そして、その兄弟たちの多くが、職場を失い、友を失い、身内を失い、この街に託たくした夢と希望を奪うばわれて、嘆なげき悲しんでいる。行き場のない感情を絶望というおぞましい化物に貪むさぼり食われて、うなだれている。

「みんな──」

　ウーゴは顔をあげて、こみあげてくるものをなんとか抑おさえ、ぎこちなく笑え顔がおをつくった。横目で父を見た。父は、じっとウーゴを凝ぎよう視ししていた。

「みんな、今日はよく集まってくれた。それ以上に、よくぞ生き残ってくれた。私は、みんなも知ってのとおり、エンツォ・パンカロの長男たるにふさわしい男ではないが、しかし、長男であることは事実だ。頼たよりないが、私はみんなにとっても長兄ということになる。弟たちよ。妹たちよ。まずは、お前たちの顔をこうして見られることに、私は感謝したいのだ。そして、三日前のあの火災と血塗れブラツド聖堂テンプル騎士団ナイツとの交戦で命を落とした者たちに、深く、深く、深く、とてつもなく深く、哀あい悼とうの意を表する。私は……非常に、悲しい。彼らの冥めい福ふくを、心から……祈いのっている──すまない。私は……この焼けた街を見るだけで、涙なみだが……こらえられなくなるものだから。申し訳ないと思うが、こ、こうして……みっともない、泣き顔で、話をつづけることを、どうか許して欲しい。それから、泣きたい者は、もし我が慢まんしている者がいたら、泣いてもかまわない。私たちは、兄弟だ。泣いていいのだ。だから、どうか、隣となりで泣く者がいたら、肩かたを叩たたいて、抱だきよせて、慰なぐさめてあげて欲しい。私たちは兄弟だからだ」

　そこかしこで嗚お咽えつがもれはじめた。堰せきを切ったように泣きじゃくる者もいた。ウーゴはハンカチをとりだして顔をぬぐい、はなをかんだ。少しだけ、すっきりした。勢いに任せてしゃべりはじめてしまったが、自分が何をするべきか、わかったような気がする。この耐たえがたい不安と、ひどい悲しみの底にあるものが、なんなのか。大量の涙の海に沈しずめられ、なかなか正体をつかむことができなかったそれが、徐じよ々じよに姿を現しつつあった。

「──兄弟たちよ。泣いていい。今はぞんぶんに泣いていい。そして、涙を流しつくすのだ。だが、それは私たちの心にしっかりと刻みこまれている。この傷きず跡あとはけっして消えまい。消すことなどできるはずもない。永遠に。永遠にだ！　見て欲しい！　目を見開いて、しっかりと見るのだ！　この街を！　無残な姿を！　ああ……！　なんということだ！　私たちの──私たちの！　私たちの、街が！　燃やされてしまった……！」

　熱い。

「私たちの兄弟が死んだ！」

　胸が、熱い。

「愛すべき女たちが焼け死んだ！　煙けむりを吸いこみ、苦しんで死んだ！」

　すさまじく、熱い。

「誇ほこり高き男たちが刺さされ、斬きられ、突つかれ、馬ば蹄ていにかけられて死んだ！」

　これほどの灼しやく熱ねつを、この身のうちに感じたことは、いまだかつてない。

「友を、我が子を、仲間を、兄弟を助けようと、みずから炎ほのおのなかに飛びこんだ者もいた！　こどもたちさえ死んだ！　大勢死んだ！　なぜだ！　どうしてだ！　なぜゆえに彼らは死なねばならなかったのか！　いや！　いや……！　その前に！」

　爆ばく発はつしそうだ。

「──死んだのではない。そうだな？　彼らは、殺されたのだ。敵

に、殺された」

　そうだ、と、誰だれかがつぶやいて、誰かがうなずいた。そうだ。拳こぶしを振ふりあげて叫さけぶ者がいた。そうだ、そうだ！　そのとおりだ……！　誰かがテーブルを思いきり両手で叩いて立ちあがった。殺された。殺やられたんだ……！　敵に。敵に！　ワインのグラスを地面に投げつけて割る者がいた。俺の兄が殺された！　弟が！　娼しよう館かんを何なん軒けんも経営している中年の女が金色に染めた髪の毛をかきむしった。私のいいひとが！　若者が号ごう泣きゆうしている。俺の恋こい人びとが！　別の男が手で顔を覆おおった。妻が！　泣き声。怒ど声せい。唸うなり声。おおお。おおおおお！　友が！　親友が！　親おや父じが！　息子が！　娘むすめが！　兄が、弟が、妹が、姉が！　仲間が！　兄弟たちが！　殺された！　敵に、敵に、敵に……！敵！　敵！　敵！　敵！　敵！　敵！　敵に……！

　現在のパンカロ・ファミリーには、サンランドで生まれ育った者はもちろん、暗黒大陸出身の黒い肌はだの者もいれば、少数だがα大陸東部の黄色っぽい肌の者さえいる。しかし、中心となっているのは、やはりラフレシア第三帝てい国こくカレーナ自治州からの移民や、その子孫たちだ。

　今でこそ帝国の一部だが、かつてカレーナは、独自の地方言語と華はなやかで情熱的な文化に彩いろどられた、れっきとした独立国だった。強大な帝国の侵しん略りやくに遭あっても、長く、長く、粘ねばり強く抵てい抗こうした歴史は、今でもカレーナ人の誇りであり、また大いなる悲ひ哀あいの原因ともなった。戦後、帝国は、時のアデナ大だい元げん帥すいアナトール・デュルフォア・大智万世マグナス＝ゼキス・ロンドンベルの「カレーナ人を根絶しないかぎり、カレーナの土地を支配することはできない」との見解によって、カレーナ人たちに限定的な自治権を与あたえたが、それは自由を意味しなかった。カレーナの土地には、次々と帝国の臣民たちが流れこんできた。彼らは、税制、法制上の圧あつ倒とう的な有利をいかして、思うさまに利益をむさぼり、文化を破は壊かいし、女を陵りよう辱じよくして、血を汚よごした。カレーナ人が罪を犯おかせば、即そく座ざに強制労働付きの終しゆう身しん刑けいか、死刑になった。臣民はそもそも滅めつ多たに逮たい捕ほされなかった。各地で反乱が続発したが、帝国の大軍団がこれをただちに鎮ちん圧あつし、仕返しのように民衆を弾だん圧あつした。カレーナの男たちは、女こどもを守るため、血をたぎらせ、ときに暴発しながら、

奥歯をぎりぎり噛かみしめて、こらえるしかなかった。「血には血を」を旨むねとするカレーナ人にとって、それは耐えがたい日々だった。愛は高らかに歌えばいい。憎ぞう悪おは剣けんにのせてただちに決けつ闘とうせよ。愛し、殺して、禍か根こんは残さず。それがカレーナ人の伝統であり、美徳であり、気質なのだ。

　たしかに、現在のパンカロ・ファミリーには、さまざまな人種がいる。

　だが、それでもなお、ファミリーを特とく徴ちようづけているのは、カレーナの血だ。

　その象しよう徴ちようともいうべきエンツォ・パンカロが、すっくと立ちあがる。

　夢に見るとまでいわれたその凶きよう相そうが、厳しく、恐おそろしく、引き締しめられている。

　おそらく、ある重大な決意によって。

「──我々は、すでに知っておる」

　父の声は、若じやつ干かんかすれていたが、たとえようもないほど重く、深く響ひびきわたった。

「敵の名を知っておる」

　そうだ、そうだ、と声があがる。ある者はテーブルを叩く。別の者が地面を踏ふみ鳴らす。カレーナ人の血を引く者も。そうでない者も。男も。女も。若い者も。年老いた者も。エヴェリーナが髪かみを振り乱して叫び、ジョゼッペ・ザンニーニが顔を真っ赤にして吼ほえ、ニーノが狂くるったように何本ものナイフをテーブルに突き立てて、右手を吊つったチーロは滝たきのごとく涙なみだを流しながら何か絶ぜつ叫きようした。あのカルロ・ボッシでさえ涙ぐんでいるように見えた。その弟分のイビツが誰かの名を連呼していた。リクはうつむいて肩を震ふるわせていた。五百人が連呼して、焼け落ちた赤線地区の空が激しく揺ゆれた。知っている。知っている！　知っているぞ……！　敵の名を！　敵！　我らの敵！　敵！　敵！　敵の名を……！　敵の名、それは、そう──

「血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ……！」

　父は大だい音おん声じようで我らが怨おん敵てきの名を告げるなり、杖つえの先で指し示した。

　皆みながその方向を見る。

　まがまがしい赤地に黒十字の旗がひるがえる、元大海王神オストロス神しん殿でん。

　血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの根城。

　今は、連中によってこう呼ばれているらしい。

　ゲヘナ聖堂、と。

「──復ふく讐しゆうだ」

　父が雄おゝおしく、昂こう然ぜんと、決然と、だがむしろ静かに宣言した。

「我らの悲しみを、痛みを、苦しみを、そのすべてを敵に味わわせるのだ。殺せ。殺せ。殺せ。死ぬまで殺せ。敵を殺すまでけっして死んではならん。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ。やつらが最さい期ごにまみれる血は、おのれの血だ。おのれの血の海でやつらは溺おぼれ死ぬだろう。我々は殺すだろう。殺しまくるだろう。血は血で贖あがなわれねばならん。やつらの望みなど、たくらみなど、計画など、知るものか。いずれにせよ、やつらにもはや前進はない。我々が粉こな微み塵じんに砕くだくからだ。死ねば浄じよう化かされるというのなら、殺してやれ。皆みな殺ごろしにしてやれ。もう我が慢まんせずともよい。今こそ待ちに待った復讐のときだ。さあ、解き放て、殺意を！　憎ぞう悪おを！　悲しみを！　絶望を！　そして、くそったれな敵を残らず叩たたき殺せ……！」

Omenage 897 11th revolution 1st day

サンランド無統治王国ジェードリ・ベアフット地区

〝ローラの家〟

chapter.17

欠片たち

　ローラの葬そう式しきは、しめやかに、ひっそりと営まれた。何しろ、ローラが死んだ日の晩にあんなことが起こったものだから、死人なんて珍めずらしくもなかった。大勢が死んだ日だった。本当なら、ローラを弔とむらってくれたはずの人も、たくさん死んだみたいだった。ただ、ローラと昔からつきあいのある女たちが五人ばかり集まって、いろいろ手伝ってくれた。彼女たちから知らせを受けたローラの母親も顔を見せたけれど、遺体にすがりついて泣くばかりで、やがて疲つかれ果てて気を失ってしまった。

　ローラの亡なき骸がらは、ベアフットの海岸にほど近い、小さな墓地に埋まい葬そうされた。

　でも、みんなで運んだ棺ひつぎが、やけに軽くて。あまりに軽すぎるから、ローラがなかにいないんじゃないかって、思って。じつは、ローラは生きていて、家に帰ったら、「おかえり、ラッチャ。仕事どうだった？」とか言って笑ってくれるんじゃないかって。そんなことを考えて。情けないけど、涙が止まらなくて。墓地について、穴を掘ほって、いざローラを埋うめる段になって、最後のお別れをするために、棺の蓋ふたを開ける間ま際ぎわ、ラッチャは祈いのった。

　──どうか、からっぽでありますように。

　祈りはどこにも、誰だれにも届かなかった。ローラは、そこにいた。女医術士ナースのオードリーさんが傷を消してくれて、女たちが化け粧しようをしてくれたおかげで、きれいな、すごく美しい顔で、棺のなかに横たわっていた。さわると、つめたかった。テッドが「ローラ、美人だな」とつぶやいた。たしかに、めちゃくちゃ美人だった。なんだか、ラッチャが知っているローラとは別人みたいだった。ローラは家ではすっぴんだったから。それでも、美人じゃないってわけじゃなかったけど、やっぱり、びしっと化粧をすると、段だん違ちがいにきれいに見えた。けどさ。意味ねーよ。死んじゃったら、せっかくこんなに美人でも、なんにもならないじゃんか……？

「ほうじゃのう。せやけどなあ」と、もうずいぶん前に僧そう侶りよを辞やめて、今はローラの家の近くに住んでいるじいさんが、老いた腕うででラッチャの肩かたを抱だいた。「これからローラちゃんは天国に行くんやでな。一人っきりで行くんやでな。ぬしらも心

配じゃろ。どうせなら、ひっかりおめかしして、ええ男の一人や二人つかまえて、しあわせに暮らして欲しいじゃろの」

「天国なんてあるかよ」

「ほうじゃのう。ないかもしれんのう。せやけどなあ。あったほうがええやろて。他のもんはおいといたっても、ローラちゃんのために、天国あったほうがええと思わんかえ」

「そりゃあ……」

「じゃったらのう。信じたったらええ。ローラちゃん、まんだ若いのんに、かわいそうじゃけど、これからしあわせになったってくれよのう、てな。祈ってやったかて、バチはあたらんよ。ほうは思わんかえな」

　じいさんは、現げん役えき時代、かなり偉えらい坊ぼうさんだったらしいが、もう百歳を超こえている。歯がなくて、しゃべりも変だし、耄もう碌ろくしているに違いない。納なつ得とくしたわけじゃなかったけれど、ローラのために、ラッチャたちは祈ることにした。じいさんが上古ハイロ高位語メオンで祈りの言葉を捧ささげてくれた。意味がわからないから、いらいらした。文句を言うと、じいさんは「ほうか、ほうか」とうなずいて、共通語で、丁てい寧ねいに、わかりやすく、ローラの死出の旅に苦難がともなわないよう、大海王神オストロスや大勢の神に何度も頼たのんでくれた。そんなことをしたところで、ローラの助けになるとは思えなかった。でも、そんなことしかできなかった。ローラは死んでしまった。ローラはもういない。土をかけられ、次し第だいに埋もれてゆく棺を、ミミが不思議そうな表情で見ていた。大人になったミミは、ローラを覚えているだろうか。きっと、忘れるだろう。もちろん、俺は絶対に忘れない。この悲しみは、いつまでも癒いえない。どっちがいいか、今はわからなかった。

　どうやら、アンナは二階の窓からすべてを目もく撃げきしていたようだ。あたりまえだが、よほどショックだったのだろう。あれ以来、うつろな目で黙もく々もくとミミの世話をするだけで、一言もしゃべらない。たまに、いきなり泣きだすことがある。でも、その

泣き方がなんだか異様だ。ほとんど無表情で、声を出さずに、涙なみだをぽろぽろこぼすだけなのだ。そして、涙がつきると、ミミを抱いたまま寝ねてしまう。ミミがぐずると、目を覚まして、適切な処置をする。そのうちまた泣いて、寝て、起きて、それを繰くりかえす。アンナは、大事な人を失ったことで、同じくらい大事な何かをなくしてしまったかのようだった。見ていられなかった。

　テッドは――ラッチャも同じだが、仕事に行こうとしない。ローラの家の二階は、壁かべで仕切られた女部屋と男部屋があって、あとはそれぞれ布で仕切って個室にしている。テッドは自分の部屋にこもって、ほとんど出てこない。ラッチャと顔をあわせると、何か言おうとして、口ごもり、背中を向ける。一度だけ、まともに話した。「……みんなとさ、話して、泣いて、思いっきり泣けば、ちょっとはすっきりするんだろうなって、思うんだ。でも、なんか、それでいいのかなって。ラッチャ、俺たちさ、いなかったわけじゃん？　その場に、いられなかった。なんにも、できなかったわけじゃん？　それなのに、さ……泣いて、すっきりするなんて、ずるいっていうか。もっと、悲しんで、苦しまないと、ぼろぼろにならないと、ダメなんじゃないか、とか……それで、どうにかなるわけじゃないけど……」

　いや、テッド、だからさ――どうにもならないから、俺たち、つれーんだよ。

　死んじゃった人は、どうやっても、もう絶対に、戻もどってこないから。

　ラッチャだって、考える。あの日、仕事なんかに行かないで、家にいれば、何か、どうにかできたんじゃねえか？　それはラッチャだけではないだろう。ステラも、ジョルジュも、リクも、ルカだって、それぞれ悔くいているに違いない。あのとき、ああしていたら。こうしていたら。そうしたら、きっと、こんなことにはならなかった。

　ローラは死ななかった。

　――でも、無む駄だだ。

　いくら後こう悔かいしても、胸が破は裂れつしそうなほど悲しんでも、戻ってきてくれとせがんでも、お願いします返してくださいと頼みこんでも、どうにもならない。前を向いても、後ろを振ふり

返っても、右を見ても、左を見ても、上を見ても、目線を下に落としても、たった一つの、厳然たる、動かしがたい事実だけに、視界が覆おおわれてしまう。

　ローラが死んだ。

　かけがえのない人を、俺たちは永遠に失ってしまった。

　ラッチャはローラの家の居間のまんなかで、あぐらをかいている。

　すっげえ……ぼろっちい家。

　何日も掃そう除じをしていないせいか。薄うす汚よごれていて、一気に古さに拍はく車しゃがかかったようで、なんだか、やけに寒い。以前は気にならなかった隙すき間ま風かぜが、やたらと身にしみる。気味が悪いくらい静かだ。二階にいるはずの、テッドとアンナとミミの気配が、まったくしない。ステラはダイニングテーブルに伏ふしたまま、もうずいぶん長い間、ぴくりともしないし。ジョルジュも、窓際の寝ね椅い子すに座っているものの、本を手にとることもせず、虚こ空くうを見つめている。

　ルカだけは、前と同じだった。

　玄げん関かんのドアと向かいあうように、膝ひざを抱かかえて床ゆかに座り、じっとにらみつけている。

　たぶん、目の前のドアではなく、どうしようもない、現実を。

　──いや。

　きっと、みんなそうなんだ。

　みんな、それぞれのやり方で、現実を見つめてるんだ。耐たえようとしてるんだ。

　だって、逃にげられない。目をそらしても、現実は俺たちをすっかり包囲してしまっている。現実はどこにでもある。今、ここには、この家には、「ローラがもういない」という現実しかない。少なくとも、この家にいるかぎり、ローラの不在は次々と、絶え間なく、襲おそいかかってきて、肌はだを突つき刺さし、喉のどを絞しめ、心臓を締しめつける。

それなら、いっそのこと、この家を出れば……？

どうなるだろう。わからない。想像もつかない。でも、もしかしたら、誰だれかはそんなことを考えているかもしれない。たとえば、テッド。テッドは仕事もしているし、親方のところに住みこませてもらえば、なんとか生きてゆけるだろう。ステラは？　ステラだって、しっかり者だし、仕事も探せばありそうだし、なんとかなりそうだ。ルカは？　今日は、パンカロ・ファミリーの集まりに出ているはずのリクは？　──俺は？

「……なんか、アレだよな。こうして黙だまってっとさ。余計なことばっか──アホなことばっか、考えちゃうよな」

「それは、あんたがアホだからでしょ」

ルカの声は、つめたいが、落ちついていた。ふつう、だった。

「たしかに、俺はアホかもしんねえけどさ。ルカ、おまえは考えねえのかよ。いろいろと」

「考えてるよ」

「何考えてんだよ」

ルカはその問いには答えず、不意に立ちあがって、ジョルジュのそばまで歩いていった。その足どりも、やけにふつうだった。それにしても、いったい何しようってんだ。ルカは、この家のなかでふつうに話して、ふつうに歩きまわって、それこそ何考えてんだ。

今は、みんな、ちょっとふれただけで自分も傷ついて、相手も傷つける、脆もろい、尖とがった硝子ガラスの破は片へんみたいになってしまっている。

いや、もともとそうだったんだ。

俺たちは、親や、社会や、その時々の状じよう況きように壊こわされた、欠片かけらだった。

それをローラが拾い集めて、丁てい寧ねいに接着して、どうにかこうにか一つのものにしてくれた。接せつ着ちやく剤ざいは、たぶん、ローラ自身だった。だから、ローラがいなくなって、もとに戻っただけなんだ。

そうして、俺たちはバラバラになる。粉々に砕くだけ散ろうとしている。訪おとずれようとしているそのときに怯おびえながら、でも、怯えているだけで、何もできない。誰も何かしようとはしない。違ちがう。しなかった。

「ジョルジュ」

ルカに呼ばれても、ジョルジュは振り向かず、空中を漂ただよう埃ほこりでも見つめているかのようだった。ルカはかまわずにつづけた。

「本、読まないの？　本、好きなんでしょ。実際に経験できることは少ししかないから、本を読んで、もっといろんなこと知ったり、覚えたりするんじゃないの？　ジョルジュ、そう言ってたよね。いつも本ばっかり読んでたよね。もう読まないの？　本、嫌きらいになった？　もういろんなこと知りたくないの？　飽あきちゃった？」

ジョルジュは返事をしない。ただ、聞こえてはいるはずだ。その証しよう拠こに、ジョルジュの顔が少し強こわ張ばっている。何げないふうを装よそおって、窓の外に目をやったのも、表情を隠かくすためだろう。ルカは、でも、やめなかった。窓の脇わきにしつらえられた棚たなに近づいて、きれいに並べられている本のなかから一冊抜ぬきとり、ぱらぱらとページをめくってみせた。

「あたし、本って、ぜんぜんおもしろいとか思えない。ローラも、わかんないってよく言ってた。ジョルジュの誕生日に本を買ってあげたいけど、何がいいかさっぱりわかんないって。これだよね。ていうか、ここにある本ほとんど、ローラが買ってくれたやつだよね。ジョルジュに直接どんな本がいいか聞いても、いらないとか言われるから、ローラはいつも困ってた。それで、わざわざドーマンさんに教えてもらいに行って。ドーマンさんのところにも本はたくさんあるけど、古本ばっかりなんだって。新しい本は少ないから、そういうの、ジョルジュに読ませてあげたいな、ジョルジュ、喜ぶかなって、ローラが言ってた。これ、ローラが買ってきた本だよね。もう読んだ？」

「……読んだよ」

か細い声だった。

「読んだに……決まってるだろ。すぐに読んじゃったよ。何回も、読んだ」

「何回も読むんだ。何が書いてあるか、もう知ってるのに？」

「……読みなおすと、気づくことがあるんだよ。一回目と、二回目じゃ、違う読み方ができるんだ。一年たって、もう一度読むと、前とは別の本みたいに感じる。どうせ……ルカにはわからないだろ。本、読まないんだから」

「うん。わかんない。でも、さ──だったら、ジョルジュ、この本、また読むの？」

「読むよ」

　今度は、はっきりと、しっかりした声で、ジョルジュが答えた。

「──何度も、何度だって、読むよ。だって……」

　その先は言葉にならなかった。ジョルジュは、窓のほうへ顔を向けたまま、声をつまらせていた。葬そう式しきでも、埋まい葬そうのときも、少なくともラッチャの前では泣かなかったのに。けれど、それはいつものことだった。ジョルジュは、何かくだらないことで喧けん嘩かになって、こっちが手を出しても、どこか冷めた口調で非難したり、人を馬ば鹿かにしたり、抗こう議ぎするだけで、けっしてやり返してこなかった。すぐに身体からだが動いてしまうラッチャにしてみると、何を考えているのかわからないし、わかりあえるような気もしなかった。赤線地区で一度目の火事があった晩も、ジョルジュは一人だけやけに落ちついていて、むかついた。こいつ、ローラのことなんてなんとも思ってないんじゃねえか、とか。生まれつき薄はく情じようなやつなのかな、とか。

　誤解だった──なんて、これだけで簡単に断言してしまうのも、何か違うような気がする。

　でも、ジョルジュはジョルジュなりに、ローラが大事だったんだろう。

　ルカがそっと手をのばして、ジョルジュに本を持たせた。ジョルジュはローラが買ってくれた本をぎゅっと抱だきしめて、寝ね椅い子すに顔を押しつけた。その背中が震ふるえていた。ひっく、ひっく、と、低い、押し殺した泣き声がした。どうせなら、もっと泣け

ばいいのに。堂々と、泣けばいいのに。なんか、気の毒なやつだな。そんなふうにしか泣けないなんて。きっと、それはそれでつらいよな。そんなことを考えていたら、ラッチャの涙るい腺せんまでゆるんできた。やばい、と思って、袖そでで目のあたりをごしごしこすった。こすればこするほど、涙なみだがあふれそうで、本当にやばかった。変に刺し激げきするから、悪いのかもしれない。ラッチャは何度かまばたきをして、顔を上げたら、目の前にルカがいた。

「ラッチャ。仕事行きなよ。べつに、今日とか明日からじゃなくてもいいけど。親方には早く言っておいたほうがいいんじゃないの。いつからまた働くって。働かせてくださいって。ちゃんと謝って、さ」

「……お、おう」

　反射的にうなずいてしまった。

　だって、ルカが言ったことは、しごくまっとうだ。もう三日も無断で仕事を休んでいるのだ。ふつうに考えれば、明らかにそうすべきだ。パンカロ・ファミリーを通じて紹しよう介かいしてもらった親方は、鉄てつ拳けん制裁あたりまえの、ものすごく怖こわくて厳しい人だが、優ゆう秀しゆうな船大工だし、拳げん骨こつと雷かみなりみたいな怒ど声せいにめげず、正直に事情を話せば、たぶんわかってくれる。今すぐ名人街まで走っていって、親方に頭を下げて、ボコボコにされてもなんとか許してもらって、明日から心を入れかえて働かないといけない。わかっている。そんなことは、ラッチャだってわかっているのだ。

　でも、それどころじゃない。

　ローラが死んだのに、仕事とか言ってられっかよ。

　だけど──じゃあ、このまま仕事、辞やめちまうのか？

　明日も、あさっても、しあさっても、いつまでも、ローラが、ローラがって、泣きべそかいてるつもりなのか？

　頭を悩なやませている間に、ルカが階段のところまで歩いていって、二階に向かって叫さけんだ。

「アンナ！　下りてきて！　ミミ、たまに外とかで遊ばせてやらな

いとかわいそうだよ。テッドも。いつまで閉じこもってるの？　お風ふ呂ろ、入ってないでしょ。ご飯もろくに食べてないでしょ。なんのつもり？　いいかげんにしなよ。そんなことして、なんになるの？　意味わかんないんだけど。ねえ！　下りてきて！　さっさと下りてこいってば！　テッド！　なんで黙だまってるの？　アンナ！　しゃべれないの？　だったら、いいよ。しゃべんなくていい。でも、下りてきて！　ここにきて……！」

　ルカは必死だった。ふつうなんかじゃなかった。

　だいたい、こんなふうに声を張りあげること自体、ルカらしくない。ルカは、一応、家のことをやっていたけれど、いつもだるそうで、いかにもやる気がなさそうで、楽しそうに笑っているところなんて、ほとんど見たことがない。ジョルジュは誕生日にみんなから何かプレゼントをもらったりすると、かなり控ひかえめに、恥はずかしそうに、でも嬉うれしそうにするが、ルカは違ちがう。つんとしていて、ただ、どこかこどもっぽくて、すねているみたいで、いつも一人だけ離はなれた場所に座っている。しかも、背を向けて、しらんぷりをして。リクとは仲がいいみたいだけれど、人前では、そういうそぶりもできるだけ見せまいとしていた。年上の女に言うことではないかもしれないが、本当にかわいげのないやつだった。

　そんなルカが、ジョルジュにローラが買ってくれた本を抱かせ、ラッチャには仕事に行けと命じて、アンナとテッドに下りてこいと連呼している。

　不思議な光景だった。ラッチャは半分くらい呆ぼう然ぜんとして、しばらくの間、黙ってルカを見つめていた。アンナとテッドは、一分たっても、二分たっても、下りてこなかった。それでも、ルカは叫びつづけた。そのうち、だんだんと言こと葉ば遣づかいが汚きたなくなってきて、年配の漁師しか使わないような言い回しまで飛びだした。たとえば、「てめぇっざけてんでねーどこら、さっさと下りてこいっつってんだべや」とか、「ヤキいれられてーんかおいこんくそ」とか。たしか、ルカの父ちゃんは腕うでのいい漁師で、やたらと天気の悪い日に漁に出たきり、戻もどってこなかったのだった。でも、きれいな顔をしたルカに、漁師言葉はぜんぜん似合わなくて、そこまで一生懸けん命めいになっている姿が、なんだか、おかしくて──妙みように、悲しくて。

　もういいじゃん、と、言おうとした。

　その前に、ダイニングテーブルの上にあった干ひからびた料理の皿が、床ゆかに落ちて、割れた。

「──うるさい……！」

　悲鳴みたいな声だった。

　ステラだった。

「うるさい！　うるさい！　うるさい！　うるさい……！」

　少し縮れ気味で量の多い髪かみの毛を、両手で乱暴に引っかきまわしながら、ステラは肘ひじでテーブルをガンガン叩たたいた。床だけでなく、テーブルの脚あしも蹴けった。かなりびっくりしたけれど、まあ、暴れるのはいい。今はみんなちょっと、いや、かなりおかしいのだ。でも、抑よく制せいがきかなくなっているのか、ステラはまったく力を加減していないように見える。あれでは、怪け我がをしかねない。ラッチャとしてはそれが心配で、立ちあがってステラを止めようとした。「おい、ステラ、やめ──」「うるさい！」「……うおっ！」だが、はねのけられた。ものすごい剣けん幕まくで、予想以上に強い力だった。転びそうになったラッチャは、床に手をついて身体からだを支えた。そこにちょうど割れた皿の破は片へんが散らばっていた。「──いつッ」とはいえ、たいして痛くはなかったし、かすり傷だろうと思った。掌てのひらを見て、唖あ然ぜんとした。破片は思ったより大きくて、傷は結構深い。ザックリ切れている。慌あわてて破片を抜ぬくと、血がドロッとあふれてきた。

「……あ──くっそ、これ、いってぇー……」

「だいじょうぶ？」

　すぐにルカが駆かけよってきて、ラッチャの傷の具合を確かめると、少しだけ顔をしかめた。そうしている間にも、ラッチャの掌からしたたり落ちた血が、どんどん床を汚よごしてゆく。どうにかしないと。そうは思うのだが、なんだか頭が働いてくれない。気ばかり急せいて、身体はだんまりを決めこんで、鈍にぶいんだか鋭するどいんだかよくわからないこの痛みが、どうか早く消えてくれればいい、と、そんなことを願う。

　なんか、掌だけじゃなくて、胸もズキズキ痛いてえし。

　俺、いやだよ。みんなおかしいこんな状じよう況きようは、もういやだ。

　誰だれか、どうにかしてくれよ。俺には難しくてわかんねーよ。なんにもできねーよ。できっこねーよ。だから、誰か。

「ステラ、手当て」

　と、ルカがステラに向きなおった。

「ラッチャの手当て、してあげて。あたしはできない。どうしたら血が止まるのか、あたしはよく知らないから。器用じゃないから、包帯なんかもきっとうまく巻けない。ステラはできるよね。手当て、してあげて」

「……うるさい」

「手当て、して」

「うるさい」

「やれっつってんべや」

「うるさい」

「やれ」

「うるさい！」

「さっさとやれや」

「うるさい……！　うるさい！　うるさい！」

「ぼけ」

　ルカは吐はき捨てるようにそう言って、ラッチャを立たせた。「傷洗っといで」「……あ、うん」「早く」「お、おう」「絆ばん創そう膏こう、棚たなの箱にあるから。ジョルジュ。泣いてるとこ悪いけど、絆創膏出したげて」なんだよ。よく知らないとか言って、知ってんじゃんか。ジョルジュものそのそと起きあがり、背せ伸のびをして、棚の上段から箱をとった。うまく言葉にできないが、その姿を見ていたら、ラッチャは少しだけ心が軽くなった。何

もかもが止まっていたのに、少しずつ動きだした。そんな感覚だった。

　でも、まだぜんぶが動きはじめたわけじゃない。アンナもテッドも二階から下りてこないし、ステラはテーブルに額を押しつけたまま、顔を上げようとしない。

　ラッチャは台所で傷を洗った。傷口に、水がしみた。ジョルジュが袖そで口ぐちで顔をごしごしぬぐいながら、絆創膏を持ってきてくれた。「さんきゅ」「べつに……」ジョルジュはラッチャに絆創膏を手て渡わたすと、ほとんど小走りで寝ね椅い子すに戻って本を開いた。前みたいに。ローラがいたころみたいに。

　俺も、親方に謝って、明日から仕事に行く。しゃきしゃき働いて、早く一人前の船大工になるか、パンカロ・ファミリーに入れてもらって、いっぱい稼かせいで、ローラに楽させてやるっていう目的は、消えた。でも、俺は働く。ローラがいても、いなくても、俺は俺として、ここにいるわけで──ローラの家にいるわけで、それはローラのおかげで。その事実は消えない。どうやったって、消し去ることなんかできやしない。

　ルカは一人で皿の破片を片づけている。

　ステラはまだ顔を上げない。

　アンナがミミを抱だいて二階から下りてきた。

　テッドはまだだ。

　ジョルジュは本を読んでいる。

　ラッチャは絆創膏を貼はり終えた右手で腹をさすりながら、アンナに声をかけた。

「なあ、アンナ。腹へってねー？」

　アンナは穴ぼこみたいな目でラッチャを見たが、それだけだった。うんともすんとも言わなかった。でも、ルカに言われて、一階に下りてきた。とりあえず、いいよな。それで。俺たち、ガキだし、ちょっとずつしか前に進めないもんな。アンナなんて、俺らよりも小さいんだから。俺はもうガシガシ働いて、少しだけ先に行って、アンナの手、引っぱってやらねーとな。ローラは、そういう

の、ぜんぶ一人でやってくれてたんだよな。何かあると、叱しかってくれて、慰なぐさめてくれて、やさしく抱きしめてくれて、そのうえ、仕事もばっちりこなして。俺にはできねーよ。たぶん、無理だよ。だけど、ローラはもう、いないから。

「よしっ。飯でも作るか」

「ラッチャが？」

　ルカが訊きいてきた。ちょっと馬ば鹿かにしているような口調だった。

「なんだよ。俺だって料理くらいできるって。前は当番でやってたじゃんか」

「ラッチャの料理、おいしくないからやだ」

「僕も食べたくない」

「ジョルジュ、てめえ、人のこと言えんのかよ」

「言えるよ。僕はラッチャよりずっとマシだもの」

「じゃあ、てめえが作れよ！　俺よっかマシな飯作れるっつーんならよ！」

「いいよ。手伝ってくれるなら」

「上等じゃねえか。手伝ってやらあ。そのかわり、まずかったら承知しねえからな」

「そのときは、僕じゃなくて、きっとラッチャが何か失敗したせいだよ」

「悪いことはぜんぶ俺かよ！」

「あのさ。手伝うのはいいけど、材料、何もないから、買ってこないと」

「じゃ、買い物部隊結成。隊長ジョルジュ。俺、副隊長。ルカ、平隊員」

「なんで僕が隊長……」「あたし、ヒラ？　ていうか、部隊っ

て……」

「うっせーな。ぶつくさぶつくさ文句ばっかり垂れてる間に、腹へりまくりでおなかと背中がくっついちまうだろ。あーもうめんどくせえな。それなら、必要な物ぱっぱと教えろよ。俺がひとっ走り行って買ってくっから。あ、料理、もちろん、リクの兄貴のぶんもな。ファミリーの会合だっていってたけど、いつ帰ってくるかわかんねーし──」

　でも、その日、リクはなかなか帰ってこなかった。

　ようやくリクが帰宅したころには、日が暮れるどころか日付も変わっていた。

　ドアが開いた音で目を覚ましたラッチャが一階に下りようとすると、いつものようにリクの帰りを待っていたのだろうルカの声が聞こえた。「……なんで？　こんなときに……」「こんなときだから、なんだ」「でも、いきなり……」「何度もカルロさんに言われて、ずっと考えてた。いきなりじゃないよ」「だけど、どうして、今？」何を話してるのだろう。ラッチャは階段を下りた。リクと目があった。こっちに背中を向けているルカは、気づいていないようだ。「人が、たくさん死んだ」と、リクがラッチャから目をそらした。かといって、ルカを見ているかといえば、そうでもなかった。まだ半分寝ねぼけていたので、ぼんやりとだが、なんだか変だ、とラッチャは思った。リクの兄貴は、いつも相手の目を見て話すのに。なんで、何かごまかすみたいに、目をそらすんだろう。「知っている人が、大勢。本当に、大勢、死んだんだ。それで、ようやくわかったんだ。この家はもちろん大切だけど、ファミリーの人たちのことも、おれには大事なんだ」「それは……」「ごめん。もう決めたことだから」と、リクは言った。有う無むを言わせない口調だった。

「──おれは、パンカロ・ファミリーに入る」

Omenage 897 11th revolution 3rd day

サンランド無統治王国ジェードリ・バルモア地区
〝サンブレイク・ホテル〟

chapter.18

しあわせの原形

　今こ宵よいはぞんぶんに飲もうと決めていた。酒もいろいろと持参した。ダンデスパンのシャンパン。五七年のラトー・グラッスィエル。フィガノの二十年物。暗黒大陸の代表的な蒸留酒アルーン・ネクノアー。すべてこんなときのためにとっておいた秘蔵の品だ。友は同じ銘めい柄がらの五六年と五七年の差がわかる男だから、飲まれる酒も本ほん望もうだろう。

　場所はバルモア地区の湾わん岸がん道路沿いにあるサンブレイク・ホテル最上階、交わる夜空の星々と宝石の夜景を望めるスウィートルーム。慇いん懃ぎん無礼なボーイなど一いつ切さい入れず、ホテルのシェフは使わずに、信しん頼らいできる親しい料理人を手配した。帆ほ立たて貝がいのムースとロワール海え老びキャビア添ぞえ。フォアグラのソテーかき卵添え。鮑あわびと真ダチとダルフ蟹がにのグリエ、シャンパン・ソース。牛フィレ肉のステーキ黒コショウ風味。ココナッツのシブースト、キャラメルアイス詰づめ、南国フルーツの彩いろどり。等々。素材はもちろん一級品で、料理人の腕うでも特級とはいわないまでも、まず一級だ。一流好みの友も、それなりに満足してくれただろう。実際、あの口うるさい友が、食事の間、ほとんど文句を言わなかった。ほとんど、であって、皆かい無むではなかったが。

　もっとも、口数自体、少なかった。

「──すまんな、今日は」

　エンツォ・パンカロがアルーン・ネクノアーをストレートで飲やりながらそう切りだしても、ジャン・ジャック・ド・ジョーカーは「ふん」と鼻を鳴らしただけだった。はて、何か友の機き嫌げんを損そこねるようなことでもしたか。本当はわからないでもないのだが、あえてエンツォは軽く肩かたをすくめてみせる。ジョーカーはいらいらしたように、グラスのなかに半分ほど残っていたアルーン・ネクノアーを一気に飲み干した。それでも、まだ何も言わない。やむをえず、エンツォは話をつづけた。

「〝子の親にマルフエなる儀式ツトウ〟には、信用のおける、だが、家族の者ではない立会人が必要なのだよ。そういう習わしでね。まあ、カレーナの古いしきたりだ。笑わんでくれ。くだらなくとも、意味などなくても、守るべきものはあると私は思うのだ。守って、伝えねばならん。いったん途と絶だえて、消えてしまえ

ば、とりもどすことは容易ではない。人の営みとは、子をなして血を残すだけではないだろう。それでは獣けものと同じだよ。人は、血以外のものも後世に残すことができるからこそ、人なのではないか。あんたはどう思う？　──ともあれ、いつものようにジョゼッペにやらせてもよかったが、今度ばかりは是ぜ非ひあんたに頼たのみたかった。それにかこつけて、あんたと飲みたかったというのが本音だがね」

　ジョーカーは空のグラスに右手で蓋ふたをしたまま、窓の向こうの夜景を眺ながめている。足を組んで、左手で顎あごをつまみ、人の話を聞いているのか、いないのか。

「しかし、私もずいぶん大勢の親になったが、あの、リク、な──あれは、少々変わっている。四年前、ベアフットの海岸に裸はだかで流れついて、ローラという女に保護された。それ以前のことは、誰だれが訊きいても一切しゃべらん。ひょっとしたら、記き憶おくがないのかとも思ったが、そうではないようだ。何か、よほどのことがあったのか。カレーナにこんな言葉がある。そう──共通語でいえば、『幸福なこどもは戦場でも愉ゆ快かいな夢を見て死ぬ』かな」

「センスのない訳だ」

　ようやく口を開いたと思ったら、悪態だった。

「原文を直訳すると、こうだろう。幸福なこども時代は、戦場で斃たおれる兵士に幸福な夢を見せる。この言葉では、幸福という単語が二度使われている。貴様はあえてそのうち一方を別の単語に置き換かえたわけだが、それは壊かい滅めつ的な大おお間ま違ちがいだ。なぜなら、幸福は繰くりかえすことによって意味がある。反はん芻すうできぬ幸福など幸福ではない。少なくともこの言葉をひねくりだした者はそう思っている。だからこそ、兵士は幸福な夢を見て死ぬのだ。しかも、幸福と愉快は必ずしも一いっ致ちしない。甘かん美びな痛みも幸福となりうる。さらに、原文では、幸福を二度使うことによって独自の韻いん律りつをもたらしている。つまり、貴様は、幸福を愉快にとりかえただけで、三重の決定的なあやまちを犯おかしたのだ。稀まれに見る天才的な大おお馬ば鹿か者ものだな」

「では、あんたが訳したらどうなるのだ」

「幸福の慈じ雨うはうすら馬鹿の上にのみ降る」

「原形をとどめていないではないか」

「芸術の本質は破は壊かいと創造だ」

「誰が芸術の話をしている」

「ああ、まともな親を持たず、幸福の原形を手に入れそこねた、哀あわれな糞くそ餓が鬼きどもの話だったな」

「幸福の原形、か」

「貴様も言っただろう。人は、血以外のものも後世に残すことができるからこそ、人だ。幸福の概がい念ねんもその一種だ。幸福は血では伝えられぬ。親が子に――必ずしも親子である必要はないが、人が人に幸福の原形を植えつけることで、次し第だいに輪りん郭かくが整い、はっきりと感じられるようになる」

「私の子らには、それを持たん者が多い」

「幸福の影かげ踏ふみだな」

「どういう意味だ」

「哀れな糞餓鬼どもは、それが幸福だと思い追い求める。なんとしても手に入れようと思う。だが、ふれるたびに、するりと逃にげてしまう。手ざわりがない。それは幸福そのものではなく、幸福の影にすぎないからだ」

「それでも、彼らは影を踏みつづけるだろう」

「そうだ。貴様の影を踏む」

　ジョーカーがグラスの上から右手を外した。すかさず壁かべ際ぎわに立っていたクローディアが近づいてこようとしたが、エンツォは軽く手をあげて制し、ジョーカーのグラスにアルーン・ネクノアーをついだ。暗黒のAlune 財宝Necnoar。その名のとおり、ほとんど黒に近い褐かつ色しよくのこの酒は、独特の薫くん香こうがあり、そうとう癖くせが強いが、慣れるとやみつきになる。ジョーカーは一気にあおって、半分ほどまで中身が減ったグラスを揺ゆらしてみせた。

「貴様らカレーナ人は、何かにつけすぐに決けつ闘とうだ果たし合

いだと殺しあう、野や蛮ばんで、愚おろかで、愛すべき者たちだ。父親たちは、一時の熱ねつ狂きようのために軽々しく命を落とす。だが、こどもたちには父親が必要だ。死んだ父親よりも、いくらか賢けん明めいで、強い父親が。そこで、貴様らは、血によらない血族という、美しいシステムを作りあげた。貴様はさっきなんだかんだと得意顔で解説しくさったが、おそらく己おれのほうが数倍くわしいはずだぞ。そう──マルフェットゥとは、カレーナの古語で『王よりも強い者』を意味する。子になる者が、親になる者の前にひざまずき、足の甲こう、手ての甲に口づけして、親が子の額に口づけを返す。子が親に呼びかける。マルフェットゥ、愛します、守りませ、我が命、違たがうことなし、この契けい約やく、と。シンプルだが、あれはなかなかに味わい深い儀式だな。己おれは嫌きらいじゃない。しかし、残念なことに、本家本元のカレーナ自治州では、帝てい国こく法によって決闘が禁止され、父親たちは死なず、マルフェットゥは儀ぎ礼れい化し、形けい骸がい化している。カレーナの血は、母なる──いや、父なる大地で、弱まり、薄うすめられ、いずれ死に絶えるだろう。エンツォ・パンカロ。猛たけ々だけしく、愚ぐ劣れつで、強ごう情じようで、愛すべきカレーナの男よ。貴様らは故郷を出て、このジェードリの地でカレーナ人の血を花開かせ、そして今、散らそうとしているのだな。この馬鹿者め」

「だが、誰かが止めねば」

「貴様は貴様の可愛かわいい家族のことだけ考えていろと言ったろうが」

「幾いく人にんも殺されたのだ。私の子が、幾人も」

「血には血を、か」

「私はカレーナ人だ」

「知っているさ、エンツォ・パンカロ」

「ジャン・ジャック・ド・ジョーカー、あんたには感謝している」

「やめろ。気色が悪い」

「いや、あんたがいなければ、私はマンフレッドに殺されていた。べつに、死は恐おそれんよ。カレーナの男はそういうものだ。だが、女にょう房ぼうを残して死ぬのはしのびない。あいつに先立た

れたのは正直こたえたが、考えようによっては、よかったのかもしれんと思うことがあるのだ」

「貴様の奥方はじつにいい女だったな」

「ああ。あれ以上の女はいない」

「貴様にはもったいなかった」

「私もそう思う」

「ふん。貴様とも、無む駄だに短くはないつきあいだが──そう、あれは、己おれが在りし日のマンフレッド一家の直営店で、あまりにも劣れつ悪あくなサービスに対して正当な抗こう議ぎを」

「いくらサービスが悪くても、十人殺すのは行きすぎた抗議だと私は思うがね」

「九人だ。桁けたが変わると印象がずいぶん違ちがう。気をつけろ。それに、己おれから手を出したんじゃない。まあ、己おれもまだ若かったから、堪こらえ性しようがなかったのは事実だろうがな。とはいえ、全員うまく、きれいに殺してやったぞ」

「放ほうっておけば、もっと殺していただろう。私が間に入って場を収めなければ」

「しかし、マンフレッドの店に堂々と乗りこんできて、従業員を殺しまくった男の身み柄がらを引き受けてみせるなど、ずいぶん思いきったことをしたものだ」

「私も若かったのさ。もちろん、あんたよりはずっと年を食っていたがね。マンフレッドの顔に泥どろを塗ぬって挑ちよう発はつし、私個人に標的を絞しぼらせようという考えも多少はあった。エドガー・マンフレッド。やつは薄うす汚ぎたない、卑ひ怯きような男だった。ファミリーの者ではなく、その身内を狙ねらった。とくに、女こどもだ」

「貴様は、非情を気どってみせていた昔から、甘いやつだった」

「そうは思わんがね。ただ、自分の腕うでの届く範はん囲いのものは、どうにかしたい。女房。息むす子こ。友。こどもたち。その家族。ファミリーが大きくなるに従って、私の腕が長くなった。それ

だけのことだ。だいたい、あんたこそ、マンフレッドに拉ら致ちされた私を助けにきたではないか」

「貴様の奥方に頼たのまれたからだ。人妻とはいえ、美女の頼みを断れるか」

「だから、その話は女房に確かく認にんしたと、何度も。またぞろ繰くりかえすのも馬ば鹿からしいが、あいつはあんたに頼んでなどいないと断言しておったぞ」

「己おれこそ何度も言っているだろうが。貞てい淑しゆくな妻でも、亭てい主しゆに正直には言えぬことの一つや二つはあると」

「あいつにかぎって、そんなことはない！」

「どうかな。女は魔ま性しようだ」

「あんたはあいつを知らん。あいつは清らかな女だった。世界で一番やさしい女だった。考えてもみるがいい、この私と一いつ緒しよになってくれたのだぞ」

「たしかに、奥方の決断は謎なぞに満ちているな。魔性を通り越こして神秘ですらある」

「そこまで言われると不ふ愉ゆ快かいだがね」

　そう言いながらも、エンツォ・パンカロは低く喉のどを鳴らして笑った。明日のことについて、この年の離はなれた友に話すつもりはなかった。友もあえて訊きこうとはしないだろう。彼はファミリーの一員ではなく、ジョゼッペ・ザンニーニのような義兄弟でもない。えがたい、だが、ただの友だ。そうありたい。できれば、ありつづけたい。そのためには、通さなければならない筋というものがある。くだらない意地だと笑うなら笑うがいい。嘲ちよう笑しようされたところで、痛くもかゆくもない。理解も求めない。六十何年生きてきて、今さら変えられる人生でもない。おのれを裏切るわけにはゆかないし、最愛の妻が愛して支えてくれた人生でもある。ただとにかく、今こ宵よいはぞんぶんに飲もうと決めていた。友と語らい、飲もうと決めていた。

Omenage 897 11th revolution 3rd day

サンランド無統治王国ジェードリ・バルモア地区

〝サンブレイク・ホテル〟

chapter.19

義兄弟

「──リク、ジブンは家ぇ帰ってもええんやで。親おや父じは何時にならはるかわからへん。こうしてわてらもいてるんやから、ジブン一人くらいおらへんかっても大だい丈じよう夫ぶなんや」

　何度言っただろう。自分でも、いいかげんしつこいと思うが、言わずにはいられない。だいたい、やたらと豪ごう華かな造りのホテルの廊ろう下かで親父を待っているだけの仕事だ。気を抜ぬいているわけではないが、口から先に生まれてきたイビツは、黙だまっているのが苦手だから、相手さえいれば、ついきっかけを探してはしゃべる。無口なオルソとつるんでいたときなど、ほとんど反応がないから、一方的にそれをなじり、非難して、罵ば倒とうするだけで時間がすぎていったものだ。たぶん、息ができひんのんと、しゃべられへんのやったら、しゃべられへんほうがきっついやろな、と思う。口がきかれへんのやったら、くたばってもうたほうがマシや。それにしたっても、たいがい強ごう情じようなヤツやな。

「ファミリーに入った先から、そういうわけにはいかないです」

「アホ。せやったら、わいともれっきとした兄弟っちゅうことやろが。兄貴やで。兄貴の気き遣づかい無にする弟がどこにおんねん」

「すみません」

「謝っとる場合やないがな。ジブン、アレやろ。家、むっちゃワヤなことになっとんのやろ。ローラ、な。わいも知っとるさかい、これでもショックやったんやで。しっかりしとって、さばさばしとって、ええこやったからな。ちゅうか、ワレ、そないなときに、ホンマにファミリー入ってよかったんか」

「はい」

　リクはこれっぽっちも躊ちゆう躇ちよせず、即そく座ざに答えた。こんな世界で生きていれば、十八歳が餓が鬼きだとは思わないが、それにしてもリクはいやに老成している。逆に、そこが心配にもなる。だいたい、よくファミリーの仕事を一緒にしていた同年代の友人に、世話になっていた女を殺されただけでなく──リクはその友人をみずから手にかけたのだ。まあ、事実関係については、ややあやふやなところもあるが、少なくとも、リク自身が語ったところによると、そうらしい。それがわずか数日前の出来事なのに、リク

の赤い双そう眸ぼうは、コップに満たした水みたいに澄すんで、凪ないでいる。表情にも硬かたさはなく、穏おだやかと形容してもおかしくない。

　イビツの経験によると、こういう人間は本当の自分を心のどこかに閉じこめて、当たり障さわりのない、誰だれかと衝しよう突とつすることがないような別の自分を作り、演じている。もしかしたら、本人にもその自覚はないかもしれない。あるいは、イビツの思いすごしかもしれない。だが、リクは晴れて親父の子になって、正式にパンカロ・ファミリーに加わり、イビツの弟になった。身内のことは、いくら心配してもしたりない。それが身内だ。少なくとも、ケメックのスラムで生まれ育ち、他人を騙だまし、騙されて、蹴け落おとされ、蹴落として、ちっぽけなものをえて、すべて失って、流れついたジェードリで家族を手に入れたイビツは、そういうものだろうと思っている。

　そして、必死に、調子のいい、陽気な男を、弟たちにとっては面めん倒どう見みのいい兄を演じている。

　いつかそれが本物の自分になるはずだと信じて。

　──わいも、こいつとおんなじなんかもしらんな。

　それどころか、みんな、似たようなモンなのかもしらん。

「リク」

　と、今までポケットに手を突つっこんで黙って聞いていたカルロ・ボッシが、軽く顎あごをしゃくってみせた。

「イビツの言うとおりだ。お前はいったん家に帰れ」

「……でも」

「親父を守るのには、俺の命一つあれば事足りる。イビツがいて、他ほかの連中がいれば、おつりがくる。お前はいらねえンだよ」

　少々乱暴な言い方だが、それがカルロの心こころ遣づかいだとわからないとしたら、リクもそこまでのやつだ。果たして、リクは少しの間、うつむいていたが、素す直なおに「わかりました」と頭を下げた。

「帰ります」

「そうしろ。明日がある。メシ食って、寝ねとけ」

「はい。すみません。イビツさんも。お先に失礼します」

「気ぃつけてな。ああ、せや、これでなんか買こうて帰りや。湾わん岸がん道路まっすぐ行きよったら、屋台くらいあるやろ」

「いえ、金は──」

「ええから。恥はじかかすな」

「……ありがとうございます」

　リクはイビツがさしだした千ダラー硬こう貨か二枚を握にぎりしめて、控ひかえめに、だが、微笑ほほえみながら、もう一度頭を下げた。

「じゃあ、明日」

「ああ」

「ほんならな」

「失礼します」

　リクは廊ろう下かのそこかしこに配置されている者一人一人にいちいち挨あい拶さつしながら去っていった。まったく、律りち儀ぎなやつだ。あれはさすがに演技でどうこうできるレベルではないかもしれない。少なくとも、ある部分は天然なのか。

「──あいつ、ホンマにこれでよかったんかなあ」

「リクのことか」

「へい」

「自分で決めたことだ」

　カルロは背筋をぴっとのばして、少し顎を引き、一ひと重えの右目と二重の左目を伏ふせ気味にして、ポケットに両手を突っこんでいる。イビツが知っている、いつもの姿勢だ。必要があれば、カル

ロは何時間でもそのままでいる。すぐにだらけた体勢をとりたくなって、今も気がつくとしゃがんでいるイビツからしてみれば、驚きよう異い的な忍にん耐たい強づよさだ。

「ああ見えて頑がん固こだ。誰が何言おうと聞くまい」

「兄貴が言ゆわはってもですか」

「俺はずっとファミリーに入れとすすめてきた」

「せやけど、状じよう況きようが状況ですやん」

「リクが決めたのは、こんなときだからだ」

「義理立てっちゅうことですか」

「それだけじゃない」カルロは短く息をついた。「──おそらくな。守りたいんだろう。あいつは勘かんがいい。連中がやばい存在だと肌はだで感じてる。イビツ、てめえも実際やりあったからわかンだろうが。やつらはまともじゃない」

「まあ、なんとなぁく」

「親おや父じも察してる。やつらはなんとしてもつぶさなけりゃならねえ」

「なんやまるで、わてら正義の味方みたいでんなあ」

　イビツが肩かたを揺ゆらしてヒャッヒャッヒャッと笑ってみせたら、珍めずらしくカルロもごく低い笑い声をたてた。

「正義か。あまり聞かねえ言葉だな、この国じゃあ」

「わいも久々に口にしたような気ぃしますわ。血には血を。所しよ詮せん、わてらには、復ふく讐しゆうのほうがお似合いや」

「ああ」

　うなずいてみせたカルロの頭のなかにも、オルソの名前と顔が浮うかんでいたはずだ。むろん、他の兄弟たちのことも忘れていないが、カルロとオルソとイビツは、趣しゆ味みもあわないし、性格も違ちがうし、何から何までバラバラだったのに、不思議と馬があっ

た。オルソは寡か黙もくで、カルロも口数が多いほうではないが、何を考えているのか、なぜだかイビツにはわかった。いや、わかろうがわかるまいが、なんでも受け止めることができた。大おお袈げ裟さにいえば、今、カルロがナイフを突つきつけてきて「どうしてもてめえを殺さなけりゃならねンだ」と言えば「ほんだらどうぞ」と笑えるだろう。そんな間あいだ柄がらだった。正直、オルソを亡なくしたのは、おのれの手足を引きちぎられるよりも痛手だった。

　だが、そんなことは口が裂さけても言わない。一見、カルロは以前と変わらないし、イビツにしてもそうだ。たぶん、オルソがイビツやカルロを失っても同じだろう。知っているからだ。いくら泣いても、わめいても、悔くいても、転がり回っても、気がすむことはなく、この傷が癒いえることはないと。むしろ、癒いやしてはならないのだと。死ぬまで背負って生きてゆかねばならないものが、人にはあるのだ。

「せやけど──」イビツは立ちあがって一つのびをした。「どうせやったら、リクには、もっとこう、マシなときに兄貴面づらしてやれたらね。あの餓が鬼き、すかしとって、どうもかわいげがない。暇ひまやったら、弟らしゅうせえって、めいっぱい教育したったるのに」

「お前の教育っていったら、飲む打つ買うか」

「へっへっへっ。兄貴にはかなわんなあ。ま、厄やっ介かいごとはちゃっちゃと片したって、ゆっくり飲んましょうや」

「ああ……」

　カルロはイビツをちらりと見て、口くち許もとをかすかにゆるめてみせた。

「そうだな」



そして、おれは、裸足の海岸で見つけたルカをそっと抱きしめた。
それが正しいことなのかどうか、よくわからなかった。
もしかしたら、おれは人をなぞっているだけなのかもしれない。
おれが感じている気持ちは、ぜんぶまがいものかもしれない。
ただ、そうすべきだと思った。
そうしたいと思った。

まずルカを裏切らないことから始めようと思った。
おれは自分からルカに約束した。

ずっと、そばにいるよ。

月と海に見守られながら、おれとルカはこどもみたいに指切りをした。

Omenage 897 11th revolution 4th day

サンランド無統治王国ジェードリ・赤線地区
〝パンカロ家〟

chapter.20

日没

1

カレーナ人は日暮れに決けつ闘とうする。

理由は、単純だ。

憎にくったらしいやつをぶっ殺して、すっきりした気持ちで、うまい晩飯を豪ごう快かいにたらふく食うためだ。

だが、今回は慎しん重ちようを期して、宵よい闇やみの訪おとずれとともに、三箇か所しよの拠きよ点てんからそれぞれ人魚岬みさきにある元大海王神オストロス神しん殿でん、現ゲヘナ聖堂を目指す手て筈はずとなっている。兵力を分散させることについては異論もあったが、偵てい察さつの結果、敵側には相当数の騎き兵へいがいることがわかっている。チーロ率いる一隊が壊かい滅めつの憂うき目を見たように、騎兵相手に守勢に回らざるをえなくなると、やはりそうとう苦しい。警けい戒かいが厳重なので困難だが、できれば奇き襲しゆうをかけたい。それが無理ならば、せめて敵の本ほん拠きよ地ち前で勝負をかけたい。

そこで、三々五々出発し、地の利をいかして街にひそみながら、人魚岬の合流地点へと向かうことになった。三箇所の拠点には、かき集められるだけの装備を集めた。ファミリーはしばらくの間、大きな抗こう争そうを経験していないが、準備は怠おこたっていなかった。強化繊せん維い製のトレンチコートや特とく殊しゆ加工を施ほどこしたスーツ、追加装そう甲こう、各種刀とう剣けん類、弩いしゆみなどは、常に余よ剰じよう分をふくめて用意していたし、いつでも使用できる状態にあった。それらの一部はあの火災で焼失したが、パンカロ家や名人街の倉庫に保管してあったぶんは完全に無傷だった。パンカロ・ファミリー及および関係者の戦闘要員四百余名、完全とはいかないまでも、全員なんとか武装できる見こみが立っている──なんてことは、正直、チーロ・パンカロの頭にはまるで入っていない。

ただ、たぎっている。

名人街の一角にある殺風景な倉庫のなかで、スーツの上にそろい

のトレンチコートを身にまとい、緩かん衝しよう材ざい入りの硬こう化か山やま高たか帽ぼうをかぶって、剣やら何やらを携たずさえた連中を眺ながめていると、身み震ぶるいが止まらない。もっといってしまえば、楽しくて、楽しくて、仕方ない。

　やっぱ、なんつーかよう、とチーロ・パンカロは思う。ロマンだよなあ。喧嘩出入りってのはこうじゃなきゃいけねーよ。オレってば、ほら、戦うために生・ま・れ・てーきた男だからさ。誰だれも言ってくんねーけど、オレは自分で自分のことそう思うわけよ。だって、それっきゃ取り柄えねーし。まあ、右手の肘ひじ下した十サンチくらいから先がなくなっちまって、その取り柄もビミョーに減だけどな。あくまで、ビミョーにね。くっつけんのは楽勝でも、生やすのとかは超ちよう難すぃーらしいから、しゃーねーべ。クヨクヨすんのは性しようにあわねーし。義手もつけたし。

「しかも、戦闘用のウルトラ攻こう撃げき的なやつな。ぎゃははは」

　チーロは右みぎ腕うでをぶんぶん振ふってみた。痛みは、まだある。しかも、きれいにふさいだ傷口や無理やり装具を埋うめこんだ箇所ではなく、なくなったはずの右手が奇き妙みように疼うずく。とはいえ、我が慢まんできないほどではない。というか、我慢するしかない。義手は鋼鉄製で、重量はかなりのものだが、チーロの力をもってすれば自在に扱あつかえる。刀剣みたいな形がいいかとか、槍やり型はどうだろうとか、いろいろ迷ったあげく、とにかく頑がん丈じようで破は壊かい力りよくのある球形を選せん択たくした。嫌いやがる医術士に無理やり協力させて、芯しん棒ぼうと右腕の橈とう骨こつ、尺しやつ骨こつをがっちりしっかり接合したので、強度も問題ないはずだ。ハンマーパンチ壱いち號ごう。チーロ・パンカロ二十三歳の右手だ。

「まっ、さすがにこれじゃあよう……」恋こい人びととしては不適格だとため息をついたが、すぐに戦闘前の昂こう揚ようが蘇よみが

えってきて、自然と鼻息が荒あらくなってきた。チーロはこらえきれなくなって、サイズのあうトレンチコートを探してうろうろしている鈍どんくさいやつの尻しりを蹴けりあげた。「このアホッ！」「──うぎぃっ！」「何トロトロしてやがんだよ！　いーそーげっつーの！　女と初デートする前に勝負服コーディネートしてんのとはわけがちげーんだぞ！　たーたーかーいーだーっ！　バトルバトルバトルッ！　わかってんのか、ボケ！」「…………」「あや。蹴りすぎ？　もしかして死んだ？　おーい。生きてっかー」「……ひゃ、ひゃい……」「ダメだな、こりゃ。おい、誰かこいつ捨ててこい」

　すぐに何人かきて、合成骨材コンクリート剝むきだしの床ゆかで尻を押さえながら悶もん絶ぜつ寸前の役立たずを引きずっていった。まあ、今日は大金をつかませた医術士を各拠点に数名ずつ待機させているから、あいつがめでたく一人目の患かん者じゃということになるだろう。ちょっとだけやりすぎた気もしないではないが、おかげで雰ふん囲い気きがビビビシッと引きしまった。倉庫内にいる約百人ほどの動きが、三割増しくらいになったようにさえ見える。それが目の錯さつ覚かくか思いすごしだとしても、そのこと自体、十秒もたてばチーロの頭から消え去る。マジで都合よくできてるよなあ、オレの脳。さすがにこの倉庫は安全だろうって、オレにここを任せたニーノの判断は正しい。そこんとこよぉーくわかってて、分をわきまえてるオレって、ひょっとしてわりと偉えらい？

　などと考えながら、チーロは一番大きいトレンチコートを羽織ろうとしたが、だいぶ窮きゆう屈くつだ。というか、ハンマーパンチ壱號が邪じや魔まで、右腕が通らない。じつは、今、着ているスーツも、右みぎ袖そでをぶった切ってある。しょうがないので、チーロは近くにいた者に手伝わせて、肘、膝ひざや急所をカバーする追加装甲だけ装着し、背中に大おお振ぶりのモトロール刀を二本背負った。山高帽はどれも小さくて、かぶることができなかった。他の連中と同じ恰かつ好こうでバシッと決められないことがやや不満だったが、一人だけ違ちがえば目立つだろうと思いつき、俄が然ぜん、機き嫌げんがよくなった。

　ざわっ、と、鳥とり肌はだが立ったのはそのときだった。

　すぐに周りの連中も手を止め足を止めた。

　もしもーし、どーゆーことっスか。聞いてねーよ。だって、早くね？　早すぎじゃね？　何、この音。外から聞こえてくる、音。ド

ドドドドドドドド……って。倉庫の側面にある小さな通用口から、息せき切って駆かけこんでくる者がいた。「──敵が！　う、馬！　やべえ、こ、こっちに……！」つーか、もうちょい落ちついてちゃんと話せよ、とチーロの常時劣れつ勢せい気味の頭は思った。落ちついてらんねーよ、と、いつもだいたい優勢な身体からだは反応していた。なんでとかどうしてとか、一いつ切さい考えなかった。チーロは走りだして怒ど鳴なった。「出んぞ、やんぞ、敵、敵、敵だ！　こい！　カマーンだ野や郎ろうども！　オレにつづけやファッキンガイズ……！」

2

　カレーナ人は日暮れに決けつ闘とうする。

　風習に理由など求めても無む駄だだ。

　あったとしてもたいてい不合理で、いくらでもケチのつけようがあるに決まっている。

「ぬう……！　なぜだ！　どうしてだ！　まさか──」ニーノ・パンカロはその先を言わなかった。言っても詮せん無なきことだし、詮せん索さくしている場合でもない。ベアフット地区の海岸沿いにある、切り立った崖がけの下の洞どう窟くつを利用して造られたこの拠きょ点てんには、防衛のための備えなどもともとないのだ。一応、海岸に通じる表口には鉄てつ柵さくが立ててあったが、門もん扉ぴを閉とざして施せ錠じようしたところで、漁師や餓が鬼きの侵しん入にゆうを阻はばむ程度の効果しかない。いや、身軽な者なら、柵をよじ登って乗り越こえることくらいできるだろう。当然、攻せめられれば、呆あつ気けなく突とつ破ぱされる。それはもう仕方ない。もとより、この拠点を守ることなどまるで考えていなかったのだ。ここはあくまで物資と人員を集めるためだけの場所で、その点については、用心に用心を重ね、時間をずらし、洞窟の別の入り口なども利用して、極力人目をさけたつもりだった。このニーノ・パンカロの仕事だ。抜ぬかりはなかったはずだ。と、いうことは、だ──くそったれ。

　まあ、いい。どのみち、ニーノは誰のことも信用していない。最

後に頼たよることができるのは、結局、おのれだけだと思っている。だから、表口があっという間に抜かれ、赤と黒の鎧よろいだの陣じん羽ば織おりだのをまとった敵がなだれこんでくると、ニーノはすぐさま動どう揺ようしまくっている手下どもに「逃にげろ」と叫さけんだ。「奥だ、分散して奥に逃げろ！　外に出たら、合流地点を目指せ！　自分一人になってもだ！　たとえ死体になっても合流地点にたどりつけ……！」

　この洞窟は、入り組んでいて、長く、深い。旧市街オールドタウンの古い排はい水すい道どうに繫つながっている部分さえある。かつては海かい賊ぞくのアジトだったという話さえあるが、正直、ニーノも、間違いなく地上に出られる道は数本しか知らない。しかも、この状じよう況きようだ。敵は━血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの一団は、たぶん、七十から八十の間くらいか。数ではこっちのほうが若干多いものの、装備では負けているし、先手をとられて完全に浮うき足立っている。それに、口くち惜おしいが、やつらは本物の兵隊だ。やはり、質が違う。勝てない。うろたえている手下どもをなんとか踏ふみとどまらせ、ここで勝負をかけたとしても、勝ち目は薄うすい。では、どうするか。

　被ひ害がいが広がる前に、手下どもを逃がす。奥へ。奥へと。おそらく、パニックに陥おちいっているから、見当違いの道に逃げる者も少なからずいるだろうが、間抜けに用はない。いずれにしても、敵はそれを追う。ばらばらに逃げるのだから、ばらばらに追うしかない。深追いしないという選せん択たくもありうるが、それならそれでいい。間違った道を選んだ馬ば鹿か者もの以外は、そのうち地上に出られる。追ってきたら追ってきたで、こっちのほうが軽装だから、足は相手より速い。全員とはいかないが、気がきいてすばしっこい者は逃げおおせる。

　それがニーノの計算だった。実際、そうなりつつあった。

　ニーノも、子飼いの手下十人ばかりを引き連れて一本の道へと駆けこんだが、追っ手はずいぶん引き離はなした。道はアップダウンしながら左右に曲がりくねり、足場が悪く、明かりは手下が持っているランタンだけで、そうとう走りづらい。そうした悪条件も、こっちの有利に働いたのだろう。「フハハッ……！」思わずニーノは笑った。素す早ばやく的確な判断。よどみない指示。迅じん速そくな行動。困難な状況下において望みうる最善の結果。俺でこそ。俺ならではだ。さすが、俺だ。ようやく少しばかり正気に返って自覚に目覚めたからといって、所詮はたいして役に立たないウーゴ

や、ひたすら頭が悪くて悪くて悪すぎるチーロや、これ見よがしに忠義ぶって腹の底では何を考えているかわかったものじゃないカルロ・ボッシとは違う。ぜんぜん違う。

「……あ、あの、兄貴！」

　と、後ろから手下が声をかけてきた。もう十年近くニーノの舎しゃ弟ていをやっているボボ・ファッチョだ。ずいぶん息が弾はずんでいる。これくらいで、軟なん弱じやくなやつめ。ウーゴでもあるまいし。いや、こいつの場合、太りすぎか。とはいえ、体格のわりにタフだし、意外と機き敏びんで、力も強く、従順なので、荷物持ちとしては重宝している。

「なんだ」

「い、言いづらいんですけど……」

「だったら、あとにしろ！　黙だまって走れ！」

「いえ！　で、ですけど！　言わないとまずいような気が、ちょっと、して……！」

「だったら、さっさと言え！」

「お、俺の勘かん違ちがいかもしれないですけど！　それならいいんですけど！　この道って──この先、行き止まりじゃないかって……思ったりして……！」

「ハハハハァッ！」

　阿あ呆ほうめ。

　俺だぞ？

　このニーノ・パンカロ様が自信満々で選んだ道だぞ？

　ここは、昨夜ゆうべ、装備だのなんだのを運びこむときに使った道──とは、似ているが、なんだか、少し──ちょっとだけ、おかしいと思ってはいたのだが、アップダウンのなかに下り勾こう配ばいがやけに多いような気もしないでもないが、まあ、同じ道でも、進行方向が逆だと印象がずいぶん違うものだし、じつはそれほど道を覚えたりするのは得意ではないのだが、それにしても。

　糞くそ阿呆め。

　なんでもっと早く言わん。

「予定どおりだ……！」

　ニーノが急きゆう遽きよ足を止めて振ふり返ると、止まりそこねたボボ・ファッチョに足がかかった。やつは大おお仰ぎように転てん倒とうした。それで、いくらかすっきりした、なんてことはない。あくまで偶ぐう然ぜんだ。それに、これは、そう、予定どおりなのだ。まったくもって、完かん璧ぺきなまでに、予定調和のように、予定どおりだ。あまりにも考えたとおりに事が運びすぎて、つまらないくらいだ。

「よォォォし。このへんでよかろう！　これより、反転逆ぎやく撃げき！　追ってくる連中を粉こな微み塵じんに打ち砕くだいて、そのまま手当たり次し第だいに敵を駆く逐ちくしつつ、中央突破をはかる。あたりまえだ。当然だろうが。俺を誰だれだと思っているんだ。ニーノ・パンカロだぞ。愛する大事な部下どもを逃がすため、俺はこの身を犠ぎ牲せいにして囮おとりになり、しかも、だ！　見事に敵を打ち破って、威い風ふう堂々と合流地点にたどりつく！　すげえ！　何もかも俺の目もく論ろ見みどおりだ！　ワァッハハハハハハハァァッ……！」

　むろん、けっしてヤケクソになってなどいない。俺は冷静だ。頭にのせた水が凍こおるくらい、とてつもなく冷静だ。ニーノはまだぶっ倒たおれたままのボボ・ファッチョに背負わせてあるとっておきをちらりと見た。だから、まだあれも使わない。これくらい、ぜんぜん余よ裕ゆうだ。いつもどおりでいい。ふだんのままの俺でいい。ニーノは懐ふところにつるしてあったナイフ二本を左右の手に持ち、ジャケットを脱ぬぎ捨てた。あとは、腰こしに四本。ボボ・ファッチョにも十本ほど予備を持たせている。特とく殊しゆ繊せん維いのトレンチコートだの、追加装そう甲こうだの、余計なものは一いつ切さい身につけていない。ちなみに、甲かつ冑ちゆうで身を固めた相手に、ナイフ程度の刃は物ものでは不利なのではないかと考えるやつは、素人しろうと中の素人だ。

「──やるぞ、てめえら」

　宣言は静かに。体勢は低く。むしろ、ひそやかに足を進めろ。

恐おそれるなかれ。迷うなかれ。生死が分かたれるのは、いつも一いつ瞬しゅんだ。

俺は死という名の女を愛めでて、毎度捨てる。

敵の誰かが「Ｃｈａａａａｒｇｅ……！」と号令をかけた。洞どう窟くつの道は狭せまい。盾たてと剣けんを構えていれば、横にはせいぜい二人しか並べない。向かってくる。鉄てつ塊かいのごとき二列縦隊が。しかし、ニーノのほうが早い。襲おそいかかる。駆かけてゆき、跳とんだ。その瞬間、全身が快感にうち震ふるえた。先頭右のやつの盾を蹴けった。それを足場にして、そいつの頭を蹴飛ばし、剣、剣、剣、剣、剣──をくぐり抜ぬけながら、連中の頭やら肩かたやらの上を走った。俺は、人間どもを踏みにじっている。人間の上を走っている。「ハハハァァッ……！」愉ゆ快かいだ！　痛快だ！　笑いが止まらない。この道。狭い道の上にできた、さらなる悪路。ニーノは走破した。最さい後こう尾びのやつの頭を蹴って着地するなり、くるりと振り返って、後ろからそいつの目のあたりに二本のナイフをスッと突つき入れた。そこは兜かぶとで保護されていなかった。ああ。いい感かん触しょく。ニーノは陶とう然ぜんとしながらナイフを抜いて、もう一度刺さして、そいつの「ぎひいいいひぃ」という悲鳴をたっぷり味わいつつ、次の獲え物ものにとりかかるか、このまま遁とん走そうするか、一瞬、迷った。

3

カレーナ人は日暮れに決けつ闘とうする。

理由は、一つだ。

敗北して斃たおれるにしても、勝利して勝ち鬨どきをあげるにしても、美しい死に際ぎわの太陽のもとがいい。

ほんの些さ細さいなことで争い、議論して、手て袋ぶくろを地面に叩たたきつけ、斜しゃ陽ようのもとで殺して、殺され──その生きざまと死にざまに手を叩き、涙なみだして、歌い、語り継ついできたカレーナ人は、本質的に破は滅めつにこそ最上の美を感ずる人種なのかもしれない。

　それゆえに、断だん末まつ魔まの日ひ射ざしをその身に受けて、ひたひたと押しよせてくる赤と黒を身にまとった彼らの姿が、こうまで私の胸を打つのか。あるいは、これは単なる恐きよう怖ふなのか。

　パンカロ家は赤線地区の北東の外れにある。ジェードリという街は、ひしゃげた扇おうぎを傾かたむけたような形をしていて、海沿いから離はなれるごとに高くなってゆくため、この家からは無残に焼け落ちた赤線地区が見み渡わたせる。

　第一報が入ったのは、今から十分ほど前だ。遠くに彼らを目もく撃げきした者がいて、大声で「きた！」「やつらだ！」などと叫さけびながら、大おお慌あわてでパンカロ家に駆けこんできた。その者もパンカロ家に向かう途と中ちゆうで、人員がまだそろっていなかったこともあり、一時、邸てい内ないというか敷しき地ち内が騒そう然ぜんとした。恥はずかしながら、喧嘩出入り用の装備を身につけただけで緊きん張ちようしていたウーゴ・パンカロも、右往左往して柱に額をぶつけて涙ぐんだ。

　それをおさめたのは、カルロ・ボッシだった。「うろたえンな、みっともねえ」とカルロは恫どう喝かつするように言って回った。けっして大きな声ではなかった。ニーノやチーロのように、腕うでずくで黙だまらせたり、見せしめ的に誰かをひどい目に遭あわせたりすることもしなかった。ただ、二ふた重え瞼まぶたの左目は色男風だが、一重瞼の右目はものすごい迫はく力りよくだった。正直──胸がときめかなかったといえば、嘘うそになる。

　だが、ウーゴは誓ちかっていた。身内は絶対にそのような目で見ない。そして、その誓いを今までかたくなに守ってきた。とはいえ、頭ではわかっていても、感情は止められず、苦しい思いもしたが、たとえ無能呼ばわりされて白眼視されようと、ファミリーへの愛と忠誠に偽いつわりはなかった。せめて余計な波風は立てまいと思っていた。しかしながら──どうも父は、自分の実の息むす子こではなく、カルロ・ボッシを二代目にと考えている節もあるが、その気持ちは理解できる。額と同じくらい度量も狭く、忠犬しか飼えない癇かん癪しやく持もちの飼い主になりそうなニーノも、とにかく視野が狭くて考えなしであっという間に家をつぶしそうなチーロも、ここまで大きくなったファミリーを率いるに足る資質は持たない。もちろん、ウーゴ自身は問題外だ。まあ、形式を気にする者に配はい慮りよするなら、父がカルロを養子にするという手もあるし──そうなれば、カルロが弟に……！　ああ！　私は何を。なんたる

ことを！　いかん、いかん。

　などとごちゃごちゃ考えているうちに、混乱は収束し、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツが近づいてくる間にも、喧嘩出入りの準備が着々と進められた。用意を終えた者は、こぢんまりとした家屋とは不ふ釣つりあいな広い庭に整列して、カルロの指図を受け、十人単位で次々と外に飛びだしていった。スーツにトレンチコート、山高帽の装よそおいで統一した男たちは、もはや何も恐れてはいないようだった。少なくとも、ウーゴにはそう見受けられた。信じがたいことだった。私は、こんなにも震えているというのに。心臓が痛く、歯がガチガチ膝ひざがガクガクいって、怖こわくて怖くてたまらないというのに。

　やはり、私は最低の長ちよう兄けいであるだけでなく、最低の男なのか。エンツォ・パンカロの長男ともあろう者が、このようなときに、兵隊一人分の働きさえできないのか。

　ウーゴは玄げん関かんポーチから離れることができなかった。家から出てくる者、庭の一角に設営した物置で装備をととのえる者、外へ向かう者が、たまに怪け訝げんそうにウーゴを見た。その視線がつらかった。あとどれくらいだろう？　敵はもう、すぐそばまで迫せまっているのではないか。こんな場所で、ぐずぐずしていていいはずがない。そうは思うのだが、足が前にも後ろにも出てゆかない。進むことも、逃にげることもできない。カルロが遠くで「びびンな」とか「気合い入れろ」とか「力みすぎだ。力抜け」とか声をかけて兄弟たちを送りだしている。イビツの陽気なケメック訛なまりも聞こえる。そのそばにはつい先日晴れてファミリーの一員となったリクがいて、若い連中に微笑ほほえみながら何か声をかけ、逆に軽く小こ突づかれたり揶や揄ゆされたりして「がんばります」などと返している。だが、私は。私には、誰だれも。やはり──私は。私では。

「坊ぼう」と、後ろから肩かたを叩かれた。もう三十八になるウーゴを、そんなふうに呼ぶ者は一人しかいない。たぶん、エンツォ・パンカロの三人の息子のうち、長兄に一番の情愛をそそいでいるのは、彼だけだろう。それとて、単に義弟の最初の息子だからに違ちがいないが、ありがたいことに変わりはない。とくに、母の亡なきあとは、彼が心の支えだった時期もある。しかし、ウーゴは振ふり返らなかった。今、ウーゴの後ろでは、白髪白髭で骨張って見える体格の男が目を細めて微笑んでいるはずだ。「どうしたのです。いったいどうなさいました、坊」

「……なんでもない、ジョゼッペ」

「そうですか。この老人の目には、そうは見えませんがな」

「本当になんでもないのだ。私は大だい丈じよう夫ぶだ」

「放ほうっておけ」

　ぞくりと背筋が寒くなった。声だけで、ものすごい威い圧あつ感かんだった。

　父だ。エンツォ・パンカロがとうとう出てきた。わっと歓かん声せいがあがった。空気が一変した。やはり格が違ちがう。いくらカルロがやり手でも、重みが違いすぎる。ああ。父よ。あなたはご承知だろうか。まさしく、それがために──あまりに偉い大だいすぎるあなたの存在、それ自体が、私たち兄弟にとって、どれだけ重圧か。悲しいことに、蛙かえるの子が必ず蛙だとはかぎらないのだ。

　いちだんと士気を高める兄弟たちとは対照的に、ウーゴの震ふるえはどんどんひどくなってゆく。

　ジョゼッペと父がウーゴを追い越こしていった。

　父は、コートもジャケットもまとわず、シャツの上に強化ベストだけを着けている。左足は若じやっ干かん引きずっているが、金属製の補装具を装着して、杖つえはついていない。背負っているのは、八本のモトロール刀を交差させて据すえつけることができる器具だ。左手には、小型の円形盾たてと一体化した籠こ手てをはめている。懐なつかしい。父はこの姿でマンフレッド一家の本ほん拠きょ地ちへと乗りこみ、山さん賊ぞくあがりの熊くまのような大男、エドガー・マンフレッドを討うった。

　そして、そのかたわらには、全身を装そう甲こうで覆おおい、腰こしにジャラジャラぶらさげた短刀やら鋸のこぎりやら錐きりやら何やらと、二メーテル以上ある長い棍こん、一メーテル足らずの短い棍を巧たくみに使い分けて、あらゆる手段で義弟を掩えん護ごするジョゼッペ・ザンニーニがいた。

　赤線地区の〝大だい魔ま王おう〟と〝闘とう鬼き〟。

　かつてそう呼ばれた男たちが、再び戦場へとおもむこうとしている。

私は、ただそれを見ている。

その後ろ姿を。背中を。幼子のように、まだ見ぬ未来に怯おびえ、震えながら。

離はなれてゆく。先に行ってしまう。私は。私は──そのあとを追うこともできないのか。今や、すべての兄弟たちが父とジョゼッペを見て、二人に付き従おうとしているのに。もはや、カルロの指示は不要だ。残りの者たちは、二人を取り囲むようにして行進する流れに、自然となった。私一人だけが部外者であるかのようだ。結局、そうなのか。私は駄だ目めな男なのか。変わることはできないのか。

「ウーゴさん」

「……はっ」心底から驚おどろいた。目の前にカルロ・ボッシがいた。胸がときめかなかったといったら嘘うそに──いや、そんなことをいっている場合では。カルロはコートを着ずに、追加装甲をつけ、愛用のモトロール刀を持っただけで、軽装といってもよかった。表情にもまるで気負いがなく、自然体だ。立派な男は、やはりこうでなくてはなるまい。ただ、カルロはわずかに眉まゆをひそめていた。不思議そうだった。

「一つ訊きいてもいいですか」

「あ、そ、それは……べつに、かまわない。私に答えられることならば」

「たいしたことじゃありませんが」

「そ、それなら、たぶん、なんとか私にも答えられると思う」

「さっきから、なんでそんなに──」

「うむ？」

「楽しそうにしてるンですか」

「は？」

ウーゴは自分の顔をさわった。

楽し──そう？

私が？

だが、たしかに、これは。

「ずっとお一人で笑ってらっしゃるンで」

「……ふ」笑いだしかけて、懸けん命めいにこらえた。ウーゴは頭を抱かかえてのけぞった。我が慢まんしきれなかった。ひゃあひゃあと声がもれた。ふぁははははははと大笑いしてしまった。そうか。そういうことか。そういうことだったのか。ウーゴ・パンカロ。お前は、お前という男は、怯えていたのではなく。怖こわがっていたのではなく。この震えをもたらしたものは、恐きよう怖ふなどではなく。

期待。

興奮。

いわゆる、そう──武む者しや震ぶるい。

「ふふふふふ……」ウーゴは笑う。カルロが軽く目を瞠みはって、驚いている。ウーゴはその肩を軽ぅく、そぉっと叩たたいてやった。いい音がした。快音だった。一いつ瞬しゆん、カルロが顔をしかめてよろめいた。「なんでもない、カルロ。弟よ。本当になんでもないのだ。私は大丈夫だ。ただ、ほんの少しだけ、戦いが楽しみで楽しみでならないだけだ。何しろ、私は慣れていない。喧けん嘩かといえば、こどものころに、何度も、いやいや、何度か弟たちを半殺しにしたくらいでね」

「……あのニーノさんと、チーロ坊ぼつちゃんを、ですか」

「あくまで、こどものころの話だよ。ふふふふふ。私は根っからの平和主義者だから、割れ物を扱あつかうように手加減していたし、命まではとったりしないというのに、ジョゼッペがいつも止めに入ってね。思わず手て許もとが狂くるって、みんな血だるまさ。ふふふふふ。もう少しだったのに。いやいや。冗じよう談だんだよ。私は芸術をこよなく愛する平和主義者だ。母に諭さとされて、目覚めたのだよ。『ウーゴ、あなたはお兄さんなのだから、弟をいじめてはだめよ。喧嘩はよしなさい。弱い者を踏ふみにじるような真ま似ねもやめなさい。気持ちが昂たかぶって仕方ないときは、絵画に

目を向けて、音楽に耳を傾かたむけ、心を落ちつけるようにしなさい。それでも無理ならママがいつでも抱だきしめてあげるわ』とね。ふふふふふ。残念だな。ここには絵もなく、音楽も聞こえない。ママンもいない。ちょうどいい。好都合だ。さあ、カルロ。行こうか。喧嘩だ。楽しい喧嘩の始まりだ。ふぁははははは……！」

　足に羽でも生えたかのようだった。心も軽かった。ウーゴは走りだした。くびきから解き放たれたウーゴの身体からだは、見る間に加速していった。激しく発熱していた。なんだか、全身の細さい胞ぼうがつくりかえられてゆくような感覚があった。私は生まれ変わろうとしている。いや、本来の自分をとりもどそうとしている。私が変われば、世界も変わる。目の前に新しん鮮せんな世界が広がっている。新鮮！　新鮮！　フレッシュだ……！　兄弟たちがぽかんとして駆かけるウーゴを見つめている。兄弟たちよ。私のことなどいい。いいのだ。私は大だい丈じよう夫ぶだ。それどころか体調も頭の具合もすばらしく良好だ。完かん璧ぺきだ。ウーゴはさらに足を速めた。父とジョゼッペに、もうすぐ追いつく。ウーゴは叫さけんだ。「パァパ……！　わかったのです！　私は何もかも理解しました！　今こそ私は戦う！　パァパ！　あなたと、そして、ファミリーのために！　兄弟たちのために！　私は、戦い、戦って、殺し、殺して、殺しまくる……！」

　父が足を止めた。

　振ふり返り、その凶きよう相そうに、じつにまがまがしい、見る者を凍こおりつかせる笑えみを刻んだ。

　ジョゼッペも力強くうなずいてくれた。

「──みんな、私につづけ……！　パンカロ・ファミリーのために……！」

　兄弟たちが、最初は戸と惑まどい半分で、次し第だいに迷いを吹ふき飛ばして、腹の底から「おお！」と雄お叫たけびをあげ、拳こぶしや剣けんを振りあげた。ウーゴは父とジョゼッペを追い抜ぬいた。門をくぐって、パンカロ家の敷しき地ちから飛びだした。そこにはすでに百名ばかりが列をなしていた。「愛いとしい兄弟たちよ！」ウーゴは胸むねーいつ杯ぱいの愛をこめて彼らを鼓こ舞ぶした。「行くぞ！　準備はいいな！　思い残したことがあるなら、ここに捨ててゆけ！　戻もどってきて拾えばいい！　この先を死に場

所などと考える必要はまったくない！　お前たちは死になどしない！　死ぬのは──」

　そう。

　我々は死なない。パンカロ・ファミリーは永遠だ。

　ウーゴは隊列の先頭に出て、ゆるやかな坂道をひたひたと押しのぼってくる騎き馬ばの群れを指さした。

「死ぬのはやつらだ！　我々がやつらを皆みな殺ごろしにする……！　そうだな？」

「もちSi', ろんSi', だSi'！」「もちSi', ろんSi', だSi'！」「もちSi', ろんSi', だSi'！」「もちSi', ろんSi', だSi'！」「もちSi', ろんSi', だSi'！」

「わざわざやつらのほうからきてくれた！　むしろ行く手間が省けた！　そう思うだろう！」

「もちSi', ろんSi', だSi'！」「もちSi', ろんSi', だSi'！」「もちSi', ろんSi', だSi'！」「もちSi', ろんSi', だSi'！」「もちSi', ろんSi', だSi'！」

「さあ、楽しい復ふく讐しゆうの時間だ！　兄弟たちよ、ぞんぶんに楽しむがいい！」

「もちSi', ろんSi', だSi'！」「もちSi', ろんSi', だSi'！」「もちSi', ろんSi', だSi'！」「もちSi', ろんSi', だSi'！」「もちSi', ろんSi', だSi'……！」

「──よォォォォォし……！」

　と、重々しい、地じ響ひびきのような低い声が、ウーゴだけでなく、兄弟たちの鼓こ膜まくをなぶった。ふと、ニーノに似ているとウーゴは思った。違ちがう。そうではなく、ニーノの声が父によく似ているのだ。私は顔が父にそっくりで、若いころの父はチーロのように手に負えなかったとジョゼッペがいつか言っていた。

　──血、か。

　ジョゼッペやカルロ、イビツ、リクら、後続の兄弟たちを引き連

れて、父が門から出てきた。

　その左右の手が、背中から二本のモトロール刀をすらりと抜いた。



　父は、右手の刀を高々と掲かかげて、振り下ろした。

「全殺しだ……！」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！」

　そうして、ウーゴを先頭に、パンカロ・ファミリーの二百名近くがほぼ一いつ斉せいに駆けだしたときだった。

　騎馬の群れが停止した。

　くるのか。そうか。くるのだな。ウーゴは邪じゃ魔まくさいトレンチコートを脱ぬぎ捨てながら、騎馬の群れの最前列、中央あたりにいる一人の騎士に目をつけて、舌なめずりした。彼が手をあげて何か号令をかけた瞬しゅん間かん、連中はぴたりと止まった。装備は赤と黒の陣じん羽ば織おりに騎兵槍ランス、盾たて、剣で、他の者と同じようなものだが、間ま違ちがいなかろう。あれが指揮官。あれが私の獲え物ものだ。ウーゴは左右の足でバッバッと地面を蹴けりつつ、両手の骨をボキボキ鳴らした。ちなみに、素す手でだ。武器など持っていない。ママン。あなたが買ってくれた特製のピアノは現在も活かつ躍やく中です。ふつうのピアノは、夢中になって弾ひくと、すぐに壊こわれてしまう。私の指の力はほんの少し強すぎて。それで、鍵けん盤ばんはすべて金属製だし、もともと特とく殊しゅ鋼鉄製である弦げんも、さらに高強度のものを使用している。その他の内部機構にしても、ぜんぶ私用に設計され、強化されている。だが、それでも私の力がほんの少し強すぎるために、すぐに音が狂くるってしまい、私の演奏は素すっ頓とん狂きょうなものとなる。私の音感も狂う。私はもうあきらめている。しかし、いいのだ。あのピアノは、ママンの愛の証あかしだ。だから、私はママンのピアノを弾いて、弾いて、弾きつづけて──ほうら、私の指には、いつの間にか、こんなにすごい力がメキメキメキメキあふれている。

　それを見せつける機会はすぐに訪おとずれた。

　あの騎士が、指揮官とおぼしき者が、ウーゴめがけて騎兵槍ランスを投じたのだ。

　正確な投とう擲てきだった。相手が投げた瞬間、これは命中するとわかった。ウーゴは、だが、よけなかった。向かっていった。「ふぁはははは……！」いい。すごく、いい。このスリル。この感覚。ウーゴは騎兵槍ランスの先せん端たんを見つめたまま突つっ走

り、右手の人差し指と中指を開いて前にさしむけた。世界でもっとも難解で困難な楽曲の作り手ともいわれる天オピアニスト、カラン・ブールの譜ふ面めん上の音おん符ぷを鍵盤で再現するよりはたやすかった。というより、カラン・ブールの曲など弾けないウーゴにとっては、遥はるかに簡単だった、といったほうが正しいだろう。

　特別な気合いも不要だった。

　飛んできた騎兵槍ランスを、人差し指と中指で、シュタッと挟はさんでポイッと捨てた。

　そのまま、速度はゆるめない。

　騎兵槍ランスを失った敵方の指揮官は、だが、動どう揺ようしている様子はない。すっと右手をあげて、下ろした。「──Ｃｈａｒｇｅ」

　静かな、落ちつき払はらった号令を受けて、敵が、騎馬の群れが、次々と指揮官を追い越こして押しよせてくる。

　彼らの盾や剣が残日を照り返し、その装しよう束ぞくの彩いろどりとあいまって、赤々と燃えているかのように見えた。

　なんと美しい。

　まるで夕日の洪こう水ずいだ。

4

「──ほんと……きれい」

　なんとなく、だけれど。

「きれいな夕日」

　正面とか、後ろよりもいいんじゃないかと思って。

「……あの、さ。きれいだよ、夕日」

今日もダイニングテーブルに伏ふしたまま、ほとんど動かないステラの横に椅い子すを置いて、座ってみた。

リクとラッチャは仕事に行った。テッドは仕事には行かなかったけれど、掃そう除じと洗せん濯たくを手伝ってくれた。「ラッチャ、度胸あるよな。親方マジ怖こわいんだよ。トンカチとか平気で飛んでくるわけ。死ぬって。だけど、ラッチャがなんか言っといてくれるかなぁとか、期待してたりもして━俺って卑ひ怯きよう」とか言って、泣きそうになっていた。「べつに、いいんじゃないの。卑怯がいやならなおせばいいし。あんたは自分が卑怯だって知ってるんだから」みたいなことを言っておいた。朝ご飯とお昼ご飯はジョルジュと二人で作った。ジョルジュはかなり料理が上手だ。「いい奥さんになれそう」と言ってみたら「残念ながら、僕は奥さんには絶対になれない」とおもしろみのない答えが返ってきた。「つまんない」と正直な感想を伝えた。「そういうのを僕に期待されても困るよ」「期待はしてないけど」だったら問題ないね、とジョルジュは言った。かわいくないやつだと思った。アンナはまだしゃべらない。ただ、ミミの世話だけじゃなくて、掃除も少しだけ手伝ってくれた。そういえば、アンナもミミも、しばらくちゃんとお風ふ呂ろに入っていなかったから、うちのお風呂は狭せまくてぼろいけれど、無理やり一いつ緒しよに入って洗ってあげた。なぜか知らないけれど、不意にアンナが抱だきついてきた。裸はだかで抱きあうのはなんだかちょっと恥はずかしかった。でも、ぎゅっとしてみた。アンナは声を出して泣いた。そのうちミミも泣きだした。外からテッドが「大だい丈じよう夫ぶかよ」とか訊きいてきた。「のぞくな、すけべ」「のぞいてねーって。見えねーし」「だいじょうぶだよ。ね、アンナも、ミミも、だいじょうぶだよね」ミミはまだぐしゅぐしゅしていたけれど、アンナは涙なみだをこらえてうなずいた。

そうこうしているうちに夕方になって、ルカはステラの隣となりに座っていた。

そして、何を話したらいいかさっぱりわからなくて、窓の向こうで地平線の彼方かなたに沈しずもうとしている太陽を、むやみに誉ほめたりなんかしている。しかも、今も窓まど際ぎわの指定席で本を読んでいるジョルジュと違ちがって、語ご彙いが豊富じゃないから、「きれい」しか言えない。

「……はあー……」

　深くため息をついてみる。だいたい、自分から話しかけること自体、かなり苦手だ。何か訊きたいことがあっても、なかなか言いだせない。そんなことはざらにある。だから、仕方ない。だって、伝えるべき言葉が思い浮うかばないどころか──あたし、何がしたいのかな。ステラをどうかしようとか、したいとか、思ってるのかな。その段階でつまずくような有様だ。

　なんだか、疲つかれてもいる。

　まずあれをやって、次はあれ、その次はこれ。ちゃんと考えて、率そつ先せんしてやって、自分以外の誰だれかのことを気にかけて。こんなにたいへんだなんて思わなかった。今まで、あたしはほとんど、ステラに言われたとおり動いてただけだった。あたし、楽してた。

「ステラ、すごいね」

　ぴく、と、ステラの頭が動いたように見えた。気のせいかもしれない。

「偉えらいね。あたしはやっぱり、向いてないかも」

「向いてないね」

　ジョルジュだった。本を読みながらだ。むかつく。でも、同意するしかない部分もあった。

「客観的に見て、ステラのほうが手早いし、丁てい寧ねいだし、効率もいい。それから、ルカは共同作業が致ち命めい的にへたくそだよ。１＋１がなぜか２じゃなくて１以下になっちゃうタイプ。人を使う役目よりは、使われる役目のほうがまだマシ。とりあえず、かなり訓練が必要だと思う」

　やっぱり、腹が立つけれど。

「ジョルジュだって、協調性っていうか、そういうのないでしょ」

「そうだね。でも、ルカより要領はいいよ」

「あたしをけなして楽しい？」

「べつに」ジョルジュは本のページをぱらりとめくった。「けなし

てるつもりもないから。僕は事実を言ってるだけ。僕が間違ってるなら、反論してくれていいよ」

「やなやつ」

「うん」

　そううなずいてみせたジョルジュは、すっかり立ちなおっているように見える。少なくとも、表面的には。ただ、前よりも、よくしゃべるようになった。離はなれた場所からこっちを観察しているようなところが、少し薄うすれた。おかしな話だけれど、以前よりも近しく感じる。つまり、結局、立ちなおってなんかいない。そういうことだと思う。あたりまえだ。まだ時間が足りない。足りなさすぎる。夜の二階なんか、たいへんだ。あっちで誰かが泣いているかと思えば、今度は別の誰かが泣きはじめる。なかなか寝ねつけなくて、眠ねむることができても、夢にうなされて起きてしまう。思い出す。あの感かん触しよく。あたしは━殺した。ハーヴェイを、殺しちゃった。でも、殺されて当然だ。それだけのことを、ハーヴェイはやった。だけど、殺した。殺したんだ。死んだ。死んじゃった。ローラの身体からだが体温を失ってゆく経過。命が消える瞬しゆん間かん。忘れられない。忘れられるはずないよ。

　だから、いくら時間がたっても、前と同じにはならない。

　なりっこない。

　窓から射さしこむ夕ゆう陽ひで半分くらい橙だいだい色いろに染められたステラは、相変わらずテーブルに胸から上を投げだし、両手を枕まくらにして、ルカに後頭部を向けている。

　テッドみたいに部屋に閉じこもっていないで、ステラは朝ちゃんと起きて、ここにくる。

　悲しくて、きっと誰よりも自分を責めて、つらくて、もう何もかもいやになって、それでもステラは踏ふみとどまろうとしているのかもしれない。ここで。自分の仕事場で。いつもローラと語りあっていた場所で。よくローラが座っていた席で。あたしたちの気配を感じて。声を聞いて。ローラのいない日常が動きだしてる。そのことを認められずに、でも、逃にげないで、ここにいる。

　ルカはそっとステラの頭をさわった。自分の行動に、自分でも

びっくりしたけれど、ステラも驚おどろいたようだった。今度は間違いなく身じろぎした。手を払はらわれるかと思った。でも、ステラはじっとしている。ルカは少し指に力をこめた。初めてかもしれない。あたしがステラの頭を撫なでるなんて、変なかんじ。ステラを撫でてあげたいって、思うなんて。ステラが黙だまってるのも、変。あたしはがんばるのとか、好きじゃないし、苦手なのに。なんか、がんばってる。それだって異常事態だ。何もかもが、おかしい。まるで、ちょっと前までとは別の世界にいるみたいで。目が覚めたら、そこは見知らぬ土地で、常識も何も通用しなくて、二度と帰れないことだけはわかっている──みたいな。

　ただ、一人じゃない。

　家があって、そこにはステラがいて、ジョルジュがいて、リクがいて、ラッチャとテッド、アンナとミミがいる。あたしがいる。

　ローラがいなかったら、この家はなかった。

　ローラが残してくれたんだ。

「ステラ」

　あたしはやっぱり、こんなことしか言えないけれど。

「夕日が、きれいだよ」

　ステラが顔をあげてくれるまで、あきらめずに待つことくらいしか、できないけれど。

　それでも、あたしにできることはやろうと思う。みんながいるから。ローラの家がまだあるから。リクも約束してくれた。ずっとそばにいてくれるって。あたしは強くなれるような気がする。強くならなくちゃ。なんとか、なるよね。ローラ。見ててね。でも──なんだろう。少し前から、胸がざわざわしてる。これは、何……？　ルカは下した唇くちびるを嚙かんだ。いやなかんじだった。あのときとどこか似ていた。あのとき？　そう。あのときだ。お父さんが、漁に出たまま戻もどらなかった、あの日──

　と、誰だれかがドアを叩たたいた。

　ダンダンダンダン。

　玄げん関かんのドアだ。

「俺、俺、俺だよ！　ラッチャだよ！　誰か！　鍵かぎ、開けて！」

　居間でミミをあやしていたアンナが、無言で立ちあがって玄関に近づいていった。「鍵持ってるんだから、自分で開ければいいのに……」とかジョルジュが言っている。ルカもそう思う。だけど、それより気になることがある。仕事が終わったにしては、少し早い。それに、ラッチャはずいぶん慌あわてている。いやなかんじが急激にふくれあがってゆく。アンナが鍵を外して、ドアを開けると、ラッチャが駆かけこんできた。「──やばいって！　喧嘩出入り！　喧嘩出入りだよ！　つーか戦争！　馬に乗ったやつらが、すげー人数で、名人街に攻せめてきて！　もう仕事どころじゃねーって！」

「名人街に？」ジョルジュが本を置いて身を起こし、訝いぶかしげに眉まゆをひそめた。「なんか、話が見えないんだけど。どうして名人街なんかで？　戦争……？」

「相手、パンカロ・ファミリーなんだよ！　わかんねーけど、何十人も、もしかしたら百人以上いて！　ぐちゃぐちゃで！　どっか別のとこでも派手にやりあってるらしくて！」

　──リクは、仕事に行った。

　まだファミリーには入っていないはずだ。昨夜、尋たずねたら、そう言った。「みんなには、儀ぎ式しきが終わったら、おれが自分でちゃんと言うから」って。リクの決意を知っているラッチャも、口止めされていたみたいだ。

　でも、リクは仕事に行った。

　仕事の内容はわからない。必要に応じて、いろいろなことをやらされるらしくて、今日はどこへ行くとか、何をやるとか、いちいち話さないことも多い。こっちからも訊きかない。

　リクは今朝、仕事に行った。

「ルカ……！」駆けよってくるラッチャを、ルカは見開いた目で凝ぎよう視ししていた。「リクもいたのかな？　あのなかに、リクの兄貴も。俺、確かめようと思ったんだけど──怖こわくて。邪じや魔

まになりそうだったし。だって、死んでたんだ。いっぱい死んでたんだ。リクの兄貴、大だい丈じよう夫ぶだよな？　何、起こってんだよ？　どうなってんだよ？　俺──俺……」

　ルカは答えなかった。答えられなかった。ステラが顔をあげて、気き遣づかわしそうに、ルカを見た。ステラの声は、ひどくかすれていた。「ルカ……」「うん」うなずくことだけは、なんとかできた。けれども、それ以上は無理だった。だいじょうぶだよ。だって、ずっとそばにいるって、リクはあたしに約束してくれたから。だいじょうぶだよ。だいじょうぶに決まってるよ。そう言いたいのに、言葉が出なかった。唇くちびるだけがむなしく震ふるえていた。

5

「おい」見たところ、かなり血を吐はいているが、息はある。意識はどうか。カルロ・ボッシはそいつの兜かぶとを引っぺがし、右手で短い髪かみの毛をつかんでグイと引っぱり起こした。「聞こえるか」そいつの瞼まぶたが引きつるように動いた。顔をしかめて、低く呻うめく。口から赤黒い血がゴボリとあふれた。駄だ目めだ、こいつは。長くねえ。「おい。貴様らのボスは──サー・ジューダスとやらはどこにいる。貴様らを指揮してたやつは何者だ」「……さ……さぁ……」やっぱり、とぼけるか。いや。「……じゅ……だ……す、は……」そいつは笑ってみせた。凄せい惨さんな笑えみだった。「……せい、ど……で、いの、り……われ、わ……の……ため、に……きさま、ら……な、ど……」聖堂。ゲヘナ聖堂。元オストロス神しん殿でんか。そこで、祈いのり？　我々の、ために？　貴様らなど？　「……せいな……ほの……に……」そして、また例の聖なる炎ほのおか。カルロは右手を離はなすなり、左手のモトロール刀を一いつ閃せんさせた。サハ・リドル作「蓮れん華げ」。身み幅はばが広く肉厚で長大な刀身と、蓮はすをかたどった芸術的な鍔つばがアンバランスな印象だ。柄つかの形状が特とく殊しゅで、四本の指輪をつけた手で握にぎることにより、コツは必要だが、一種異様な斬きれ味をえられる。やつの頭部はなんの抵てい抗こうもなく胴どう体たいと離ればなれになって、別々に地面に落ちた。

それにしても、と、カルロはほんの数分前まで戦場だった坂道を見まわした。こっちの被ひ害がいは、二十五から三十の間。相手は、十か十五といったところか。敵ながら、なかなかに見事な退ひきっぷりだった。一往復の突とつ撃げきを行っただけで、さっさと引きあげたのは、おそらく的確な判断だ。何しろ、こっちは、急変したウーゴ・パンカロが向かってくる馬の脚あしを素す手ででわしづかみにしてぶっ倒たおすわ、リクが鳥みたいに飛んで馬上の騎き士しを引きずり下ろすわ、エンツォ・パンカロは二本のモトロール刀で馬ごと三枚に下ろすわで、騎馬をものともしない猛も者さが幾いく人にんもいた。それでも、馬の速度と質量をいかした突撃は有効だったし、実際、死傷者はこっちのほうが多いが、やがて乱戦になれば、形勢は逆転したはずだ。敵の指揮官はそれを見み越こして、さっさと引きあげた。そういうことだろう。

—ゲヘナ聖堂。

あてにはなるまい、と思う。死ぬ間ま際ぎわに、敵に訊かれて、首領の居場所を吐くうたう。そんな心情は理解しがたい。攪かく乱らんか。だが、一方で、連中に小細工はそぐわないような気もする。

サー・ジューダス。

人物像どころか、外見も不明。チーロ坊ぼつちゃんは、火付けアカウマのなかにいた「十じゆう字じ架かを背負った男」がそうではないかと言っていたが、確証があるわけではない。

敵。

妙みような敵だ。目の前の敵を殺しても、あやふやな手て応ごたえしかない。まるで、こんなやつらをいくら殺したところで、終わらない、とでもいうような。

「せやけど、あれやな、先手打たれたっちゅうことは—」

振ふり返って、それ以上言うなとイビツに目で合図した。イビツは「へい」と頭を下げた。イビツが着ている、刀とう子すやナイフをやたらとぶらさげた自前のコートは、それほど汚よごれていない。もともと、真正面からやりあうより、不ふ意い討うち、闇やみ討うちが得意な男だ。とくに、カルロのそばにいるときは、やつなりの位置どりで掩えん護ごに徹てつする。ただ、イビツの後ろにい

るリクが、涼すずしい顔で息も乱していないのは、わかってはいるものの、呆あきれるしかない。

「何人いくつ殺とった、リク」

「わかりません。数えてませんから」

「数えとらんてか。へっへっへっ。嫌いや味みなやっちゃなあ」

「すみません」

　しかし、かすかに頭を下げながらも、リクはどこか心あらずといった様子だ。視線だ。ちらちらと別の方向を見ている。カルロはその先を目で追った。あれか。元オストロス神殿。現ゲヘナ聖堂。一戦やらかした直後に、もう考えはあっちに飛んでやがるのか。

　リク。こいつは、ふつうじゃない。親おや父じやウーゴさん、ニーノさん、チーロ坊ぼつちゃんの三兄弟もかなりのものだが、リクはどこか違ちがう地平にいる。あれでも、本人はまだ隠かくしているつもりらしい。底が見えないのだ。

　だから、リクが自分を知っているだけなのか、過信しているのか、そのあたりもよくわからない。ただ、どうも、余計な荷物まで背負いたがる癖へきがリクにはある。あぶなっかしい、と思う。どれだけ力があろうと、所しょ詮せんはまだ十八だ。餓が鬼きではないにしろ、一人前の大人ともいえない。リクをほとんど特別扱あつかいしてきたカルロが言えた義理ではないが、立派に兵隊をやってくれているだけで、上出来すぎるくらいなのだ。それ以上の働きをしているのだから、もういい。十分すぎる。弟でいろ。ただの弟で。てめえ一人に背負わせるわけにはいかねえンだよ。

「イビツ、隊列組みなおさせろ」

「へい」

　カルロはイビツに命じてから、親父とジョゼッペ・ザンニーニに近づいていった。ジョゼッペが何事か耳打ちして、それにうなずいている親父の足あし許もとには、ウーゴ・パンカロが目をつぶり、大の字になって寝ている。無傷のようだが、だいぶ暴れたので、ゼエハアゼエハアかなり息が上がっていた。長いブランクのせいか。どうやら体力は人並みらしい。

「親父。ここに兵隊が回ってきて、他ほかの拠きよ点てんが無事だと考えるのは少し虫がよすぎるかもしれません。このまま合流地点に向かうか、それとも──」

「時間は早まったが、予定どおりに進める」

　おそらく、おのれの半身のようなジョゼッペとも、そのことを話していたのだろう。親父の決断は早かった。

「ニーノもチーロもそうするだろう。あれらの性格を考えれば、な」

「はい」

「内通者はおらん」

　唐とう突とつだった。声も大きかった。わざとだ。親父はあえて断言してみせた。皆みなの胸のうちにわだかまっていたかもしれない不安を払ふっ拭しよくするためか。それもあるかもしれないが、親父の目の色は、それが嘘うそ偽いつわりない本音だと語っていた。

「裏切り者などおらん。いるはずがない。一人もだ」

「はい」

「子を信じん親がどこにいる」

　みずからに言い聞かせるでも、気負うでもなかった。むしろ誇ほこらしげに、エンツォ・パンカロはそう言い放ってみせた。親父が言ったのだ。親を信じない子がどこにいる。それでいい。疑いの靄もやのなかをまっすぐに奔はしれるほど、人は強くない。だから、道標が欲しい。道を照らす灯火が欲しい。絶対的に信じられる存在が欲しい。それさえあれば、俺たちは前を向ける。まともな人間のふりができる。

　たとえば、父親が誤って人を殺し、母親は村八分を苦に自殺して、親しん戚せき中をたらいまわしにされたあげく、腐くされ外げ道どうに堕おちた俺のような下衆ゲスも。

　故郷で行き場を失い、ロレンツィの港から貿易船で密航して、暗黒大陸経由でジェードリにたどりついた俺は、金になることならな

んでもやった。誰だれにでも雇やとわれた。頼たのまれれば女だって殺した。弱じやつ冠かん十六歳の、卑ひ劣れつで、非情で、安い殺し屋だった。

　ただ、最後に請うけ負った仕事はでかかった。

　パンカロ・ファミリーの首領ドンを、暗殺する。

　自分は賢かしこいと勘かん違ちがいしているどこかの馬ば鹿かが立てた周しゆう到とうな計画のもと、俺はエンツォ・パンカロに接近して、ファミリーにもぐりこんだ。カレーナ人で、あのころまだ十七で、計画に従って猫ねこをかぶっていた俺の待たい遇ぐうは、悪くなかった。それどころか、かなりよかった。親父はなぜか俺に目をかけてくれた。何度も丸まる腰ごしで俺に背中を向けさえした。まるで、誘さそっているかのようだった。まさか、と思った。

　そうこうしているうちに、絶好の機会が訪おとずれた。ある日、俺は親父と二人きりになった。親父が俺に背を向けた。殺とれそうだった。だが、躊ちゆう躇ちよした。胸のうちの「まさか」をどうしても消せなかった。迷っている俺に親父が言った。「どうした。私を殺さんのか」「すみません」俺は親父に斬きりかかった。謝罪の言葉を口にしながらも、本当に殺す気だった。しかし、親父のほうが上うわ手てだった。親父は赤子の手をひねるように俺の手から短刀ドスを奪うばい、半殺しにして、立てないようにしてから、仰あお向むけで床ゆかに倒たおれている俺の顔をのぞきこんできた。「お前に私は殺せん。殺す気がないからだ」違う、と思った。誓ちかって俺は本気だった。情など欠片かけらもなかった。「お前は私の子だ」だから、どうした。すべて計画どおりだった。見破られていたことをのぞけば。そのはずだったのに。親父が凶きよう相そうにまがまがしい笑えみを刻んでみせた。「子を信じん親がどこにいる」あの一言だった。俺は落ちた。

　俺は、誰かに信じてもらいたかった。

　金さえもらえば、たとえどれほど汚きたなくてくだらない仕事でも、必ずやりとおす。俺は裏切らない。裏切るのはいつもてめえらだ。安い殺し屋の俺は、まだ十七で、大人とはいえない、ほとんど餓鬼で、誰かに信じて欲しかった。それだけだった。

「イビツ、いいか」

「へい。準備オッケーですわ」

「親父、急ぎましょう」

　カルロにうながされて、親父がうなずき、ジョゼッペ・ザンニーニがウーゴ・パンカロを助け起こした。「坊ぼう」「……く、苦しい……ま、まだ息が……」「調子に乗ってご無理をなさるからです」「いや。いやいや。大だい丈じよう夫ぶだ……私は、大丈夫……ふふふふふ。もうすっかり。このとおりだ。ふぁははははは」立ちあがってみせたものの、返り血と汗あせにぬれ、依い然ぜんとして肩かたで息をしているウーゴは、正直、見苦しい。親父も苦々しそうにしている。だが、昨日まで下手なピアノを弾ひくしか能がないと思われていたパンカロ家の長男を笑う者は一人もいない。カルロは振ふり返ってリクに目をやった。リクはまたゲヘナ聖堂の灯台に翻ひるがえる赤地に黒十字の旗を見つめていた。いったい何を背負いこもうとしてるンだ。てめえはまだあのころの俺と大差ない、たかが十八の若造だろうに。

6

　──いや……まいったな。ブクブクブク。俺が間違うわけはないから、この状じよう況きようぜんぶが間違いということだろう。ブクブクブク。だいたい、ヤワなやつが多すぎる。ブクブクブク。俺は敵がひしめく洞どう窟くつからどうにか脱だつ出しゆつしたあと、とっさに機転をきかせて海に飛びこみ、こうして一人でも生きのびてるんだ。ブクブクブク。死ぬ馬鹿が悪い。しかし──そろそろ、かなりきつくなってきたな。ブクブクブク。息を止めているのも限界か。ブクブクブク。一度沖おきまで出たが、岸に向かってだいぶ泳いだ。岸はそう遠くないはずだ。ブクブクブク。そおっと。そっとだ。ニーノは海面から顔を半分だけ出した。そのときちょうど波がきた。「ぶはっ」またもぐった。それから、もう一回。慎しん重ちように。苦しくても、慎重に。もう少し我が慢まんすれば、空気なんぞいくらでも吸える。ニーノ・パンカロ、さあ、ゆっくりだ。暮れなずむ空を仰あおぐようにのけぞって、鼻の下まで──出た。呼吸！　おお、空気だ！　生き返る。生き返ったら、余よ裕ゆうができた。ニーノは海岸のほうを見た。砂すな浜はまだ。この時間帯だと漁師はもういない。というか、仮にいたとしても、家に逃にげ帰

るだろう。

　馬鹿め。

　いる。いるぞ。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ。

　見たかぎりだと、近くにいるのはたった二人、いや二騎きだ。その二騎は、馬を並べて波打ち際ぎわをゆっくりと南下している。あとは、遠くを駆かけまわっているやつが、十か、二十か。悲鳴や叫さけび声も聞こえる。まだ追い立てられているのだ。使えない手下どもが。いくら不意を打たれたからといって、糞くそ重たい鎧よろいを着たとろくさい連中に後おくれをとり、あまつさえ、俺についてくることすらできんとは。せめて、荷物持ちのボボ・ファッチョだけでもいればいいのだが、いつの間にかはぐれた。今ごろどこかで死んでいるか。あの役立たずめ。

　役立たずは嫌きらいだ。

　だが、役立たずの手下どもと、そいつらを殺す敵とでは、その敵をぶち殺すときに快感がえられる点を差し引いても、さすがに敵のほうがいくらか嫌いだ。

　二騎はこちらに気づいていない。

　ニーノは一いつ瞬しゅんだけ思案して、海中でビキニパンツ以外の衣類を靴くつもふくめて次々と脱ぬぎ捨てた。ナイフは二本、左右の手に一本ずつ持ち、波を利用しつつゆったりした横泳ぎで岸へと近づく。気分はまるで流木だ。いや、死体か。漂ひよう着ちゃくする水死体。そんなイメージだ。ただ、こっちへ向かってくる二騎の前に流れつく必要がある。そのために、多少急がなければならなかったが、なんとかなった。ニーノはうまく打ちあげられた。むろん、死んだふりをしている。ナイフは砂のなかに突つっこんで、巧こう妙みように隠かくした。

　さあ、どうする。

　ニーノは薄うす目めを開けて、二騎の動向をうかがった。

　あたりまえだが、やつらはニーノに気づいたようだ。

　もし、俺が砂浜に打ちあげられている半はん裸らの人間を見つけたら、と考えてみる。ぱっと見て、知っている顔かどうかにもよ

る。だが、いずれにしても、生死を確かく認にんしようとするだろう。俺がそうするのだから、やつらもそうするはずだ。

　果たせるかな、片方が手た綱づなをしぼって馬から下りようとした。そうだろう。そうだろう。

　ところが、もう片方が余計なことを。

「待て、パオロ」

　そいつは、鞍くらから騎兵槍ランスを外して、右手に持った──って、おい。

「死体にしてはどうも血色がよすぎる」

　当然だろうが。こちとら生きているんだ。俺の都合も考えろ。いくらなんでも、そこまで演技できるか。しかも、だ。

「それに、なんでパンツ一丁なんだ……よ！」

　いきなり騎兵槍ランスを投げてよこすとは、何様のつもりだ！

　ニーノはとっさに横に転がって騎兵槍ランスをよけた。すぐさま起きあがって低い姿勢で駆けた。阿あ呆ほうめ。なんでパンツ一丁なのか、だと？　「──そんなこともわからんのか……！」狙ねらうは、少し後ろにいる騎兵槍ランスを投げてきたほうだ。前にいるパオロと呼ばれたもう一人は、剣けんも抜ぬかず、馬が右に左によたよたして、その制せい御ぎよに苦心しているざまだから、雑ざ魚こに違ちがいない。雑魚など、これで十分だ。すれ違いざまに、馬の脚あしにシャクッと深めの傷をつけてやる。馬が暴れる。「──うわっ……！」雑魚パオロはせいぜい馬とたわむれていろ。ニーノはさらに駆ける。雑魚じゃないほうだ。やつは、馬を竿さお立だちにさせて、すでに剣を抜いていた。「どっからどう見たって、あやしすぎだろうが！」そのまま、馬ば蹄ていにかけるか、蹴け飛とばすつもりか。このニーノ・パンカロ様を。甘い甘い甘すぎる舐なめるな。「あやしさには理由がある……！」ニーノは退ひかなかった。突っこんだ。馬の脚きやく力りよくや蹄ひづめなど、ちっとも恐おそろしくない。あたらなければいいだけの話だ。頭上から襲おそいかかってくる馬蹄を、間かん一いつ髪ぱつくぐり抜ければいいだけのことだ。

　ニーノは、そうした。馬の腹の下にもぐりこんだ。もちろん、そ

こでじっとしてなどいない。即そく座ざにナイフをひらめかせた。筋肉がみっちりつまった馬の腹を、ザシュザシュかっさばいてやった。悪くなかった。畜ちく生しようにしては、いい感かん触しよくだった。「ハハハァッ……！」そうしてなまぐさい返り血を浴びながら、右方向に身を投げだし、回転して、飛び起きた。雑魚じゃないほうは、だが、どうやら、それなりに思いきりがいい男らしい。すぐに自分の馬を見限って飛び降りた。砂浜だったことも、やつにさいわいした。背中から着地しても、ダメージはなさそうだった。ただし、当然、機先を制したのはニーノだ。

「シャァァァァッ……！」「──くっ！」いななきながら駆け去ってゆく馬が跳はねあげた砂すな煙けむりのなかで、ニーノはやつに飛びかかった。やつはまだなんとか起きあがったところだった。不十分な体勢から、モトロール刀を振ふりまわしてニーノの接近を阻はばもうとした。だが、止まって見える。俺は速い。何しろ、ほとんど全ぜん裸らだ。少々寒いが、動きを妨さまたげるものが何もない。海水をたっぷり吸って重くなった服など着て、思うように戦えるか。風か邪ぜだってひきかねない。あやしさにはちゃんとした理由がある。そういうことだ。天才的な発想だ。というか、正真正しよう銘めい天才だ。やはり跡あと目めは俺しかいない。親おや父じもわかってくれる日がくるだろう。

「遅おそいィィ！　鈍のろォいッ！　とろくさいィィ……！」ニーノはやつの斬ざん撃げきを完全に見切ってスイスイかわし、懐ふところに入りこんで左のナイフで顔面を狙うと見せかけて、右の足裏で強きよう烈れつな足あし払ばらいをかけた。「──おうっ！」「ハハッ！」やつはまんまとバランスを崩くずした。そのまま中ちゆう途と半はん端ぱに立っているのは危険だと考えたのか、砂に転がりこんで、立ちあがりかけた。最悪ではない判断だが、どっちにしても同じだ。ニーノはもう距きよ離りをつめている。さあ、楽しい解かい剖ぼうの時間だ──と思ったら、やつは生意気にも、モトロール刀を突きだして体当たりを敢かん行こうしてきた。ニーノも前がかりになっていた。切っ先をよけるだけで精せいーいつ杯ぱいだった。突き倒たおされそうになった。それでも、転んでもただでは起きないのがニーノ・パンカロだ。ニーノは両足をやつの下半身に絡からめ、全身をひねって、巻きこんでやった。そのとき、ニーノは左手のナイフを捨てていた。あいた左手で引き倒したやつの右手をがっちり押さえて、右手のナイフをやつの左ひだり腕うでの装そう甲こうと胸きよう甲こうの合間にねじこみ、馬乗りになった。

「ジ・エンドだァァ！」「──ぐ……こんな、額の狭せめえ露ろ出しゅつ狂きよう野や郎ろうに……！」「ダァァレが露出狂だァッ！それに俺の額は狭くねェェ眉まゆ毛げが少ォォし上めなだけだァァッ！」「同じことだろうが！」「大おお違ちがいだァッ！もういい、おのれのあやまちを後こう悔かいしながら死──」と、右手のナイフを引き抜いてやつの顔面に突き刺さそうとした。しかし、俺は本当にすげえ。こんな状じよう況きようでも、ちゃんと後ろをケアしている。「──サー・アンドリュー……！」雑魚パオロか。後ろを見て確かめる前に、ニーノは左方向に跳ちよう躍やくした。雑魚パオロも、ようやく下馬して味方の掩えん護ごに駆かけつけたというわけだろうが、相手が悪すぎる。雑魚パオロの斬撃はニーノにかすりもしなかった。

　ただ、火をつけてしまった。

　嫌きらいだ。邪じや魔まされるのが一番嫌いだ。腹が立つ。いったいなんの権利があって俺を邪魔するんだ。人は俺を我が儘ままと言う。上等だ。それがどうした。とにかく俺は我が慢まんならない。邪魔する者を俺は許さない。雑魚パオロ。雑魚だが、雑魚のくせに、俺を、このニーノ・パンカロを怒おこらせた。

「貴様から死ねェェィ……！」「──っ！」ニーノの踏ふみこみに、雑魚パオロは雑魚なだけに、ぜんぜん対応しきれなかった。兜かぶとからのぞく引きつった顔は、まだ若かった。餓が鬼きで、雑魚で、未熟だった。ニーノは難なく雑魚パオロの懐に入りこんで、その左ひだり脇わきをすり抜けて背後に回り、左手で兜を剝はぎとりざま、後ろから右手のナイフを突つき入れた。狙うは右の眼球だ。お。プチススゥッと入って、コツッと止まる、いい感触。そこからさらに力を入れる直前の一いつ瞬しゆんが、ニーノは好きだ。そのときの反応は人それぞれ、さまざまだ。こいつはどうする。雑魚パオロは。

「……父さんダツド……」

　そう言った。

　どうやら、やつが助けようとした雑魚じゃないほう、サー・アンドリューとやらを見て言ったらしい。呼びかけたのか。つまり、アンドリュー＝父さんダツド、というわけか。なるほど。だからどうした。ニーノは力をこめた。「あぁ……」眼底の骨が砕くだけて、ナイフの刃は先さきがその奥に達する、すばらしく甘かん美びなひ

とときだった。「あぁぁ……っ──」さらに、素す早ばやく抜いたナイフを逆の眼球に突き刺しつつ、耳みみ許もとでやさしく囁ささやいてやる。「とくと味わえ。それが絶望だ」それから、雑ざ魚こパオロを乱暴に蹴け倒たおして、その手から落ちた剣を拾いあげた。もう死につつある雑魚パオロは、まだ「父さんダツド」だの「浄じよう化かがどうした」だのとつぶやいているが、じきにおとなしくなるだろう。

「さて──」ニーノは左手に持ったパオロの剣の切っ先をアンドリューに突きつけて、笑ってみせた。「こう見えて俺は慈じ悲ひ深い。父として子に先立たれるのは、さぞかしつらいだろう。息むす子このあとを追わせてやる」

「……息子じゃねえよ」

　アンドリューはうつむき加減で、左腕をだらりと下げ、右手に握にぎったモトロール刀は小刻みに揺ゆれていた。声も、かすかに震ふるえている。

「そんなでかい息子がいるように見えるかよ。見えるか。見えるかもな。そこまで年じゃねえが、若くもねえしな。ははは。でもな、そいつは俺の息子なんかじゃねえ。ただの──そう、ただの、部下だ。馬ば鹿かで、哀あわれな、餓鬼だ」

「そうか。まあ、どっちでもいい」

「ああ、そうだな。どうでもいいことさ。どうせ俺たちは、死ねば罪とやらが浄化されて救われるらしいしな」

「それなら、俺がいくらでも殺して解剖してやるぞ」

「いや」

　不意に、アンドリューが四囲に視線を巡めぐらせた。

　──しまった。

　ニーノ・パンカロとしたことが。

　手早く片づけて、馬でも奪うばって逃にげるつもりが、だいぶ時間を食ってしまった。

　おかげで、遠くにいた連中が騒さわぎに気づき、こっちに集まってこようとしているじゃないか。

「残念だな」

　アンドリューが、付け根を負傷している左腕に力をこめて、手を握り、開いた。

　その手を柄つかに添そえてモトロール刀を両手持ちし、八相の構えをとって、唇くちびるをゆがめてみせた。

「死ぬのはお前さんだ」

7

　もしかして、ダメかもな。いくらなんでも、こいつはマジでダメかもだよなあ。オレもたいがいアレだけどよ、アレって何よ、ようするにバカチンだけどよう──と、チーロ・パンカロは左手で額の汗あせをぬぐった。これくらいわかるって。さすがに。この状況がムチャクチャやばいってことくらい、オレでも悟さとるって。悟り開いちゃうって。だってよう。

　まず、前！

　この表参道最後の坂道をのぼりきれば、元オストロス神しん殿でん、現ゲヘナ聖堂だ。

　だが、いるわいるわ。

　騎き馬ばは十かそこらで少ないものの、鎧よろい兜かぶと剣けん盾たてで完全武装した徒歩カチの兵隊が四列か五列横隊で行く手をほぼ完全にふさいでいる。石いし畳だたみで舗ほ装そうされた道は幅はば十五メーテルほど。その両側に等とう間かん隔かくで石柱が立てられていて、坂道自体の幅は約三十メーテル。その両脇は断だん崖がいだから、基本的には、連中を突とつ破ぱしなければゲヘナ聖堂にたどりつけない。ぜんぶで、百か、二百か。チーロは数が苦手なのでよくわからないが、それだけでも厄やつ介かいなのに、あの列の中央にいるやつ。

でかい。

ありえないくらい、でかい。

あれはおそらく、二メーテルなんてものじゃない。たぶん、二・五メーテルくらいある。チーロも一九〇以上あって、まあ、わりとでかいほうなのだろうが、あれは違ちがう。レベルが違う。黒十字の焼き印が入ったやたらと巨きよ大だいで無む駄だに丈じよう夫ぶそうな木き槌づちを持って、赤と黒の鎧兜で全身を隙すき間まなくピッタリ覆おおっていることもあり、あそこまでいくとちょっと人間とは思えない。周りの人間がこどもみたいで、やつは山みたいだ。さすがのチーロも、あれは食わず嫌ぎらいしてしまいそうだ。というか、食ったら間違いなく腹を壊こわしそうだ。それどころか、身体からだがぶっ壊されちまいそうだ。

そして、後ろ！

こっちにも、いる。ぞろぞろいる。騎馬だ。表参道を埋うめつくしているのは、名人街の拠きよ点てんに攻せめこんできた連中の生き残りだけではない。繰くりかえすが、チーロは数が苦手なのでよくわからないけれども、あいつらだけにしては多すぎるような気がする。いや、明らかに多い。たぶん、百はいるだろう。もっとか。とにかく、たくさんいる。

—で、オレらは……。

名人街の拠点から、どうにかチーロについてこられた者が、四十か、五十か。このうち半分以上が弩いしゆみを持っていて、それぞれ前後に向けているから、敵は一応、距きよ離りをとってくれている。時間の問題だろうが。

あとは、ニーノが受け持っていた洞どう窟くつの拠点からきた者が、十か、二十くらい。

あわせて六十か七十か知らないが、ようやく合流地点までやってきたのに、しっかり待ち伏ぶせされていて、しかも前後を挟はさまれて、戦力的にはもちろん圧あつ倒とう的に不利で、全員の士気が限界ギリギリどころか、限界を突つき破ってとんでもなく低いということだけはたしかだ。

もっとも、そんなことがたしかでも、さっぱりうれしくないし、

まったく困ったものだし、困っている場合でもないし、困っているなんて柄がらじゃない。

　そうだ。そうだよな。こんなのオレらしくねーよ。つーか、オレが「ダメかも」とか思っててどうするよ。オレ、これでも親おや父じの息むす子こじゃん？　親父は一等強くて偉えらい男じゃん？　親父の顔に泥どろ塗ぬるわけにはいかねーべよ。たとえダメでも、なんつーの、前のめりに倒たおれるってのかな？　お？　オレ、今、難しいこと考えた？　もしかして頭よくなった？　なーんて、そんなわきゃねーってな。オレは頭がエア空っぽヘツド。だから、ぐちゃぐちゃ考えねーで、やるだけだよな。バシッ、ビシッとな。

「おい、ボボ・フトッチョ。てめーなんか背負ってやがんな。それオレに貸せや」

「……あ、いえ、でも、これは……」

　ボボ・フトッチョはニーノの舎しや弟ていで、太めのわりにすばしこくて、どうにかこうにか合流地点までやってきた。やはり奇き襲しゆうを受けてさんざんだったらしいが、ボボ・フトッチョでもたどりつけたのだ。どこかでくたばったに違ちがいないニーノは、無能で弱小でカスだとチーロは思う。しっかし、マジで死んじまったのかな、あのアホ。そこまで弱いか？　弱いか。

「その……ニーノ兄貴のものなんで、いくらチーロ坊ぼつちゃんでも、勝手に貸したりしたら、あとで殺されるっていうか。そもそも、俺、フトッチョじゃなくてファッチョだし……」

「うっせえ、バカ。あとなんかねえよ、デブ。貸せ、おら！」

　チーロはボボ・フトッチョが背負っていたブツを強ごう引いんに奪うばった。なんだ、これ。そう思いながら、右みぎ腕うでで抱かかえたその筒つつみたいな物体を、生身の左手で少しさわっていたら、なんとなく理解できてきた。ははーん。上についてるこのレバー回すと、なんか飛びだしてきやがるな？　ようは、弩のでかい版か。側面に何か刻印がある。〝RUNNING FIRE〟？　どうやらこれが名前らしい。うひょう。かっけー。粋ＣＯＯＬじゃん。

「よっしゃ。いっちょぶちかますか」

「あ……安全装置、外さないと」

「これだろ？　わかんだよ。それくらい。オレ、バカだけどこういうのは得意なんだよ」

　どうせ喧けん嘩かしか能がねえんだよ。だから、絶対に喧嘩しながらオレは死ぬんだよ。所しよ詮せん、殺やるか殺られるかなんだよ。結局、それがオレのすべてなんだよ。

　チーロ・パンカロのさして長くもない人生は、いつも戦いに彩いろどられていた。身近な兄たちからして、次じ兄けいは解かい剖ぼうマニアで何かにつけすぐナイフを振ふりまわすし、長兄もあれで昔は結構恐おそろしいヤツだったのだ。パンカロ・ファミリーの敵も多かった。殺しあいは日常茶さ飯はん事じだった。いちいち怯おびえてなどいられなかった。いつ自分が巻きこまれるかわからなかった。いつしか先制攻こう撃げきを心がけるようになった。強くなろうとした。女だの博ばく打ちだの、一時的に他ほかのことにかまけても、戦う、相手をぶちのめす、戻もどる場所は常にそこだった。

「いいか、てめえら。一暴れすんぞ。いや、大暴れな。超ちよう暴あばれでもいいけどな。なんでもいいから、とにかく殺るぞ。殺りまくれ。わかったかよ？　おい、聞いてっか？」

　だが、返事がない。見れば、誰だれも彼もしけたツラというか、むしろ唖あ然ぜんとしている。チーロには理解できない。てめえらアホじゃねーのかと思う。だって、どうすんだよ？　敵が動きだして挟み撃うちにされてギチョギチョのメッチョンメッチョンにされるまで、このままじっとしてんのか？　それって、楽しいか？

　ただ、チーロも、親父に命令されて、人を使う役目を何度もこなしてきた。自分と他人とはあれこれ違い、他人にもいろいろいるということは知っている。人が気分や気合いだけで動くものではないこともわかっている。つまり、理由だ。人が動くには、納なつ得とくできる理由というやつが必要なのだ。

「あのな。考えてみろよ。あっちな」チーロは坂道の上を示してみせた。「で、あっち」今度は下を示す。「──わかるよな？　ようするに、アレだ。オレらが上に突っこむだろ。したら、下のやつらはまあ突とつ撃げきかましてくんだろーけど、オレらは上に行くわけで、ぐちゃぐちゃになんだろ。下のやつらは困るべ？　そういうことだよ。わかるよな？　オレの言ってること」

「……ぜ、ぜんぜんわかんないんですけど」

　ボボ・フトッチョだけは目を白黒させてそう答えたが、なぜだか他の連中は軽く笑ったり、しょうがねえなあ、みたいな顔をしたり。馬ば鹿かにされているみたいで少々気にくわないが、ついてこないということはこれでもうないだろう。じゃあ、やるか。殺って、殺って、殺って、殺りまくって、あとは野となれ山となれ。気き魄はくが充みち満ちてくる。興奮してきた。鼻血がブーしそうだ。よだれがジュルジュル出る。チーロは仲間全員をぐるりと見まわした。

「よォォォォォし。てめえら、オレについてこい。ちなみに、オレの許可なしで死ぬのは禁止な。オレが死ねっつーまで絶対死ぬんじゃねえぞ。死ぬのは思いっきり殺ってからだ。いいな？」

　皆みなが一いつ斉せいにうなずいた。

　折しも下の騎き馬ばどもが動きだそうとしている。

　猶ゆう予よはない。

「──いっくぞォォォォルアァァァァァァッ……！」

　チーロは駆かけだした。いったん奔はしりだしてしまえば、何をすればいいか考える必要なんてない。チーロの脚あしは勝手に動く。左手も。作り物の右手さえも。チーロ・パンカロのすべては、喧嘩用に調整されている。チーロは足をゆるめずに右みぎ脇わきに抱えたラニングファイヤのレバーを左手で回した。「お、お、おっ……！」予想以上だった。反動も、威い力りよくもだ。射出口は正面からやや右に向けていたのだが、走っているせいで照準がぶれた。矢の束が、しっかり盾たてを構えている歩兵三、四人にズバババババババババババババ襲おそいかかった。バタバタ倒れた。すっげえ！　盾ぶち抜ぬいてら！　「ぎゃははは……！」ニーノは勢いに乗って射出口を左右に振りながらさらにレバーを回した。他の連中も次々と弩いしゆみを発射した。何せ、あれだけ敵がいる。わざわざ狙ねらいをつける必要がない。適当に撃てばあたる。敵も、崩くずれはしなかったものの、平静そのものというわけにはゆかなかった。見るからに動どう揺ようしていた。とはいえ、それは束つかの間でおさまるだろう。雰ふん囲い気き的にはこっちの押せ押せだが、実際の被ひ害がいはたいしたことがないし、ヤツの存在がガンだ。あの馬鹿でかいヤツ。チーロはヤツにもズバズバ矢を浴びせ

てやったが、ビクともしない。矢は何本か刺さったのに、平気の平へい左ざだった。チーロの本能が叫さけんでいた。ヤツだヤツを殺せヤツをしとめろ！　ラニングファイヤの矢や弾だまは間もなくつきた。チーロはラニングファイヤを左手で持ちなおして全力で投げつけた。「──おおおおおおおおっ……！」

　標的は、もちろんヤツだ。

　ヤツは巨きょ大だいな木き槌づちを振りあげた。

　振り下ろして、叩たたきつぶした。

　おのれに向けて飛んできたラニングファイヤもろとも、足あし許もとの石いし畳だたみを木こっ端ぱ微み塵じんにした。

「──我こそは血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ親衛隊〝裁きジヤツジメントの石ストーン〟隊長〝向こうデアデ見ずビル〟……！」

　腹の底がじんじん痺しびれる野太い声だった。体がでかいだけに、声量も半はん端ぱじゃない。

「〝真のザ・リ預言者アルワン〟、サー・ジューダス・アロンズ・ニードルスピア団長の〝裁きジヤツジメント〟にあらがう罪深き愚おろか者よ！　我が手で浄じよう化かの下準備をしてくれる……！」

「よくわかんねえなあ！」チーロは舌先で唇くちびるをぺろりと舐なめた。「わかる言葉で言えよ！　頭が悪わりぃこのチーロ・パンカロ様でもわかるようによう！」

「ズバリ殺してやる！」

「ぎゃはは！　やれるもんならやってみろって……！」

　チーロは一気に加速した。デアデビル野や郎ろうまであと七、八メーテル。まったく呆あきれるばかりだ。近づけば近づくほどでかい。何食ったらこんなに育つんだよ。正直、怖こわくないといったら嘘うそになるが、ヤツはもう目の前だ。ヤツは再び木槌を振ふりかぶって、一いち撃げきでチーロを挽ひき肉にくにしようとしている。ヤツ以外の敵は隊列を維い持じしたまま動かない。射撃がやんで、一時の動揺からも立ちなおったようだ。最前列の穴があいた部

分は後列の者が埋うめている。他の連中はついてきてんのか。きてるな。ちゃんときてる。天下のパンカロ・ファミリーだ。ここまできて怖おじ気づくような腰こし抜ぬけはいやしねえ。聞こえる。連中の雄お叫たけびが。兄弟たちの声が。その声に背中を押されて、力がモリモリわいてくる。

　ふと、こういうことか、とチーロは思った。

　いつだったか、親おや父じに言われた。お前もパンカロ家の男なら、兄弟たちの命を背負っている自覚を持て、と。それができんのなら、お前は男ではない、ただの糞くそ餓が鬼きだ、と。

　こういうことなのかな、親父。これから虫けらみたいに殺されちまうに違ちがいない兄弟たちのためにも、オレはやんなくちゃいけないって、今、思うんだよ。あのデアデビル野郎をぶちのめしてやろうって。そうしてヤツらに目に物見せてやれば、兄弟たちも笑われることはねえだろ。あいつら雑ざ魚このくせに向かってきて、バッカじゃねえの？　とか誰も言えねえだろ。オレらが負けたのは、数が少なかったから、ただそれだけで、オレたちは弱くなかったって証明できんだろ。胸張って死ねんだろ。

　違うかな、親父。オレはバカチンだから、違うかもなあ。もし違わなくても、遅おそいよな。遅すぎだよな。だから、オレはバカだっつーんだよ。ごめん。マジ、ごめん、親父。不ふ肖しようの息むす子こでごめんなさい。直接謝れなくてごめんなさい。先立っちゃうかもしれない不幸をお許しください。でも、やるだけやるよ。やりきってから死ぬよ。男、見せちゃるぜぃ。

「──おっしゃあっ！　こいやあぁぁぁぁぁ……！」

　チーロはデアデビルの間合いの直前で急停止して、両足を踏ふんばった。

　デアデビルの動きが一いつ瞬しゆん止まった。

　どうしたよ？　こいよ。きてみろよ。カマーン。やってみろ。

　やつの顔は兜かぶとにほとんど隠かくれていたから、表情はわからない。だが、チーロの挑ちよう発はつ的な態度と眼まな差ざしに激げつ昂こうしたような気配はあった。ヤツは一歩踏みこんで猛もう然ぜんと巨大な木槌を振り下ろした。総毛立った。それどころ

か、全身の毛穴から変な液体が噴ふきだしそうだった。ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオン──って、ありえねえ！　何？　オレ、何するつもり？　マジ？　やんの？　嘘。マジのマジで？　オレってやっぱ頭悪すぎ！　でも、もう逃にげられない。やるしかない。チーロは左手を頭上に突つきだした。真しん剣けん白しら刃は取りに比べればタイミング的には楽勝簡単余よ裕ゆうだと自分を勇気づけた。瞬間にかけた。全身の力を爆ばく発はつさせる。二抱かかえほどもありそうな木槌が落ちてくるその瞬間に、必要な神経と筋肉をすべて動員して──受け止める！

「はあぁぁぁっ……がっ──！」

　まず左ひだり掌てのひらの骨がパアァァンッ……と粉こな微み塵じんになった。あっという間に左ひだり腕うでの骨という骨がバキバキに折れた。まるで左腕自体が消失してしまったかのようだった。木槌はほんの少し速度を落としただけだった。そのまま、しゃがみこんだチーロの頭に猛然と襲おそいかかってくる。だが、そのほんの少しが重要だった。今こそ右手の義手ハンマーパンチ壱號の出番だった。

「──ふん……！」

　チーロは立ちあがりながらハンマーパンチ壱號で突きあげた。

　膝ひざ、腰こし、背中、肩かた、右みぎ肘ひじ、そしてハンマーパンチ壱號、すべてが完全にかみあって生みだされた生しよう涯がい最高のアッパーだった。

　止まった。

　巨大な木槌を止めてやった。

　それだけでなく、木槌にヒビが入った。金属でがっちり補強されていることもあって、さすがに割れはしなかったが、細かいヒビではなかった。チーロはもう一発、同じ箇か所しよにハンマーパンチ壱號をお見み舞まいしてやった。「ダアァッ……！」さらに、もう一発。「ダアッ！」もう一発。「ダアッ！　ダアッ！　ダララララァッ！」何発も。何発でも。ついにデアデビル野郎がよろめいて、ヒビ割れた木槌を引っこめるまで、飽あくことなくハンマーパンチ壱號を繰くりだしつづけた。

「……ば、馬ば鹿かな……」

　デアデビル野郎の吃驚びつくり仰ぎよう天てんした声が、じつに心ここ地ちいい。静せい寂じやく。あたりは静まりかえっている。度ど肝ぎもを抜ぬかれてやがる。そりゃそうだろう。実際、やったチーロ自身が一番驚おどろいている。呆れてもいる。いや、たしかにすげえけどさ。あんま真ま似ねできねえだろうけど。真似する必要もねえよな。左腕全損しちまったし。右腕もジンジンするし。あー。オレってバカ。でも、自分で言うのもなんだけど、気持ちいいバカじゃね？　オレが気持ちいいだけか。

「──つーか、ボケっとしてんじゃねえよ、デカデビル！」

　チーロは呆ぼう然ぜんとしているデアデビル野郎に急接近して、ハンマーパンチ壱號を下から振りあげた。狙ねらうはヤツの股こ間かんだった。これがガイィィンとヒットした。装そう甲こうで保護していても、いくらか響ひびいたらしい。デアデビル野郎は「──おほっ……」と呻うめいて左手で股間を押さえようとした。その右みぎ頬ほおをハンマーパンチ壱號でガツンと殴なぐりつけた。立てつづけに左頬をボゴンとぶん殴った。跳とびあがってズドンと脳天に叩たたきこんだ。それでもよろめいただけで倒たおれなかったのは、兜が頑がん丈じようなのか、ヤツがタフなのか、その両方か。「ぎゃははは……！」チーロはいったん飛び下がって、兄弟たちを振り返った。さあ、てめえらの番だぞ。何してやがる。オールでゴーだ。そう言おうとしたのだが、かわりに舌打ちが出た。

　騎き馬ばの群れがゆっくりと迫せまってきていたのだ。兄弟たちのすぐ後ろに。もう最さい後こう尾びの兄弟は騎馬の荒あら波なみにのみこまれようとしている。のみこまれちまう。先頭中央の騎馬が右手に持った騎兵槍ランスを立てて、振り下ろす。「やさしくGently 突撃せよcharge.」騎馬の速度があがる。一人の兄弟が撥はねとばされる。悲鳴があがる。二人目。三人目。ああ。くそ。どうする。どうすりゃいい。こうなるってことは、わかってたのに。それなのに、なんだこれ。この胸の苦しさ。痛いてえ。イタタタタタ。これ、って──もしかして、悲しい、とか。そういうの？　悔くやしくて、仕方なくて、悲しくて、たまらなくて、痛くて。「ファック」チーロは下した唇くちびるを嚙かんだ。「──ファック」ブチッと嚙み切った。兄弟たちは、もう前を向いていない。後ろを向いて、恐きよう怖ふして、ただ轢ひかれて、突き殺されて、死んでゆく。兄弟たちは弱くない。弱くなんてないはずなのに、数に圧あつ倒とうされて、死んでゆく。ぜんぶオレのせいだ。オレは

パンカロ家の男だから、オレのせいなんだ。オレが不ふ甲が斐いないせいで。「ファックファックファックファック……！」

　涙なみだで視界がぐちゃぐちゃになった。

　男が泣いていいのは、母親か愛する女が死んだときだけだと親おや父じに教えられた。

　だけどさ、止まらねえよ。我が慢まんできねえよ。もうちゃんと見えねえよ。涙をぬぐう気力もねえよ。なんだかわかんねえよ。めちゃめちゃに見える。兄弟たちが。きちんと隊たい伍ごを組んでいたはずの騎馬が。あっちにこっちに。揺ゆれて見える。ああ。何もかもが──って、あれ？

　チーロはまばたきをした。

　涙のせいじゃない。

　騎馬の列が、実際、乱れている。

　割れる。

　飛びだしてくる。

　すごい勢いで、一騎の騎馬が──なんと、全ぜん裸らの男にまたがられた馬が、駆かけてくる。

　いや、その騎馬は追われているようだ。多数の騎馬に。

　つまり、チーロたちを押しつぶそうとしていた騎馬の一隊に、全裸男の騎馬が、別の騎馬の一隊に追われて、後ろから突つっこんだ、という形らしい。

　全裸の、いや、パンツだけは穿はいている──

「お兄ちゃん……？」

　思わず、かなり懐なつかしい呼び方をしてしまった。

　だが、まぎれもなく、それは次じ兄けいだった。ニーノ・パンカロに違ちがいなかった。

「ハハハハハハハァァッ……！　チーロォォォ！　弟よォォ！　お

兄ちゃんが助けにきてやったぞ！　泣くほどうれしいかァッ！　そうかそうかァァッ！」

　ニーノはチーロを見つけると、そう叫さけびながら左手に持った剣けんの平で馬の尻しりを叩いて、さらに足を速めさせた。右手一本の手た綱づなさばきはかなり巧たくみだった。ニーノを乗せた馬は、一人の兄弟も轢き殺さずにチーロの脇わきを駆け抜けていった。チーロがとっさに振ふり返ると、ちょうどニーノが馬から飛び降りたところだった。馬はそのまま直進して、デアデビル野や郎ろうと正面衝しよう突とつしかけ、竿さお立だちになって狂くるったようにいななきながら、飛んだり跳はねたりして暴れまわった。それで、そのへんにいた歩兵どもが追い散らされる羽目になった。

　ただ、ニーノを追いかけてきた騎馬の一隊が、今度は兄弟たちに狙いを変えて、蹂じゆう躙りんしようとしている。ニーノとそいつらに間を割られた一隊も、態勢を立てなおしつつあった。

「ファハハハァッ！　すべて俺の計画どおりだな！　すげえ！　こんなにうまくいくと、自分で自分の頭のよさが少々怖こわいくらいだ！」

「……いや、ぜんぜんさっぱりうまくいってねーし！　てめえは裸はだかだしよ！　剣一本しか持ってねーし！」

「阿あ呆ほう！　よぉく見ろ！」

「あ？」

　チーロはニーノが剣の切っ先で指し示してみせた方向を見た。目を疑ったが、すぐに信じることにした。夢じゃない。幻げん覚かくでもない。声もする。「血をSangue！」「復讐をVendetta！」それは唱和することで否いや応おうなく士気が高まる合い言葉だ。「血をSangue！」「復讐をVendetta！」「血をSangue！」「復讐をVendetta！」悲しみを、怒いかりを、恨うらみを解き放つ声だ。「血をSangue！」「血をSangue！」「復讐をVendetta！」「復讐をVendetta！」同時に、仇あだ討うちの喜びにうち震ふるえる声だ。「血をSangue！」「復讐をVendetta！」「血をSangue！」「復讐をVendetta……！」

　カレーナ人は日暮れに決けつ闘とうする。

時は黄昏たそがれ、太陽はひとたび死に、敗れた者も死に、復ふく讐しゅうは終わるだろう。

血色に染められた天上も、地上で流された血も、訪おとずれる夜の闇やみに押しつつまれ、生き残った者たちは飲み、歌い、踊おどり、愛しあい、やがて眠ねむりにつく。

「親父……！　ジョゼッペ……！」

騎き馬ばの群れが一気に崩くずれ立った。後ろからだ。表参道の両側に建ちならんでいる、もう使われていない石造りの古い建物やその合間から、次々と飛びだしてくる。山やま高たか帽ぼうをかぶり、スーツの上にトレンチコートを着て、それぞれ得物を手にした兄弟たちだ。その先頭には、左手に盾たてと一体化した籠こ手てをつけ、両手にモトロール刀を一本ずつ持った〝大だい魔ま王おう〟エンツォ・パンカロがいる。そのかたわらには、全身を装そう甲こうで固めて、長短二本の棍こんを操あやつる〝闘とう鬼き〟ジョゼッペ・ザンニーニの姿がある。騎馬の隊はもともと密集気味だったため、突とつ撃げきを開始したものの、後列はまだ並足以下だった。親父は、ジョゼッペは、兄弟たちは、その尻にガップリ食くらいついて、咬かみちぎろうとしていた。たぶん、敵が遺い棄きしたのだろう馬に乗っている者もいた。そのなかの一人が、カルロ・ボッシだった。カルロは器用に馬を制せい御ぎよしながら、サハ・リドルの蓮華で騎馬を食いまくっていた。チーロは知っているが、蓮華は特とく殊しゆな刀で、専用の指輪を柄つかに引っかけて使うことで、力以上の力と、斬きれ味以上の斬れ味が生みだせる。ただ、扱あつかいはとても難しい。チーロも貸してもらったことがあるが、ぜんぜんダメだった。あれ、あんなふうに使えるだけでもすっげえよな。首くび刎はねだろうが腕うで斬きりだろうがなんでもこいだもんなあ。返り血ジャブジャブじゃん。さすがはカルロの兄貴！　もっとも、それも、ジョゼッペが二本の棍でどんどん馬をぶん殴なぐって隊列をメチャクチャにし、親父が二本のモトロール刀で手当たり次し第だいに敵を斬り捨てているからこそ、できることだった。さらに、ちょっと人間業わざとは思えない跳ちよう躍やく力りよくで騎馬に襲おそいかかって、騎士を馬から叩たたき落とす仕事に専念しているヤツもいた。リク！　リクか！　あの餓が鬼き、やるなあ！　そして、素す手でで馬の脚あしをボッキボッキ握にぎり折って、引きずり下ろした騎士を殴り殺している、非常識なヤツは──まさか。おいおいおい！　ウーゴ、復活しちゃってんじゃんかよ！　あの恐怖のテリブルウーゴが！　もうすっかり腑ふ抜ぬ

けちまったとばかり思ってたのに！

「いつまでボケッとしてるんだ、チーロォォ！　お兄ちゃんについてこォォォいッ！　ワァッハハハァァッ！」「──あ、お、おお！」チーロはニーノのあとを追った。ニーノはどうやら親おや父じたちと連れん繫けいして騎馬の隊を挟きよう撃げきするつもりらしい。もちろん、そうすると、歩兵どもに背を向けることになる。デアデビル野郎が大声で何やら命令している。歩兵どもが押しよせてくる。「これってやベーんじゃねーの！」「だからお前は馬ば鹿かだというんだ！　何もかもお兄ちゃんの計算どおりだと言っただろうがァッ！　状じよう況きようが混こん沌とんとすれば混沌とするほど、俺たちにとっては有利ィィィ！　なぜならァァッ……！」ニーノはなぜか自信満々だった。だが、不思議だった。兄の背中が前にあると、安心感がある。こんなふざけた兄なのに。ただ、全ぜん裸ら同然で恐おそれ気もなく戦場を疾しつ駆くするニーノには、妙みような、なんとも言いがたい、異様な迫はく力りよくがあることも事実だった。行く手の騎馬どもも、そんな男が奇き声せいを発しながら向かってくるわ、後ろから攻せめ立てられるわ、生き残りの兄弟たちが再び勢いづくわで、足が止まって狼ろう狽ばいしていた。味方とぶつかって、馬を御ぎよしきれなくなり、落馬する者もいた。主人を失った馬があさっての方向へ走りだした。小さな混乱が、中くらいの混乱を作りだして、それが大きな混乱になろうとしていた。敵も互たがいに叱しつ咤た激げき励れいしあい、なんとか秩ちつ序じよを維い持じしようとしていたが、ほとんど無む駄だな努力だった。そりゃそうだ。喧けん嘩かってのは、本来、こんなもんなんだ。こうなってからが本当の勝負だ。右も左も前も後ろも上も下もわからない。敵と味方が交こう錯さくして、殺して、殺されて、殺しあう。きれいも汚きたないもない。最後に立っていた者だけが勝ちで、あとはぜんぶ負け。オレらは容よう赦しやしない。喧嘩を吹ふっかけてきたやつは、徹てつ底てい的に殺して殺しつくす。死にたくなければ、土ど下げ座ざして命いのち乞ごいすればいい。それ以外は殺す。だから、これまでパンカロ・ファミリーに敵対した連中は、ほとんど全員墓のなかだ。それがパンカロ・ファミリーの流りゆう儀ぎだ。チーロは昂こう揚ようしていた。これは、この戦場は──オレら向きだ。ニーノが言いたいのも、そういうことなのだろう。状況が混沌とすれば混沌とするほど、オレらが有利。なんでかっつーと、それは。「──俺たちがァァッ！　パンカロ・ファミリーだからだァァッ……！」

　そんななかで、一騎きの騎馬がニーノに突つっかかってきた。

チーロの記き憶おくに間ま違ちがいがなければ、たぶん、ニーノを追ってきた一団の先頭にいたヤツだ。ついでに、大火災の晩、なかなか楽しいタイマンの果てに、チーロの右腕を叩き斬った男でもあるような気がした。

「──パオロの仇あだ討うちってわけじゃねえがな！　パンツ一丁の間ま抜ぬけ野や郎ろうをまんまと逃にがしてしとめそこなったままじゃあ、俺もメンツが立たねえんだよ……！」

「ハハァッ！　くだらんなァァァッ！」

　ニーノは速かった。もしかして、裸だから……？　とにかく、ニーノは目を瞠みはるような速度でその騎馬に突とつ進しんしていって、右手に持ちかえた剣けんを横よこ薙なぎに振ふるった。お得意のナイフじゃなくて剣なのに、見事スッパリ斬ってみせた。馬の左前ぜん肢しが、きれいに二等分された。馬は前のめりになって倒たおれた。馬に乗っていた右腕の仇かたきがどうなったかはわからなかった。それどころではなくなった。

　始まったのだ。

　まるで、見えない巨きょ大だいな手に前後から挟はさまれて、ぎゅっと押しつけられたかのようだった。

　デアデビル野郎をはじめとする歩兵どもと、チーロたちと、騎馬どもと、親父たちが、あっという間に入り乱れた。

　とくに、ちょうどチーロがいた中間地帯は、本当にメチャクチャだった。

　耐たえきれずに馬から下りたアホな騎士が、〝大魔王〟エンツォ・パンカロのモトロール刀でまっぷたつにされた。親父は斬って斬って斬りまくって、もう四本のモトロール刀を使いつぶしていた。〝闘鬼〟ジョゼッペ・ザンニーニが、二、三人の歩兵をまとめて棍で吹っ飛ばした。ボボ・ファッチョが騎兵槍ランスでつつかれて転んだところに、馬から飛び降りた別の騎士が襲いかかろうとして、ニーノにぶった斬られた。ウーゴがわしづかみにした歩兵の頭が兜かぶとごとひしゃげた。デアデビル野郎が、壊こわれかけた木き槌づちで、三、四人の兄弟をまとめて薙なぎ払はらいやがった。チーロは、こんな状況でやけに落ちつき払って指示を出している風情ふぜいの騎馬を見つけ、そいつの馬の土手っ腹にハンマーパンチ

壱號をお見み舞まいしてやった。そいつは、だが、やはりまったく慌あわてず、そばにいた別の馬に飛び移って、乗っていた騎士を蹴け落おとし、チーロに騎兵槍ランスを投げつけようとした。あ、あのときのヤツか、と一いつ瞬しゅん思った。あいつがタイマン邪じゃ魔ましやがったんだ。ともあれ、よけようとしたが、歩兵二人か三人が束になってかかってきた。やべえ。ひやりとした。ギリギリだった。横合いからスッと視界に入ってくる影かげがあった。そいつはもう馬は捨てたようだった。左ひだり利ききだった。独特な振り下ろし方で蓮華を馬の首に叩きつけて、ズバッとあっさり一刀両断し、騎兵槍ランスは狙ねらいがずれて、歩兵の一人の胸に突き刺さった。チーロはカルロに礼を言う前に、近づいてきた歩兵の剣をハンマーパンチ壱號で叩き落とし、顔面に蹴けりを食くらわせた。そのあとカルロと背中あわせになった。「一つ借り作っちまったな、カルロの兄貴」「いえ。忘れてもらって結構ですンで」「そうもいかねーよ」「そうですか」返り血でずぶ濡ぬれなのに、カルロはやたらと冷静だった。おかげで、チーロの頭も少しだけ冷えた。そうだ。親父だよ、親父。やっぱな。エンツォ・パンカロは首領ドンだからよう。ビシバシ狙われんだろうしな。掩えん護ごだよな、掩護。まあ、だが、捜さがすまでもなかった。すぐに見つかった。

エンツォ・パンカロは、逃げも隠かくれもせず、戦場のどまんなかにいた。

八本のモトロール刀を据すえつけることができる背中の器具は、すでにない。

手にしているのは、最後の二振りだ。

親父の右みぎ斜ななめ後方にはジョゼッペ・ザンニーニがいて、ウーゴ・パンカロがその近くにしゃがんで息を整えようとしている。

すぐそばには、誰だれかから奪うばいとったものとおぼしき剣と騎兵槍ランスで雄お々おしく戦うパンツ一丁のニーノもいた。

その周りをさかんに動いて、敵を蹴り倒し、鎧よろいの隙すき間まにナイフを差しこんでしとめているのはリクに違いない。

イビツがなんとか兄弟たちをとりまとめようとしている様子も見てとれた。

　その甲か斐いあってか、兄弟たちが徐じよ々じよに首領ドンのもとに結集しつつある。あいつも、あいつも、あいつも生きてる。死んじまったヤツもいるけど、生きて、がんばってるヤツが大勢いる。

「カルロ、オレら勝てるよな？」「当然です」「だよな」チーロは笑った。そうだよな。勝てるな。こりゃあ勝っちまうな。一時はダメかもとか思ったけどな。なんか、相手も微び妙みように腰こし引け気味だし。どう見てもこっちが押してるし。チーロは嬉うれしくなって、たまたま一番近くにいた敵に飛びかかった。そいつは及および腰どころか逃げ腰だった。ハンマーパンチ壱號でボゴンと顔面を殴なぐったら、大おお袈げ裟さに倒れて動かなくなった。演技っぽかったので、顔面を踏ふんづけてやった。「ぎゃははははは！　勝てんぞ！　そのまんま押せ！　押せ！　押せ！　押しまくれ！　ファミViva リー万歳Famiglia！　親父万歳Viva Papa'……！」チーロは我が慢まんできなくなって叫さけんだだけだが、それでさらにいっそう勢いづいた感があった。敵は、全体として後退はしないものの、明らかに抵てい抗こうが弱まった。エンツォ・パンカロが力強くズンズン前進した。その行く手にはデアデビル野郎がいた。アレは、でも、オレの獲え物ものだよな。オレが殺やる。親おや父じも、ああ見えて足が悪わりぃし。オレがパッパと始末してやる。親孝行、親孝行。チーロは駆かけだそうとした。駆けださなかったのは、何か──ひどく場ば違ちがいな何かが聞こえたからだ。

　Ito Kashikoki Hito yo Anata ha Nani wo Motomete Itano Desuka.

　Ito Kedakaki Hito yo Anata ha Nani wo Motomete Itano Desuka.

「──あ？　歌……？」

　Watashi niha Wakaranai. Watashi ni Wakaru Hazu mo nai.

　Watashi ha tada Oroka de Aware de Anata no Koto nado Wakara nai.

　ウーゴが立ちあがって目を「おお……」と見開いた。だが、ウーゴじゃなくたってわかる。美しい声だ。聞いてしまうと、胸を揺ゆさぶられずにはいられない声だ。清らかで、悲しげで、何かを頼たのみこんでいるかのような声で、歌だ。

　Tada Watashi ha Hitasura Hizamazuite Inoru dake. Tsumi aru mi

tosite Inoru dake.

Naku koto sura Yurusarezu Sore ha Tsumi yue de Dare no sei demo naku Inoru dake.

その歌を耳にして動きを止めたのは、チーロたちだけではなかった。敵もだった。ただ、敵はすぐに行動を始めた。呆あつ気けにとられた。「退けRetreat……！」「後退だRetreat！」「退けRetreat、退けRetreat！」あちこちでそんな声があがった。まるで連中は、これから何が起こるか知っているかのようだった。逃にげだした。一も二もなくゲヘナ聖堂めがけて逃げていった。逆方向へ、表参道を逆走して逃げてゆく者もいた。崖がけから滑すべり落ちてゆく者さえいた。もちろん、兄弟たちの一部は連中を追おうとした。追いすがって背中から斬きり倒たおすことに成功した兄弟もいた。だが、多くは遅おくれた。チーロも追つい撃げきにかかろうとはしなかった。できなかった。なんだ、この震ふるえ。なんだよ。何が起こるっつーんだよ。それは―あの歌にこたえる別の声という形で現れた。

Ahhhh, 全ＴＥＤＥＳＵ妾ＷＡ全ＴＥＷＯ求ＭＥＴＥＩＴＡＮＯＤＥＳＵ．

Ahhhh, 其ＲＥＧＡ過ＣＨＩＴＯＭＯ知ＲＡＺＵ妾ＷＡ求ＭＥＴＥ已ＭＡＮＡＫＡＴＴＡ．

こちらもまた、美しい声だった。ちょっとくぐもって聞こえるが、うっとりするほど美しい声であることには変わりなかった。

愛全臥ＲｕＮａｄ Ahhhh, 彌秘宵Ｈｉｙｅ Ahhhh, 邨帋Ｎａｒｅ 蜃憧ＲｅｙＨＯＨＯ

愛全臥ＲｕＮａｄ Ahhhh, 彌秘宵Ｈｉｙｅ Ahhhh, 邨帋Ｎａｒｅ 蜃憧ＲｅｙＨＯＨＯ

―しかし、この声は、どこから……？

チーロは後ろを見て、右を見て、左を見て―前を見た。

あれか。

女だ。

顔面以外をすっぽり覆おおう黒と白の服を着た女が歩いてくる。

おそらく、ゲヘナ聖堂から出てきたのだろう。

胸の前で両手を組みあわせ、かたく目を閉じて、女は歌っている。

いや、閉じているのではない。

その両の瞼まぶたは、糸か何か知らないが、とにかく何かできつく縫ぬいあわされている。

それだけでも薄うす気き味みが悪いのに、奇き妙みようなことはまだあった。

あの女はたしかに歌っている。

Ito Kegarawashiki Hito yo Anata ha Nani wo Motomete Itano Desuka.

愛全臥ＲｕＮａｄ Ahhhh, 彌秘宵Ｈｉｙｅ Ahhhh, 邨帋Ｎａｒｅ屢憧ＲｅｙＨＯＨＯ

Ito Orokashiki Hito yo Anata ha Nani wo Motomete Itano Desuka.

愛全臥ＲｕＮａｄ Ahhhh, 彌秘宵Ｈｉｙｅ Ahhhh, 邨帋Ｎａｒｅ屢憧ＲｅｙＨＯＨＯ

だが、声は二人分だ。

それがどうした？　いったいなんだっていうんだ……？　わからない。心臓がどきどきする。女が歌いながら歩いてくる。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの兵どもは女をよけて逃げてゆく。手をこまねいて見ている場合じゃないと思う。それなのに、女から目を離はなせない。女二人の声はどんどん高まってゆく愛全臥ＲｕＮａｄ Ahhhh, 彌秘宵Ｈｉｙｅ Ahhhh, 邨帋Ｎａｒｅ屢憧ＲｅｙＨＯＨＯ声と声がまざりあう愛全臥ＲｕＮａｄ Ahhhh, 彌秘宵Ｈｉｙｅ Ahhhh, 邨帋Ｎａｒｅ屢憧ＲｅｙＨＯＨＯああ愛全臥ＲｕＮａｄ Ahhhh, 彌秘宵Ｈｉｙｅ Ahhhh, 邨帋Ｎａｒｅ屢憧ＲｅｙＨＯＨＯ何かが起こる愛全臥ＲｕＮａｄ Ahhhh, 彌秘宵Ｈｉｙｅ Ahhhh, 邨帋Ｎａｒｅ屢憧ＲｅｙＨＯＨＯ何かが何かが何かが何かが。

引きちぎれて、はじけ飛び、壊こわれる音がした。

突とつ如じょ、女の身体からだがふくれあがって、破は裂れつするように黒と白の服がちぎれ飛んだのだ。

それは──肉、としかいいようがなかった。

ぬらぬらして、ぶよぶよした、青白い肉につ塊かいだった。

肉塊は、長い長い無数の毒々しい紫むらさき色いろの茨いばらに絡からみつかれ、うごめいて、膿うみのような液体を垂れ流しながら、常に形を変えつづけている。苦労して、何かになろうとしている。そんなかんじで、それが何かはすぐに見当がついた。

顔だ。おそらく、女の顔だ。だが、なりきれない。鼻が、唇くちびるが、瞼が、耳が、崩くずれる。持ちなおそうとするかのように、ぼこり、と、どこかの肉が膨ぼう張ちようする。それでも、持ちこたえられない。どんどん大きくなりつつ、たまに女の顔に近づきながら、やはり何かまったく別のものになってしまう。ひたすらおぞましい、嫌けん悪おしか催もよおさない何かに──そして、そのてっぺんに、両目を綴とじた女の首から上が生えていた。

「……う……うわあああああぁぁぁ……！」

最初に誰だれかが悲鳴をあげて転がるように逃げだすと、あとは連れん鎖さ反応だった。いくら誉ほまれ高いパンカロ・ファミリーの怖こわいもの知らずたちでも、あんなものを正視したら、さすがに平然としてはいられない。喧けん嘩かで命を張ることはできても、あんな得体の知れない化物が相手となると、話は別だ。その気持ちはチーロもわかる。正直、チーロも逃げたい。だって、アレ、でけーよ。でかすぎだろ。もっとでかくなるのかよ。どこまででかくなるんだよ。今、どれくらいだ？　五メーテル？　いや、その倍はある。十メーテル？　わかんね。とにかく、でかすぎだろ。しかも、ブヨブヨボコボコふくれながら──進んでんじゃん。顔なのに、変な手足っぽいのが生えてきてんじゃん。歩いてるって。こっちきてるって。やべーって！

「おわわああっ」チーロは踵きびすを返した。走ろうとした。その右足首を、握られた。何に？　チーロは見た。それは、青白い、ところどころから膿のような液体が流れでている、ぶよぶよした、だが、細長い何かだった。肉の管だ、と思った。「──あがっ」引っぱ

られた。踏ふんばろうとしたが、ダメだった。すごい力だった。とっさに上を向いたので、背中で地面をガガガガガザザザザザザ滑る恰かつ好こうになった。「うがががががが……！」チーロは引きよせられていた。肉に。チーロだけではない。何人も、ひょっとしたら何十人もの兄弟たちが、あの肉塊から芽が出て見る間に育ってこんなに長く立派になった触しよく手しゆめいたものにとらわれて、引っぱられていた──って、マジかよ。マジっすか。何それ？　そんなのありかよ！　チーロは自分が引きずられてゆく先に目を向けた。本当は見たくなかったのに、見てしまった。見なけりゃよかった。

　肉塊にあいた、大きな口だ。とろとろ溶とけているものの、なんとなく口だとわかる。口こう腔こうは見事などどめ色だ。つまり、餌えさか。食われちまうのか。食料かよ。オレなんて筋張っててうまくねーって。しかし、止まらない。そもそも、チーロは左ひだり腕うでがまったく使えない状態で、右手もハンマーパンチ壱いち號ごうと化している。石いし畳だたみの出っ張りに指を引っかけることさえできない。抵てい抗こうしようがない。もうダメだ。食われる。食われる？　ああ。食われちまう。ダメか。あきらめるしかねーのか。チーロは目を閉じた。そのときだった。

「ふん……！」

　すぐに止まりはしなかった。チーロの体は勢いのまま地面に二、三度バウンドして、ゴロゴロ転がった。チーロは目を開けた。じんときた。

「大だい丈じよう夫ぶか、チーロ」

　親おや父じだった。チーロよりも前のほうにいた親父が、モトロール刀で触手を断たち切ってくれた。間かん一いつ髪ぱつ、チーロを救ってくれたのが、親父だった。見れば、ニーノやジョゼッペ、リクらも、それぞれ兄弟たちを助けるべく、触手に挑いどみかかって、成功したり失敗したりしていた。だが、チーロの命を救ってくれたのは、他ほかの誰でもなく、親父だった。そのことがなんだか無む性しように嬉うれしかった。もっとも、ゆっくり喜びを嚙かみしめていられる状じよう況きようでもなかったが。

「早く立て！　次がくるぞ！」「──は、はいッ！」チーロは慌あわてて起きあがった。実際、肉塊はその各所から次から次へと触手を繰くりだしてきた。親父は襲おそいくるそれらを両手のモトロール

刀で的確にズバズバ切り落としたが、その作業に忙ぼう殺さつされて、進むことも退ひくこともできない。チーロも手伝えればいいのだが、この体では無理だ。邪じや魔まにならないよう、親父の陰かげに隠かくれていることしかできない。他の連中も、いつも親父の掩えん護ごが第一のジョゼッペさえ自分のことで手て一いつ杯ぱいだし、切り落とされた触手はうにうに蠕ぜん動どうして近づいてきて気色悪いし、兄弟たちは少しずつとらえられて食われてゆくし、自棄ヤケになった兄弟が崖がけから飛び降りるしで──それに、チーロは気づいていた。親父が肩かたで息をしている。動きにキレがなくなってきている。古傷を抱かかえた足がかなりきつそうだ。どうしよう。オレ、どうすればいい？　何か──何かないのかよ。何か、できることは……？　ない。何もない。ファック。ファックファックファック！　結局、ダメなのかよ。オレはダメな子かよ。無能かよ。やっぱ、馬ば鹿かだからダメなのか。ごめん。親父。こんな息むす子こでごめん。もう、いっそ、突つっこんじまうか……？

「──まだだ……！」

　と、親父が、まるでチーロの心を見み透すかしたように叫さけんだ。それと同時だった。

　飛んできた。後ろからだった。というか、チーロが最初に目もく撃げきしたのは、それが肉塊に突き刺さる場面だった。それはあとからあとから飛んできた。だから、少しして、後ろから飛んできているのだとわかった。

　矢だった。

　山なりの軌き道どうで、おそらくかなり遠くから放たれた矢が、一本も外れずに、肉につ塊かいを射い貫ぬいてゆく。

　もっとも、あのクソでかい化物にしてみれば、ふつうの矢なんて痛くもかゆくもないんじゃないか。そう思ったのも束つかの間、矢は的を絞しぼりはじめた。肉塊のてっぺんから突きだしている、目を綴とじた女の首から上に。たぶん、狙ねらっているのだと思う。女の首の近辺に二、三本の矢が刺さって、その次だった。命中した。女の額に。その瞬しゆん間かん、肉塊の、触手の動きがぴたりと止まった。

　きゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ……！

チーロは女のけたたましい悲鳴に耳をふさぎながら、ようやく振ふり返って射手を捜さがした。何人いるんだ。五人？　十人か？　いや──違ちがった。

そこにいたのは、三人と、一頭だった。

そのうち弓を構えているのは、たった一人だけだった。

しかも、やたらと体格のいい純白の犬を従えた、震ふるえがくるような黒い肌はだの美しい女だ。見覚えがある女だ。そんなに前じゃない。どこで、いつ、会ったんだっけ？

ともあれ、残りの二人のことはよく知っていた。

二人は並んで駆かけてくる。

一人は、高級オートク注文服チユールのきらびやかであでやかなカフタンをひるがえして、肩までの黒くろ髪かみをなびかせ、青味を帯びた黒い瞳ひとみはデ・ロッソの斬ざん新しんなサングラスの奥に隠して、突とつ風ぷうのごとき速度で。

もう一人は、金銀の髪の毛が乱れ、黒赤白の三色をあしらったジャンパースカートの裾すそがめくれあがるのも気にせず、清せい楚そにして可か憐れんではかなげでさえある容姿にそぐわない身体能力を発揮して、主人に遅おくれることなく、カモシカのように軽かろやかな足どりで。

二人はあっという間にチーロとエンツォ・パンカロを追い越こしていった。すれ違いざまだった。サングラスが宙に舞まった。きれいに整えられた口くち髭ひげはたしかに笑えみを浮うかべていた。

「老いぼれは下がっていろ」

パンカロ・ファミリーの首領ドンに向かってそんなことを言い放つことができる者は、彼だけだ。

ジャン・ジャック・ド・ジョーカー。

年の離はなれたえがたい友人の後ろ姿を見送りながら、親父がなかば呆ぼう然ぜんとつぶやいた。

「……あんたはまさしく、私にとっての道化師ジョーカーだ」

　まったく同感だった。そのとおりとしかいいようがない。チーロだけではなく、その場にいあわせた誰だれも彼もが、たぶん、ゲヘナ聖堂付近まで引っこんだ敵までもが、ただ黙だまって見ていた。ぼんやりと突っ立って見ていることしかできなかった。

　目を綴じた女は、まだ苦鳴をもらして首をよじっていたが、肉塊は再び動きだしつつあった。あっちが盛りあがったり、こっちがひっこんだりを繰りかえして、紫むらさき色いろの茨いばらがグイグイ肉に食いこんで膿うみ状じようの液体が流れだし、新しい触しよく手しゆの芽がボコボコ生まれて、へたっていた触手はまた力をとりもどした。足らしきものを動かして前進しようとしている気配もあった。もはや縦も横も十メーテル以上、十五メーテルにも達しようかという巨きよ体たいの化物が押しよせてこようとしているのだ。しかも、触手が上からも前からも右からも左からもどんどん襲おそいかかってくる。まるで、肉の津つ波なみと、肉の豪ごう雨うだ。



　ジョーカーとその従者クローディアは、そのなかを脇わき目めもふらず、ひたすらまっすぐ疾しつ走そうしてゆく。

　何なん人ぴとも彼らを止めることはできない。

　ふれることさえかなわない。

グングン近づいてゆく。

十五メーテル。

十メーテル。

五メーテル。

チーロはそのとき初めて目撃することになる。淡あわい初はつ恋こいを抱いだいた相手だった。彼女ほど美しい女をチーロは他ほかに知らない。金と銀に彩いろどられたジャン・ジャック・ド・ジョーカーだけの女。だが、考えてみれば、二人がどういう間あいだ柄がらなのか正確に説明できる自信はない。それどころか、彼女が何ものなのかさえも知らなかったのだ。その事実を思い知らされた。

「──クローディア……！」

「はい、主様マスター」

ジョーカーが腰こしの鞘さやから刺し突とつ剣けんを抜き、クローディアが足を止めた。ジョーカーは、クローディアの少し前で膝ひざを曲げ、半身立ちになって──突ついた。四方八方から迫せまってくる触手を、突いて、突いて、突いた。はっきりと目で捕ほ捉そくできないほど、高速で、複雑で、それでいて理にかなった無む駄だのない足あし捌さばきでクローディアの四囲を回りながら、もれなく触手を一突きしていった。〝千のサウザンド貫通・ピアツサー〟。あの魔導王時代の秘宝で刺さし貫つらぬかれた者は、雷かみなりに打たれたかのような衝しよう撃げきを感じるという。事実、ジョーカーの突きが触手をとらえるたびに、カッ、カッ、と細かい雷らい光こうが飛び散った。それは断じてハッタリではなかった。斬きられたわけでもない触手がことごとく力を失って地面に崩くずれ落ちるのは、あの刺突剣の特とく殊しゆな効力のおかげだろう。それにしても、なんつー身のこなしだよ……！　秘宝の威い力りよくよりも、チーロはジョーカー自身に目を奪うばわれていた。理にかなっている、と思ったが、チーロに「理」なんてわかるはずがない。それでも、感じるのだ。きっと、あれはベターではなく、ベストに違いないと。まるで、何百回、何千回に及およぶ練習の果てに完成した動きであるかのようだ。思わず見み惚とれて、クローディアに注意が向かなかった。気がついたときにはもう、クローディアの全身はそれにすっぽり包みこまれていた。

それは、黒こく煙えんのようにも見える。あるいは、そんなものがあるとしたら、黒い靄もやのようでもある。だが、もちろん、そのどちらでもない。その何かは、クローディアから放出されている。おかしな話だが、そうとしか思えない。それはクローディアから生みだされ、もしくはクローディアが生みだし、クローディアを取り巻いて、渦うず巻まき、立ちのぼって、凝こり固まり──徐じよ々じよに、ある形をとろうとしていた。

鎌かまだ。

四メーテルほどはあろうかという長大な柄えの先に、獰どう猛もうに湾わん曲きよくしている刃はを備えた、クローディアの身体からだには明らかに不ふ釣つりあいな、黒い、やや緑がかった光こう沢たくの、まがまがしい、あまりに大きな長なが柄えの大鎌だった。

「──〝縦断DIVIDE〟……！」クローディアは、だが、まるで重量など感じていないかのように、その大鎌を軽々と扱あつかってみせた。ジョーカーを追い抜ぬいて、三歩、四歩と大おお股またで踏ふみこみ、大鎌を振ふり下ろす動作は、包丁でも使っているかのようだった。ただし、その結果、もたらされた破は壊かいは尋じん常じようではなかった。包丁とはかけ離れていた。ズザジャグジャズジャグジャグジャァとでも表現するしかない奇き妙みようで凄せい絶ぜつな音がした。斬れた、というよりも、ごっそり削けずりとった。肉につ塊かいの下部にできた傷きず跡あとからは、膿状の液体が噴ふきだして、そのへん一帯に降りそそいだ。クローディアは間かん髪はつを入れず今度は大鎌を横に振りまわした。「──〝薙倒MOWDOWN〟……！」またあの怪かい音おんが響ひびき渡わたる。大鎌はさっきの傷跡を横方向に引き裂さいた。もうそれは傷というより穴だった。肉塊は身み震ぶるいした。声ともいえない声が肉塊からわきあがった。禍阿阿阿……！

さらに。そこからさらに、だ。

「──〝鎖縛BIND〟……！」クローディアは飛び退すさって、大鎌の柄の先せん端たんを地面に突き立てた。すると、大鎌が崩れた。砂の城のように崩れてしまった。ただ、なくなりはしなかった。崩れた大鎌はあの黒い靄と化して、すぐさままた別の形をとった。そ

れは、クローディアの両手に巻きついて、そこからギュンギュンのびてゆく。やはり緑がかった光沢を持つ、黒い──鎖くさり。クローディアの手首ほどの太さはある、何本もの、いや、数十本の、鎖に違ちがいなかった。鎖は肉塊に絡からみついていって、縛しばった。今にも暴れだしそうだった肉塊が、緊きん縛ばくされて、動けなくなった。「──主様マスター……！」そこまでお膳ぜん立だてされて、ようやく真打ちの出番だった。

　ジャン・ジャック・ド・ジョーカーだ。ジョーカーが、なんと、鎖に飛び乗って、その上を走る。駆かけてゆく。駆けのぼってゆく。チーロは思わずため息をついた。これは違う、と思った。違う。違う世界だろ。オレがぜんぜん知らねー世界だ。たぶん、オレだけじゃなくて、ジョゼッペや、兄貴たちや、カルロや、親おや父じでさえも。力量とか、気合いとか、そういう問題でもない。とにかく、違うんだ。人間が鳥みたいに飛べないように、だからといって、鳥が人間よりすぐれているわけじゃないように、ジョーカーっちとクローディアは、オレらとは違う。別の世界に生きてるんだ。

　その別世界の住人ジョーカーは、ついに、というか、あっさり肉塊の頂上までのぼりつめた。

　ジョーカーがしようとしていることくらい、チーロにもわかる。誰だれだって思いつくことだ。ただ、できるかどうかは完全に別問題だ。やりたくても、できないから困る。簡単にできるのなら苦労しない。しかし、それはチーロたちの場合だ。ジョーカーは違う。やってのけた。

　首だ。

　額に矢が一本突き刺さっている、瞼まぶたが縫ぬいあわされた女の、首から上だ。

　ジョーカーは肉塊を苦もなく足場にして、むしろ優ゆう雅がに飛びかかった。

　狙ねらいすました〝千のサウザンド貫通・ピアツサー〟の突きは神速だった。

　カッ、と、雷光が飛び散るはずだった。

　──そうはならなかった。

「……なっ……！」

　消えたのだ。めりこんだ。いや、のみこまれた、といったほうが正しいかもしれない。女の首から上が、肉塊のなかに、にゅっと吸いこまれてしまった。〝千のサウザンド貫通・ピアツサー〟は空を突いた。それとほぼ同時に、肉塊の表面が波打ちはじめた。荒あら波なみにもまれる船の上よりもっと悪い状態になった。ジョーカーもたまらず転んだ。肉の上で弾はずんで、転げ落ちた。
「あ……！」心臓が止まるかと思ったが、すかさずクローディアの鎖が肉塊から離はなれて、空中に投げだされたジョーカーの体を絡めとった。その瞬しゅん間かんか、直前か、直後だった。「──〝羽散SCATTER〟……！」鎖がまた別のものへと変じた。今度はまっ黒い羽う毛もうだった。本物よりだいぶ大きい羽毛がファサッと大量に飛び散った。ジョーカーは黒い羽毛に包まれて、そのまま落下とはいえないような速度で落ち、地面に無事降り立った。無事ではなかったのは、クローディアのほうだった。

　クローディアはジョーカーの着地を見届けると、糸が切れた操あやつり人形のように倒たおれた。

　ジョーカーはそれを予測していたように、すぐさまクローディアを抱かかえあげて、走りながら叫さけんだ。「──退ひけ、エンツォ……！　これ以上は無む駄だ死じにになる！　退かせろ！」チーロのすぐ前にいる親父は一瞬だけ躊ちゆう躇ちよした。あくまで一瞬だけだった。その一瞬がどうしたとかなんだとか、そんなことはけっしてないはずだ。ただ、その間に、いったん肉塊のなかに消えた女の首から上が、さっきまでとは別の場所に──やや前気味の位置に現れたことは事実だった。親父がぐるりとあたりを見まわしながら声を張りあげた。「退くぞ！　振り向くな！　ひたすら走れ！　退けい、退けい……！」それと、どっちが早かっただろう。

「ＭｅｌｇＺｅｌｇＲｅｖＮａｖ遠炎近火ＫｒｅｙＢｒｅｙ動乱砲危黄回廻ＪｅｎＲｅｎＤ」

　ＲｙｙｙｙｙｙｙｙＳｈｈｈＡｈｈｈｈｈｈＲｙｙｙｙｙｙｙｙｙＡｈｈｈｈｈ．

　たぶん、目を綴とじた女と、とろとろの肉塊の口が同時に、別々の何かを唱えたのだ。

　パンカロ・ファミリーの総員は、首領ドンの命令に従って後退を

始めていた。その矢先だった。

　ドウンッという轟ごう音おんがそこかしこでした。まるで、もう虫の息のはずの太陽が、いきなり息を吹ふき返したかのようだった。だが、その太陽は小さかった。ただ、いくつもあった。

　火だ。炎ほのおの玉だ。おお。うおお……！　熱い。煙けむり。火の粉。焼ける。人間が燃えている。何人も、何人も、逃にげだす途と中ちゆうだった兄弟たちが燃えている。焦こげるにおいがする。血と肉が焦げるにおいだ。さいわい直ちよく撃げきはまぬがれたが、すぐそばで炎が巻きあがっていた。チーロはよろめいた。尻しり餅もちをつきそうになった。「──チーロ！　馬ば鹿か者ものが、早く逃げろ……！」親父に叱しかりつけられて、なんとか膝ひざに力が入るようになった。そうだ。逃げる。逃げるんだ。逃げねーと。死ぬ。死んじまう。でも、親父は？　親父は──右手で持ったモトロール刀を杖つえにして、左手で左膝を押さえている。親父の左膝は、昔、マンフレッド一家に拉ら致ち監かん禁きんされたときに受けた拷ごう問もんで完かん膚ぷ無なきまでに破壊され、直後にきちんとした治ち療りようを受けられなかったせいもあって、ほとんど役に立たない。そんな膝で、今日は若いころみたいに戦っていた。戦いまくっていた。無理しすぎたんだ。チーロは親父に肩かたを貸そうとしたが、拒こばまれた。「よせ！　いいから逃げろ！」「でも！」「──エンツォ、貴様……！」炎をくぐり抜ぬけて近づいてきたのはジョーカーだった。クローディアはジョーカーの腕うでのなかでぐったりしていた。意識もないようだ。親父はそれを見てジョーカーを怒ど鳴なりつけた。「あんたもだ！　早くクローディアさんを安全なところに連れて行け！」「黙だまれ、クローディアは、己おれの──」「大事な女だろうが！　この目はそこまで曇くもっておらん！　行け！」ジョーカーは殺気さえみなぎらせて親父をにらみつけた。口くち許もとが震ふるえていた。そのときだった。また炎があちこちでドウウウゥゥゥンと巻き起こった。「──ぬう」「うわわあっ」「……くう！」炎は至近でも起こった。チーロたちはそれぞれ体勢を崩くずした。親父が叫んだ。「行け、ジャン・ジャック・ド・ジョーカー！　これ以上、あんたの世話になったのでは私の立つ瀬せがない！」「──勝手にしろ、頑がん固こ者ものめ……！」ジョーカーは走り去ってゆく。もう二度と振ふり返らない。チーロはどうすればいいかわからない。どうするのが一番いいのか。バカだから、かよ。そうなのかよ。でも、親父を見捨てて行けるわけねーよ。絶対、無理だよ。そうだろ？　だからだろ……？

炎がはぜる。直撃していないのは、もう運がいいだけとしか思えない。煙もひどい。音もすごい。そんななかを──集まってくる。ウーゴが。パンツ一丁のニーノが。ジョゼッペ・ザンニーニが。カルロ・ボッシが。イビツが。リクが。その他の兄弟たちが。親父が激げき怒どしている。こんなに怒おこっている親父は久しぶりだ。「──何をやってやがるんだこの腐くされ阿あ呆ほうども！　雁がん首くび揃そろえて何を考えてやがる……！　いいか、これは命令だ！　逃げろ！　生きのびろ！　カルロ、お前は言ったな！　死ねと命じたら今すぐ死ぬと！　だったら逃げろ！　ここにいる連中、見事に逃がしてみせろ！」チーロは心底からすげえと思った。カルロは、この期ごに及およんでも乱れなかった。親を殺したあとのような表情だったが、「──はい」とうなずいてみせたのだ。そして、イビツとリクを引きずって、兄弟たちに撤てつ退たいを命じるというより強制した。今すぐ撤退しなければ殺すという剣けん幕まくだった。でもな。悪わりぃな。カルロの兄貴。オレらは、やっぱ、カルロの兄貴とは違ちがうんだわ。不ふ肖しようの息むす子こたちなんだよな。そーだろ。わかってっから、カルロの兄貴もオレたちのことは見み逃のがしてくれたんだろ。

「じゃ、ウーゴ兄ちゃん、そっち頼たのまあ。オレ左ひだり腕うでぜんぜんダメだからさあ」「そうか。わかった。では、ニーノはそっちを頼む」「ふん。了りよう解かいだ。しかし、チーロ、お前のその右腕、役に立つのか」「大だい丈じよう夫ぶだって。パンツ一丁のお兄ちゃんより役に立つって」「ああ、ジョゼッペも手伝ってくれ」「もちろんです、坊ぼう」息はぴったりだった。チーロとウーゴとニーノとジョゼッペの四人は、いっせいのせいっで親おや父じを担かつぎあげた。「──ば、お前たち！　な、何をする！　下ろせ……！」親父は当然暴れたが、こっちは四人だ。抗こう議ぎなんか無視してそのまま走りだした。「こら！　お前たち、親の言うことを……！」「いやあ、オレら出来の悪ぃ息子でさあ。マジスンマセンってかんじなんだけどね！」「俺の場合、ウーゴやチーロと違って、出来は悪くないがな。従順じゃないことはたしかだ」「まったく私は長男失格です。申し訳ありません、パァパ。そういうわけで、言うことは聞けません」「いやいや、そう悪いご子息方でもないと、私は思いますよ。何しろ、父親には問題があるとしても、あの母君の血を引いておられるのですから」「──か、勝手なことを……！　下ろせ！　このエンツォ・パンカロが、担がれて運ばれたとあっては……！」



まあ、気にすんなよ、親父。ファミリーはそりゃあ大切だし、ベアフットの連中に職を持たせるってのもいいことだと思うし、プライド、メンツ、そういうのだって、どうでもいいとは言わないけど──オレら、家族じゃん？　なんつっても、それが一番大事じゃん？

だから、オレらは懸けん命めいに走って逃げた。火の粉は熱かったし、転がってる焼死体はむごかったし、煙には噎むせたし、オレは左腕が今さら痛かったし、とにかくたいへんだったけど、とにかく逃げた。逃げて、逃げた。もう誰だれもしゃべらなかった。逃げることだけ考えた。逃げて、みんなで生きのびること。みんなでまた復ふく讐しゆうすること。少なくともオレは、後ろから何が迫ってきているのかなんて気にもとめなかった。前だけを見ていた。たぶん、うまくいくだろうと思っていた。なんとなく、そんな気がしていた。みんなに担がれていて、唯ゆい一いつ、後ろが見えていた親父が叫さけぶまでは。

「──駄だ目めだ、何かくる……！」

おそらく、親父はそんなかんじのことを言った。たしかに、何か聞こえていたような覚えもある。それまで何度か聞いた呪じゆ文もん──そう、たぶん魔ま術じゆつの呪文だったのだろう、それとは違うかんじの声だった。別の呪文？　わからないが、チーロたちは一いつ斉せいに足を止めて、振り返った。あ、目があった、と思っ

た。あの肉につ塊かいの目だった。とけたチーズみたいな瞼まぶたの奥で、目玉らしきものが光ったように見えた。肉塊は大口をあけていた。クローディアがつけた傷なんて、もうどこにあるのかわからなかった。そのどどめ色の口こう腔こうの奥で、何かが揺ゆらめいていた。それは、藍あい色いろの炎ほのお、とでも表現すればいいのか。おぞましかった。圧あつ倒とう的な力のようなものを感じた。遠くで、カルロが何か叫んでいた。ジョーカーの声も聞こえたような気がする。

　そのあとのことは、よくわからない。

　というか、チーロはほとんど何もしなかった。

　何かする前に、ウーゴが、ニーノが、親父が、ジョゼッペが、次々と覆おおいかぶさってきた。順番も、誰が誰の上で、誰の横に誰がいるのかも、よくわからなかった。なんでこんなことになっているのかも。これから何が起こるのかも。チーロにはわからなかった。チーロの身体からだはほぼ完全に押しつぶされていた。何も見えなかった。苦しかった。怖こわかった。本当に、怖くてたまらなかった。それで、誰にということもなく、大声で訊きいた。「なんで……！」その直後だった。「──子を守るのは親としてあたりまえのことだ」ゴオオォォ。「頭は悪いが、仮にもお前は弟で、俺はお兄ちゃんだからな」熱、熱、熱、熱。「長ちよう兄けいとしてこんなことしかしてやれなかった私を許してくれ」「お元気で」それは、ぜんぶ幻げん聴ちよう……？　見えない。だが、すさまじい炎が暴れ狂くるっている気配はする。チーロは、熱い、熱い、灼しやく熱ねつの暗くら闇やみにいた。とけそうだった。しかし、とけることは絶対にない。みんなが防いでくれているからだ。そのことだけは理解した。誰かが最後に言った。「チーロ、あとを頼む」それは、生き残れということで。耐たえろ、ということで。チーロは死ぬまいと思った。死ぬまい。けっして、死ぬまい。死んでたまるか。そのために、意地でも意識を保ちつづけるつもりだった。火傷やけどで、それ以外の負傷で、どんなに痛くても、つらくても、泣きそうでも、泣き叫びそうでも、オレは、生きる。生きてやる。生きて、やる。生き、て、やる。生き、て。生きてやる。生きてやる。生きてやる。そうして、やがて、誰かが引っぱりだす。それは、オレだ。オレの身体だ。オレの上にいるのは──いたのは──オレを守ってくれたのは──けれども、この身体は、もう動かない。オレは、生きてるのか？　わからない。目が開かな

い。「━チーロ坊ぼつちゃん！」カルロ……？　「━おい、リク！　何するつもりだ！　よせ……！」リク……？　オレ、は……？

8

　━すべてが間ま違ちがいだったように思えてならない。

　生まれてきたこと。このように作られたこと。与あたえられた役目をうまく果たせなかったこと。追放されたこと。海を漂ただよう間に死を選ばなかったこと。流れついた裸足の海岸でルカに見つけられたこと。介かい抱ほうされてローラの家についてしまったこと。ぬくもりに感謝したこと。大切な時間をすごしてきたこと。みんなを好きになってしまったこと。パンカロ・ファミリーでカルロ・ボッシやエンツォ・パンカロに気に入られたこと。ファミリーのみんなによくしてもらったこと。

　どこかで断たち切ろうと思えば断ち切れた。できなかったのではない。しなかった。

　居い心ごこ地ちがよかった。嬉うれしかった。楽しいことがあった。自然に笑うことができるようになった。もしかしたら、と期待していた。ひょっとしたら、このままふつうの人間のふりをして生きてゆけるかもしれない。人間に。人間として。おれは━人間でありたい。人間として、この街で生きてゆきたい。人間として、誰かのそばにいて、誰かを抱だきしめて、抱きしめられて、何かをわけあって、与あたえあって、生きてゆきたい。

　後こう悔かいしている。

　いくら後悔してもしたりない。

　できるわけがないのに。

　人間のふりをして、嘘うそをついて、みんなを欺あざむいて、どこまでもそれにこだわるあまり、おれはどれだけ大切なものを失ったんだろう？

　もう、やめよう。おれの我が儘ままのために、大事なものが傷つき、失われるくらいなら、やめよう。やめないといけない。そう思ったのに。

　カルロの制止を振ふり切ってあの肉塊に突とつ進しんしていったリクは、事ここに至っても変われない自分に愕がく然ぜんとするほかなかった。カルロに、イビツに、その他の見知った人たちに見られているせいか。まだおれは嘘をつきたいのか。嘘つきがすっかりしみついてしまっていて、もうだめなのか。結果は中ちゆう途と半はん端ぱよりも半端だった。触しよく手しゆをかいくぐって肉塊に接近して斬きりつけ、膿うみみたいな液体を少し浴びただけだった。こんなことをして、なんになる……？　おれがしないといけないのは、こんなことじゃない。違ちがう。絶対に違うはずだ。

　おれは、終わらせないといけない。

　ハーヴェイがローラを殺した。動機は正直よくわからない。でも、ハーヴェイをそそのかしたやつがいることはわかった。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ。そう。赤線地区を焼き払はらって、パンカロ・ファミリーの仲間たちを、罪のない人たちを大勢殺した、敵。敵。憎にくむべき敵。赤地に黒十字。敵。おれは、敵を殺さないといけない。しとめないといけない。敵。敵。その中ちゆう枢すう。それは。

「──リク、戻もどれ……！　チーロ坊ちゃんは息がある！　いったん退け！　リク……！」

　いいや。おれは戻らない。振り返ることもしない。カルロさん。あなたの声も聞こえない。もうすぐ聞こえなくなる。おれは──変わってゆく。違う。そうじゃない。もとに戻るだけだ。おれは、おれになる。本来のおれをとりもどす。おれは擬ぎ態たいが得意だ。それがおれの、ニセモノのおれの、一番の特技だ。おれは、おれが似ている誰だれかを知らない。その誰かは、あの国の王子だった。真の王が生みだした最後ラスト・の王子プリンス。おれはそのニセモノとして作られた。おれだけじゃない。ニセモノはたくさんいた。おれはそのなかの一人だった。有望な一人だった。擬態が得意な慰なぐさめ役の王子候補だった。

　でも、擬態だ。あくまで擬態にすぎない。化けの皮はすぐに剝はがれる。ルカ。ああ。ルカ。おれはおまえと似ているんだ。おまえが人目をしのんで、夜の海で、異形の力を抑おさえる練習をしてい

たように。おれは、この化けの皮が剝がれないよう、擬態がとけてしまわないよう、毎日、毎日、すべての瞬しゅん間かんが特訓だった。おれはいつも怖こわかった。怯おびえていた。何かの拍ひよう子しで擬態がとけてしまったらどうしよう？　あばかれてしまったら？

　だから、穏おだやかに。微笑ほほえんで。心を落ちつけて。欲望を抑えて。本ほん性しようが顔をのぞかせないように。力を使いすぎないように。人間でいられるように。だって、そうしないと、ばれてしまう。おれがニセモノだって、人間なんかじゃないって、ばれてしまう。

　けれど、もうおれの右手は変わっている。左手も変わりつつある。ごめん。ルカ。おれの本当の肌はだは、あんなに白くないんだ。鈍にび色いろなんだ。やわらかくないんだ。硬かたいんだ。すごく、硬いんだ。混ざりモノだから、これと指し示せるものはない。なんだか、いろいろな生き物の特とく徴ちようを適当にまぜあわせて作ったような──それだけに、全体的にバランスが悪くて、醜みにくい。少なくとも、人間から見たら、醜いだろう。自分でも醜いと思う。それが、おれなんだ。おれは本当に嘘つきなんだ。みんなを騙だましてたんだ。

　おれは、戦うために、それなのに、何かから逃にげるように走っている。

　この足も、ズボンの下は変わりはじめているんだろう。

　おれはすでに肉につ塊かいから離はなれている。ゲヘナ聖堂へと向かっている。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの兵士たちは、例外なくおれを見て驚おどろく。道をあける者さえいる。そうでなくとも、今のおれをつかまえられはしない。変わりつつあるおれは、すり抜ぬけてゆく。あるいは、飛び越こえてゆく。もうきっと顔も変わってきているんだろう。皮ひ膚ふは鈍色に。硬こう化かして。骨格も変化して。目だけは真っ赤なはずだ。目だけは変えられなかったんだ。今のおれは、たぶん、もう人間のようにはしゃべれない。うまく言葉を発することができない。おれは人間じゃない。

　ニセモノなんだ。でも、人間でいたかったんだ。おれは走る。追ってくる兵士たちを楽々と振りきって、ゲヘナ聖堂に飛びこむ。この建物がオストロス神しん殿でんと呼ばれていたころ、二度ほど

きたことがある。おれは知っている。複雑な構造じゃない。長くて、広くて、天てん井じようの高い石造りの廊ろう下かを突つき進めばいい。おれを追ってくる者は、おれに追いつくことはできない。おれはひとりで走る。おれはもう人間の服を着ていることが窮きゆう屈くつになっている。脱ぬぐのではなくて、破り捨てる。人間の武器もいらない。おれの身体からだは武器になる。おれは走りながら、ふと、今のおれを見ても、誰もおれだとは気づかないだろうと考える。ルカ。ラッチャ。ジョルジュ。ステラ。テッド。アンナ。ミミ。カルロさん。イビツさん。誰もわからないだろう。わかるはずがない。それなら、いったいおれは、誰なんだ……？

　もしかしたら、その答えを求めて、おれは走っているのかもしれない。

　答えを探して長い長い石段をのぼってゆく。

　その先に礼拝堂がある。壁かべはなく、数十本の柱だけで天井が支えられていて、どこまでも広がる海を見み渡わたせる「大いなる祈いのりの場」だ。

　おれはその場所に足を踏ふみ入れる。

　太陽はすでに地平線の彼方かなたに沈しずんでいた。

　西の海がわずかに紅に染まっている。

　海風が吹ふきすさんでいる。

　もう暗いはずだが、おれにはあまり関係がない。おれの目は「大いなる祈りの場」の中心で片かた膝ひざをつき、両手を組みあわせて、頭こうべを垂れている人間の姿をちゃんととらえている。そのかたわらには、大きな黒くろ鹿か毛げの馬がいる。馬も人間と一いつ緒しよに祈りを捧ささげているかのように、あるいは人間の祈りを妨さまたげまいとしているかのように、じっとしている。ここは静かだ。波の音。風の音。おれを追ってくる者たちの足音は、もうおれには聞こえない。そろそろ終わりにしよう。いや、終曲を奏かなではじめよう。おれは苦労して人間の声を真ま似ねる。

「おまえ……が、さぁ……じゅーだす……だな」

　人間は答えずに立ちあがった。

　こっちを向いた。

　敵。

　これが敵なのか。

　年ねん齢れいは、わからない。三十歳でも、四十歳でも通用しそうだ。顔立ちはえらく整っている。騎士というよりは、貴族の風ふう貌ぼうだ。しかし、やわらかさのなかにも、厳しさがある。まっすぐな眼まな差ざしには強さを感じるが、どこかやさしげでもある。これが敵なのか。たしかに、精せい緻ちな刺し繡しゅうが施ほどこされた陣じん羽ば織おりや、赤黒い鎧よろいや、背中に背負った大おお振ぶりの剣けんは、どれも見るからに逸いつ品ぴんで、戦いの気配、血のにおいがしみついている。だが、これが敵なのか。この男が。

「──あなたがここにくることはわかっていました」

　低い声も、やたらと耳ざわりがよかった。

「穢けがれし者よ。いかにも、人は私をサー・ジューダスと呼びます。私の名はアロンズ・ニードルスピア。ロシュの声を聞き、ロシュの名のもとに〝裁き〟を行う者です」

　リクは膝ひざを曲げて重心を低くした。あなたがここにくることはわかっていた？　なぜ？　穢れし者。どうしておれをそんなふうに呼ぶ？　疑問はある。でも、いい。関係ない。この男を殺す。この両手は鋼はがねよりも硬い。長くのびた爪つめで鉄板を引き裂くことだってできる。サー・ジューダス。アロンズ・ニードルスピア。おれはこの男を殺す。

「私一人を殺したところで〝裁き〟は止まりませんよ」

「おまえ、だけで……たりな、ければ……おまえを、ころした、あとで……ころす……すべて、ころす」

「それは、愛のためですか。幸福のためですか。復ふく讐しゅうのためですか」

　軽く右手をあげてみせたサー・ジューダスに、馬がゆっくりと近づいていった。サー・ジューダスは馬の腹を撫なでて、鞍くらにかけてあった槍やりらしきものを手にとった。それは見るからに古び

ていた。全面にびっしりとさまざまな紋もん様ようが細かく彫ちよう刻こくされていて、実戦用というより儀ぎ礼れい用のようなおもむきがあった。何しろ、閉じた傘かさのような形をした穂ほ先さきの先せん端たんが、突き刺させるほど尖とがっていなかった。なおかつ、装そう飾しよくなのか、穂先には八つもの穴があいていた。

「穢れし者よ。あなたは間ま違ちがっています。私にはわかります。聞こえるのです──」

　それからサー・ジューダスは、実際に遠くからの声に耳を傾かたむけるように、視線を中空に泳がせた。変化はすぐに起こった。震ふるえだした。サー・ジューダスの全身が。それだけはない。髪かみの毛が逆立った。白目を剝むきかけた。歯が噛かみあわされてカタカタ鳴った。「ああ。ああ……聞こえる……」サー・ジューダスは、笑っていた。「──聞こえる。ロシュの声が。何をなすべきか、私にはわかる。見える……！」

　リクはとっさに動いた。サー・ジューダスがあの槍の穂先をリクに向けたからだ。いや、それだけなら、動く必要はないはずだった。あの槍はせいぜい二メーテル。リクとサー・ジューダスの間は五メーテルほど離はなれている。にもかかわらず、リクの身体は勝手に反応していた。よけようとした。のびたのだ。槍が。違う。槍自体ではない。装飾だと思っていたあの穴から、何か光のかたまりのような細長いものが飛びだして、それがまっすぐリクめがけてのびてきた。速い。ギリギリで間に合わなかった。「──グッ……！」腹か。どまんなかではない。左よりだ。光。光だ。光の、槍。灼やける。血。血だ。おれにも血は流れている。おれの血は、赤い。まるで、人間みたいに。人間じゃないのに。

　光の槍がふっと消失して、リクは石の床ゆかに膝をつきそうになった。なんとか、こらえた。

　サー・ジューダスが槍を構えた。

「きなさい。穢れし者よ。あなたに救いを」

「……すくい、なんて……！」

　そんなものいらない。救われようなんて、べつに思っていない。おれは、ただ──ただ、守りたいだけだ。もう失いたくないだけだ。何かするべきだと思うんだ。できるはずだと思うんだ。遅おそすぎ

た。もっと早く決断しないといけなかった。わかってる。後こう悔かいしてる。でも、このまま何もしないよりはましなはずだ。おれは殺す。サー・ジューダスを殺して、それからあの肉につ塊かいの化物を殺す。他の騎き士したちもすべて殺す。おれは駆かけだす。痛くなんかない。おれは速い。だって、おれは人間じゃない。おれは低い姿勢でまっすぐ突つっこむと見せかけて、急に跳ちよう躍やくする。人間の目では追えまい。サー・ジューダスの目には、おれが突とつ然ぜん目の前から消えたように見える。あるいは、瞬しゅん間かん、おれの残像が網もう膜まくに焼きついているかもしれない。おれは空中から襲おそいかかる。おれは殺す。敵を殺す。まずサー・ジューダスを殺す。そして、おれは約束を果たさないといけない。約束したんだ。おれは裏切るわけにはゆかない。おれは今こそ凶きよう暴ぼうな力のすべてを解き放つ。おれの全身がそれ用に調節される。筋肉が倍にもふくれあがって、鈍にび色いろの皮ひ膚ふに無数の筋が走り、爪や牙きばがグイグイのびる。おれは殺意のかたまりとなって、猛もう禽きん類るいのような雄お叫たけびを発する。「──ＳＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨ……！」

　ルカと約束したんだ。

　ずっとそばにいるって。

　おれは必ず帰るから。

　人間のふりをして、必ず帰るから。

　そうしたら、おれを抱だきしめてくれないか。

　おれは嘘うそつきだけれど、どうか抱きしめてくれないか。

ここにいる

an approach

　もうそろそろだということは、御ぎょ者しやのアニャキス・ローから聞かされていた。

　何がって、もちろん、そろそろ高速乗合馬車フライング・ワゴンの旅が終わるということだ。

　マリアローズは、ユリカやサフィニア、カタリと一いつ緒しょに、窓にかじりつくようにしてそのときを待っている。乗り心ごこ地ちは悪くないし、いろいろな景色も見られるし、退たい屈くつしても話し相手には不自由しないとはいえ、いいかげん馬車に乗っているのにも飽あきた。ユリカに教えてもらった鵺ヌエ流古式戦せん闘とう術じゆつのイメージトレーニングをやってみたり、サフィニアを先生にして初歩的な魔ま術じゆつをちょこっと試ためしてみたり、狭せまいスペースでも可能な筋トレをしてみたり、そんな暇ひまつぶしにも限界がある。それは何もマリアローズだけではない。トマトクンは朝も夜も眠ねむってばかりだったし、髭は相変わらず口数が少なかったけれど、昨日あたりから、ジェードリについたら何をしようとか、どこに行きたいとか、何を食べたいとか、ああ早くつかないかなとか、そんなことばかりが皆みなの話題にのぼるようになっていた。

　現在、馬車のなかは、少し浮うわついた期待と危機感のない緊きん張ちよう感かんとで、ちょっと妙みような雰ふん囲い気きになっている。なぜだか誰だれも口を開かない。雑談でもしていればいいのに、そのタイミングがつかめなくて黙だまりこんでいるかんじだ。

　でも、まあ、そのうちカタリが「ひゃっほう！」とかすばらしくベタベタな歓かん声せいをあげるだろう。それにすかさずマリアローズがツッコミを入れて、ユリカとサフィニアはかわいらしく騒さわいで、ピンパーネルはかすかに口くち許もとをゆるめる。トマトクンはあくびをして、髭はそれでもむっつりしている。そんな情景が目に浮うかぶ。

　それにしても、いろいろ話を聞かされたけれど、やっぱり実際に目で見ないとはっきりイメージできない。どんな街なんだろう？　サンランド第三の都市といわれているくらいだから、かなり大きいことは間ま違ちがいなさそうだ。マリアローズはしばらくエルデン以外の街には滞たい在ざいしたことがないので、おそらく何を見て

も目新しく感じるだろうし、珍めずらしいものがあったら、土産みやげとして持ち帰るのもいい。そうだ。おみやげ、おみやげ。モリー。あとは、ベアトリーチェにも。それから──や、あとはいらないや。うん。いらない。あいつとは、ばいばいする予定だし。ばいばいもクソもないんだけど。そのことは何度も考えたし、何回考えなおしても結論は一緒で、とりあえず今は忘れたい。てゆうか、今から帰りのことなんか考えなくても。まだ到とう着ちゃくしてもいないのに。

　ともあれ、本当にもうすぐだ。馬車の行く手に城じよう壁へきがある。あの城壁の向こうがジェードリだ。カタリがとうとう沈ちん黙もくに耐たえかねたのか「あーもうあかん」と窓に手をかけた。一気に全開にした。車内に風が流れこんできた。「──ひゃっほう……！　むうぅぅはぁっ！　海やなあ、海！　海やで！　海のにおいや！　いや、さすがにまだせえへんけどな！　ナハハハハハハッ！　ん？　なんやねん、マリアローズ。そないな目ぇして」

「……あんまりにも予想どおりだったもんで。きみの反応が。一応、つっこむつもりだったんだけど、その気にもなれないくらい」

「なんやえらいバカにされとるような気がせんでもないんやけど」

「そ？　バカになんてしてないよ？　しなくても十二分以上にバカだから。それはみんな知ってるし、知らなくたって見ればわかることだし、わざわざ労力使ってバカにする必要もないでしょ？」

「む、む、むっきぃぃぃー！」

「──あ……！」と、ユリカが窓から身を乗りだして前方を指さした。「見えてきたわよ！　ほら、街が！　正しえい門もんの向こう！　海も！」

「おお！　ホンマや！　見えるで！　見えよるで！　見えまくりや！　げへへへへへ！」

「なんかやらしいんだけど。気持ち悪いから、そこの腐くされ半魚、ちょっと死んでくれない？」

「お願いやから、そんくらいで死を求めんといてくれ……その程度で死んどったら、命がいくつあっても足りへんわ……」

「いくつもはいらないって。一つでいいよ。一回だけ死んで。それ

でおしまいにするから」

「生き返らしたってくれや！」

「いつもいつも、そううまくいくとはかぎらないでしょ。ね、髭」

　なんとなく、元気がない髭に話を振ふってみた。でも、一番後ろの座席で腕うで組ぐみをしている髭は、無視こそしなかったものの、やはり「うむ、そうだな」と生返事をしただけだった。まあ、何か事情があるみたいだし、しょうがないか。マリアローズが短くため息をついて軽く肩かたをすくめていたら、隣となりのサフィニアがそっと耳打ちしてくれた。

「……昔、いろいろあったみたいですが……ジェードリにつけば、髭さんも吹ふっ切れると思います……わたしたちと一緒にきたということは、きたかったということでしょうし……」

「そっか──そうだよね。よくわかんないけど、くるって決めたのは髭自身だもんね」

「はい……だから、わたしたちは……ふつうにしていれば、いいんだと思います……」

「うん。なんか、大人の意見」

「……そんな……マリアのほうが……たまに、わたしなんかより、ずっと大人だし……」

「そうかなあ？　そんなことないでしょ。僕なんて、まだまだぜんぜんガキだよ。や、ほんとに。もっと大人になりたいな、なれればな、とか、しょっちゅう思うもん」

「ちゃんと、なってきてますよ……なんだか……初めて、マリアと閉へい鎖さ魔ま宮きゆうに行ったのが……すごく、前のことみたいで……」

「う。言わないで。思い出すと恥はずかしいから。あーもう、ひどかったよねえ、僕……」

　ＺＯＯのみんなの前では、最初から失敗したり、いじけてみたり、八つ当たりしたりで、各種醜しゆう態たいをさらしまくりだった。でも、あのときがあるから、今がある。こうしてみんなといら

れる。サフィニアとは今やちょっとした秘密を共有している間あいだ柄がらだし、カタリは相変わらずツッコミ甲が斐いのある相手だ。ユリカはいつもかわいくて、それでいてしっかり者のお姉さん的存在で、髭は筋肉自じ慢まんや無む駄だな蘊うん蓄ちくがうざいけれど、ごくたまーにいいことも言う。トマトクンは、いまだによくわからないというか、どこかとらえどころがない。今も、後ろの窓を開けて、大きな体を大だい胆たんに半分くらい外に出している。こんなときは、それこそあくびの一つでもしているか、はしゃいでいる仲間を見守るあたりがトマトクンらしい行動だと思うのだが、本当に読めない。ただ、絶対的に信用はできる。頼たより甲斐もある。サフィニアが惹ひかれるのも、理解できなくはない。それから、ピンパーネルは──向かい側の席で、閉めたままの窓にべったり顔をくっつけ、なんとか前方を見ようとしていた。何やってるんだろ。マリアローズはピンパーネルのそばまで行って、窓を開けてやった。

「開けないと」

「はイ」

　頬ほおを赤らめたわけではないし、そんなふうに見えただけかもしれないが、ピンパーネルは少しだけ恥ずかしそうだった。まあ、四六時中一いつ緒しよにいれば、こんなこともある。ふだんは見えない面が見えたりする。それが、ちょっと楽しいというか、嬉うれしいというか。そんなふうに感じられる仲間がいる。マリアローズは窓から吹きこんでくる風に真しん紅くの髪かみをなびかせながら、間近に迫せまったジェードリで顔をあわせることになるだろうジャン・ジャック・ド・ジョーカーに思いを馳はせた。いったいどんな男なんだろう。やなやつじゃないといいけど。ただ、多少相あい性しようが悪かろうが、たとえ何かトラブルが持ちあがろうが、なんとかなるような気もする。だって、僕には仲間がいるんだ。みんなに助けてもらいながら、いくつもの丘おかを越こえてきたし、これからもそうするだろう。怖こわくても、僕はあきらめない。腰こしが砕くだけそうになっても、逃にげださない。捨ててしまうことが一番の損失なのだと、マリアローズは知っていた。僕はけっして捨てない。ここにいる。あいつが言ってくれた。『だったら、キミはＺＯＯにいるべきだ』って。わかってる。そんなこと、僕だってわかってるよ。でも、あらためてそのことを痛感させてくれたきみに、感謝はしてる。僕はここにいる。そして、何があっても、みんなと一緒に乗り越える。それが僕の選せん択たくなんだ。

『薔薇のマリア　V.SEASIDE BLOODEDGE』了



あとがき

ふとテレビを見たら、ある男のドキュメンタリー番組が放映されていました。どうも見覚えがあると思ったら、路上で歌っていたころの知人でした。知人といっても、何度か立ち話をしただけで、すれ違ちがえば挨あい拶さつくらいはしましたが、とくに親しかったわけでもないので、おそらく彼は僕のことを覚えていないでしょう。彼は僕のような歌うたいではなく、パントマイマーでした。まだ踊おどっていました。すっげー。まだやってんのかよ、オルカ。僕はどういうわけか小説なんて書いてるよ。昨日、昔、使ってたギターを引っぱりだしたら、弦げんが錆さびちゃってたよ。とりかえて、弾ひいてみた。ぜんぜん弾けなかった。でも、小説はいくらかマシになってきたかな。ほんのちょっとだけ、だけど。まだまだ、だけど。そんなことを考えながら、今日も僕は小説を書いています。たぶん、明日も、明後日も、明々後日しあさつても。

さて、いろいろと思うところがあって、本巻はこのようなお話になりましたが、次巻ではお馴な染じみの連中が大だい活かつ躍やくしてくれるはずです。ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての人々、そして今、本書を手にとってくださっている皆みな様さまへ愛と感謝をこめつつ、夏の再会をお約束して、筆を置きます。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア

Ｖ．ＳＥＡＳＩＤＥ ＢＬＯＯＤＥＤＧＥ

十じゅう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　Ｖ．ＳＥＡＳＩＤＥ ＢＬＯＯＤＥＤＧＥ』平成18年4月1日初版発行

平成20年9月25日8版発行

BOOK☆WALKER